

苑辭

文學博士
新村出
纂編



版
館 文 博

不許複製

發行所

東京市日本橋區本町三丁目九番地
振替口座東京二四〇番

株式會社
博文館

昭和二十二年四月廿二日
昭和二十二年五月十五日
昭和二十二年五月廿五日
昭和二十二年六月五日
昭和二十二年六月十五日
昭和二十二年六月廿五日
昭和二十二年七月五日
昭和二十二年七月十五日
昭和二十二年七月廿五日
昭和二十二年八月五日
昭和二十二年八月十五日
昭和二十二年八月廿五日
昭和二十二年九月五日
昭和二十二年九月十五日
昭和二十二年九月廿五日
昭和二十二年十月五日
昭和二十二年十月十五日
昭和二十二年十月廿五日
昭和二十二年十一月五日
昭和二十二年十一月十五日
昭和二十二年十一月廿五日
昭和二十二年十二月五日
昭和二十二年十二月十五日
昭和二十二年十二月廿五日

編纂者	新村 出
發行者	株式會社 博文館
本文組版	開明堂
本文印刷	共同印刷株式會社

東京市日本橋區本町三丁目九番地
右代表者 高田 壬午 郎

靜岡縣濱松市元城町一七三番地
株式會社 開明堂
右代表者 高田 壬午 郎

東京市小石川區久堅町一〇八番地
株式會社 共同印刷株式會社
右代表者 君 島 潔

定價 金四圓五十錢

辭苑——奧付

自序

國語辭書は、その載録語の種類の上よりして、一般辭書または普通辭書と特殊辭書または専門辭書との別があり、これをその時代の上から見て、古語辭典とか現代語辭典とかいふやうに分けることもある。更に規範的方面からいふと、標準語辭典だの、方言辭典だの、隱語辭典だのといふものが生ずるわけである。又、主として語の來歴の上から考へると、語原辭書や外來語辭書などが出て來る。その他、發音辭典もあれば、他方に假名遣辭典もある、といふやうに大小様様の辭書が存在する。之に加へて、百科事彙式が辭典の様式に加味されて來る傾向も見逃がせない。

言語上の標準を確立することの困難なのにひきかへて、言語界の事相は、益々複雑に進展して極まる所を知らぬ有様である。知識界の振張につれて、辭書に於ても、之れに應ずるために、語數の豊富と語種の周到とを期し、以て辭書の包含性を増すことにせねばならぬ。然るに、知識慾の満足と規範の拘束力とは、とかく反比例するを免れないから、それを適度に調節して、語數・語種の緊縮なり取捨

なりを程よく按配してゆくことに、編纂上の苦慮が費されねばならぬ。かくの如き態度を保持しつつ、上に列擧したやうな各種の辭書のそれぞれ長所を採取して、而もそのいづれにも偏することなく、普遍的にして且輕便な中形の辭典を編纂したならば、一般讀者の需要、殊に中等程度の教育界における不備を充たすことが出來はしないかと思ひついたので、抑々この「辭苑」編纂の由來である。實用向きの辭書として、かなり百科辭書風の色彩が濃厚になつたのは自然であるが、嚴重な規範主義に由るよりも、むしろ網羅式に傾いてしまつたのも、讀書界の趨勢に従つたに外ならぬ。

かくて、古代語も中古語も、近世語も現代語も、なほまた新古の外來語も、人名や地名や書名やの如き固有名稱も、廣汎に載録する方針を以て臨んだ結果として、元より語數を以て辭書を評價する標準とすべきではないが、本書所載の語數は約十六萬に達してゐる。

索出の方法は、大要、表音式に由り、その直下に舊來の假名遣を註記したが、これは利用の能率を高めると共に、傳統の保存に資した次第である。解釋も主として口語體を採つた。又、必要な程度には、語原語史を附説し、出典をも略記し

ゆたひがちな自分を、蔭ながら刺戟して決然ここに至らしめた二三敢爲な篤志者のあつたことを私は忘れることが出来ない。況んや、纂述に査閲に印刷に校正に畫圖に、各々その意を致し力を竭された人人に對しては、感激の辭を知らぬ。就中、特筆せねばならぬのは、理學博士武田久吉氏が、その専門に屬する植物學上の檢討ばかりでなく、自然科學に關する方面の名稱をはじめ、人文現象に關する用語、その他新外來語等についても、終始有力な補翼を賜はつたことに對する感謝の念である。又、多年國語教育の富贍なる經驗よりして、本辭書の立案より編輯・印刷等に涉つて、四年間、細大となく、編者のために盡瘁された越前福井の士溝江八男太氏の勞苦と篤厚とに對して深謝の情に充たされてゐることを一言せねばならぬ。爾餘助力者諸君の芳名は、之を跋文中に掲げて永く記念と致したいと思ふ。

希くは、博雅の士の教を得て、漸次本書の増訂完備を計り、自分としても、更に平素の念願たる辭書の事業に向つて邁進して行きたい。

昭和十年一月

文學博士 新

村

出

た所があるが、これらも妥當と穩健と簡素とを旨とした。掲載を割愛しなればならなかつた語原解釋も多い。文法上の説明には、往々異論がありがちであるが、辭書としては便宜に循つた點が少くない。

「辭苑」の名は、晉の葛洪の著なる字苑から思ひついたものである。葛洪の字苑は、同時代の人たる呂忱の字林と共に、平安朝には本邦にも傳存し、寛平時代藤原佐世の日本見在書目にも著録されてゐたが、平安朝以後、唐代以降、和漢兩土において佚書となつてしまつた。源順の倭名類聚抄にも四聲字苑を引いた個處が甚だ多く、また兼名苑などいふ辭書の引用も和名抄のあちこちに散見してゐる。字苑が私の愛讀する顔氏家訓にも援引されてゐるのが、私をして題名選擇にそれを利用せしめた因縁であつた。葛洪はまた、抱朴子の著者として知られ、有名な鍊金術家であるのも面白いと思ふ。

「辭苑」は、古今先進の諸辭書に負ふ所が多であるのは申すまでもないが、編者は先づ前賢の業績に對して敬意と謝意とを表する義務がある。また私が「辭苑」の編纂を董督するに方つて、幾多篤實なる人人有爲な人人から得た直接間接の助力は、一一銘記するに堪へない程である。殊に業を興し事を進める上に於て、とかくた

凡例

一、本辭典に採録した語彙は、之を時代よりすれば、上古中古近古近世現代に於ける國語を網羅し、國語化した新古の外來語をも挿入した。又、之を實質的方面よりすれば、倫理教育哲學文藝地理歴史傳記神社佛閣宗教理化博物音樂社會經濟工藝美術農業娛樂書籍解題人名等の多方面に互つてゐる。

一、人名は各方面の著名の士を網羅し、本邦人は故人に限り、その歿年には神武紀元を用ひ、外國人は生存人物をも加へて、生歿年には西曆紀元を用ひた。なほ、我が國の事件には神武紀元を用ひ、外國の事件には西曆を用ひた。

一、長さ・重さ・容積には主としてメートル法を用ひた。

一、語原は、從來慣用し來つたものを用ひたが、尙

編者が多年研究の結果、之を公表したものを採録した。

一、語彙の排列は五十音順に依り、語彙の表現にはすべて表音的假名遣を用ひて檢出に便にし、下にルビを附し、歴史的假名遣を細記して参考に供した。即ち一例を舉げれば、

「を」は「お」、「わ」に發音するは「わ」、「くわ」は「か」、「ぐわ」は「が」、「お」は「い」、「ぢ」は「じ」、「づ」は「ず」、「いう」は「いふ」、「ゆふ」は「ゆう」、「せう」は「せい」、「やう」は「しょう」、「はう」は「ふ」、「ほふ」は「ほう」、「いほ」は「いお」、「おほ」は「おお」、「やう」は「よう」、「まう」は「もう」を以て之を表はし、促音はすべてルビを以てあらはし、外來語の長音符は、上の音の繰返しの意として用ひた。即ち

「ア」は「アア」、「イ」は「イイ」、「ウ」は「ウウ」、「エ」は「エエ」、「オ」は「オオ」の代りに用ひた。

又、va、vi、vu、ve、vo は特にヴァ、ヴィ、ヴ、ヴェ、ヴォを以て、エは「エイ」、エは「ディ」を以て表はし、他はすべて表音的とし

た。

或語の説明を同意語によつてする場合には、檢出に便ならしめる爲に、その同意語に表音的假名遣を用ひ、之を()の中に入れて、歴史的假名遣との別を明らかにした。即ちはんによ(班女(名)はんじよ)の如き記載法に従つた。

一、語彙の説明は、簡明平易を旨とし、口語體を用ひ、稍難解と考へられる語には適宜用例を附加した。

一、同一語で意味を異にするものには、①②③等の符號を用ひ、同一科に屬して種屬を異にするものは④⑤等の符號によつて之を區別した。又、同意語を説明の最終に添附して、彼此對照の便に供した。

一、動詞形容詞助動詞等の表現法にも表音的假名遣を用ひ、下にルビを以て歴史的假名遣と活用形とを示し、文語と口語との間に表記法を異にするものは、別箇に之を掲載して、その相違を明らかにすることに力めた。

一、外來語の品詞名は、外來語本來の性能に鑑みて之を掲載した。即ち(英形)(英動)(佛形)の類。

一、送假名法は、大體、文部省の臨時國語調査會に於て規定せられたものに準據したが、三音以上の語で、誤讀の處あるものは、特に語幹の最後の音を送ることとした。

即ち

「集まる」「起る」「留まる」「始まる」「緩やか」の類。

一、本書に用ひた假名は、すべて國定小學讀本に掲載せられたものに準據した。

一、外來語中、英語は「英」と特記しなかつたが、品詞名の個處には、(英形)(英動)等と記した。

一、附録として、難音訓索引字音索引國語並びに字音假名遣表動詞活用表形容詞活用表形容動詞活用表助動詞活用表動詞助動詞接續表動詞助動詞接續表常用漢字及び略字表國字表等を添附して参考に供した。

こ、ば、の、そ、の、に、遊、び、筆、の、海、を、汲、み、て、も、空、と
ぶ、鳥、の、網、を、も、れ、水、に、す、む、魚、の、釣、を、の、が、れ、た
る、た、ぐ、ひ、昔、も、な、き、に、あ、ら、ざ、れ、ば、今、も、ま、た、知
ら、ざ、る、所、な、り。
(新古今和歌集序)

略語表

名詞	數詞	代名詞	形容詞	副詞	接續詞	助動詞	助動詞	感動詞	接頭語	接尾語	枕詞	自動詞	他動詞	四段活用	上一段活用	上二段活用	下一段活用	下二段活用	加行變格	良行變格	佐行變格	奈行變格	形容詞ク活用	形容詞シク活用
.....
(名)	(數)	(代)	(形)	(副)	(接續)	(助動)	(助動)	(感)	(接頭)	(接尾)	(枕)	(自動)	(他動)	(四)	(上一)	(上二)	(下一)	(下二)	(カ變)	(ラ變)	(サ變)	(ナ變)	(形一)	(形二)

倫理	教育	哲學	政治	經濟	文學	社會	歷史	機械	植物	動物	礦物	法律	生理・生物	船舶	藥學	建築	農業	林業	音樂	天文	地理・地文・地質	神名・神社・神話	佛教・佛蘭	
.....
(倫)	(教)	(哲)	(政)	(經)	(文)	(社)	(歷)	(機)	(植)	(動)	(礦)	(法)	(生)	(船)	(藥)	(建)	(農)	(林)	(音)	(天)	(地)	(神)	(佛)	

宗教	心理學	軍事・兵器	醫學	數學	論理學	化學	物理學	傳説	漁業	美術	工業	人名	イタリー語	イギリス語	フランス語	ドイツ語	ロシア語	オランダ語	スペイン語	ポルトガル語	ギリシャ語	ラテン語	支那語	梵語
.....
(宗)	(心)	(軍)	(醫)	(數)	(論)	(化)	(理)	(傳)	(漁)	(美)	(工)	(人)	(伊)	(英)	(佛)	(獨)	(露)	(蘭)	(班)	(葡)	(希)	(拉)	(支)	(梵)

一本の傘を二六さすこと。多く男女二人の場合にいふ。あひがき。

アイアン [Iron] (名) (普通にはなまって)「アイロンの毛をまぢらせる小形の鏡。②ゴルフ用の鐵の杖。③軍人に対する軍律。又は共產黨員に対する黨律の如く、絶対に破らざる規律。—ロー「Iron Law」(名) 人間の意思では變更することのできぬ法則。鐵則。④現行の資本主義經濟組織では、労働者の賃銀は増加させる望みがないといふフランドルの説。即ち労働賃銀が上れば労働者が増加して賃銀が低下する。故に労働者は生活費用として必要額以上の賃銀を、永久得ることが出来ないこと。

あいにく (愛育) (名) かはゆがって育てること。あひしや (愛育者) (名) その人をよく診察し、通病を授ける醫者。

あいりん (愛飲) (名) 好んで飲用すること。あいりん (愛飲) (名) 帳簿書類のひきあはせにおく印。わりりん。あひりん。

アイヴァンホー [Ivanhoe] (名) (文) イギリスの文豪サウザーホルター・スコットの歴史小説。騎士アイヴァンホーを主人公としたもの。一八二〇年刊。

アイヴロー [Ivory] (名) 象牙。①名判などを用いる象牙の光澤ある厚い洋紙。—ターワー [Towar] (名) 象牙の塔。②現代物質文明の醜態を諷刺し、自己の好む靜寂な詩的英生活をするために文藝家などが一日を籠る別天地。

アイエフ・フーリー [I.F.F.U.] (名) (社) International Federation of Trade Union (国際労働組合聯盟) 第二インターナショナル系労働組合の国際的聯合で、赤色労働組合に對抗し、社會民主主義を標榜する。その本部がオランダの阿姆斯特ダムにあるので、「阿姆斯特ダムインターナショナル」と稱す。

あいえん (愛縁) (名) 佛恩愛の縁。

あいえん (哀戀) (名) 哀れにやましいこと。あいえん (哀戀) (名) 悲しい聲で啼く聲。

あいえん (合縁) (名) ちびあふことのできる縁。—きえん (合縁奇縁) (名) 合ふも合はぬも縁のこと。—不思議縁。

あいおい (相生) (名) いっしに生ひ出ること。おなじこと。—さ (相生挿) (名) 男松と女松を挿し、根じりに數柑子を用ひたもの。男松のまづ相生松 (名) 兵庫縣加古郡高砂町高砂神社の境内の靈松。高砂の松。—はん (相生盆) (名) 婚禮の折に用ひる男松女松とを植へた盆景。—むすび (相生結) (名) 普通の夫婦ひの一端を更にその結目に通した紐の結び方。

アイ・オー・ユー [I.O.U.] (名) (名) (名) の略語。あなたから借りましたの意。借用をあらはす商業用の略語。—て (兩端の尖った釘)。

あいおれき (哀歌) (名) 悲しい心持をあらはした歌。あいかき (哀歌) (名) 建二箇の水又は石を接合するに、その端を互に半分ずつ削いて合はせること。又、その物。—錠 (錠にあふ外のかき)。

あいかた (合方) (名) 芝居のせりふの間に入れる三味線。②謡の大鼓小鼓・太鼓・笛の鳴り。

あいがも (間鳴) (名) 動野生の風鳴と青苔。—のあひの。

あいがん (愛玩) (名) 大切にしてみてもあふぶ情を逸れて熱心に顧ふこと。

あいきこ (相聞) (名) 萬葉集中の歌體のうち、男女親子兄弟夫婦知己等の相思の歌。—うらも相聞。

あいきゆう (哀泣) (名) かなし泣くこと。あいきゆう (哀泣) (名) 結の年を経たも。

あいきゆう (哀泣) (名) 結の年を経たも。

あいきゆう (哀泣) (名) 結の年を経たも。

あいきゆう (哀泣) (名) 結の年を経たも。

あいきゆう (哀泣) (名) 結の年を経たも。

あいきゆう (哀泣) (名) 結の年を経たも。

あいきゆう (哀泣) (名) 結の年を経たも。

あいきゆう (哀泣) (名) 結の年を経たも。

あいきゆう (哀泣) (名) 結の年を経たも。

あいきゆう (哀泣) (名) 結の年を経たも。

あいきゆう (哀泣) (名) 結の年を経たも。

あいきゆう (哀泣) (名) 結の年を経たも。

あいきゆう (哀泣) (名) 結の年を経たも。

あいきゆう (哀泣) (名) 結の年を経たも。

あいきゆう (哀泣) (名) 結の年を経たも。

あいきゆう (哀泣) (名) 結の年を経たも。

あいきゆう (哀泣) (名) 結の年を経たも。

あいしん (愛郷心) (名) 愛郷の精神。あいきゆう (愛郷心) (名) 人づきのよいこと。あいしん (愛郷心) (名) 人づきのよいこと。

あいせん (愛染) (名) 花道で見物方へ見えさせること。—あいせん (愛染明王) (名) あはた愛敬痘毛 (名) 愛敬があるやうに見えるあはた。

あいせん (愛染) (名) 愛敬があるやうに見えるあはた。

あいせん (愛染) (名) 愛敬があるやうに見えるあはた。

あいせん (愛染) (名) 愛敬があるやうに見えるあはた。

あいせん (愛染) (名) 愛敬があるやうに見えるあはた。

あいせん (愛染) (名) 愛敬があるやうに見えるあはた。

あいせん (愛染) (名) 愛敬があるやうに見えるあはた。

あいせん (愛染) (名) 愛敬があるやうに見えるあはた。

あいせん (愛染) (名) 愛敬があるやうに見えるあはた。

あいせん (愛染) (名) 愛敬があるやうに見えるあはた。

あいせん (愛染) (名) 愛敬があるやうに見えるあはた。

あいせん (愛染) (名) 愛敬があるやうに見えるあはた。

あいせん (愛染) (名) 愛敬があるやうに見えるあはた。

あいせん (愛染) (名) 愛敬があるやうに見えるあはた。

あいせん (愛染) (名) 愛敬があるやうに見えるあはた。

あいせん (愛染) (名) 愛敬があるやうに見えるあはた。

あいこんじょうやく (愛理條約) (名) 愛理は滿洲國黑龍江省の都會。咸豐二年(一八五〇)清露の間に黒龍江を兩國の國境とするに就いて、この地を結ばれた條約。

あいけん (藍氣風) (名) 藍色を帯びてゐること。—ねずみ (藍氣風) (名) あいれすみ。

あいけん (藍氣風) (名) あいれすみ。

あいけん (藍氣風) (名) あいれすみ。

あいけん (合拳) (名) 拳の遊技で二人が同じ手を出すこと。—馴れあひ。合意。

あいけん (合拳) (名) 拳の遊技で二人が同じ手を出すこと。—馴れあひ。合意。

あいけん (合拳) (名) 拳の遊技で二人が同じ手を出すこと。—馴れあひ。合意。

あいけん (合拳) (名) 拳の遊技で二人が同じ手を出すこと。—馴れあひ。合意。

あいけん (合拳) (名) 拳の遊技で二人が同じ手を出すこと。—馴れあひ。合意。

あいけん (合拳) (名) 拳の遊技で二人が同じ手を出すこと。—馴れあひ。合意。

あいけん (合拳) (名) 拳の遊技で二人が同じ手を出すこと。—馴れあひ。合意。

あいけん (合拳) (名) 拳の遊技で二人が同じ手を出すこと。—馴れあひ。合意。

あいけん (合拳) (名) 拳の遊技で二人が同じ手を出すこと。—馴れあひ。合意。

あいけん (合拳) (名) 拳の遊技で二人が同じ手を出すこと。—馴れあひ。合意。

あいけん (合拳) (名) 拳の遊技で二人が同じ手を出すこと。—馴れあひ。合意。

あいけん (合拳) (名) 拳の遊技で二人が同じ手を出すこと。—馴れあひ。合意。

あいけん (合拳) (名) 拳の遊技で二人が同じ手を出すこと。—馴れあひ。合意。

アイサイト [Eye-sight] (名) 視力。● 眼線。
あいさがも [秋沙鴨] (名) 鴨。あきまがも。
あいさつ [挨拶] (名) ● お辭儀。● 答禮。
返辭。● 仲儀。あつかひ。● おの仲。● 一きき。

あいし [哀子] (名) 支那で、親の忌中にある子。
あいし [哀史] (名) 悲しい事情の歴史。あはれな。
あいし [哀辭] (名) 人の死を悲しむ文。
あいじ [愛兒] (名) かはゆが子。寵愛する子。
あいじ [愛日] (名) 月日を惜しむこと。●

あいじゅつ [愛性] (名) 愛しあはれむこと。
あいじゅう [哀恤] (名) かなしみいたむこと。
あいじょう [愛性] (名) ● 男女の生年月日を五行にあはせ考へて、縁の有無を定めること。● 心持のよきあふこと。相性。

あいしょう [愛誦] (名) 愛のて誦すること。
あいしゅう [哀傷] (名) かなしみいたむこと。
あいか [哀傷歌] (名) 人の死を悲しむ歌。
あひしゅう [愛羞] (名) かはゆめかけ。おとしもの。

アイシンキョロシ [愛親愛羅羅氏] (名) 支那清朝皇室の姓。
アイシンクラス [Isinglass] (名) 魚鱈の浮き膠。
アイスクリーム [Ice-cream] (名) 氷菓。アイスクリーム。
アイス [Ice] (名) 氷。アイスクリーム。の略。

あいす [愛す] (動) 愛する。● 愛する。● 愛する。
アイズ [Eyes] (名) 目。アイズ。
アイベグ [Beg] (名) 乞ふこと。アイベグ。
アイボクス [Ice-box] (名) 冷かなる箱。冷庫。

あいすちゅうなごん [會津中納言] (名) 入道。さかきかづ(上杉謙勝)。
あいすのこてつ [會津小鐵] (名) 人江戸の俠者。本名は上坂信吉。會津藩に愛された。
アイスランド [Iceland] (名) 地。天西洋北部の一大島。面積約十萬二千方。獨立の君主國で、デンマーク王が王位を兼任してゐる。首府はレイキヤーク。アイスランド。

あいせき [愛惜] (名) 顧事の仲間。相愛。
あいせき [哀情] (名) あいひやく。
あいせき [哀感] (名) かなしめいたむこと。
あいせん [藹然] (名) 藹然。あひあひ。
あいせん [愛染] (名) 須磨。愛の執着心。● 佛。

あいせき [愛惜] (名) 顧事の仲間。相愛。
あいせき [哀情] (名) あいひやく。
あいせき [哀感] (名) かなしめいたむこと。
あいせん [藹然] (名) 藹然。あひあひ。
あいせん [愛染] (名) 須磨。愛の執着心。● 佛。



【王明染愛】

あいそ [愛想] (名) あいそげの貌。いすかし。
あいそ [愛想] (名) あいそげの貌。いすかし。
あいそ [愛想] (名) あいそげの貌。いすかし。
あいそ [愛想] (名) あいそげの貌。いすかし。

あいだ [間] (接) 接。あいだ。
あいだ [間] (名) 間。あいだ。
あいだ [間] (名) 間。あいだ。
あいだ [間] (名) 間。あいだ。

あいだ [間] (接) 接。あいだ。
あいだ [間] (名) 間。あいだ。
あいだ [間] (名) 間。あいだ。
あいだ [間] (名) 間。あいだ。

あいだ [間] (接) 接。あいだ。
あいだ [間] (名) 間。あいだ。
あいだ [間] (名) 間。あいだ。
あいだ [間] (名) 間。あいだ。

あいだ [間] (接) 接。あいだ。
あいだ [間] (名) 間。あいだ。
あいだ [間] (名) 間。あいだ。
あいだ [間] (名) 間。あいだ。

あいだ [間] (接) 接。あいだ。
あいだ [間] (名) 間。あいだ。
あいだ [間] (名) 間。あいだ。
あいだ [間] (名) 間。あいだ。

あいだ [間] (接) 接。あいだ。
あいだ [間] (名) 間。あいだ。
あいだ [間] (名) 間。あいだ。
あいだ [間] (名) 間。あいだ。

「化銀の腐蝕を防ぐ爲に、その表面を亜鉛でおほふこと。」

あえんか か (亞鉛華) (名) 〔化学〕 化銀。白色の粉末。亜鉛を熱して製し、顔料及び薬用とする。

あえんこう こう (亞鉛華膏) (名) 〔藥〕 亞鉛華と安息香と豚脂とを混ぜた膏藥。皮膚病に用ひる。

あお あ (青) (名) 七色の一。晴天の空の色。黒みを含んだ馬の毛の色。一は藍より出てて藍より青し(句) (名) 動物學の包) 弟子が先生よりよすんばにいふ。『の意をあらはし語。』一待たず

あお あ (靑) (名) 彼の語の上につけて、未熟なと

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あお あ (靑) (名) 腹のあたりに抱く、武官の服。胸

あえん—あおき



【あおき】

年生草木。葉は細く、所から根を生ず。葉は圓形又は腎臓形。全縁。長い葉柄を有し、葉脈は花柄を抜き、黄化を開く。一さ(葉座) (名) 兜の(名) 八幡蓮。一すみれ(葉座) (名) 〔植〕 蓮葉

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

〔葉座〕 (名) 葉の形に似た刀の舞。一つば

あおいろ いろ (青色) (名) 靑。おかりやすと紫とて染めた色や其の色。衣服。(あおかりやると紫) (名) 靑白。一すがた(青色) (名) 靑鹿(名) 靑鹿

あおうき き (青) (名) 靑水田。油濁に生ずる一年生の草木。葉は楕圓形で小さく、表裏ともに緑色。『した海。大洋。

あおうな うな (青海原) (名) 青色の廣原

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

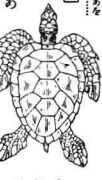
あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。

あおうま うま (青馬) (名) 毛が黒く、青ふある馬。毛が白く、青ふある馬。一白馬節會の略。



【魚海青】

を各種の形に切つて、漆器などの面に嵌入して飾とするもの。らで(人鏡餅)

あおがえる がえる (青蛙) (名) 〔動物〕 一種。體は小形で、あま(名) に似る。全身緑色で、趾端に吸盤を具へ、跳ぶに有し、樹上に登る。水田、池沼に産し、水邊の草中又は土中に産する。あや(名) がはづ。

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

あおがえり がえり (青鹿毛) (名) 馬の毛色。青分を帯

●常緑針葉樹。〔植〕山菜黄(名)科の雄雌異株の常緑灌木。葉は長楕圓形で鋸齒があつて對生する。夏の初葉紫緑色の小花をなす。冬、紅色の實を結ぶ。

あおきこころよう(名)〔青木昆陽(名)〕〔人〕江戸幕府の儒賢。蘭学の先覺。名は秋查(名)。字は原用。通稱は文鑑。甘藷を取寄て、研究の上、『蕃書考』を著して種考と共に配布した。死後、甘藷先生と稱せられる。明治六年(一八四九)歿。年七十二。

あおきしゅうぞう(名)〔青木周藏(名)〕〔人〕外交官。子爵。舊山藩士。外務大臣・全權大使。樞密顧問官。大正三年(一五七四)歿。年七十一。

あおきす(名)〔青藍(名)〕〔動〕鱸科の海産魚。鱗骨魚。體長、側扁し、青色青く、吻尖つて尾は細い。

あおきた(名)〔青北(名)〕〔扇き立(一)〕他動タ下(二)むやみにあふく。おどたどる。煽動する。

あおきたてる(名)〔あおきたつ(一)〕煽き立て(他動)タ下(一)あおきたつ(一)の口語。

あおきつつき(名)〔青啄木鳥(名)〕〔動〕あおけり(名)〔青黄粉(名)〕青粉に用ひ(一)。

あおきり(名)〔青桐(名)〕〔植〕梧桐科の落葉喬木。樹皮は緑色。葉は闊大で、三尖。長柄を結ぶ。夏、黄白色の小花群咲く。土に似ず實質が粘着。

あおきろすい(名)〔青木蠟水(名)〕〔人〕俳人。浮世草子作者。名は五音。野野口立圃の門人。歿仙堂と號す。享保十八年(一七三三)歿。年七十六。俳諧良材集等の著がある。

あおきん(名)〔青金(名)〕青色を帯びた粗製の金。金箔製造用の地金。

あおき(名)〔仰ぐ(一)〕自動、方四(一)上を向く。上の方を見る。仰ぐ。うやまふ。請ふ。

あおぐ(名)〔仰ぐ(一)〕扇ぐ(他動)方四(一)扇子を扇ぐ(他動)扇を振つて風を出す。扇子や團扇などを振つて風を出す。

あおくけ(名)〔青公卿(名)〕取るに足らぬ公卿。

あおくさ(名)〔青草(名)〕青竹とた草。一す(青草)〔名〕糊張の白絹や紙に、山藍で花鳥などの模様を描く摺りだしたの紙。

あおくさい(名)〔青臭い(一)〕形(一)あおくさ(一)の口語。

あおくさし(名)〔青臭し(一)〕形、(一)青草のやうなにはひがする。未熟らしい。

あおくちば(名)〔青朽葉(名)〕青みを帯びた朽葉。〔名〕葉の色目。表は青黄、裏は青。

あおくび(名)〔青頸(名)〕頸羽の緑の鶉。〔名〕鶉の雄。

あおぐま(名)〔青隈(名)〕俳優が幽霊や悪人に扮す時、髪や顔を青隈と名づける。

あおぐも(名)〔青雲(名)〕晴れた空。青空。一(青雲)の(一)〔名〕出来(一)の枕詞。

あおぐろ(名)〔青黒(名)〕青味を帯びた黒い色。表は黒い、青色、裏はつねの青色。①黒く青ばんだ馬の毛色。②見える黒色のもの。

あおげ(名)〔青毛(名)〕馬の毛色。青みを帯びて青黒い。〔名〕青い。

あおげら(名)〔青啄木鳥(名)〕〔動〕佛法僧目に屬する啄木鳥の一種。背部は黄緑色、腹部は橙黄色。頭上は鮮紅色、尾羽は褐色。下は帯緑白色、嘴は緑褐色。硬直尾尾と趾とによって樹幹を穿ることが巧みである。本州以南及び九州に棲む鳥類。

あおこ(名)〔青粉(名)〕食物を青く色つける粉。あなのりの粉末。おはばがらしの菓の粉末の類。

あおこけ(名)〔青苔(名)〕青色の苔。〔名〕だ馬。あおこま(名)〔青駒(名)〕毛色が白く、青は石草・石苔・腐菜(名)〔種〕緑藻類の海藻。海中の岩などに著生し、葉狀體は緑色で扁平。食用となる。ちさ(一)。

あおさいろく(名)〔青才六(名)〕オオビ下種。の隱語。青稚めと成る語。

あおさき(名)〔青黛(名)〕動置の一種。普通の碧より大きく、頭と頭とは白く、背は蒼灰色、冠毛は青黒し長い。①馬の毛色。淡青いものも。あおさし(名)〔青掃(名)〕青を散り、白でひいて緑のやうによつた菓子。〔又〕その錢。

あおさし(名)〔青掃(名)〕青を散らした錢。

あおさば(名)〔青掃(名)〕動置(一)自動、下(一)青くなる。青ばむ。①顔の色が青くかはる。

あおさむらい(名)〔青侍(名)〕若年で不馴れな官位の低い侍。

あおさめ(名)〔青白眼馬(名)〕青ばんだ白眼馬。あおさま外に達し、背部は藍色。腹部は黄白色又は白色で、砂狀狀の脚を被。齒は鋭尖、性は兇暴で、人、畜を噛む。肉は清淨の材料とし、又、骨を胡香といひ、鬚を推翅と稱して支那料理に用ひらる。我が國の近海、南洋、地中海に産す。もろさめかつなごめ。

あおさめる(名)〔青さめる(一)〕青さめる(一)自動、マ下(一)あおさむ(一)の口語。

あおさんごじゆ(名)〔青珊瑚珠(名)〕緑色の珊瑚珠。らうかん(瑠汗)〔種〕大鼓(名)科の藻類。高さ三米位、臺灣南部に自生する。温泉に栽培し、觀賞とする。

あおし(名)〔襖子(名)〕衫。冬着に用ひ、綿を入れたものもある。青藍。

あおじし(名)〔青磁(名)〕青緑色の釉藥を施した磁器。せい。青磁のやうな色。

あおじ(名)〔高雀(名)〕動雀科の鳥。頭、背尾は暗緑色。腹は淡黄色。秋季よく啼く。

あおじ(名)〔青地(名)〕織物の青い地質。

あおじし(名)〔青鹿(名)〕動かもしが羚羊。



〔雀 鶯〕

あおじそ(名)〔青紫蘇(名)〕種紫蘇の一種で、紫葉とも緑色のもの。あなそ。

あおじし(名)〔青紫(名)〕青葉のついた紫。なまき(名)。

あおじま(名)〔青島(名)〕地宮崎縣にある島。宮崎市から十六町。島周二町。干潮時には陸路との間に砂路ができ、牛島状を呈する。蒲葵(一)等の亞熱帯植物が發生してゐる。

あおじやしん(名)〔青寫原(名)〕普通には青地に白の線であらはした建築土木、機械等の見取圖面をいふ。發光劑赤血鹽と原液酸アミンの混合液を塗布した感光紙に、原線を含めて直接日光で焼付ける。白線法・青線法・黒線法の三種がある。アメリカリント。

あおじらつせい(名)〔青書生(名)〕若年や學問のあおじらつせい(名)〔青白橡(名)〕染色の名。藍の色目。青色を帯びた白橡。刈安草と紫草で染めたもの。きくちん(麴麩)。山鳩色。

あおじら(名)〔青汁(名)〕ゆでた藪積草(名)をすりつぶし、白濁をまててこしす汁でいって魚菜などを入れた料理。

あおす(名)〔青酢(名)〕ゆでた藪積草をすりつぶしてある液。

あおすか(名)〔青塚(名)〕青い草の茂つてゐる所。

あおすけ(名)〔青苔(名)〕〔種〕藻類の多年生草本。葉は細長く柔かい。初夏、花葉を抽き、緑色の花を、小さい穂狀花序に結ぶ。

あおすじ(名)〔青筋(名)〕青色の筋。①皮膚の上から見える靜脈。一を立てる(一)怒る。鯛類を起す。

あおすそ(名)〔青藪(名)〕青竹で編んだ上から見える靜脈。一を立てる(一)怒る。鯛類を起す。

あおすだれ(名)〔青簾(名)〕青竹で編んだ

あききく(秋菊)(名)「植秋咲く菊。
あききき(厭氣味)(名)「い」になつた様子。
あききり(秋桐)(名)「植」形科の多年生草本。陰地に生ず。直上線があり、三叉をなしてゐる。始め横臥し、後直立する。葉は對生し、形をなして、秋花種を生じ、紫赤又は黄色の唇形花を開く。

あききり(秋蕪)(名)「植」秋立つ蕪。
あききく(秋草)(名)「植」秋に花の咲く草本の總稱。一の「秋草」(一統)「結ぶ」の統詞。一の「はな」(秋草花)(名)「植」菊の異名。

あきくち(秋菜苗)(名)「植」初刈種子(子)科の落葉灌木。高さ二年前後、葉は長楕圓形で銀色の細葉がある。初夏、葉腋に散花を醸生し、白色で、後、黄變する。秋、白點を密布する紅色球形の果實を結び、生食し得る。

あきぐるま(空車)(名)「物」物を載せぬ車。からぐるあきさ(秋笠)(名)「秋」秋笠。
あきさ(秋沙鵝)(名)「動」鴨の一種。嘴は尖り、前、狭く、末端鉤状に曲り、嘴端には尖つた齒を列生し、潜水して魚類を巧みに捕食する。翼は黒白の斑を交へて線光あり、北方地方に繁殖し、冬季には温帯地方で越冬する。あきさ(あきさ)も、あきさく(秋作)(名)「秋」秋季に栽培する作物。秋季に成熟する作物。

あきす(手附金を渡す)「前金を出す」(古語)。
あきさ(秋鯖)(名)「動」秋に生る。脂のつたうまい。鯖。
あきさ(秋魚)(名)「秋」秋の頃。秋魚の雨。
あきさ(秋雨)(名)「秋」秋の雨。
あきさ(秋去衣)(名)「秋」秋になつて着る衣。秋衣。(古語)。
あきさ(秋去衣)(名)「秋」秋になつて着る衣。秋衣。(古語)。

あきさ(秋去衣)(名)「秋」秋になつて着る衣。秋衣。(古語)。
あきさ(秋去衣)(名)「秋」秋になつて着る衣。秋衣。(古語)。

あきさ(秋去衣)(名)「秋」秋になつて着る衣。秋衣。(古語)。
あきさ(秋去衣)(名)「秋」秋になつて着る衣。秋衣。(古語)。

あきさ(秋去衣)(名)「秋」秋になつて着る衣。秋衣。(古語)。
あきさ(秋去衣)(名)「秋」秋になつて着る衣。秋衣。(古語)。

あきさ(秋去衣)(名)「秋」秋になつて着る衣。秋衣。(古語)。
あきさ(秋去衣)(名)「秋」秋になつて着る衣。秋衣。(古語)。

あきさ(秋去衣)(名)「秋」秋になつて着る衣。秋衣。(古語)。
あきさ(秋去衣)(名)「秋」秋になつて着る衣。秋衣。(古語)。

あきさ(秋去衣)(名)「秋」秋になつて着る衣。秋衣。(古語)。
あきさ(秋去衣)(名)「秋」秋になつて着る衣。秋衣。(古語)。

あききーあきに

あきじい(明白)(名)「あき」あきめく。外見は見えやうであるが、實は盲目であること。(古語)。
あきしく(秋しく)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(商じり)(名)「商」商賣上のしくじり。(古語)。

あきしの(秋篠)(名)「地」奈良縣生駒郡平城村の字。あきめの名所。(歌枕)。「初めは法相宗。光仁(佛)初帝の頼朝所實靈十一、善珠正正の開基。(名)佛(初帝)の頼朝所實靈十一、善珠正正の開基。光仁(佛)初帝の頼朝所實靈十一、善珠正正の開基。光仁(佛)初帝の頼朝所實靈十一、善珠正正の開基。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。
あきじり(秋濕)(名)「植」菊の異稱。(古語)。

よこま。①分にくいこと。いやしいこと。②まづいこと。③好ましくないこと。狭くないこと。④罪惡。⑤志願のたなきやく。⑥不吉。⑦小なるを以てなす子初れ(句) (詞志剛先生傳及び小學の句) 劉備が子劉禪に對してした遺言。⑧に強ければ善にも強し(句) 大なる惡事をしたものが改心すれば却つて大なる善事をなす。

あく(權) (名) 上と四方をなか。お假風を連るに用ひる意。あがり。ひきま。まくばり。
あく(明) (名) 自動、力四 ①閉ぢられたものが開く。②からになる。③不用になる。④ひまになる。⑤まがき。⑥閉める。
あく(明) (名) 自動、力四 ①閉ぢられたものが開く。②からになる。③ひまになる。④ひまになる。⑤まがき。⑥閉める。

あく(自動、力四) ①自動、力四 ②あきらかになる。③年が経過する。新しい時になる。④満足する。
あく(自動、力四) ①自動、力四 ②あきらかになる。③年が経過する。新しい時になる。④満足する。
あく(自動、力四) ①自動、力四 ②あきらかになる。③年が経過する。新しい時になる。④満足する。

あく(自動、力四) ①自動、力四 ②あきらかになる。③年が経過する。新しい時になる。④満足する。
あく(自動、力四) ①自動、力四 ②あきらかになる。③年が経過する。新しい時になる。④満足する。
あく(自動、力四) ①自動、力四 ②あきらかになる。③年が経過する。新しい時になる。④満足する。

あくーあくし

あくがい(惡意) (名) ①他人に害を興へようとする心。わるい心。わるくだん心。惡心。②法或行爲が、法律上正常な效力に影響を及ぼす事實の存在を知りながら、殊更にこれを實行しようとする意思。
あくがい(惡意) (名) 粗末な着物。粗衣。①あくあぐい(安居院) (名) 東京都市上野區紫野にあった寺の名。比叡山の東塔林院の里坊。今は廢墟となつてゐる。
あくがい(惡意) (名) 佛前の惡事。①佛前の原因。②あつた(惡因惡果) (名) 佛前の原因。③あつた(惡因惡果) (名) 佛前の原因。

あくえん(惡縁) (名) わるい結果を生ずる原因。
あくえん(惡縁) (名) わるい結果を生ずる原因。
あくえん(惡縁) (名) わるい結果を生ずる原因。
あくえん(惡縁) (名) わるい結果を生ずる原因。
あくえん(惡縁) (名) わるい結果を生ずる原因。

あくえん(惡縁) (名) わるい結果を生ずる原因。
あくえん(惡縁) (名) わるい結果を生ずる原因。
あくえん(惡縁) (名) わるい結果を生ずる原因。
あくえん(惡縁) (名) わるい結果を生ずる原因。
あくえん(惡縁) (名) わるい結果を生ずる原因。

あくえん(惡縁) (名) わるい結果を生ずる原因。
あくえん(惡縁) (名) わるい結果を生ずる原因。
あくえん(惡縁) (名) わるい結果を生ずる原因。
あくえん(惡縁) (名) わるい結果を生ずる原因。
あくえん(惡縁) (名) わるい結果を生ずる原因。

あくきりゆう(惡氣流) (名) 飛行家の慣まされる陰謀な上層の氣流。①陰謀五月の異稱。
あくけつ(惡月) (名) 山の月。運のわるい月。
あくけつ(惡月) (名) 山の月。運のわるい月。
あくけつ(惡月) (名) 山の月。運のわるい月。
あくけつ(惡月) (名) 山の月。運のわるい月。

あくげん(惡言) (名) 人をあはさまいふこと。
あくげん(惡言) (名) 人をあはさまいふこと。
あくげん(惡言) (名) 人をあはさまいふこと。
あくげん(惡言) (名) 人をあはさまいふこと。
あくげん(惡言) (名) 人をあはさまいふこと。

あくげん(惡言) (名) 人をあはさまいふこと。
あくげん(惡言) (名) 人をあはさまいふこと。
あくげん(惡言) (名) 人をあはさまいふこと。
あくげん(惡言) (名) 人をあはさまいふこと。
あくげん(惡言) (名) 人をあはさまいふこと。

あくげん(惡言) (名) 人をあはさまいふこと。
あくげん(惡言) (名) 人をあはさまいふこと。
あくげん(惡言) (名) 人をあはさまいふこと。
あくげん(惡言) (名) 人をあはさまいふこと。
あくげん(惡言) (名) 人をあはさまいふこと。

あくし(惡態) (名) 佛惡業の結果、死後、行かればならぬ苦惱の世界。惡道。
あくし(惡態) (名) 佛惡業の結果、死後、行かればならぬ苦惱の世界。惡道。
あくし(惡態) (名) 佛惡業の結果、死後、行かればならぬ苦惱の世界。惡道。
あくし(惡態) (名) 佛惡業の結果、死後、行かればならぬ苦惱の世界。惡道。
あくし(惡態) (名) 佛惡業の結果、死後、行かればならぬ苦惱の世界。惡道。

あくし(惡態) (名) 佛惡業の結果、死後、行かればならぬ苦惱の世界。惡道。
あくし(惡態) (名) 佛惡業の結果、死後、行かればならぬ苦惱の世界。惡道。
あくし(惡態) (名) 佛惡業の結果、死後、行かればならぬ苦惱の世界。惡道。
あくし(惡態) (名) 佛惡業の結果、死後、行かればならぬ苦惱の世界。惡道。
あくし(惡態) (名) 佛惡業の結果、死後、行かればならぬ苦惱の世界。惡道。

あくし(惡態) (名) 佛惡業の結果、死後、行かればならぬ苦惱の世界。惡道。
あくし(惡態) (名) 佛惡業の結果、死後、行かればならぬ苦惱の世界。惡道。
あくし(惡態) (名) 佛惡業の結果、死後、行かればならぬ苦惱の世界。惡道。
あくし(惡態) (名) 佛惡業の結果、死後、行かればならぬ苦惱の世界。惡道。
あくし(惡態) (名) 佛惡業の結果、死後、行かればならぬ苦惱の世界。惡道。

あくし(惡態) (名) 佛惡業の結果、死後、行かればならぬ苦惱の世界。惡道。
あくし(惡態) (名) 佛惡業の結果、死後、行かればならぬ苦惱の世界。惡道。
あくし(惡態) (名) 佛惡業の結果、死後、行かればならぬ苦惱の世界。惡道。
あくし(惡態) (名) 佛惡業の結果、死後、行かればならぬ苦惱の世界。惡道。
あくし(惡態) (名) 佛惡業の結果、死後、行かればならぬ苦惱の世界。惡道。



〔舎〕

あくしん[悪心](名)わるい心。●他に害を
與ふこと。●
あくしん[悪臣](名)わるいけし。たになら
あくじん[悪神](名)災を興へる神。まにかみ。
あくすい[惡水](名)飲料に濁せる水。汚
水。一汚水路(名)汚水を流す溝。下水道。
アクステイン(Acostion)(名)耳の達人
が音を聴取に用いる擴音の器械。傳音器。
あくせ[惡世](名)惡事の行はれる世の中。●
末世。●渡者。

あくせい[惡聲](名)聲のわるいこと。●口の
あくせい[悪性](名)性質のわるいこと。●病
氣のわるいこと。●
あくせく[醜隙催促](名)こせせさせること。
あくせつ[惡說](名)條理の通らぬ説。●害
のある言説。●無用の言説。
あくせつ[惡舌](名)悪口。他人をあしざまに罵
あくせつ[惡錢](名)粗賤の錢。●不正で得た金
錢。●身上に附かず(句)不正の行いで得た金
錢は、無益に消費せられて、怒り盡くるにいふ。
あくせん[惡戰](名)苦しむ戦。
あくせん[Accent](名)一講の中で特に力
を入れる部分。●(一語中の高まり、低まり。近
世西洋語の如きは強弱アクセントを有し、日本語は
大體に於いて、高低アクセントを有する。漢詩の平
仄、西洋語の詩等の音律的義は之を應用したるもの場
音。強音。●發音の調子。

あくそう[惡相](名)悪性のかま。●
あくそう[惡相](名)わるい人相。●兒童な
人相。●不吉な現象。
あくそう[惡憎](名)よくない恨の役にも立たぬ
あくそどもくぞ[芥蕪屑](名)何の役にも立たぬ
あくた(名)あたま。

あくと(名)かみ。ちり。くつ。
アクダ[阿骨打](名)入支部。金の太直の名。完
顔(完)氏。菊利姓の第三子。遂末の衰微に乘じ、女
眞を不嫁、會樂に都して一一一五年金國を建てる皇帝

と稱した。(二つ)
アクター[Actor](名)俳優。男優。●【法】
たれくち[惡態](名)わるく。あくかう。あく
あくと(名)あたま。
あくたがわ[荊川](名)●(一)地大阪市西成區
にある淀川の支流名。伊勢物語の記載で、鬼の住
居として名高い。●(二)文)龍の狂言。生田八幡
に參詣する生葉手の男とちんばの男が、芥川を渡る
際、互の不具を嘲つてたわひもない喧嘩をする筋を
作つたもの。(かみ)麗寛。

あくたがわりゆうのすけ……が「芥川龍之
介」(二)●(一)明治大正時代の小説家。東京市に生ま
れた。新技巧派の巨匠としてその才華を顯はれた
が、昭和二年(五八)七自殺。年三十六。●(二)麗生門
「傀儡師」夜來の花等、多くの作品がある。
あくたひ[芥火](名)芥を焚ひ火。一の「芥火
の」(枕)●(二)鯛の枕詞。
あくたま[惡玉](名)奸佞邪智な者。惡人。●
惡事に誘ひ入れる妖術。●
あくたまたくた[芥蕪屑](名)何の役にも立たぬ
あくとたれ口[惡太郎](名)いたづら。●
あくとたれ口(名)にくまれ口。●
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。

あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。

あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。
あくとたれ口(名)悪太郎。あはれ者。

あくちしき[惡智識](名)●(一)人を惡に導く邪
惡のもの。●(二)智識(の對)
アクテイヴ[Active](名)●(一)自ら進んでしか
ける。積極的。●(二)活氣のあるさま。●(三)活動力。
アクティヴイティ[Activity](名)●(一)活動力。
活動性。●(二)「作」●(三)代理の。臨時の。
あくくと[惡徒](名)わるい。●(一)悪黨。
●(二)一種(名)きび。かかと。
あくくと[種](名)きび。かかと。
あくくと[種](名)又か又はオペラの一幕。●(二)法律。
●(三)行爲。動作。

あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。

あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。

あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。
あくどい[惡道](名)わるい道路。難路。

あけたたみ(上履)(名)両面に表と裏をつけ、

畳の上に別に敷きかきれる厚い履。貴人の御座所又は

は様所に用いる。○床下の投道。【あけること】

あけたて(開閉)(名)戸や障子をあけること

あけたま(上玉揚玉)(名)かぶとの頂上にある

金物の名。打巻の裾。鑑定数の縁を早く縫門に

入れ盡くした縁が、更に投げ入れた金色の帯が。

あけち(上地)(名)漫收せられた土地。あがりち。

あけちみつひて(明智光秀)(名)入武將。通稱十兵衛。織田信長に仕へて丹波國山崎城主となる。

天正十年(一四二二)信長を討するや、僅かに十三日

で秀吉に破られて死。年五十五。

あけちらす(行違)(名)開散らす(他動)カ、四

方方の戸、障子などをあけ放す。

あけつづもり(明告鳥)(名)動疑の異稱。

あけつちもん(上土鳥)(名)左右の丸柱の上に

冠木をのせ、その上に土をあげた門。あづちもん

(築門)。

あけつらい(論)(名)あけつらふこと。論

あけつろう(論)(名)あけつらふこと。論

あけつら(論)(名)あけつらふこと。論

あけつら(論)(名)あけつらふこと。論

あけつら(論)(名)あけつらふこと。論

あけつら(論)(名)あけつらふこと。論

あけつら(論)(名)あけつらふこと。論

あけつら(論)(名)あけつらふこと。論

あけつら(論)(名)あけつらふこと。論

あけつら(論)(名)あけつらふこと。論

あけつら(論)(名)あけつらふこと。論

あけつら(論)(名)あけつらふこと。論

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。

あけはなる(あけはなる)の口語。



【あけはなる】

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下

あけひろげる(開擴) (他動) 方下



【あけまき】

あけまき(揚幕)(名)能舞臺の横がかりの出入

口に垂れ幕。○芝居の花道の出入口の垂れ幕。

あけまさり(上履)(名)元服して髪あがした姿

の前よりよく見えること。(古語)

あけまつ(上笠)(名)長野縣西筑摩郡駒ヶ根

村の大寺。木曾の精道達院床の奇勝が近くにある。

あけまど(揚窓)(名)つきあけること。扉のやうに

なる窓。つきあけまど。

あけまじ(上鞆)(名)昔の職師で、巧みに低く蹴

あけまじ(上鞆)(名)昔の職師で、巧みに低く蹴

あけまじ(上鞆)(名)昔の職師で、巧みに低く蹴

あけまじ(上鞆)(名)昔の職師で、巧みに低く蹴

あけまじ(上鞆)(名)昔の職師で、巧みに低く蹴

あけまじ(上鞆)(名)昔の職師で、巧みに低く蹴

あけまじ(上鞆)(名)昔の職師で、巧みに低く蹴

あけまじ(上鞆)(名)昔の職師で、巧みに低く蹴

あけまじ(上鞆)(名)昔の職師で、巧みに低く蹴

あけまじ(上鞆)(名)昔の職師で、巧みに低く蹴

あけまじ(上鞆)(名)昔の職師で、巧みに低く蹴

あけまじ(上鞆)(名)昔の職師で、巧みに低く蹴

あけまじ(上鞆)(名)昔の職師で、巧みに低く蹴

あけまじ(上鞆)(名)昔の職師で、巧みに低く蹴

あけまじ(上鞆)(名)昔の職師で、巧みに低く蹴

あけまじ(上鞆)(名)昔の職師で、巧みに低く蹴

あけまじ(上鞆)(名)昔の職師で、巧みに低く蹴

あけまじ(上鞆)(名)昔の職師で、巧みに低く蹴

あけまじ(上鞆)(名)昔の職師で、巧みに低く蹴

あけまじ(上鞆)(名)昔の職師で、巧みに低く蹴

あけまじ(上鞆)(名)昔の職師で、巧みに低く蹴

あさひーあさく

りしてゐる。あざやかである。

あさい (朝寝) (名) あざい朝寝。(古語)

あさい (朝飯) (名) あさい朝飯。(古語)

あさい (朝市) (名) 朝立市。

あさい (浅井忠) (名) (八) 明治初年の洋画家。江戸の人。留學洋東洋の先覺者。東京美術學校教授。フランス留學、京都高等工藝學校教授となる。明治四十年(二五七)没。年五十三。

あさい (麻絲) (名) 麻の纖維を織つた糸。

あさい (浅井了意) (名) 淺井了意(名) 江戸時代の歌作家。鎌倉著家。京都の人。如璧子と號す。寶永六年(二六九)没。年七十。お伽椰子。東海道名所記等の著がある。

あさうら (麻裏) (名) あさうらぞうり(麻裏草履)。

あさうら (浅草) (名) 麻絲草履(名) 麻絲のひらうち組紐を裏につけた草履。〔へちま) 絲瓜。

あさえびす (朝惠比須) (名) 朝早く惠比須様を拜みに行くこと。

あさおき (麻苦) (名) 麻絲。(名) 麻絲。(古語)

あさおき (朝起) (名) 朝早く起きること。一は三文の徳(句) 朝起には利益がある。

あさおき (阿座名) (名) 動はまぐりの變種。鶯の色は薄赤く肉は白色で美味。琉球に産する。

あさか (朝) (名) 朝。(古語)

あさがえり (朝) (名) 朝。家に歸ること。遊郭から朝、歸朝(名) 朝。

あさがお (朝顔) (名) 朝。床からおき出した時の顔つき。(朝) 庭菜の科の一年生纏性莖草本。葉は心臟形で三裂し、五生す。花は漏斗状をなし、その色には種種ある。夏朝早く咲き、日中に萎む。花後球形の果實を結ぶ。早子、咲花、きょう、桔梗) (名) けい木種(動) かげろう(蜻蛉)。(朝) 朝顔の花の形をしてゐる落着きの標章。

男便所の排尿器。(名) 嬰の色の目。表も裏も緑色(は)のの。あわせ(名) 朝顔合(名) 種類(朝顔)を持寄つて品評すること。いかに朝顔(名) (動) 腹足類の朝顔貝科の貝。形は扁平に似て密二五種位。紫色半透明つやは朝顔に似る。和歌の浦小笠原島等に産する。一ぞめ(朝顔染(名) 紺又は紫で、大形に染めた染織物。器物の頃流行した名) 一なり(朝顔形(名) 器物の形の朝顔の花の形に似てゐるもの) 一たんきょう(朝顔人形(名) 朝顔を人形に模してつづしたもの) 一の朝顔の(枕) 秀色に咲く(枕) 一ひめ(朝顔姫(名) (しとくじせい) (織女名) 一やき朝顔焼(名) 朝顔の花の形に焼いた陶器。多く便所に用ひる。一の花一時(句) 物事の多々、便所に用ひる。

あさがお (朝顔日記) (名) 文(し) うつあさがお(名) 生寫朝顔日記。

あさか (朝鏡) (名) 朝日かけの多いこと。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさかけ (朝影) (名) 朝日影。(名) 獲せた姿。

あさかけ (朝駟) (名) 朝早く駟馬に押寄せること。一早期の出かけ。朝早く馬を驅ること。

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、

あさか (朝) (名) 朝。朝早く馬を驅ること。又、朝鏡や水にうつした形が、又、



【朝辛白】

アール。観音堂・仲店・植地・風置池・興行物の盛り場等があつて、東京市内第一の民衆的歡樂地である。
いぐら (浅草倉) (名) 浅草にあつた江戸幕府の米倉。
いしき (浅草色) (名) 浅草公園に於ける特殊な雲氣からいふ安價で強烈で挑教的な気分。
たんぼ (浅草田圃) (名) 吉原遊郭の後にあつた田圃。
にんきょう (浅草人形) (名) 浅草の木彫。着色の人形。
しり (浅草海苔) (名) 浅草の木彫。着色の人形。黒紫色の佳香であつた海苔。あまのり。
せうかい (浅草海苔) (名) 浅草公園に於ける海苔。あまのり。
せうかい (浅草海苔) (名) 浅草公園に於ける海苔。あまのり。
せうかい (浅草海苔) (名) 浅草公園に於ける海苔。あまのり。
せうかい (浅草海苔) (名) 浅草公園に於ける海苔。あまのり。



〔つぐまあ〕

あさくち (浅黒) (名) 染色の名。薄いくち。
あさくち (浅黒) (名) 染色の名。薄いくち。
あさくち (浅黒) (名) 染色の名。薄いくち。
あさくち (浅黒) (名) 染色の名。薄いくち。
あさくち (浅黒) (名) 染色の名。薄いくち。
あさくち (浅黒) (名) 染色の名。薄いくち。
あさくち (浅黒) (名) 染色の名。薄いくち。
あさくち (浅黒) (名) 染色の名。薄いくち。
あさくち (浅黒) (名) 染色の名。薄いくち。
あさくち (浅黒) (名) 染色の名。薄いくち。

あさけしむらさき (浅滅紫) (名) 染色の名。紫色を薄くして光澤を消したものを。(古語)「の煙。
あさけり (朝煙) (名) 朝立ちのぼる炊事。
あさけり (朝煙) (名) 朝立ちのぼる炊事。
あさけり (朝煙) (名) 朝立ちのぼる炊事。
あさけり (朝煙) (名) 朝立ちのぼる炊事。
あさけり (朝煙) (名) 朝立ちのぼる炊事。
あさけり (朝煙) (名) 朝立ちのぼる炊事。
あさけり (朝煙) (名) 朝立ちのぼる炊事。
あさけり (朝煙) (名) 朝立ちのぼる炊事。
あさけり (朝煙) (名) 朝立ちのぼる炊事。
あさけり (朝煙) (名) 朝立ちのぼる炊事。

あさごち (朝東風) (名) 朝吹く東風。
あさごち (朝東風) (名) 朝吹く東風。
あさごち (朝東風) (名) 朝吹く東風。
あさごち (朝東風) (名) 朝吹く東風。
あさごち (朝東風) (名) 朝吹く東風。
あさごち (朝東風) (名) 朝吹く東風。
あさごち (朝東風) (名) 朝吹く東風。
あさごち (朝東風) (名) 朝吹く東風。
あさごち (朝東風) (名) 朝吹く東風。
あさごち (朝東風) (名) 朝吹く東風。
あさごち (朝東風) (名) 朝吹く東風。

あささけ (朝茶) (名) 朝茶。
あささけ (朝茶) (名) 朝茶。
あささけ (朝茶) (名) 朝茶。
あささけ (朝茶) (名) 朝茶。
あささけ (朝茶) (名) 朝茶。
あささけ (朝茶) (名) 朝茶。
あささけ (朝茶) (名) 朝茶。
あささけ (朝茶) (名) 朝茶。
あささけ (朝茶) (名) 朝茶。
あささけ (朝茶) (名) 朝茶。
あささけ (朝茶) (名) 朝茶。

あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。

あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。

あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。



〔◎ 船妻朝〕

あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。

あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。

あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。
あさすけ (浅漬) (名) 浅漬。

あしけびと(悪人)名 あくんにん。わるもの。

あしこい(彼處)代 あそこ。かし。〔古語〕

あしこい(葦五位)名(名)動(よし)程度。

あしさい(悪し)名 あしき。わるい程度。

あしさい(紫陽花八仙花)名(名)種(虎耳草)科の落葉灌木。高さ一米半位。葉は廣楕圓形で、縁は鋸歯をなす。六月の交、紫色の四瓣花を聚繖花序に綴る。〔枕詞〕

あじさお(簞刺)名(動)動(目)動(海鳥)脚に似て形小く、白色で頭上及び後頭は黒色翼に黒色部がある。嘴は細く末端屈曲し、尾は分岐してある。

あじさま(悪様)名 わるいやう。わるさま。わるさま。一に「悪様に」(副)わるいやうにわるさまに。わるさまに。御前にさまへ。に啓する。

あじさわり(足障)名 あく時(妨)となるもの。

あじさわり(足障)名 あく時(妨)となるもの。

あじさわり(足障)名 あく時(妨)となるもの。

あじさわり(足障)名 あく時(妨)となるもの。

あじさわり(足障)名 あく時(妨)となるもの。

あじさわり(足障)名 あく時(妨)となるもの。

あじさわり(足障)名 あく時(妨)となるもの。

あじさわり(足障)名 あく時(妨)となるもの。

あじさわり(足障)名 あく時(妨)となるもの。

あじさわり(足障)名 あく時(妨)となるもの。

あじさわり(足障)名 あく時(妨)となるもの。

あじさわり(足障)名 あく時(妨)となるもの。

あじさわり(足障)名 あく時(妨)となるもの。

あじさわり(足障)名 あく時(妨)となるもの。

あじさわり(足障)名 あく時(妨)となるもの。

あじさわり(足障)名 あく時(妨)となるもの。

あじさわり(足障)名 あく時(妨)となるもの。

あしけーあしの

あしぞろえ(足揃)名(名)人馬の足数を揃へて列を正しくすること。せいぞろえ。

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あした(朝)名(名)朝の曙

あしけーあしの

あしだら(足踏)名(名)足を踏むに用ひる器

あしづいて(足座)名(名)あるきついで道ついで

あしつて(足津)名(名)琴の縁の端を結びか

あしつき(葦附)名(名)水草木松の類(古語)

あしつき(足附)名(名)足のある器物白足の形

あしつき(足附)名(名)足のある器物白足の形

あしつき(足附)名(名)足のある器物白足の形

あしつき(足附)名(名)足のある器物白足の形

あしつき(足附)名(名)足のある器物白足の形

あしつき(足附)名(名)足のある器物白足の形

あしつき(足附)名(名)足のある器物白足の形

あしつき(足附)名(名)足のある器物白足の形

あしつき(足附)名(名)足のある器物白足の形

あしつき(足附)名(名)足のある器物白足の形

あしつき(足附)名(名)足のある器物白足の形

あしつき(足附)名(名)足のある器物白足の形

あしつき(足附)名(名)足のある器物白足の形

あしつき(足附)名(名)足のある器物白足の形

あしつき(足附)名(名)足のある器物白足の形

あしつき(足附)名(名)足のある器物白足の形

あしつき(足附)名(名)足のある器物白足の形

あしつき(足附)名(名)足のある器物白足の形

あしつき(足附)名(名)足のある器物白足の形

あしつき(足附)名(名)足のある器物白足の形

あしけーあしの

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あしけーあしの



あしな(足長)名(名)足の非常に長い。いふ想像

あじろ(網代) (名) 冬、川の瀬に竹や木を編ん

だもの網のかけりに立てて、魚を捕るに用いる。

あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ



(まろぐろじわ)

あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

もの。あじろ(網代) (名) 網代形に編んだ

あすかいりゅう(飛鳥井流) (名) 飛鳥

井流を祖とする書法の一流派。飛鳥井流を祖

とす流儀の流派。

あすかり(預) (名) 人や金品を預ること。保

管。預る人。預り手。預り文書。御つち所

重所。武者所等の長。あすかり(預) (預)

(名) 銘銘任務を果すと。あすかり(預) (預)

(名) 預て保管する金子。あすかり(預) (預)

證券(名) 預て保管する物品等を預った證として預

す有價證券。預証書。約束手形。あすかり(預)

預證文(名) 預り人や金品を預ったしに渡す

文書。あすかり(預) (預) (名) 預ること。あすかり(預)

た(預手形) (預) (名) 預りしもの。あすかり(預)

ころ(預所) (名) 莊園を預つてその管理する

役所。又その人。江戸時代に諸藩が預つた幕府の

領地。あすかり(預) (預) (名) 預つてある人。保管者。

ぬし(預主) (名) 領地に同じ。あすかり(預)

米(名) 納税の抵当として人民から預つた米。

ま(名) 納税の抵当として人民から預つた米。

預物(名) 預つてある品物。一物は半分の主

預物(名) 預つてある品物。一物は半分の主

預物(名) 預つてある品物。一物は半分の主

あすかる(預) (名) 預りしもの。あすかり(預)

あすかる(預) (名) 預りしもの。あすかり(預)

あすかる(預) (名) 預りしもの。あすかり(預)

あすかる(預) (名) 預りしもの。あすかり(預)

あすかる(預) (名) 預りしもの。あすかり(預)

あすかる(預) (名) 預りしもの。あすかり(預)

豆梨(名) 種薯蕷科の落葉喬木。高さ約八米

樹皮は黒褐色で、灰白色の小斑がある。葉は卵形

で鋸歯を有し、初夏白色の小花を腋生花序に開け

秋、紅色の小果実を生ずる。やまなし。いねず

「小豆鼠」(名) 鼠色がかった小豆色。いむし「小

豆豆」(名) 小豆の香臭。黄色緑色の皮紋ある

甲虫。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い

た飯。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い

た飯。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い

た飯。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い

た飯。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い

た飯。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い

た飯。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い

た飯。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い

た飯。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い

た飯。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い

た飯。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い

た飯。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い

た飯。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い

た飯。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い

た飯。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い

た飯。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い

た飯。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い

た飯。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い

た飯。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い

た飯。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い

た飯。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い

た飯。いむし「小豆鼠」(名) 小豆をよって炊い



(塚)

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(塚) (名) 塚

あすち(安土)名「地滋賀縣蒲生郡にある村。養老朝の東岸、東海道線の一驛。天正四年(一五七六)織田信長がここに城を築いた。今は丘上。磯があり、絶見寺はその麓にある。一ほうろん村(安土法論)名「佛」天正七(一五七九)安土で行った浄土日蓮兩宗の法論。一ももや田信長(安土桃山時代)名「歴」安土は織田信長の居た、桃山は豊臣秀吉の居城であったが、安土桃山時代は、信長秀吉の政権を握つてゐた時代である。美術工芸史上の一時代をなす。

アストラカ(Astrakhan)名「帽」外套等に用ひる天然毛織物の一種。ロシアのアストラカ地方に産する動物の毛皮に似せて織つたもの。

アストン(Stanton)名「天竺」元亨元年(一〇九〇)化学士が考へ、質稔光澤を奏出し、ノール化学員を経て「同位元素」の者である。

アストン(William George Aston)名「天竺」イギリスの言語学者・外交官、駐日英領公使、前翻譯官。二等書記官日本文化の研究に著し「日本神道論」「日本文学史」「日本古代史」「日本神話」「日本口語文法」「日本文学文法」の著者である。(Aston)

あすなひ(二人を一所に葬る)。(古語)

あすなひ(望)名「望」望遠鏡(望遠鏡)名「種」種科の當様生木。高さ約三〇米。葉は楕に似て大。交互に對生する。雌雄同株。六月頃、單性花の筒開。果實は楕形。材は建築材。船材。枕木。木材の細材。樹皮は火繩又は繩となる。

アスパラガス(Asparagus)名「石」「柏」(ア)「種」食用又は觀賞用の植物。食用には「まじや」と「西洋」名「おらんどじこく」など呼ばれる種類。「てんもんどう」があり、觀賞用には「きじか」し「たまばうき」「みどりばうき」「やなぎばうき」「ちばうき」「このぶようき」「すきのはかばうき」などがある。百合科の多年生草本で、葉は退化して、淡黄色の細花を葉の代りにする。雌雄異株。初夏、黄緑色なり、赤色の漿果を結ぶ。食用に供する種類は、嫩葉を軟白して

用の、亦これを雄詰にして貯蔵する。

アスピリン(Aspirin)名「藥」サリチル酸無水酸成又は鹽化アセチルアセチル化した白色無臭の粉末。解熱及び鎮痛劑として、神經痛、頭痛、感冒、筋肉リウマチ、肋膜炎に効果がある。

アスファルト(Asphalt)名「土」瀝青名「石」石油の産地から天然に出る樹脂状光澤を有する粘塊塊状の礦物で、道路の舗装材、洋風建築の床の電線、被覆等に用ひられる。西印度洋島のトリニダードは世界一の産地。一コンクリート(Asphalt Concrete)名「コンクリート」アスファルトを混入し、舗道などに用ひるもの。一フェルト(Asphalt felt)名「液」になったアスファルトを麻、ニス、油に混ぜ、コンクリート工事の膠目に使ふもの。一フェルトメント(Asphalt pavement)名「舗道」アスファルト舗道。一アスペクト(Aspect)名「景観」飛行機から瞰下した景。一飛行中の飛行機を更にその上から寫した寫眞。

アスベスト(Asbestos)名「織」わたた織物。

アスマス(吾妻吾儘)名「巻」が巻。(古語)

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「日本武尊が東征の歸途に、唯日瀨に登り、東南を眺め、妃皇孫媛の影、妃皇孫媛の影を眺め、吾儘者耶(あすま)と歎に給うたことに起るといふ。東方諸國。(古語)東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。



(遊 東)

ら行はれた歌舞の一種。初めは東國地方の民間歌舞であったが、宮廷や貴族の間に採用せられ、神社の祭禮にも奏するやうになつた。舞人六人、狛音籠樂、笛琴を用ひ、笏拍子を打つ。現在は、宮中の皇靈祭、神武天皇祭、日光東照宮加茂祭、永川神社祭に行はれる。東國。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

色である。あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。

あすま(東)名「東」東國・吾儘名「あすま」。



(駄 下東)

「ずくり」(四)阿造(名)【建】屋根の形に
よる建築名稱。(よせむれずくり)寄棟造。

あすまわらわ(あすまわら)【東浦東駝子】(名) 内侍
司の女官。一服三斗の小童を用いる。(語)

あずもろと(あずもろ)【東人】(名) (あすまろと)。(古)
あすら【阿修羅】(名) (あし)。【古語】

アスリート(Athlete)(名) 運動家。競技者。
アスレティックス(Athletics)(名) 運動競技。
競技。開拔。

あすわひのき【翠槍】(名) 種「あすわひ」なる
あす(汗)(名) (生)人及び動物の皮膚から分泌す
る分泌物。臭気と鹹味とを有する。①船箱内の積
荷に生ずる汗滴。②取手(句)漢番の劉向内に
出(一)且發し命を取す(句)はぬにいふ。又、

あせ【吾兄】(代) あた。男子を親しんで呼ぶ語。
あせ【腫・神】(名) ①田と田との間に土を盛り上げ
た細道。②明居や数居の流の中間にあるしきり。

あせ(副) な、なりゆき。(古語)
あせ【線】(名) 機の方で糸をすくへる用具。一いと
【線】(名) あせの中まきとめる廻り糸。一た
【線】(名) 機の際糸の中に入れて糸の乱れを
防ぐ。【古語】

あせ【汗着】(名) 汗と着。苦心を重ねる。
あせい【亞聖】(名) 聖人につぐ賢人。「こと。
あせい【阿世】(名) 世間の人。おもしろく。つら
アゼイム(Atheism)(名) 無神論。無神教。

あせお(汗)【織機】(名) 織地に高価を現はした織物。
あせか(汗)【種】(名) 汗のよみかひ出る人。
あせか(汗)【種】(名) 種「あせか」一年生草本。
田畔に生ず。高さ一米以下。葉は細長く、花は黒
褐色で、圓錐形の穂をなす。夏咲く。

あせが(汗)【種】(名) 種「あせが」一年生草本。
一年生草本。莖は三角形。葉は細長く、花は穂狀で
淡黄色。ほくそがやつり。

あせぐ(汗)【種】(名) 種「あせぐ」一年生草本。
一年生草本。葉は三角形。葉は細長く、花は穂狀で
淡黄色。ほくそがやつり。

あせくら(校倉)(名) 【建】
古代建築の一。三角形の木の
柱を外にあらはして井桁に
組みあげた倉。甲斐。玄倉。あ
せり。正倉院は之に屬する。

あせし(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせし(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせし(汗)【汗染】(名) 汗の染。



(5)

あせじ(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせじ(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせじ(汗)【汗染】(名) 汗の染。

あせじむ(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせじむ(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせじむ(汗)【汗染】(名) 汗の染。

あせじば(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせじば(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせじば(汗)【汗染】(名) 汗の染。

あせしらず(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせしらず(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせしらず(汗)【汗染】(名) 汗の染。

あせしる(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせしる(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせしる(汗)【汗染】(名) 汗の染。

あせしる(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせしる(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせしる(汗)【汗染】(名) 汗の染。

あせしる(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせしる(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせしる(汗)【汗染】(名) 汗の染。

あせしる(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせしる(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせしる(汗)【汗染】(名) 汗の染。

あせしる(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせしる(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせしる(汗)【汗染】(名) 汗の染。

あせしる(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせしる(汗)【汗染】(名) 汗の染。
あせしる(汗)【汗染】(名) 汗の染。

色の液體。エーテルに類する。木材又は補綴體を乾
溜する時「メチルアルコール」と共に生ずる。糖
尿病熱性症及び饑餓時の尿中には屢々含まれる。

あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)
あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)

あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)
あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)

あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)
あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)

あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)
あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)

あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)
あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)

あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)
あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)

あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)
あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)

あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)
あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)

あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)
あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)

あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)
あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)

あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)
あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)

あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)
あせな(汗)【汗洗】(名) 汗を洗ひ去る。(古)

あそ(朝臣阿會)(名) あそみ(朝臣)。(古語)
アソ(ASO)(名) アメリカ合衆国イーストマリーナ社
から製造販賣する瓦斯ラジオ用真空管の名稱。ア
ソニア(A.S.O. A.S.O. A.S.O.)等十種ある。一し
き「一色素」(名) 化「有機色素化合物」の。メ
チルオレンジ・メチルレッド・メチルブルー等もこの
アソに属する。(古語)

あそ(朝臣阿會)(名) あそみ(朝臣)。(古語)
アソ(ASO)(名) アメリカ合衆国イーストマリーナ社
から製造販賣する瓦斯ラジオ用真空管の名稱。ア
ソニア(A.S.O. A.S.O. A.S.O.)等十種ある。一し
き「一色素」(名) 化「有機色素化合物」の。メ
チルオレンジ・メチルレッド・メチルブルー等もこの
アソに属する。(古語)

あそ(朝臣阿會)(名) あそみ(朝臣)。(古語)
アソ(ASO)(名) アメリカ合衆国イーストマリーナ社
から製造販賣する瓦斯ラジオ用真空管の名稱。ア
ソニア(A.S.O. A.S.O. A.S.O.)等十種ある。一し
き「一色素」(名) 化「有機色素化合物」の。メ
チルオレンジ・メチルレッド・メチルブルー等もこの
アソに属する。(古語)

あそ(朝臣阿會)(名) あそみ(朝臣)。(古語)
アソ(ASO)(名) アメリカ合衆国イーストマリーナ社
から製造販賣する瓦斯ラジオ用真空管の名稱。ア
ソニア(A.S.O. A.S.O. A.S.O.)等十種ある。一し
き「一色素」(名) 化「有機色素化合物」の。メ
チルオレンジ・メチルレッド・メチルブルー等もこの
アソに属する。(古語)

あそ(朝臣阿會)(名) あそみ(朝臣)。(古語)
アソ(ASO)(名) アメリカ合衆国イーストマリーナ社
から製造販賣する瓦斯ラジオ用真空管の名稱。ア
ソニア(A.S.O. A.S.O. A.S.O.)等十種ある。一し
き「一色素」(名) 化「有機色素化合物」の。メ
チルオレンジ・メチルレッド・メチルブルー等もこの
アソに属する。(古語)

あそ(朝臣阿會)(名) あそみ(朝臣)。(古語)
アソ(ASO)(名) アメリカ合衆国イーストマリーナ社
から製造販賣する瓦斯ラジオ用真空管の名稱。ア
ソニア(A.S.O. A.S.O. A.S.O.)等十種ある。一し
き「一色素」(名) 化「有機色素化合物」の。メ
チルオレンジ・メチルレッド・メチルブルー等もこの
アソに属する。(古語)

あそ(朝臣阿會)(名) あそみ(朝臣)。(古語)
アソ(ASO)(名) アメリカ合衆国イーストマリーナ社
から製造販賣する瓦斯ラジオ用真空管の名稱。ア
ソニア(A.S.O. A.S.O. A.S.O.)等十種ある。一し
き「一色素」(名) 化「有機色素化合物」の。メ
チルオレンジ・メチルレッド・メチルブルー等もこの
アソに属する。(古語)

あそ(朝臣阿會)(名) あそみ(朝臣)。(古語)
アソ(ASO)(名) アメリカ合衆国イーストマリーナ社
から製造販賣する瓦斯ラジオ用真空管の名稱。ア
ソニア(A.S.O. A.S.O. A.S.O.)等十種ある。一し
き「一色素」(名) 化「有機色素化合物」の。メ
チルオレンジ・メチルレッド・メチルブルー等もこの
アソに属する。(古語)

あそ(朝臣阿會)(名) あそみ(朝臣)。(古語)
アソ(ASO)(名) アメリカ合衆国イーストマリーナ社
から製造販賣する瓦斯ラジオ用真空管の名稱。ア
ソニア(A.S.O. A.S.O. A.S.O.)等十種ある。一し
き「一色素」(名) 化「有機色素化合物」の。メ
チルオレンジ・メチルレッド・メチルブルー等もこの
アソに属する。(古語)

あそ(朝臣阿會)(名) あそみ(朝臣)。(古語)
アソ(ASO)(名) アメリカ合衆国イーストマリーナ社
から製造販賣する瓦斯ラジオ用真空管の名稱。ア
ソニア(A.S.O. A.S.O. A.S.O.)等十種ある。一し
き「一色素」(名) 化「有機色素化合物」の。メ
チルオレンジ・メチルレッド・メチルブルー等もこの
アソに属する。(古語)

あそ(朝臣阿會)(名) あそみ(朝臣)。(古語)
アソ(ASO)(名) アメリカ合衆国イーストマリーナ社
から製造販賣する瓦斯ラジオ用真空管の名稱。ア
ソニア(A.S.O. A.S.O. A.S.O.)等十種ある。一し
き「一色素」(名) 化「有機色素化合物」の。メ
チルオレンジ・メチルレッド・メチルブルー等もこの
アソに属する。(古語)

あそ(朝臣阿會)(名) あそみ(朝臣)。(古語)
アソ(ASO)(名) アメリカ合衆国イーストマリーナ社
から製造販賣する瓦斯ラジオ用真空管の名稱。ア
ソニア(A.S.O. A.S.O. A.S.O.)等十種ある。一し
き「一色素」(名) 化「有機色素化合物」の。メ
チルオレンジ・メチルレッド・メチルブルー等もこの
アソに属する。(古語)

あそ(朝臣阿會)(名) あそみ(朝臣)。(古語)
アソ(ASO)(名) アメリカ合衆国イーストマリーナ社
から製造販賣する瓦斯ラジオ用真空管の名稱。ア
ソニア(A.S.O. A.S.O. A.S.O.)等十種ある。一し
き「一色素」(名) 化「有機色素化合物」の。メ
チルオレンジ・メチルレッド・メチルブルー等もこの
アソに属する。(古語)

(形二) 上中である。(古語)
あて(名) 適買の村木。●醜い女。

あてあてて(形) 疑わしい。●「當當」(形二) あてつけがましい。あてこするやうにする。(古語)

あていし(阿第二名) 弟を親しんで呼ぶ名。「金石アディソン」(Joseph Addison) (名) 人イギリスの著名政治家。十八世紀のオーストリアの閣僚。國務卿に任ぜられた。その著に「サー・ジョージ・カヴァー」等がある。(一七九七)

アディソンしびよう(一氏病) (名) 醫見し犬病。醫賢トスマナディソンが一八五五年に発見した病。脚背ト小腺の結核、皮膚や粘膜が暗黒色に變化し、體力の衰弱することが特徴。未だ特效ある治療法は發見されてない。

あてて(名) 畜馬の發情を検査する爲に牡馬を近づけて試みること。又その牡馬。

あてえ(名) 當繪(名) 見る者に、それとささるやうに畫がいた繪。てぶみ(充文)。

あておこないじよう(充行狀) (名) あておこのう(充行) (名) 充行ふ(他動) (四) あて(古語)

あてがい(充行) (名) あてがふ(充行) (名) 充行扶持(名) 見はからって渡す扶持。●他の要求によらず、こちらの心ませに他に與へること。又、その物。

あてがう(充行) (名) 充行ふ(他動) (四) あて(古語)

あてかおし(充行) (名) 定期の期限。

あてきわ(充行) (名) 定期の期限。

あてごう(充行) (名) 充行ふ(他動) (四) ありあててたす。わづける。●心まかせに、ありあてておくる。●またあてておくる。●あはせる。【言葉】

あてこす(充行) (名) あてこす(名) 又、そのあてこする(充行) (自動、ラ四) 人

の面顔で他の事にかつて遠まはしにその人にあてておこす(充行) (名) あてこす(名) 成功をなしにまはしにいふことば。【こと】

あてこみ(當込) (名) あてこす(名) 成功をなしにまはしにいふことば。【こと】

あてて(名) 畜馬の發情を検査する爲に牡馬を近づけて試みること。又その牡馬。

あてえ(名) 當繪(名) 見る者に、それとささるやうに畫がいた繪。てぶみ(充文)。

あておこないじよう(充行狀) (名) あておこのう(充行) (名) 充行ふ(他動) (四) あて(古語)

あてがい(充行) (名) あてがふ(充行) (名) 充行扶持(名) 見はからって渡す扶持。●他の要求によらず、こちらの心ませに他に與へること。又、その物。

あてがう(充行) (名) 充行ふ(他動) (四) あて(古語)

あてかおし(充行) (名) 定期の期限。

あてきわ(充行) (名) 定期の期限。

あてごう(充行) (名) 充行ふ(他動) (四) ありあててたす。わづける。●心まかせに、ありあてておくる。●またあてておくる。●あはせる。【言葉】

あてこす(充行) (名) あてこす(名) 又、そのあてこする(充行) (自動、ラ四) 人

あてはかる(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはかる(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはまる(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あてはむ(當計) (名) 他人の酒を當てにして飲む。

あともちろ(後) 率(ハ) (他動、ハ) ひきあ

アドモスフイア (Atmospheric) (名) ①大気。

アドモスフエリク・エレクトロシテイー (Atmospheric electricity) (名) ①空中電氣。空電。

アドモドリー (後戻) (名) ①物事の退歩すること。

アドモメーター (Anemometer) (名) ①大気の温度を測る器。温度計。

あとややく (後役) (名) ①近年の次の年。(前足の對) ②その人。

あとややく (後槍) (名) 槍を持ってしんがり者。

アドラー (Max Adler) (名) ①オーストリアの社會學者。カント派のマルクス主義者。ウィーン大學教授。マルクス主義の國家觀「カントとマルクス主義」等の著がある。(ハ)

アトラス (Atlas) (名) ①神話中、神話中の神。天を荒した罪でゼウスに罰せられ、地球の西端に立つて、天を支へるやうに命ぜられた。②同上の像を地圖本の左返しに描いた所から、地圖をいふ。

アトランティス (Atlantis) (名) ①傳) 古代ギリシヤ人が大西洋上にあると想定した島土。

アトランティック・オーシャン (Atlantic Ocean) (名) ①地) 新舊大陸の間に挟まれた大西洋。

アトランド (Atlantis) (名) ①古代ギリシヤの建築家。支柱として用ひられた裝飾用の男性の立像又は跪像。

あとり (鴉子鳥花雑) (名) ①動) 鴉目科の鳥。ほぼほに似、頭から背にかけて背黒色を呈し、頸項には輝色。ヨーロッパシヤの温帯帯に産し、秋季、大群をなして我が國に渡る。あつどり。

アトリエ (Atelier) (名) ①美) 畫家や彫刻家の



〔り)とあ]

仕事場。畫室。工原。製作所。

アドリヤかい (海) (名) ①地) (Adriatic sea) 地中海の一支。即ちイター牛島東方の灣入海。

アドレス (Address) (名) ①住所。宛名。②演說。③語。④一ブック (Address book) (名) 住所氏名簿。

アドレックラフ (Addressograph) (名) ①機) ②名) 印刷機。

アドレックス (Adolescence) (名) ①男女の若い時代。青春期。青年期。

アトロピン (Atropine) (名) ①化) 鴉子科の植物に含まれる苦味ある色針狀の結晶。制汗劑、散瞳劑、解痙劑等に用ひる。アトロピン。

あとわ (後輪) (名) ①後方の車輪。しづわ。

あな穴 (名) ①くぼんだ所。うづるにたつ所。②過失。缺點。短所。③損失。失敗。④かくが。秘密。⑤女の陰部。⑥競馬などで勝負の番狂はせ。⑦あらば入りたし (句) 恥ぢて顔を見られるのつらくて身を隠したい程に思ふ。

あな (喧鳴呼) (感) 驚駭した時に出す聲。あ。あ。あ。(古語) ①尊) (句) ああ尊い。ああ有難い。

アナ (Ana) (名) ①社) ナーキストの略語。②アナキストの略語。③アナキスターの略語。④義者。

アナキスト (Anarchist) (名) ①社) 無政府主義。②無政府主義。

あない (案内) (名) ①案内。②案内の略。(古語) ③義。④案内。⑤案内。⑥案内。⑦案内。⑧案内。⑨案内。⑩案内。

あな (穴) (名) ①地) 穴にかけた穴に錢をうち込め、穴に入つたものを所得とする子供の遊戯。今は錢のかほりに、めんこ小石などをつかふあなうち。

あな (地名) (名) ①地名。②地名。③地名。④地名。⑤地名。⑥地名。⑦地名。⑧地名。⑨地名。⑩地名。

あな (鳴呼) (感) つらいことかな。(古語)

あなうち (穴打) (名) ①あないち (穴一)。

あなうめ (穴埋) (名) ①穴をうづめること。②損失をなぐさむ。(古語)

あなうち (足裏踏) (名) 足のうら。あうち。あなうち。

アナウンス (Announcer) (名) ①ラヂオ放送の告知を掌る者。②ラヂオの放送者。送話者。送話の告知を掌る。③ラヂオの放送者。送話者。送話の告知を掌る。

アナウンス (Announce) (英) ①告知する。②告知する。③告知する。④告知する。⑤告知する。⑥告知する。⑦告知する。⑧告知する。⑨告知する。⑩告知する。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

アナクレオンティック (Anacreontic) (英) 形酒と女を讚美する。

アナクロニズム (Anachronism) (名) ①アナクロニズムの略。

アナクロニズム (Anachronism) (名) ①時代錯誤。時世に合はぬこと。時代とかけはれた行動や思想。アナクロ。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。

あな (穴) (名) ①穴。②穴。③穴。④穴。⑤穴。⑥穴。⑦穴。⑧穴。⑨穴。⑩穴。



普通のよりも大きく、顔面に黒斑があり、物にたとる時は後脚と尻をあげて體を斜にする。マラリヤ病、熱病の媒介者。はまたら。

あは(名)彼世(名) 死後の世界。來世。後世。千日(名)の世(名) 旬死後千日の樂しみよりも、現世の一日の樂しみの方がよい。

あは(名) 足速(名) 足の早いこと。(古語) あは(名) 肋(名) 生あはらば(肋骨)の略。あは(名) 肋助骨(名) 生胸部をおほひ内蔵を保護する骨。ろく。

あは(名) 荒(名) あはれてたま。破屋。旅人の休憩所として設けた四方のかのひな家。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。

あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。

あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。

あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。

あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。

あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。

あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。

あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。

あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。

clefance(名) パリの下層社會に行はれる類型的なダンス。男女二人で踊り、男性が女性を流く彼ふを特徴とする。最近では社交ダンスの一種となる。

あは(名) 名詞 笑ふ。あは(名) 足速(名) 足の早いこと。(古語) あは(名) 肋(名) 生あはらば(肋骨)の略。

あは(名) 肋助骨(名) 生胸部をおほひ内蔵を保護する骨。ろく。あは(名) 荒(名) あはれてたま。破屋。旅人の休憩所として設けた四方のかのひな家。

あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。

あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。

あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。

あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。

あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。

あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。

あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。

あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。

あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。あは(名) 疎(名) まばらなさま。物のすさまのある。

を起し、心臓が麻痺して死ぬ。少量は強壯劑となす。工業用醫藥用に用ふ。カリ之き(亞砒酸加里液)に溶かした液で、透明又はやや濁つて赤黄色を呈し、醫藥に用ひる。どう(亞砒酸銅)に溶かした液に亞砒酸の溶液を加へて得る綠色の沈澱物。毒性がある。時症の飲料に用ひられる。湯水などをそそぎかける。●彈丸などをそそぎかける。●刀で切る。●議論を攻める。●他動、サ下

あびせる(名) 浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。

あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。

あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。

あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。

あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。

あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。

あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。

あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。

あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。

あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。

あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。あび(名) 浴び。●浴びせる。●他動、サ下。

ヤ洲西南部の獨立國。イラン高原の東北部に位し、面積約六萬平方哩。英國政府の保護を受けてゐる。首府はカーブ。分りに得た金錢。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。

あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。

あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。

あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。

あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。

あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。

あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。

あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。

あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。

あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。

あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。

あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。あぶくま(名) あわ。氣泡。一せに(泡た)名。

あみさいけ(編細工)名 絲を編んで、靴下、手袋、シール等をつくる細工。又その細工物。

あみさだ網筒(名) あみさだ網筒。科の多年生草本。莖には毛茸を生じ、葉は三角形で羽状をなし、葉脈は分岐して、網状をなす。四國・九州・臺灣に産する。

あみさじま(網島)名 地 大坂市東區にある地。大和川と淀川と合する所の三角洲。近松門左衛門作(中天下網島)名 高い。

あみさじやくし(網杓子)名 金網で造つた杓子。

あみさじやくし(網袢衣)名 レースなどで細目に造つたシヤツ。夏の肌着に用ふ。

あみさじばん(網襪)名 レースなどで細目につくつた夏用の襪。

あみさす(浴みす)名 他動、サ下(二)水浴など水に注ぎかける。あびす。あぶす。

あみさすき(網抄)名 網をむすび造ること。又その人。あみさし。

あみさすき(網抄針)名 網をすく針で、竹又は鯨鬚などで造る。あびり。あびり。

あみさすか(網捨籠)名 中央を編んで、周囲は編みかけのままなる竹籠。魚の形などをくづきすに煮るに用ひる。

あみさすな(網)名 網にかけた網。あみな。

あみさそ(網座)名 網をくりに用ひる麻絲。あで。

あみさだ(阿彌陀)名 佛 梵 Amitayus 又は Amitayus の略。無量壽。無量光明と譯する。○西方淨土に住する佛の名称。一切の人を救ふ誓願を立てるを念すれば、死後直ちに極樂淨土に生まれることができるといふ。

あみさだ(阿彌陀佛)名 佛 阿彌陀佛。阿彌陀如来。無量壽如来。無量光佛。無碍光佛。無量光如来等の異稱がある。○あみだかぶ。○輪金なはめた車輪の周囲の木。○がさ(阿彌陀笠)名 あみだかぶ。



〔だみあ〕

りにかぶ。た考。○かぶり(阿彌陀被)名 阿彌陀佛の後光をおうたやうに帽など後部部に傾けてかぶること。○きょうろ(阿彌陀經)名 佛阿彌陀の功德と極樂のことを述べた經文。眞宗・浄土宗で用ひる。○くく(阿彌陀經)名 出金すべき金額を記した籤を引いて、物の買ひ、平等に分配すること。○ごうざ(阿彌陀號)名 人の名の下に阿彌陀佛とつけた。○阿彌陀護摩(名) 佛阿彌陀法を行ふ時に焚く護摩。○阿彌陀三尊(名) 佛阿彌陀とその左右に附添ふ觀音・勢至の二菩薩。○しじのみ(安徳天皇の御殿)。○どう(阿彌陀堂)名 安徳天皇の御殿。○どう(阿彌陀堂)名 佛阿彌陀如来を安置した堂。○あみだかぶ(名) 佛阿彌陀如来を安置した堂。○あみだかぶ(名) 佛阿彌陀如来を安置した堂。○あみだかぶ(名) 佛阿彌陀如来を安置した堂。

あみだかぶ(阿彌陀笠)名 あみだかぶ。

あみだかぶ(阿彌陀笠)名 あみだかぶ。

あみだかぶ(阿彌陀笠)名 あみだかぶ。

あみだかぶ(阿彌陀笠)名 あみだかぶ。

あみだかぶ(阿彌陀笠)名 あみだかぶ。

あみだかぶ(阿彌陀笠)名 あみだかぶ。

あみだかぶ(阿彌陀笠)名 あみだかぶ。

あみだかぶ(阿彌陀笠)名 あみだかぶ。

あみだかぶ(阿彌陀笠)名 あみだかぶ。

あみだかぶ(阿彌陀笠)名 あみだかぶ。

あみだかぶ(阿彌陀笠)名 あみだかぶ。

あみだかぶ(阿彌陀笠)名 あみだかぶ。

あみだかぶ(阿彌陀笠)名 あみだかぶ。

あみだかぶ(阿彌陀笠)名 あみだかぶ。

あみだかぶ(阿彌陀笠)名 あみだかぶ。

あみだかぶ(阿彌陀笠)名 あみだかぶ。

あみだかぶ(阿彌陀笠)名 あみだかぶ。

あみだかぶ(阿彌陀笠)名 あみだかぶ。

アミド (Amido) 名 化 アミノモヤの水素原子二個の代りに、脂肪酸の水酸基を除いた残りの基と結合した形の物質の總稱。

あみどり(網捕)名 網で魚などを捕へること。

あみなわ(網細)名 あみなすな(網網)。

あみのき(網)名 網。

あみのめ(網目)名 網の絲と絲とのすきま。

あみのめ(網目)名 網の絲と絲とのすきま。

あみのめ(網目)名 網の絲と絲とのすきま。

あみのめ(網目)名 網の絲と絲とのすきま。

あみのめ(網目)名 網の絲と絲とのすきま。

あみのめ(網目)名 網の絲と絲とのすきま。

あみのめ(網目)名 網の絲と絲とのすきま。

あみのめ(網目)名 網の絲と絲とのすきま。

あみのめ(網目)名 網の絲と絲とのすきま。

あみのめ(網目)名 網の絲と絲とのすきま。

あみのめ(網目)名 網の絲と絲とのすきま。

あみのめ(網目)名 網の絲と絲とのすきま。

あみのめ(網目)名 網の絲と絲とのすきま。

あみのめ(網目)名 網の絲と絲とのすきま。

あみのめ(網目)名 網の絲と絲とのすきま。



〔草百〕

で、現後後不要部分を酸で腐蝕させて製した印刷用版。寫真銅版。網版。

あみめ(網目)名 絲と絲とを編みあはせた目。

あみめ(網目)名 絲と絲とを編みあはせた目。

あみめ(網目)名 絲と絲とを編みあはせた目。

あみめ(網目)名 絲と絲とを編みあはせた目。

あみめ(網目)名 絲と絲とを編みあはせた目。

あみめ(網目)名 絲と絲とを編みあはせた目。

あみめ(網目)名 絲と絲とを編みあはせた目。

あみめ(網目)名 絲と絲とを編みあはせた目。

あみめ(網目)名 絲と絲とを編みあはせた目。

あみめ(網目)名 絲と絲とを編みあはせた目。

あみめ(網目)名 絲と絲とを編みあはせた目。

あみめ(網目)名 絲と絲とを編みあはせた目。

あみめ(網目)名 絲と絲とを編みあはせた目。

あみめ(網目)名 絲と絲とを編みあはせた目。

あみめ(網目)名 絲と絲とを編みあはせた目。

あみめ(網目)名 絲と絲とを編みあはせた目。

あみめ(網目)名 絲と絲とを編みあはせた目。

あみめ(網目)名 絲と絲とを編みあはせた目。

(句) 受難の時が去って、その時に受けた苦を忘れること。誓。一降つて地面まる(句) 事難を経て却つてよく治まる。一や誓と(句) 彈丸などの烈しく飛來する。

あめ(句) 穀類又は炭粉含有原料(糖米、糖粟、糖米、玉蜀黍等)を麥芽(イ)で糖化した甘味ある黒褐色の食品。淡黄色で透明であるが、下等なものは褐色である。●飾色。●あめにくは(句) 一を噓は(句) 勝負事にわざわざ負ける。甘貴を以て人だます。●一を呑み孫を弄ぶ(句) 後漢馬皇后の(句) 風父母ながら、給を弄ぶながら、孫を遊ばせる。

あめ(名) 〔動〕鱈科の魚。長さ一五釐位、背部は暗青色で黒斑と小朱点がある。関東でやまめ、関西であめうなといふ。深流に住み、味は美味。あめをな。あめのうな。あめまです(雨上)。(雨上)。(脚)。



[鱈]

あめあし(雨脚) (名) あまあし(雨)。あめあし(雨跡) (名) 地上に残る雨のしづりのく。あし。●岸面に在る雨の爲の凹み。あめあられ(雨散) (名) 雨と散と。●彈丸などの烈しく降下すること。あめやあられ。あめい(蛙鳴) (名) ●蛙の鳴くこと。●やまし。いこも。一せんそう。一蛙鳴蟬噪(名) ●蛙や蟬のやましく鳴くこと。●がががやしゃしゃるばかりで効果のないこと。

あめいし(鉛石) (名) 水色の半透明な石。あめうら(鉛牛・黄牛) (名) 飾色の牛。あめうらし(鉛膏) (名) 笛を吹いて呼びあめき、道あめつり(鉛管) (名) 管を並べて、鉛を賣りあめくしの。又子供の興をひく爲樂器を鳴らし、眼で睇しながら、鉛を賣りあめくしの。

アモバ(Amoeba) (名) 動物アモバ。「子。あめがし」(名) 鉛菓子(名) 鉛を原料とした菓あめがす(鉛糖) (名) 鉛を摺ったあめがす。牛瓶などの飼料とする。あめかす(鉛糖) (名) 雨と風。●風が加はつて雨の降ること。●酒好でありながら、菓子などな好むこと。

あめがち(雨勝) (名) 雨天の日の多いこと。あめかんむり(雨冠) (名) あまかんむり(雨冠)あめきんこく(雨禁欲) (名) 自河天皇が、雨の爲に法勝寺行幸の中止になつたのをお怒りになつて、雨を器に盛つて叫ぶ(自動)カバ。あめくさく(雨細工) (名) ●飾。●人馬歌花弁などの形をつくつたもの。●外観ばかり美しくて内容のつまらぬもの。

あめしすく(雨零) (名) ●雨のしたたり。●涙。●女のしなれて泣くさま。あめしらす(雨知らず) (自動) サ四。●天上を治められる。古語。●死んで天上にお出でになる。崩御。(古語)。

あめつち(天地) (名) 天地と地。てんち。●の(天地の)枕(イ)やとほが(御道長)の枕詞。一のふくろ(天地袋) (名) 年頭に多くの幸福を取入れる心持で、天地を擬はせたと祝の袋。一の道(句) 自然の大道。一のむた(句) 天地と共に。(古語)。

あめの(天) (接頭) 高天原にあたる天又はあつた物の名に冠せていふ語。あめのおお(天) (名) 動物あめ。あめのうき(天浮橋) (名) 神代に、神たちあめの間のうき通ひになつたといふ道にかけたつ橋。諸層二層が此の橋に立つて若菜を探て、磯取敷島を得給つたと傳へられる。(古語)。

あめのおきて(天控) (名) 天つ神の定められた規則。(古語)あめのかたりごと(天語言歌) (名) 天上の故事を語り傳へられた。(古語)あめのこやねのみこと(天兒屋根命) (名) 神中臣イ、藤原氏の祖先。神皇產靈神の御子。五部神のて、その子孫は祭祀を掌た。あめのした(天下) (名) 天におはれたこと。●國志。●世界。日本開一しろしめす(句) 天下をお治りになる。(古語)一申す(句) 天下の政治を行ふ。(古語)一を逆さまにする(句) 現実にはあり得ないこと。

あめのおきて(天控) (名) 天つ神の定められた規則。(古語)あめのかたりごと(天語言歌) (名) 天上の故事を語り傳へられた。(古語)あめのこやねのみこと(天兒屋根命) (名) 神中臣イ、藤原氏の祖先。神皇產靈神の御子。五部神のて、その子孫は祭祀を掌た。あめのした(天下) (名) 天におはれたこと。●國志。●世界。日本開一しろしめす(句) 天下をお治りになる。(古語)一申す(句) 天下の政治を行ふ。(古語)一を逆さまにする(句) 現実にはあり得ないこと。

あめのおきて(天控) (名) 天つ神の定められた規則。(古語)あめのかたりごと(天語言歌) (名) 天上の故事を語り傳へられた。(古語)あめのこやねのみこと(天兒屋根命) (名) 神中臣イ、藤原氏の祖先。神皇產靈神の御子。五部神のて、その子孫は祭祀を掌た。あめのした(天下) (名) 天におはれたこと。●國志。●世界。日本開一しろしめす(句) 天下をお治りになる。(古語)一申す(句) 天下の政治を行ふ。(古語)一を逆さまにする(句) 現実にはあり得ないこと。

あめのおきて(天控) (名) 天つ神の定められた規則。(古語)あめのかたりごと(天語言歌) (名) 天上の故事を語り傳へられた。(古語)あめのこやねのみこと(天兒屋根命) (名) 神中臣イ、藤原氏の祖先。神皇產靈神の御子。五部神のて、その子孫は祭祀を掌た。あめのした(天下) (名) 天におはれたこと。●國志。●世界。日本開一しろしめす(句) 天下をお治りになる。(古語)一申す(句) 天下の政治を行ふ。(古語)一を逆さまにする(句) 現実にはあり得ないこと。

あめのおきて(天控) (名) 天つ神の定められた規則。(古語)あめのかたりごと(天語言歌) (名) 天上の故事を語り傳へられた。(古語)あめのこやねのみこと(天兒屋根命) (名) 神中臣イ、藤原氏の祖先。神皇產靈神の御子。五部神のて、その子孫は祭祀を掌た。あめのした(天下) (名) 天におはれたこと。●國志。●世界。日本開一しろしめす(句) 天下をお治りになる。(古語)一申す(句) 天下の政治を行ふ。(古語)一を逆さまにする(句) 現実にはあり得ないこと。

あめのおきて(天控) (名) 天つ神の定められた規則。(古語)あめのかたりごと(天語言歌) (名) 天上の故事を語り傳へられた。(古語)あめのこやねのみこと(天兒屋根命) (名) 神中臣イ、藤原氏の祖先。神皇產靈神の御子。五部神のて、その子孫は祭祀を掌た。あめのした(天下) (名) 天におはれたこと。●國志。●世界。日本開一しろしめす(句) 天下をお治りになる。(古語)一申す(句) 天下の政治を行ふ。(古語)一を逆さまにする(句) 現実にはあり得ないこと。

あめのおきて(天控) (名) 天つ神の定められた規則。(古語)あめのかたりごと(天語言歌) (名) 天上の故事を語り傳へられた。(古語)あめのこやねのみこと(天兒屋根命) (名) 神中臣イ、藤原氏の祖先。神皇產靈神の御子。五部神のて、その子孫は祭祀を掌た。あめのした(天下) (名) 天におはれたこと。●國志。●世界。日本開一しろしめす(句) 天下をお治りになる。(古語)一申す(句) 天下の政治を行ふ。(古語)一を逆さまにする(句) 現実にはあり得ないこと。

あめのおきて(天控) (名) 天つ神の定められた規則。(古語)あめのかたりごと(天語言歌) (名) 天上の故事を語り傳へられた。(古語)あめのこやねのみこと(天兒屋根命) (名) 神中臣イ、藤原氏の祖先。神皇產靈神の御子。五部神のて、その子孫は祭祀を掌た。あめのした(天下) (名) 天におはれたこと。●國志。●世界。日本開一しろしめす(句) 天下をお治りになる。(古語)一申す(句) 天下の政治を行ふ。(古語)一を逆さまにする(句) 現実にはあり得ないこと。

あめのおきて(天控) (名) 天つ神の定められた規則。(古語)あめのかたりごと(天語言歌) (名) 天上の故事を語り傳へられた。(古語)あめのこやねのみこと(天兒屋根命) (名) 神中臣イ、藤原氏の祖先。神皇產靈神の御子。五部神のて、その子孫は祭祀を掌た。あめのした(天下) (名) 天におはれたこと。●國志。●世界。日本開一しろしめす(句) 天下をお治りになる。(古語)一申す(句) 天下の政治を行ふ。(古語)一を逆さまにする(句) 現実にはあり得ないこと。

あめのみなかぬしのみこと(天御中主神) (名) 神代天照の初め、高天原に出生せられた。宇田を主宰せられた神。(古語)い(柱) (古語)あめのみはしら(天御柱) (名) 宮殿など高あめのみまこ(天御孫) (名) 天照大神の御子孫。天皇。(古語)あめのひらくものつるぎ(天雲雲劍) (名) 三種神の一つ。兼世尊章が出雲國松江(古)大神の退治し得給つた劍。之を天照大神に奉られた。草薙劍。「水鏡を鑑た水鏡」あめのもち(餅餅) (名) 貴、佐夜の中出で買つた。あめのもちほうしゅう(雨森芳洲) (名) 江戸時代の儒者。名は俊良。通稱五郎。京都の人。木下順庵の門人。對島侯宗氏に仕へた。寶暦五年(西一八一五)歿。年八十八。(續文鏡秘府論)

あめのひらくものつるぎ(天雲雲劍) (名) 三種神の一つ。兼世尊章が出雲國松江(古)大神の退治し得給つた劍。之を天照大神に奉られた。草薙劍。「水鏡を鑑た水鏡」あめのもち(餅餅) (名) 貴、佐夜の中出で買つた。あめのもちほうしゅう(雨森芳洲) (名) 江戸時代の儒者。名は俊良。通稱五郎。京都の人。木下順庵の門人。對島侯宗氏に仕へた。寶暦五年(西一八一五)歿。年八十八。(續文鏡秘府論)

あめのひらくものつるぎ(天雲雲劍) (名) 三種神の一つ。兼世尊章が出雲國松江(古)大神の退治し得給つた劍。之を天照大神に奉られた。草薙劍。「水鏡を鑑た水鏡」あめのもち(餅餅) (名) 貴、佐夜の中出で買つた。あめのもちほうしゅう(雨森芳洲) (名) 江戸時代の儒者。名は俊良。通稱五郎。京都の人。木下順庵の門人。對島侯宗氏に仕へた。寶暦五年(西一八一五)歿。年八十八。(續文鏡秘府論)

あめのひらくものつるぎ(天雲雲劍) (名) 三種神の一つ。兼世尊章が出雲國松江(古)大神の退治し得給つた劍。之を天照大神に奉られた。草薙劍。「水鏡を鑑た水鏡」あめのもち(餅餅) (名) 貴、佐夜の中出で買つた。あめのもちほうしゅう(雨森芳洲) (名) 江戸時代の儒者。名は俊良。通稱五郎。京都の人。木下順庵の門人。對島侯宗氏に仕へた。寶暦五年(西一八一五)歿。年八十八。(續文鏡秘府論)

あめのひらくものつるぎ(天雲雲劍) (名) 三種神の一つ。兼世尊章が出雲國松江(古)大神の退治し得給つた劍。之を天照大神に奉られた。草薙劍。「水鏡を鑑た水鏡」あめのもち(餅餅) (名) 貴、佐夜の中出で買つた。あめのもちほうしゅう(雨森芳洲) (名) 江戸時代の儒者。名は俊良。通稱五郎。京都の人。木下順庵の門人。對島侯宗氏に仕へた。寶暦五年(西一八一五)歿。年八十八。(續文鏡秘府論)

あめのひらくものつるぎ(天雲雲劍) (名) 三種神の一つ。兼世尊章が出雲國松江(古)大神の退治し得給つた劍。之を天照大神に奉られた。草薙劍。「水鏡を鑑た水鏡」あめのもち(餅餅) (名) 貴、佐夜の中出で買つた。あめのもちほうしゅう(雨森芳洲) (名) 江戸時代の儒者。名は俊良。通稱五郎。京都の人。木下順庵の門人。對島侯宗氏に仕へた。寶暦五年(西一八一五)歿。年八十八。(續文鏡秘府論)

あめのひらくものつるぎ(天雲雲劍) (名) 三種神の一つ。兼世尊章が出雲國松江(古)大神の退治し得給つた劍。之を天照大神に奉られた。草薙劍。「水鏡を鑑た水鏡」あめのもち(餅餅) (名) 貴、佐夜の中出で買つた。あめのもちほうしゅう(雨森芳洲) (名) 江戸時代の儒者。名は俊良。通稱五郎。京都の人。木下順庵の門人。對島侯宗氏に仕へた。寶暦五年(西一八一五)歿。年八十八。(續文鏡秘府論)



[鱈]

るにつけ風の吹くにつけ。一ぐさ(雨降草)

あめほうびき(船貨引)(名)江戸時代に、船員が旗を立てて、あたりに船をやって入氣をとて船を買って、

あめまだら(船斑斑黃牛)(名)斑のある船牛。

あめもよひ(船斑斑黃牛)(名)斑のある船牛。

あめもよう(雨模様)(名)あまもよう(雨模様)。(古語)

あめもよに(雨もよに)(副)雨の降る時に。

あめやま(天山)(名)天や山のやうに高い。

あめやき(阿米屋燒)(名)明の歸化人宗慶の造た樂焼。宗慶が始め阿米夜といつたから名づけた。

あめり(有めり)(句)「有るめり」の約。あるやアメリカインディヤ(American Indian)

アメリカいんどじん(亞米利加印度人)(名)北部アメリカを中心に分布してゐる米國の原住民族。皮膚は銅色で黒髪を有し、總數約三〇萬を數へる。アメリカインディヤン。

アメリカが(アメリカ) (名)「亞米利加合衆國」(名)The United States of America 北アメリカの中央にある一大共和國。首府はワシントン。本國面積七七〇萬方呎。現在鐵道の延長四〇萬呎。自動車數二七〇萬輛。商船二二〇萬輛。國富は世界に冠絶し、債務は二〇餘億に達してゐる。もと英國の屬領であつたが、一七八三年獨立を承認された。

アメリカ(亞米利加後家)(名)米國出稼人を夫とする妻の我が國で留守をたゝる者。

アメリカしゅう(亞米利加洲)(名)地(America) 北亞米利加洲と南亞米利加洲との總稱。ヨーロッパより少し後に渡航し、探検に従事したイヌピヤンアメリカ(Vesputi)の名に

因んで名をされた。つばはたん(松葉牡丹)

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

アメリカな(亞米利加草)(名)植木

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あも(甘える)(名)ははと(母刀自)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あやく(はきくものなふ)。(古語)

あらいのり(名)〔洗海苔〕(名)〔種〕甘露苔に似た岩藻の一種で、海藻に産する。

あらいはくせき(名)〔新井白石〕(名)〔江戸時代の學者。名は君美〕江戶の人。木下順庵の門人。博學を以て稱せられた。家宣將軍の時、幕府の書官となり、又大政に參與して前代の弊政を改めた。享保十年(一三八五)卒。年六十九。「古史通」(深澤真音)「讀史餘論」(澤柳橋)「東推」(折村和郎)「同文通考」等の外、歴史、國語學故實に關する著書が多い。

あらいはり(名)〔洗張〕(名)衣服のきれを洗濯して板に張りつけてほすこと。ーや〔洗張屋〕(名)洗張を職業とする家。

あらいびん(名)〔洗盤〕(名)物を洗ふに用ひる瓶。或は沈澱物を洗ふに用ひる器。

あらいみ(名)〔洗忌散膏〕(名)膏薬にあつかる人が、まい久患忌の前後に行ふ膏敷。(異忌の對)もの。洗ふも。

あらいよめ(名)〔洗米〕(名)神佛に供へる爲に、清く洗つた白米。せんまい。かしよれ。

あらくし(名)〔荒鷄〕(名)つかひなれぬ鷄。「し」の口語。

あらくし(名)〔荒牛〕(名)荒れた狂牛。あばれ牛。

あらくま(名)〔荒馬〕(名)あばれ馬。荒れた狂馬。

あらうま(名)〔新馬〕(名)新たに牧場から引出した馬。一の馬。

あらい(名)〔荒海〕(名)浪の荒れた海。一のそうじ(名)〔荒海]



〔子障海荒〕

障子(名) 講談の弘前北にあつた障子。手長足長が海濱にゐる裏があり、裏には宇治の桐代の墨繪があつた。

あらえびし(名)〔荒夷〕(名)あらあらしく、石化に服した人。〔荒夷〕(名)あらえびし。荒夷。

あらか(名)〔阿羅漢〕(名)佛の聖者。御殿。おあらか(名)〔阿羅漢〕(名)佛の聖者。御殿。おあらか(名)〔阿羅漢〕(名)佛の聖者。御殿。

あらかた(名)〔租方〕(名)おほよそ。おほかた。大あらかた(名)〔租方〕(名)おほよそ。おほかた。大あらかた(名)〔租方〕(名)おほよそ。おほかた。大

あらがみ(名)〔荒神〕(名)荒荒した神靈。靈驗のあらがみ(名)〔荒神〕(名)荒荒した神靈。靈驗のあらがみ(名)〔荒神〕(名)荒荒した神靈。靈驗のあら

あらか(名)〔租壁〕(名)粗塗のまの壁。まだ中途あらか(名)〔租壁〕(名)粗塗のまの壁。まだ中途あらか(名)〔租壁〕(名)粗塗のまの壁。まだ中途

あらか(名)〔阿羅漢〕(名)佛の聖者。御殿。おあらか(名)〔阿羅漢〕(名)佛の聖者。御殿。おあらか(名)〔阿羅漢〕(名)佛の聖者。御殿。

あらか(名)〔阿羅漢〕(名)佛の聖者。御殿。おあらか(名)〔阿羅漢〕(名)佛の聖者。御殿。おあらか(名)〔阿羅漢〕(名)佛の聖者。御殿。

あらか(名)〔阿羅漢〕(名)佛の聖者。御殿。おあらか(名)〔阿羅漢〕(名)佛の聖者。御殿。おあらか(名)〔阿羅漢〕(名)佛の聖者。御殿。

あらか(名)〔阿羅漢〕(名)佛の聖者。御殿。おあらか(名)〔阿羅漢〕(名)佛の聖者。御殿。おあらか(名)〔阿羅漢〕(名)佛の聖者。御殿。

あらか(名)〔阿羅漢〕(名)佛の聖者。御殿。おあらか(名)〔阿羅漢〕(名)佛の聖者。御殿。おあらか(名)〔阿羅漢〕(名)佛の聖者。御殿。

のみや(名)〔預言〕(名)あらかし(古語)

あらき(名)〔新穀〕(名)新に開墾した。又、その地(古語)一た(新墾田)(名)新に開墾した田。(古語)一た(新墾田)(名)新に開墾した田。(古語)一た(新墾田)(名)新に開墾した田。

あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。

あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。

あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。

あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。

あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。

あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。

あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。

あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。

あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。あらき(名)〔荒木〕(名)荒れた木。

を削へてする修行。一じゃ(荒行者)(名)修行をする修行者。一じゃ(荒行者)(名)修行をする修行者。

あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。

あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。

あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。

あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。

あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。

あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。

あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。

あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。

あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。

あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。あらく(名)〔荒草〕(名)荒地に生える草。

あらぬり〔粗塗〕(名) 最初にあらぬること。し
たぬり。〔枕詞〕

あらねよし〔在根よし〕(枕詞)「よし」對馬の
あら野(嶺野) (名) 開闢の野。あれの。一

あらは(新刀)荒刀 (名) 新刀の刃。
あらはこ(荒筥) (名) 神事・供御などのものを入
れる筥。(古語)

あらはし(古語) 荒(名) 新刀の刃。
あらはた(荒畑) (名) 草の茂つた畑。

あらはた(新膚) (名) 處女の膚。處女。
あらはた(荒膚) (名) きめのあつた膚。〔古語〕

あらはたら(荒働) (名) あらしのこと。あらか
あらはら(荒聖) (名) 荒行する僧。

あらひと(現人神) (名) 現世に於いて人の
形をとりつゝする神。即ち天鳥。あらかみ。あき
つかみ現つ神。(古語)

アラビヤ〔Arabia〕〔亞刺比亞〕(名) (地) ヌ
シヤ大陸の西南隅にある世界最大の半島で、紅海を隔
ててアフリカに對してゐる。面積三百萬方呎。住民
はアラブ種族で回教を奉ずる。一ウマ一馬

〔動〕アラビヤ原産の馬。東洋種の馬の代表で、
性情強健、輕捷、乘用種として古來有名である。毛
色には羊毛が多い。一ウマ一護説(名) アラ
ビヤ・シブト・アフリカ等に産するアカシヤ種の植
物の幹枝から採つた牛蒡根・黄色の樹脂類。薬品・ム
糊等の製造に用ひる。一すうじ(一数字) (名)

〔數〕算用數字0・1・2・3等の數字。アラビヤ人が
ヨーロッパに傳へたからこの名がある。一そら
しよく(一裝飾) (名) 美。アラブマスク
(Carbasque)

アラビヤナイト〔Arabian Nights' En
tertainments〕(名) 文有名なアラビヤナイト
集。アラビヤ夜話「千一夜物語」ともいふ。寓話、
童話、傳説小説、神話などを集めたもので、著者不明。
邦譯には、杉谷代水日夏歌之介・森田章平三氏の

がある。〔あらぶ(荒ぶ)の口語〕
あらびる(荒び) (名) 荒ぶる(自動、バ上)
アラブ〔Arab〕(名) アラビヤの住民。(動) 動
アラビヤ語(名) 不良少年

あらぶ(荒ぶ) (名) 荒ぶ(自動、バ上) (名)
あらは(名) 荒れてゐる。未開である。●裸れてゐる
くなる。●つらくなる。

あらぶき(粗扱) (名) 始めにざつと扱ふこと。
あらは(名) 荒吹(名) 第一回目の銅鑼精煉法
で、主として銅板を製するの目的とする。すまき。

アラブ(名) Arab
esque(名) 美。アラ
ビヤ人の創意になる壁
面裝飾用の模様。動植物
等を唐草模様にしたもの。アラビヤ裝飾。〔古
グスマアラブ〕



あらはら(粗彫) (名) ざつとあらく彫りつける。
あらまき(荒巻包直) (名) ●草竹の皮裏たて
て魚類を巻くこと。又、そのもの。つと。すまき。●
甘藷の胚を乾燥して巻いたもの。又、甘藷の胚を乾燥
して巻かぬもの。新巻といふ。北海道の産。

あらまき(荒時) (名) 耕すに種を蒔くこと。
あらまし(荒増) (副) おほよそ。あらかみ。
あらまし(有らまし) (形) (二) さ
ありた。(古語) 〔あらあらし〕 (古語)

あらまし(豫) (名) 心づり。心だの。豫期。豫
算。(古語) 一ムと(豫事) (名) 心算のこと。
と(豫期) (古語) 〔る。豫期する。〕 (古語)

あらまほし(他動) サ四前か心あてに
かうあてほし。(古語)

あらみ(新身新刀) (名) 新たに鍛へた刀。一
だめし〔新刀試〕 (名) 新刀の切味をたずること。
あらみかけ(荒御陰) (名) 神男女の間柄を製
く神。あらみさ。(古語)

あらみがわのほら(名) 〔あらみか〕 (名) 荒見川(禊)
(名) 大嘗宮前に、保官が京都の紙屋川でした感
御殿。(古語)

あらみさ(荒御前) (名) あらみかけ(荒御陰) 和
あらみたま(荒御魂) (名) 荒く猛き神の魂。(和
御魂の對)

あらみち(荒道) (名) 荒い道。けはし。道。
あらみち(荒麥) (名) 種からすむき(蕎麥)。
あらむしや(荒武者) (名) ●粗暴な武士。●亂暴
なるまひ。がむし。

あらむし(粗筵) (名) 編目のあらい筵。
あらめ(荒布黒菜・滑藻) (種) 楊梅類の海藻。莖
の長さ九〇釐位ながら扁平な主葉を出し、それから
幾多の副葉を生じ、
枝の如き親を
呈し、全長
一米半に達
する。表面
は滑かて縦に
皺があり、黒褐色を呈する。食用及び肥料の原料
體が暗入。一種の昆布。荒布黒布(名) 種全
んぶ(縮黒布) 一のふくめ(荒布のふくめ)
(名) 荒布をゆいで、經節の煮出し砂糖・醤油などで
煮た食品。

あらめ(荒目粗目) (名) 編目のあらいこと。
又、そのもの。●目のあらい網。あらめみこ。一
おとし(荒目織) (名) 目をあらく三色に染
めた網。

アラモード(佛 A la mode) (佛) 形最新流
あらも(種) (名) 搗く時に碎けた米。〔古語〕
あらもの(荒物) (名) 粗大な家具。笨重・塵取な
どの類。(小間物の對)

あらもの(荒者) (名) 性質の荒い人。あはれもの。
あらもの(新家新屋) (名) ●新築した家。新宅
新居。●ぶんけ。

あらや(阿頼耶) (名) (佛) 梵。●八識の一。
藏の意で、人間心識の根本。内に一切萬有の種子を
藏し、萬法緣起の本となるもの。阿頼耶識。

あらやす(粗懸) (名) 目の粗い。すり。
あらやま(荒山) (名) ●けはし。山。●神佛のた
たりのある山。一な(荒山中) (名) 深山。
一ち(荒山路) (名) けはし。山路。

あらゆ(荒湯) (名) 煮え返る熱い温泉。『の湯』
あらゆ(新湯) (名) 沸かしてまだ人の入らぬ風呂
あらゆる(所有) (形) 修。ありたけ。すてて。
あらら(感) 驚きあきれる時發する聲。
あらら(荒ら) (名) あり。あり。一に荒
ら(一) 翻。あららしく。亂暴に。

あらら(一) (名) (一) 位。●齊宮の忌詞で塔をい
ふ。●交。明治大正・昭和の高業派歌人の團體。創
始者は左千夫・赤彦・茂吉。またその機關雜誌をいふ。
Arakakemai) 印度の數論派の哲學者。其の主義
は戒律によつて生死を解脱するにあつた。釋迦も一
時に之師事したことがある。のち釋迦の弟子とな
つた。

あららま(つばら) (荒松松原) (名) 樹のまばら
あらら(一) (名) (荒療治) (名) ●外科醫の手
荒い療治。●人をなむくつて殺すこと。

アラール(一) (海) (Sea of Aral) (名) (地) 派
領中央アジアのユラサスにある大咸湖。面積六萬
四千方呎。岸線二三百軒。海拔五〇米の沙漠中に
ある。

あられ(散) (名) ●雲雨が氷粒となつて降るもの
で、固塊又は固體をなす。●霖の目に切つた餅。
あられ(一) (名) 〔散〕の略。一いし
(散石) (名) ●獨居屋石灰より成り、針方晶系に屬



〔布〕

ありかーありつ

ひがしい。めづらしい。●かたじけない。もったいない。恐れ多い。

ありがたち〔有形〕(名)ありさま。ありやう。ありがたなきみだ〔有難儀〕(名)辱く余り感じて出る涙。喜びの涙。●うて實は迷惑なこと

ありがためいわく〔有難迷惑〕(名)有難いやありがたや〔有難屋〕(名)難儀をまける人●福成ある人の脱むやみに崇拜する人。

ありがち〔有勝〕(名)世の中によくあること。

ありがね〔有金〕(名)手許に所持する金銭。

ありがほし〔有欲〕(名)在欲し(形)世に生きてゐたい(動)有欲

ありがよう〔有様〕(名)有通ふ(自動)四常に通ふ。願れて通ふ。

初(名)小児の歩行始の時の儀式。

ありきたり〔在來〕(名)もたらあること。もとのまま。従來ならはし。

ありきぬ〔鮮衣〕(名)美しい衣。(古語)―の〔鮮衣の〕(形)か(三重)「ささる」ささる(二)「たから(寶)あり(有)の枕詞。

ありか〔有限〕(名)あんかきり。ありたり(動)あんかきり。ありか(古語)「あんかきり」(自動)カ四「あるくの古語。

ありく(動)ありく(在來)自動、カ變。經過ありく(動)食蟻獸(名)食蟻獸の略。體長約一米。體は暗褐色。口は長吻で突る。舌を出して蟻を食ふ。尾長く、前脚の爪は大きく、よ穴を開く。おぼろしく。

ありやくも〔蟻蜘蛛〕(名)蟻蜘蛛の一種。體長約六種。形は赤蟻に似赤褐色。網を造らず。よく蟻を捕へて食する。ありやくも。

ありく(動)ありく(在苦)「形」此の世にあることが苦し。世にならへ(古語)

ありごと〔有事〕(名)事實。

ありさかなりあき〔有版成章〕(名)「人」陸軍中將。男爵。山縣岩國の人。有坂式遠射機の發明

ありさかほう(名)「有版砲」(名)「軍」明治三十一一年、有坂成章の發明した遠射砲。山砲と野砲とがある。

ありさき〔蟻先〕(名)袍や直衣の裾の欄の兩側

ありさし〔蟻差〕(名)あり(動)「蟻」

ありさま〔有様〕(名)ありさま。状況。状態。

ありさま(代)お前さま。あなた。

アリザリン〔Alizarin〕(名)「化」人造煤染染料の1。茜草の根中に存在する一種の配糖體ダロシ1の分解物。赤色の結晶結晶で、又アリトレンを酸化して合成的に製造せられ、アルカリに溶解して赤紫色となり、鹽土とは赤色、酸化タロムとは褐色、水酸化第一ニ酸とは暗紫色の反應を呈し、顔料に供せられる。

ありさん(阿里山)〔名〕地「番」番臺中州から臺南州に跨がる山で、海拔二六二五米。全山、圓柏、紅檜、松、松杉等の大森林で、東隣に新高山がある。

ありじこ(阿里地獄)〔名〕(動)「す」すばかちよぶの幼蟲。體長一厘米。

あり(名)未滿體色淡紅色、細絲を生じ、泥状を著く。乾いた砂の中に種狀の穴を開き、すべり込む。

蟻を捕へて食ふ。ありあきり。

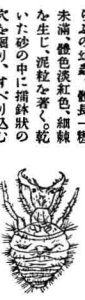
ありしまたお(阿里島武郎)〔名〕(名)明治大佐の小説家。東京市の人。札幌農学校卒業。人道主義的文學者。晩年は種痘の傾向があった。大正二年(一五八三)自殺。年四十六。その著に「宣言」「死とその前後」等がある。

ありしよ(阿里世)〔名〕(動)「生」生じて居た時。過ありしよ(動)蟻植物(名)蟻植物と共存共榮の關係を有すると謂はれる。蟻は植物に害蟲の侵入するを防ぎ、植物は蟻に蜜を供給する。即ち「さくさ」ありさや(名)鳥の巢。(古語)

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。



ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありす(阿里吸)〔名〕(動)啄木鳥(つぎ)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黒茶色で黒斑がある。好んで蟻を捕食する。

の字。轉じて如と終、又、始から終まで。永遠の意味に用ひらる。

アルファベット(Alphabet)(名) A B C等廿六文字。又、ギリシヤ文字の初の二字(アルファ)β(ベータ)を合せて呼んだ所から出た名稱。

アルプス(Alps)(名)ヨーロッパの西西部に横たはる山脈。イタリヤ・フランス・スイス・オーストリア・ドイツの境に連る。長さ七五〇〇軒。幅は中央二四〇軒、面積は我が本州位。最高のモンブラン(四八〇〇米)を始め、四〇〇米以上の高き山脈に接し、水跡の谷を横へ、雪原・氷河がある。アルプス横断の道路は、古くから開かれ、電車・ケーブルアルプ等で中腹まで登ることが出来、旅客案内所の設備が十分で、登山者が群集する。アルプスをフランス語でアルプ、ドイツ語でアルプスといふ。

アルヘイ(有平)(名)ゴルトガル語 Aidea の意。舊臣氏時代に傳はれた菓子で、白砂糖と餡子を煮つけたもの。一さきく「有平細工」(名)アルヘイで種種の形に造った菓子。一とう「有平糖」(名)アルヘイ。アルヘイ細工。アルヘンシュトゥック(獨)Alpenstock(名)登山杖。金剛杖。

アルボース(獨)Arbos(名)薬。樟腦樹の臭氣を有する消毒薬で、帯黄色の固形體。一せつけん「石鹼」(名)アルボースを加へて製し水に溶け易。消毒・化粧用及び石鹼。

アルマ(Alma)(名)エッパ及び近東方面の漢族。アルマナック(Almanac)(名)曆。統計年鑑。アルマ・メータ(Alma Mater)(名)育れの世。母校。出身校。

アルミ(名)Al(アルミニウム)の略。アルミ網(Aluminium bronze)の略語。アルミ金といふ。銅・銀・アルミニウムの合金。金に似た美觀な黄金色を有し、容易に錆びないで輕いため、裝飾品製作に用ひる。

アルミニウム(Aluminium)「輕銀」(名)「化

金屬元素。陶土・粘土中に化合物となつて存在する。銀白色の金屬で、甚だ輕く、比重は鐵の三分の一。展性・延性に富み、常溫では酸化しない。食器・家用具をつくるに用ひらる。一ばん(一版)(名)アルミニウムの板に文字・圖畫を寫し、鋳造で廣げたり製版し、石板で代用する。

あるものがお(有物類)(名)無いものを有するやうに見せつける顔つ。ありがた。

あるわ(或は「接続・副)(あるわの古語。あるわの(名)雨や風の荒いこと。暴風雨。皮膚の荒れたあくなること。(古語)

あれ(生)(名)うまれ(生)。(古語)

あれ(阿禮)(名)往古四月の賀茂祭に、種種の形組を飾りに飾り飾り、飾りつけたもの。古語「おと」とも(阿禮男)(名)賀茂祭の祭主。古語「おと」とも(阿禮少女)(名)さいいん(醫院)身を清くして仕へる。(古語)「はく」阿禮(名)阿禮を盛る筈。一はた(阿禮)古語「ひき」阿禮引(名)賀茂祭の日、言語人が阿禮の鈴を鳴らす爲に、阿禮につけた綱を引くこと。

あれ我(代)われ。(古語)「かかか(句)自分と人の區別を忘れる。一か人にもあらず(句)自分の事を忘れる。一にも非ず(句)正氣を失ふ。茫然自失。

あれ(彼)かれ。(名)あそこ。あこのもの。

あれい(陰鈴)(名)Dumb-bellの譯語。體操用具。長さ三〇對位の、鐵製又は木製。棒の兩端に球形のつた一對一組のもの。一たいそう「陰鈴體操」(名)陰鈴を持ってする體操。

アレクサンダー(一)一世紀。一八〇一年即位。一八〇五年及び一八一二年、大陸諸國と同盟してナポレオンの大軍を破ました。(一八七五)一八五五年即位。農政

を解放し、中央アジアを領有したが、虚無黨を壓迫したので、その黨に殺された。(一八八八)三世。自由思想を壓迫し、ユダヤ人を迫害した。(一八四四)

アレクサンダーたいおう(一)大王(名)「Alexander the Great」アレクサンドリアの子。年二十歳で即位し、ギリシヤを征服し、ペルシヤの邊境を全てバクシヤ・ダウラの軍を破り、シリア・シリアを占領し、印度に攻入ってバビロンに凱旋。翌年崩。年三十三。王の力によってギリシヤ文化は遙かに東方に及んだ。(一八三三)

アレクサンドライト(Alexandrite)(名)鑽。金緑玉の種。透綠色を呈すが、燐光に照らす時は赤紫色に見え。

アレクサンドリヤ(Alexandria)(名)「地」古來有名なエジプト北部の商港。アレクサンダー大王に建設されたので、この名がつけられた。一がく「一學派」(名)「Alexandrian School」西暦二三世紀頃からアレクサンドリヤに起つた哲學の學派で、ユダヤ哲學とギリシヤ哲學とを調和したもの。ピロン等に屬する。

アレグレット(伊)Allegretto(名)「音」や速く演奏せよとの意。又、その速度の樂曲名。

アレグロ(伊)Allegro(名)「音」アレグレットより少し速く、速く演奏せよとの意。又、その速度の樂曲名。

アレグロアッサイ(伊)Allegro assai(名)「音」音樂用語。甚だ急速に演奏せよとの意。

アレゴリー(Allegory)(名)隱喩。寓意。

あれさま(代)あなさま。ありさま。

あれしき(彼式)(名)あれこれある。あれほど。

あれた(荒田)(名)荒れてゐる田。耕作しないであらう。

あれたつ(阿列)(名)荒立(一)自動。カササチナマヤワリの十音。

あれつづ(阿列)(名)自動。カササチナマヤワリの十音。

あれつづ(阿列)(名)自動。カササチナマヤワリの十音。

あれつづ(阿列)(名)自動。カササチナマヤワリの十音。

あれつづ(阿列)(名)自動。カササチナマヤワリの十音。

あれつづ(阿列)(名)自動。カササチナマヤワリの十音。

世に生れ来てうけつづ。(古語)

あれて「彼體」(名)あれほど。あれくらゐ。あれの「荒野」(名)あれた野。あらぬ。あらぬ。あれのみ「暴飲」(名)酒をむかひ飲むこと。

あれは「荒田」(名)荒れてゐる田。あれは「荒果」(名)荒果(一)自動。天下(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)

あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)

あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)

あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)

あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)

あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)

あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)

あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)

あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)

あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)

あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)あれはつづ(一)自動。荒果でてる(一)自動。天下(一)

まや恐しきの爲に、皮膚に小粒ができる。身の毛がよだつ。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

あわだつ(泡立つ)自動、夕四)泡がたてり。(古語)

一だま(鮑珠)名 鮑珠に同じ。一のし多

熨斗(名)鮑乾肉をのぼしてつくった熨斗多

くの襦袢に用いられる。のしあはび。一むすび

鮑(鮑珠)名(ありむすび)淡路産。一の片思

(鮑)鮑の介殼の一方ばかりで自分から自分

が他を思ふのみで相手か自分を思ふこと

あわがき(泡吹)名(種)種風塵(塵)の科の藻

類。黄白色の細い花を長筒花序に開く。枝の所

から泡を出すので此の名がある。あわぶくたらし

あわはり(阿波形)名(昔、阿波から出した

刀劍の裝飾具の金属彫刻。野村正時の法を傳へたも

の。濃厚な金色を用いる。(以上古語)

あわむ(あはむ)名(淡む)他動(下二)冷

淡にする。(古語)。(以上古語)

あわもり(泡盛)名(琉球に産する蒸留酒で、焼酎

の一種)元來は粟を原料として醗を製し醗酵せしめ

て後蒸溜したが、近來は普通の白米を使用する。其

中に煎た粟を入れた袋を入れておく、粟の色をよ

うま(泡盛升麻)名(あわもり)名(あわもり)

一そう(泡盛草)名(あわもり)名(あわもり)

(名)泡盛草(あわもり)名(あわもり)

(名)泡盛草(あわもり)名(あわもり)

(名)泡盛草(あわもり)名(あわもり)

(名)泡盛草(あわもり)名(あわもり)

(名)泡盛草(あわもり)名(あわもり)

(名)泡盛草(あわもり)名(あわもり)

(名)泡盛草(あわもり)名(あわもり)

(名)泡盛草(あわもり)名(あわもり)



泡盛草

加へた羊羹。一七ば(泡盛蕎麥)名(蕎麥粉酒

を中火で煮上げ、卵をかきまぜて泡立てたものを入

れ、熱した蕎麥に注ぎかけたもの。一どうふ

泡雪豆腐(名)泡雪のやうに軽くて柔かい豆腐。

一の(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

あはれ(泡雪)名(沈)消え「け」の枕詞。

又は料理店などの家の名に添へる。

あん(煎)名(字)唐音。煮た小豆を摺りつぶし、

砂糖を混ぜて更に煮たもの。菓子餅などの中に包

み又は塗り、汁粉などにも製するもの。片栗粉が

菓粉を溶いたものを加味し砂糖醤油をまぜた清汁の

清液したものに味つけのつくす。

あん(鞍)名(く)鞍。地)地層の背斜層

の頂部。(山頂)と山頂の間にある低い部分。

あん(何)山頂)と山頂の間にある低い部分。

あん(何)山頂)と山頂の間にある低い部分。

あん(何)山頂)と山頂の間にある低い部分。

あん(何)山頂)と山頂の間にある低い部分。

あん(何)山頂)と山頂の間にある低い部分。

あん(何)山頂)と山頂の間にある低い部分。

あん(何)山頂)と山頂の間にある低い部分。

あん(何)山頂)と山頂の間にある低い部分。

あん(何)山頂)と山頂の間にある低い部分。

あん(何)山頂)と山頂の間にある低い部分。

あん(何)山頂)と山頂の間にある低い部分。

あん(何)山頂)と山頂の間にある低い部分。

あん(何)山頂)と山頂の間にある低い部分。

あん(何)山頂)と山頂の間にある低い部分。

あん(何)山頂)と山頂の間にある低い部分。

あん(何)山頂)と山頂の間にある低い部分。

あん(何)山頂)と山頂の間にある低い部分。

あん(何)山頂)と山頂の間にある低い部分。

あん(何)山頂)と山頂の間にある低い部分。

あん(何)山頂)と山頂の間にある低い部分。

カーエスケープメント(Auditor's escape)の時
で、箇中時計の中で、鐘形をした二本の爪が、齒車の
齒にかか合せて、その廻轉を制御する装置。アンタ
ル。

あんかい(暗晦)名 くらが、い。①かく
あんがい(案外)名 思ひの外。意外。
存外。②(案外)名 ふとまさしもの。
あんかけ(暗掛)名 食品にたまりをかけた
もの。①(暗掛)名 くだまり
をかけたこと。②(暗掛蕎麥)名 くだ
まりをかけたそば。③(暗掛豆腐)名
(名) くだまりをかけた豆腐。

アンカット(Anicut)名 ①書物などの小口の切っ
てないこと。②横開きの印刷機。③映畫で、検査官
に未だ紙を入れないフィルム。
あんかもんいん(安嘉門院)名 ①
御名は邦子。高倉天皇の第二女。後堀河天皇の准
母。弘安六年(一四三三)崩。御年七十五。

あんかもんいんのしじょう(安嘉門
院四條)名 ①阿倍氏の稱。
あんかん(安閑)名 ①心を安らかにしづかに
すること。氣楽なこと。②なす事もなく暮らすこと。
アンカン(暗櫃)名 麻唐用箱。場にさらさない
櫃子か。

あんかんでんのらう(安閑天皇)名 第二
十七代の天皇。額満天皇第二の皇子。皇紀一九四四年
即位。都を大和郡市郡(今奈良)に宮に遷し、在
位二年にして崩御。(二)心。
あんき(安危)名 心の安らな。心配のない
あんき(安危)名 安穩と危急と。やすことと
危いこと。

あんき(晏起)名 朝おそく起きること。朝寝。
あんき(諸記暗記)名 そらおぼえ。そらんじ
おぼえのこと。記憶。
あんき(暗處)名 ①暗中に見えぬ處。②疑心。
あんき(行脚)名 ①漢字の唐音。②佛の僧の
諸國をめぐる修行すること。③あんき(そら)。うん

いふ。雪水。④徒歩で諸國を遊歴すること。⑤そ
う(行脚僧)名 佛諸國をめぐる修行する僧。
あんきよ(安居)名 やすらかに暮らすこと。
あんきよ(暗渠)名 工におほひをした水路の
構造で、道路運河・鐵道軌道の下を通路とするもの。
石造新暗渠・鐵筋コンクリート暗渠。陶管暗渠・
木造暗渠・拱形暗渠等の種類がある。⑥排水等の爲
に地下に敷く水路。

あんきよ(閑虛)名 天日光によって月が空中に
投ずる全部の影。地球の中にいれれば皆既日蝕と
なる。
あんく(暗愚)名 智に暗く才能の鈍いこと。なる。
あんぐ(行宮)名 (あん)は「行」の唐音。行
幸の時などの御殿。かりみや。あんざい。「ま
あんぐり(名) ぼんやりして覺えず口を開くこと。
あんぐり(名) ぼんやりして覺えず口を開くこと。
アング(Angh)名 ①イギリスの國教教會
で、君主を其の主領とし、國會を最高立法部とするもの。
アングル(Angul)名 ①攝影機の角度。
アンクルサム(Uncle Sam)名 北米合衆國民
又はその政府の俗稱。
アンクローアメリカン(Anglo-American)
名 突、形英米の。

アンクローサクソン(Anglo-Saxon)名 トイ
ソ海岸地方から英國に渡り、五世紀頃王國を建て
たデーン民族即ち英國國民の主なる血統の祖先。
アングロロジヤニクス(Anglo)名 ①器英病。
突、形英和の。日本の。「イギリス」を器英病。
アングロフオロビヤ(Anglophobia)名
あんくん(暗君)名 風か女君主。
あんけつ(暗殺)名 佛軍罪人の
行くべき果敢(刑)の途中的暗い道。
あんけら(名) ぼんやり。あんけられた様子。
あんげり(名) 口あんげり。あきれた様子。
あんけん(按檢)名 しらべ。きんみ。
あんけん(案驗)名 しらべ。きんみ。
あんけんさつ(暗劍殺)名 九星方位中最も凶

な方位、これを犯せば生命を失ふといふ。
あんご(安居)名 佛印度の僧が、夏の雨期に
外出しない、一室に籠って修行すること。我が國
では、陰曆四月十六日から陰曆七月十五日の間に
行ふ。雨安居。夏安居。①のとう(安居頭)
名 男山八幡宮の神事。八幡宮は宮寺であつたか
ら、安居を管した。頭はの神事を管す主役。
あんごう(安堵)名 安らかなこと。おだや
かなこと。異體のないこと。安穩。

あんごう(鰐鯨鯨)名 鰐鯨科の海産硬
骨魚。長さ一米半位。鰓平で頭
大きく、口廣く、尾は細
長い。體色は背面は黒
褐色。腹側は白色。性強
て游泳は拙。①軒鰐と堅
鰐となつた角形の鰐。
よびどひ。②(たらんぼう)。
①がた(鰐鯨鯨)名
竹製花籃の一種。あくびが
た。①むし(鰐鯨鯨武
者)名 表面は強きだが、内心の卑怯な武士。
あんごう(暗香)名 目には見えないが、そ
れと感られる花などの香。
あんごう(加工)名 ①鞍をつくる職工。②馬具
製造者。③軍馬具の製造修理の陸軍の工兵。
あちごう(加工長)名 軍工の下士官。
あんごう(暗長)名 黒髪を帯びた赤色。
あんごう(暗溝)名 あんき(暗溝)。
あんこ(暗刻)名 麻唐用箱。場にさらさない
刻子か。

あんごう(暗號)名 ふて符牒。あひひ
と(合言葉)か。こしとは。符牒できまらぬ
と。①てんばう(暗號電報)名 電報
や符牒で記した電報。
あんごう(暗號)名 暗室の名。②暗號の
あんごう(暗合)名 期せずして物事の

一致すること。自然に合ふこと。
あんごうてんのらう(安閑天皇)名 第二
十代の天皇。元嘉天皇第二の皇子。穴穗皇子と申す。
皇紀一四四四年即位。都を大和の石上(今奈良)に遷し、
穴穗宮と稱せられた。在位三年、大草香皇子の子
眉間(皇)王に弒せられ給ふ。(二)六。
アンコール(佛Ankor)名 「再び」の意から、
音譯合なると、出渡しが退場した後に拍手などに
よって再び出演を望むこと。
あんごく(暗黒黒)名 くらが、い。①精
神生活上に不安や悲憤なことが存すること。
②(暗黒時代)名 戦亂の續く時代。
③(暗黒文化)名 衰へた時代。④(暗黒)名 無秩序な
時代。⑤(暗黒)名 五世紀から十一世紀に現は
れる暗黒な神。あんさん(時線)①めん(暗黒面)
(名) 物事のはっきりしない方面。②(暗黒)名 存在せ
る方面。くらひ悲憤な方面。
あんこく(安國)名 國家を安穩にすること。
①(安國寺)名 佛足利直義が懺悔の餘
國家安穩の祈禱場として諸國に建てた寺。
②(安國論)名 佛立正(安國論)日蓮の著。
あんこく(鞍骨)名 鞍の芯。鞍を構成する
材。くらげ。



(鰐鯨鯨)

あんごら(Angora)名 ①地中海アジヤ中島の中
部にあるトルコ共和國政府の首府。②うさぎ。③
毛(名) 動物毛の一變種。普通白色の長く柔かに
毛で包まれ、暖紅色、性質は貴重な織
物原料となる。原産地はアンゴラ。④せいふ
政府(名) 一九三三年十月、ケマル・パシャが舊土
耳古のコンスタンティノール(今のイスタンブール)
に反對して樹立した政府。
あんごり(名) 割。あんごり。
あんご(暗恨)名 心に恨を抱くこと。①。
アンコンシヤスネス(Inconspicuous)
名 無意。人事不省。

あんごら(安國)名 國家を安穩にすること。
①(安國寺)名 佛足利直義が懺悔の餘
國家安穩の祈禱場として諸國に建てた寺。
②(安國論)名 佛立正(安國論)日蓮の著。
あんこく(鞍骨)名 鞍の芯。鞍を構成する
材。くらげ。

あんごら(Angora)名 ①地中海アジヤ中島の中
部にあるトルコ共和國政府の首府。②うさぎ。③
毛(名) 動物毛の一變種。普通白色の長く柔かに
毛で包まれ、暖紅色、性質は貴重な織
物原料となる。原産地はアンゴラ。④せいふ
政府(名) 一九三三年十月、ケマル・パシャが舊土
耳古のコンスタンティノール(今のイスタンブール)
に反對して樹立した政府。
あんごり(名) 割。あんごり。
あんご(暗恨)名 心に恨を抱くこと。①。
アンコンシヤスネス(Inconspicuous)
名 無意。人事不省。

あんごら(Angora)名 ①地中海アジヤ中島の中
部にあるトルコ共和國政府の首府。②うさぎ。③
毛(名) 動物毛の一變種。普通白色の長く柔かに
毛で包まれ、暖紅色、性質は貴重な織
物原料となる。原産地はアンゴラ。④せいふ
政府(名) 一九三三年十月、ケマル・パシャが舊土
耳古のコンスタンティノール(今のイスタンブール)
に反對して樹立した政府。
あんごり(名) 割。あんごり。
あんご(暗恨)名 心に恨を抱くこと。①。
アンコンシヤスネス(Inconspicuous)
名 無意。人事不省。

(句) 始めに心配したこと、いざとなればたやむい
こにいふ。①考へる。②しらへる。
あんす(あんす) 按ず(他動) 考へる。③おさへ
あんせい(安静) 安らふ。やがて静かになる。
あんせい(安靖) 安らふ。安らふ。安らかに治
まらぬ。安らかに定まる。

あんせい(安政) 名 孝明天皇御宇の年號。將軍
徳川家定 家茂の時代。(一八二四)
米國との假條約に調印した。(三二)
あんせい(暗星) 名 天の光を致さぬ恒星。
假條約(名) 一 江戸幕府の大老井伊直弼が、勅
許を俟たないで、安政五年(二一八)六月米國と、
次いで露・英・佛の四國國との間に、假に結んだ通
商條約。あんせいといふ。

あんせいのたいごく(安政大獄) 名 一 大老
井伊直弼が假條約に調印し、且、將軍家茂を迎
へたことに反對した公卿大老を調し、梅田雲漢吉
田松隆・額三郎・橋本左内等多数の志士を安政五
年(二一八)に投獄・處刑した事件。あんせいのこ
ろ。

あんせん(暗線) 名 一 暗い。あんせん暗黒
あんせん(黯然) 名 一 暗いさま。②黒いさ
ま。③悲しむ心ふくま。ま。
あんせん(晏然) 名 一 安んずらかなさま。②
おちついて安んず。

あんせん(安全) 名 一 危険のないこと。①かみ
そり安全剃刀(名) 刃を横にさへるかはりな
り。皮膚を切る慮のない。②安全装置のある剃刀。
③「安全装置」(名) ④「理」(Circuit) 規定以上
の電流を遮断する場合、内部に装置したヒューズが
電路を遮断し、危険を豫防する装置。普通引込電
線と屋内電線の接続する場所に設ける。⑤銃に彈丸
をかめた場合に誤発を防ぐ爲、引金又は打金が動か
ぬやうに装置したもの。⑥「しゅうかん」(安
全週回) 名 ⑦「のび」(名) ⑧「工場・道路・家庭等
に於て各自特に注意し、災害・死傷等の起らないや

うに、社會の安全にせしめる週回。①だいいち
[安全第一] (名) (Safety first) 危険のないやうに
警戒・注意すること。生活上の第一主義であるとい
ふこと。②ちた [安全地帯] (名) (Safety
Zone) 乗客の危険を防ぐ爲に、交通頻繁な場所所
にば電車停留場等に設けた地域で、ここには自動車等
を乗入れることができない。③「らう」 [安全燈]
(名) (Safety lamp) 鑛山に炭坑で用いる金網や硝子
を嵌めたランプ。④「べん」 [安全弁] (名)
筒形に曲げて先端を隠蔽し留針。⑤「べん」 [安
全閥] (名) (Safety valve) 汽機内の蒸氣壓力
が或程度を越すと、壓力がかまか破裂するから、之
を防ぐ爲に排出口から蒸氣を通常に出す装置をした
もの。⑥「まじょうじょうやく」 [安全
全保障條約] (名) 政務協約が、相互に相手國
の領土的安全を保障する條約。⑦「マツチ」 [安全
燒付] (名) (Safety match) 普通のマッチで、軸頭
に硫黄・鹽酸加里などの含有物をつけ、箱の横側の薬
品にあてて摩擦せざる以上、發火せぬやうにしたも
の。⑧「りう」 [安全率] (名) (Factor of safety)
構造物の安全を保つ程度。

あんそく(安息) 名 一 やすかに休むこと。①
こうじ [安息香] (名) 檀香科の落葉
喬木。樹皮は茶褐色、葉は形長で鋭鋸。夏更葉から
赤いんだ小花を雌雄別々に開く。馬中島・暹羅に産す
る。この樹皮から取った脂を固めたものは、芳香を
有するから、香料・防腐・消毒用とする。②「こ
ろ」 [安息香] (名) ③「色」 [安息香] (名) 彼の
樹脂を徐かに熱する時に生ずる白色又は黄白色
の小葉状或は針狀結晶體で、之を熱すれば揮發して
咽喉を刺激して咳を起させる。結核菌・工業用染料
に用ひる。④「こく」 [安息國] (名) 工業用、メル
シヤ地方にある大王國で、支那との交通が頻繁であ
る。その國名は、首府の (Antich) から来たとい
ひ、又建國の王名 (Anaxer) から来たといふ。⑤
じつ [安息日] (名) (Sabbath day) ユダ
ヤ人の最も大切にした土曜日。神は六日間働いて宇

宙間の萬物を作り、第七日に息んだとして此の日を
聖日とする。⑥キリスト教徒が、聖日即ちキリスト復
活の日として仕事を休む、宗教的儀式を行ふ日。
アンソロジー (Anthology) (名) ①「前條」に同じ。
②「文」文集。佳句集。
③「名曲集」 ④「花の
詩集」 ⑤「花の
萬葉集」 ⑥「花の
詩集」 ⑦「花の
詩集」 ⑧「花の
詩集」 ⑨「花の
詩集」 ⑩「花の
詩集」 ⑪「花の
詩集」 ⑫「花の
詩集」 ⑬「花の
詩集」 ⑭「花の
詩集」 ⑮「花の
詩集」 ⑯「花の
詩集」 ⑰「花の
詩集」 ⑱「花の
詩集」 ⑲「花の
詩集」 ⑳「花の
詩集」 ㉑「花の
詩集」 ㉒「花の
詩集」 ㉓「花の
詩集」 ㉔「花の
詩集」 ㉕「花の
詩集」 ㉖「花の
詩集」 ㉗「花の
詩集」 ㉘「花の
詩集」 ㉙「花の
詩集」 ㉚「花の
詩集」 ㉛「花の
詩集」 ㉜「花の
詩集」 ㉝「花の
詩集」 ㉞「花の
詩集」 ㉟「花の
詩集」 ㊱「花の
詩集」 ㊲「花の
詩集」 ㊳「花の
詩集」 ㊴「花の
詩集」 ㊵「花の
詩集」 ㊶「花の
詩集」 ㊷「花の
詩集」 ㊸「花の
詩集」 ㊹「花の
詩集」 ㊺「花の
詩集」 ㊻「花の
詩集」 ㊼「花の
詩集」 ㊽「花の
詩集」 ㊾「花の
詩集」 ㊿「花の
詩集」



〔與 德〕

で旅した時。
あんたい(安泰) 名 一 やすらかなこと。さびりの
あんたい(安胎) 名 一 佛光大安胎散
中標衣又はその意(五條の製法)
あんたくせ(安宅正路) 名 一 孟子の麗裝
上篇の語「安居と正道との意で「仁義の稱。
アンタゴニスム (Antagonism) (名) 映畫にあ
はられる敵。反目者。敵對者。
アンタゴニスム (Antagonism) (名) 抵抗。反
對論。「かふ者」よび拮抗。あほう拮抗。
あんたべんけい(あんた辨慶) 名 一 辨慶によ
あんたらめ(安馬鹿) 名 一 馬鹿者。
アンダルシヤン (Andalusian) (名) ①「動」サイ
ンのアンダルシヤン。原産の産卵雞。羽毛は普通で灰黒
色または黒色である。②「ト」ト。
あんたん(暗探) 名 一 くらくしかなこと。①の
アンダンテ (伊 Andante) (名) ①「音」音樂上
曲を遅く緩かに優しく奏せよとの意。又、その緩か
な樂曲。
アンダンティーノ (伊 Andantino) (名) ①「音」
アンタラよりも早く奏せよとの意。又、その速度
の樂曲。②「國」協約の現狀維持。③「親類」
アンタント (佛 Entente) (名) ①「協約」協約
あんなん(安置) 名 一 安らかに据ゑること。②「解
あんの像(安置像) 名 一 安んずらかなさま。
アンチ (Anti) (接頭) 反對。①「アジテー
ンチ (Anti-agitation) (名) 排外運動。外排
斥運動。②「ウオ」ウオ。③「パ」パ。④「ク」ク。
⑤「ラ」ラ。⑥「フ」フ。⑦「ガ」ガ。⑧「カ」カ。
⑨「キ」キ。⑩「ク」ク。⑪「コ」コ。⑫「ク」ク。
⑬「カ」カ。⑭「キ」キ。⑮「ク」ク。⑯「コ」コ。
⑰「ク」ク。⑱「カ」カ。⑲「キ」キ。⑳「ク」ク。
㉑「コ」コ。㉒「ク」ク。㉓「カ」カ。㉔「キ」キ。
㉕「ク」ク。㉖「コ」コ。㉗「ク」ク。㉘「カ」カ。
㉙「キ」キ。㉚「ク」ク。㉛「コ」コ。㉜「ク」ク。
㉝「カ」カ。㉞「キ」キ。㉟「ク」ク。㊱「コ」コ。
㊲「ク」ク。㊳「カ」カ。㊴「キ」キ。㊵「ク」ク。
㊶「コ」コ。㊷「ク」ク。㊸「カ」カ。㊹「キ」キ。
㊺「ク」ク。㊻「コ」コ。㊼「ク」ク。㊽「カ」カ。
㊾「キ」キ。㊿「ク」ク。

neto) (英形) 排日。—ジヤパニーズボイ
ボット [Anti-japanese boycott] (名) 日貨
排斥運動。—セニス [Anti thesis] (名) 哲
学指定に反対する立言。反指論。—ミリタリス
ム [Antimilitarism] (名) 反軍国主義。
[Antimilitarist] (名) 反軍国主義者。—ミ
リタリー [Anti-modern] (英形) 淺薄な
新しがり。—ミリアン [Antiprism] [安知必林] (名)
[Antiprism] (名) 複屈折光ある白色無臭の葉片状結晶
體で、解熱劑。
アンチペリリン [Antiperilin] [安知必林] (名) [薬]
米糠の「ヒキス」から蛋白質を去った腥臭の薬剤。
グアミナニを主成分とする。
アンチモニー [Antimony] [安質母尼] (名) [薬]
黄色青緑色の脆い金屬元素。主として合金とし
て活字や種種の器物の鑄造に用ひる。アンチモン
アンチモン (名) [化] アンチモニー。—しゅー
生 (名) [化] 硫酸アンチモンから成る赤色粉末で、
メンキなどの着色料とする。

あんなちやく [安宅] (名) 無事に到着すること。
あんなちやく [暗潮] (名) やみのうち。—ひやく
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
暗中に手ごくりて求めること。てがかりのない。捜索。
あんなちやく [安宅] (名) 無事に到着すること。
あんなちやく [暗潮] (名) やみのうち。—ひやく
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
暗中に手ごくりて求めること。てがかりのない。捜索。

あんなちやく [安宅] (名) 無事に到着すること。
あんなちやく [暗潮] (名) やみのうち。—ひやく
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
暗中に手ごくりて求めること。てがかりのない。捜索。

あんなちやく [安宅] (名) 無事に到着すること。
あんなちやく [暗潮] (名) やみのうち。—ひやく
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
暗中に手ごくりて求めること。てがかりのない。捜索。

能、「道成寺現在在館」日高川入相花王行」の戯
曲又「京鹿子娘道成寺」の舞踊等の材料となつた。
あんなちやく [安宅] (名) 無事に到着すること。
あんなちやく [暗潮] (名) やみのうち。—ひやく
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
暗中に手ごくりて求めること。てがかりのない。捜索。

あんなちやく [安宅] (名) 無事に到着すること。
あんなちやく [暗潮] (名) やみのうち。—ひやく
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
暗中に手ごくりて求めること。てがかりのない。捜索。

あんなちやく [安宅] (名) 無事に到着すること。
あんなちやく [暗潮] (名) やみのうち。—ひやく
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
暗中に手ごくりて求めること。てがかりのない。捜索。

あんなちやく [安宅] (名) 無事に到着すること。
あんなちやく [暗潮] (名) やみのうち。—ひやく
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
暗中に手ごくりて求めること。てがかりのない。捜索。

あんなちやく [安宅] (名) 無事に到着すること。
あんなちやく [暗潮] (名) やみのうち。—ひやく
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
暗中に手ごくりて求めること。てがかりのない。捜索。

あんなちやく [安宅] (名) 無事に到着すること。
あんなちやく [暗潮] (名) やみのうち。—ひやく
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
暗中に手ごくりて求めること。てがかりのない。捜索。

あんなちやく [安宅] (名) 無事に到着すること。
あんなちやく [暗潮] (名) やみのうち。—ひやく
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
暗中に手ごくりて求めること。てがかりのない。捜索。

あんなちやく [安宅] (名) 無事に到着すること。
あんなちやく [暗潮] (名) やみのうち。—ひやく
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
暗中に手ごくりて求めること。てがかりのない。捜索。

あんなちやく [安宅] (名) 無事に到着すること。
あんなちやく [暗潮] (名) やみのうち。—ひやく
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
暗中に手ごくりて求めること。てがかりのない。捜索。

あんなちやく [安宅] (名) 無事に到着すること。
あんなちやく [暗潮] (名) やみのうち。—ひやく
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
暗中に手ごくりて求めること。てがかりのない。捜索。

あんなちやく [安宅] (名) 無事に到着すること。
あんなちやく [暗潮] (名) やみのうち。—ひやく
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
暗中に手ごくりて求めること。てがかりのない。捜索。

あんなちやく [安宅] (名) 無事に到着すること。
あんなちやく [暗潮] (名) やみのうち。—ひやく
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
[暗中飛躍] (名) 世間に知られずに烈しく策動。
暗中に手ごくりて求めること。てがかりのない。捜索。



〔あんとんあ〕

〔奄羅國〕

（名）佛甲印度吠舍種（いじ）國にあつた

環海の國で、その情合で推摩経などを説いた。

あんらく（安楽）（名）安らかに樂しむこと。

いす（安楽椅子）（名）普通の椅子より大きく、

膝掛をつけ、スプリングを設け、よりかたじけなく、

後・左右に動きなどする装飾の椅子。→じやい

あんらく（安楽）（名）佛京都市伏見區竹田

町にある真言宗の寺で、保安四年（一七八三）鳥羽

天皇が鳥羽離宮の北殿に設けられた等。→じやう

うと（安楽浄土）（名）佛（てんらくじやう

と）をいふ。→安楽浄土（名）佛（てんらくじやう

（てんらくじやう）と極樂浄土（名）をいふ。

あんらう（暗流）（名）表面にあらはれぬ

流。→外部にあらはれぬなりやう。

あんりよ（安慮）（名）安心。

あんりよ（安慮）（名）人知れず流す涙。

アンレスト（Unrest）（名）不穩。不安。

あんろ（暗路）（名）暗い路。→暗路内の地下の

交通用のトンネル。

あんろくさん（安祿山）（名）人支部唐の叛臣。

たが、遂に叛し、天寶十四年大難殊武皇帝と稱したが

至徳二年、嗣子慶緒に就せられた。（五七五）

五十音圖「あ」行の第二音。→中古まで「い」

を音と、「う」を徒音とした重母音で、「うい」と發

音した。（爲）の草體。→「伊太利」の略。

い（名）生。たんのう。舞臺。

い（名）寝ること。（古語）

い（蜘蛛）（名）蜘蛛の巣。蜘蛛の巣。（古語）

い（意）（名）①思考。②わけ。意味。③總意。

おもひき。④私心。私慾。⑤意志。意思。⑥意識。

い（到りて筆隨ふ）（句）思ふままに詩歌・文章を

すらすらとつくり出すこと。→まとなきさず（句）

心にかげない。→に中（句）思ふ通りになる

の。→に介（す）（句）氣にかげない。→に介（せ

ず）（句）氣にかげない。→理解に苦しむ。

い（醫）（名）病をなほすこと。→病をなほす人。

醫者。→はに術なり（句）醫は人の危急を救ふ

愛の道である。（句）わらひはひ（句）ものけ。

い（移）（名）中古八者などで互にとりかへた文書

の常を守るべき道。則。常。→を棄る（句）

（詩經大雅丞民篇の句）人道を固く守る。

い（易）（名）たやすこと。

い（夷）（名）えびす。蠻人。→平らか。安らか。→

あぐら。→を以て夷を制す（句）支部の傳統

の外交政策で、他國民を平はせておいて、自國の安全

を計るに依る。

い（衣）（名）さまもの。ころも。きぬ。着ること。

い（履）（名）赤地の絹に織したるもの。天子が諸侯に對面す

る時に用いた。→ついで。

い（氣）（名）いき（氣）（古語）

い（汝）（代）なんじ（汝）（古語）

い（陰）（名）動物の一種。體は圓筒形。雌雄

異體。海濱の砂の中に埋没して生活するゆむし。

い（名）異本語句を傍註する時に用ひる符號。

い（井）（名）地を掘り下げて、地下水を汲み上げ

又は汲みあげたけにかけたもの。あと（井戸）

い（堰）（名）用水をせきとめてある所。（并堰）

①方角の名で、西北の北によつた方。→昔の「時」の

名で、今の午後十時。

い（蘭莞草）（名）種燈心草科の多年

生草木。湿地に自生し、又、水田に栽培する。細葉

の地下茎を有し、地上莖を抽く。莖は細長く、一

米位に達し、中に白色

の髓がある。葉

は莖基に鱗片形

の鞘を有す。夏

季、莖の上節に分歧

した花穂を開し、球陽色の細花を開く。莖

は冠又は莖表し、髓は燈心とする。とうしんぐま。

い（胃）（名）生内臟の二で、消化器の主要な

もの。前方は食道に、後方は腸に連り、形は囊状とな

す。擴張部下、肝臓の下方に横たはる。内部に胃液

があつて、胃液を分泌する。→二十八宿の二で、西方

に位する。

い（蜩）（名）動はりれずみ。→と（緯度）

い（威）（名）人を畏服する勢。威光。→あり

い（威）（名）人を畏服する勢。威光。→あり

い（威）（名）人を畏服する勢。威光。→あり

い（威）（名）人を畏服する勢。威光。→あり

い（威）（名）人を畏服する勢。威光。→あり

い（名）古人の仁愛の遺風。→じ（遺愛寺）（名）

佛支那江西省の廬山に在る寺。

い（名）「居合」名。物道の一派。坐つたまま

で、ややく刀を抜き、形を斬斷して、崎林風に始まる

の。→じ（居合腰）名。居合をする時の腰つき。

→じ（居合腰）名。居合をする時の腰つき。

い（名）「居合」名。居合をする時の腰つき。

い（名）「居合」名。居合をする時の腰つき。

い（名）「居合」名。居合をする時の腰つき。

い（名）「居合」名。居合をする時の腰つき。

い（名）「居合」名。居合をする時の腰つき。

い（名）「居合」名。居合をする時の腰つき。

い（名）「居合」名。居合をする時の腰つき。

い（名）「居合」名。居合をする時の腰つき。

い（名）「居合」名。居合をする時の腰つき。

い（名）「居合」名。居合をする時の腰つき。

い（名）「居合」名。居合をする時の腰つき。

い（名）「居合」名。居合をする時の腰つき。

い（名）「居合」名。居合をする時の腰つき。

い（名）「居合」名。居合をする時の腰つき。

い（名）「居合」名。居合をする時の腰つき。

い（名）「居合」名。居合をする時の腰つき。

い（名）「居合」名。居合をする時の腰つき。

い（名）「居合」名。居合をする時の腰つき。

い（名）「居合」名。居合をする時の腰つき。

い（名）「居合」名。居合をする時の腰つき。

い（名）「居合」名。居合をする時の腰つき。

いしがみ **飯噺**(名) 飯をなみくだいて嬰兒に食はせること。酒を造る爲のものとなること。(古語)
いかもちう **詰り**(名) 言構ふ(自動) 下(二)巧みに(い)し(る)うまくいふ。(古語)
いかよう **言通ふ**(言通ふ) (他動) 四(一)い(か)わ(す)言交す(古語)
いかわす **言交す**(言交す) (他動) 四(一)い(か)わ(す)言りあふ。男女が互に交す。口約束。男女の結婚の直接約束。
いかわせ **言交**(名) い(か)わ(す)言交はせる(他動) 下(一)い(か)わ(す)の口語。
いさか **異域**(名) 外國。一の鬼となる(句) 外國で死ぬ(句)。

いさかす **言聞かす**(言聞かす) (他動) 下(一)い(き)か(せる)のみこませること。
いさかせ **言聞**(名) 言聞かせること。
いさかせる **言聞かせる**(言聞かせる) (他動) 下(一)い(き)か(せる)の口語。
いきたり **言來**(名) い(き)つ(た)こと(句) 傳説。

いざり **栴**(名) 栴科の落葉喬木。高さ約八米。樹皮は白褐色で、褐色の斑點がある。葉は心臓形で鋸齒を有す。雄雄果株。雄花は緑黄色、雌花は淡紫色。五月頃雄球状花序を開き、實は赤く南天に似て大。材は樂器を作るに用いられる。(栴)



いざり **龍馬**(名) 動かまかま(おろき)。い(ざ)り **龍馬**(名) 動かまかま(おろき)。い(ざ)り **龍馬**(名) 動かまかま(おろき)。い(ざ)り **龍馬**(名) 動かまかま(おろき)。

いざく **意育**(名) 教意の鍛練・發達をはかるを目的とする教育。(知育・體育の對)
いざく **意育**(名) 教意の鍛練・發達をはかるを目的とする教育。(知育・體育の對)

いふく **言種**(名) い(ふ)べき事のため。申すこと。言腐す(他動) 四(一)わ(る)い(ふ)け(な)す。言朽す(他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言朽す**(言朽す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。
いふく **言下す**(言下す) (他動) 四(一)い(く)ま(す)の古語。

イーストマン (Eastman) (名) 人 (Oskar Eastman) アメリカ合衆国の詩人、批評家。社会主義的文藝雜誌「ニューマックス」の中堅人物。ニューヨーク州カナディアンに生まる。「詩の歌」ニューモアの意味「レイン」の死後「レイン」ドロツキ一傳」等の著がある。(一八八〇) (George Eastman) アメリカ合衆国ロヂェスター市の世界第一のイーストマンコダック社社の建設者で社長。一九二七年英國王立寫眞協會から、寫眞術上の發明、進歩に對する賞狀の康で進歩賞牌を受けた。(一九三三)

イーストレーキ (Warington Eastlake) (名) アメリカ合衆国の英語學者。元來はドイツ人。明治十七年來朝し、英文週刊雜誌を發行し、明治三十二年再び來朝して「國民英語雜誌」を發行して、英語普及を來朝した。時人博覽博士と稱した。明治三十八年没。(一八五五)

イゼル (Isère) (名) 東嶺、黄板を立てかける嶺

いそごい (いそごい) (名) 言損 (名) いひあつまり

いそごい (いそごい) (名) 言損 (名) いひあつまり

いそごい (いそごい) (名) 言損 (名) いひあつまり

いそごい (いそごい) (名) 言損 (名) いひあつまり

いそごい (いそごい) (名) 言損 (名) いひあつまり

いそごい (いそごい) (名) 言損 (名) いひあつまり

いそごい (いそごい) (名) 言損 (名) いひあつまり

いそごい (いそごい) (名) 言損 (名) いひあつまり

いそごい (いそごい) (名) 言損 (名) いひあつまり

いそごい (いそごい) (名) 言損 (名) いひあつまり

いそごい (いそごい) (名) 言損 (名) いひあつまり

いそごい (いそごい) (名) 言損 (名) いひあつまり

いそごい (いそごい) (名) 言損 (名) いひあつまり

いそごい (いそごい) (名) 言損 (名) いひあつまり

いそごい (いそごい) (名) 言損 (名) いひあつまり

いそごい (いそごい) (名) 言損 (名) いひあつまり

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。



〔繪〕

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

いひよせる。いひよます。

奉侍の重臣、彦根の城主、直中の子、幼名殿之介、又、
 總三郎、掃部頭と稱す。安政五年大老となり、外交の
 事に當り、繼續問題を定めて紀伊家から家茂(仁)を
 迎へ、反對黨を開閉、殺戮したので、水戸浪士の爲萬延
 元年(二二〇)藤田門外に殺された。年四十六。
いひなか「好仲」(名)。「おなかのよいこと。」男女
 の互にすまざること。「いひずつてゐる。」
いひながし「言流」(名)。「いひふらすること。」
いひながす「言流す」(他動)。「サ四」
 「いひふら。」
いひなし「言」(名)。「いひなすこと。」とり
 なす。「いひなし。」
いひなしし「言」(名)。「飯無節」(名)。「魚肉を酔につ
 けておこなう飯なしの節。」
いひなす「言」(他動)。「サ四」
 「いひなす。」
いひなすけ「許嫁」(名)。「許嫁」(名)。「幼少の時
 から婚約すること。」又、その人。
いひなやむ「言」(他動)。「サ四」
いひならわし「言習」(名)。「いひつたへ。」
いひなく。
いひならわす「言習はす」(他動)。「サ四」(他
 動)。「言習はす」といひ傳へる。「口辭にいふ。」
いひなり「言」(名)。「いひがまになら。」
いひなぼう「言」(名)。「三寶」(名)。「いふ
 ことに。」
いひなる「言」(名)。「いふがまになら。」
いひなれる「言」(名)。「いふがまになら。」
いひにくだ「言」(名)。「いふがまになら。」
いひにくし「言」(名)。「いふがまになら。」
いひにくむ「言」(名)。「いふがまになら。」

あしざまだいふ (古語)
いひぬける「言」(名)。「いひぬけること。」遊辭。
いひぬける「言」(名)。「責任をぬける。」(他
 動)。「力下」口實を脱けて責任をぬける。
いひねう「言」(名)。「賣り手のいふ値段。」
いひのがる「言」(名)。「言通れる。」(他動、
 力下)。「いひぬける。」
いひのがれる「言」(名)。「いひのがれること。」
いひのがれる「言」(名)。「言通れる。」
いひのぶ「言」(名)。「言退く。」(他動)。「力下」
いひのえ「言」(名)。「言退く。」(他動)。「力下」
いひのけ「言」(名)。「いひのくこと。」
いひのこす「言」(名)。「言残す。」(他動)。「サ
 四」。「いひなげればならぬことをいひないで止める。
 ④後にはひおく。」
いひのこる「言」(名)。「言残る。」(自動)。「ラ
 四」。「いひなげること。」
いひのける「言」(名)。「言罵る。」(他動)。「ラ
 四」。「いひなげること。」
いひのぶら「言」(名)。「言延ぶ。」(他動)。「力下」
いひはぐらす「言」(名)。「言捨らす。」(他
 動)。「サ四」。「いひなげること。」
いひはげます「言」(名)。「言勤ます。」(他動)。
 「サ四」。「調て勤むこと。」
いひはじむ「言」(名)。「言始む。」(他動)。
 「力下」。「いひの出す。」
いひはす「言」(名)。「言外す。」(他動)。「サ四」
いひはつ「言」(名)。「言果す。」(他動)。「力下」
いひはなす「言」(名)。「言放す。」(他動)。「サ四」

いひはなつ「言」(名)。「言放つ。」(他動)。「タ四」
 思つたことを遂げなくいふ。斷言す。
いひはやす「言」(名)。「言嘯す。」(他動)。「サ四」
いひはて「言」(名)。「いひはて。」
いひはたる「言」(名)。「言張る。」(他動)。「ラ四」思
 ふ事を胸まで通らすこと。主張す。
いひひつ「飯」(名)。「いひひつ。」
いひひら「言」(名)。「言開く。」
いひひらき「言」(名)。「言開く。」
いひひらく「言」(名)。「言開く。」(他動)。「カ四」
いひひろ「言」(名)。「言廣く。」(他動)。
いひひろがる「言」(名)。「言廣く。」(他動)。
いひひろける「言」(名)。「言廣く。」(他動)。「ガ下」
いひひろむ「言」(名)。「言廣く。」(他動)。
いひひろめる「言」(名)。「言廣く。」(他動)。「力下」
いひひろむ「言」(名)。「言廣く。」(他動)。「力下」
いひひろむ「言」(名)。「言廣く。」(他動)。「力下」
いひひろむ「言」(名)。「言廣く。」(他動)。「力下」
いひひろむ「言」(名)。「言廣く。」(他動)。「力下」
いひひろむ「言」(名)。「言廣く。」(他動)。「力下」

いひふる「言」(名)。「言奮す。」(他動)。「サ四」
 いひ憤れて疹しくいふやうになる。「口辭にいふ。」
いひふれざ「言」(名)。「言觸れる。」(他動)。「力下」
いひふれる「言」(名)。「言觸れる。」(他動)。「力下」
いひふら「言」(名)。「いひふら。」
いひふらさ「言」(名)。「言觸れる。」(他動)。「力下」
いひふらす「言」(名)。「言觸れる。」(他動)。「力下」
いひふらし「言」(名)。「言觸れる。」(他動)。「力下」
いひふらす「言」(名)。「言觸れる。」(他動)。「力下」
いひふらし「言」(名)。「言觸れる。」(他動)。「力下」
いひふらし「言」(名)。「言觸れる。」(他動)。「力下」
いひふらし「言」(名)。「言觸れる。」(他動)。「力下」

いしづけつ 石井露月(名) 八明治時代の俳人。秋田縣の人。その句は、漢語を驅使して堂々たる格調の中に、飄忽の味があり、俳句と人生の交歩を明らかにした。昭和三年(二五八八)歿。年五十六。『露月集』の著者。

いしづち 石(名) 石でつたもの。いげい(石白藪)名 藪は多いが、秀でたものない。いしづち(石打)名 小石を互に投合ふ遊戯。

いしづち 石打(名) 小石を互に投合ふ遊戯。結婚の夜、近所のものなどがその家中に小石を投込む習俗。いしづち(石打)名 小石を互に投合ふ遊戯。結婚の夜、近所のものなどがその家中に小石を投込む習俗。大將軍の用ひたもの。いしづち(石打)名 藪の尾羽の羽の羽。極めて強いから、矢の羽として参差する。いしづち(石打)名 石打の征矢を入れたるやなぎ。

いしづら 石占(名) 占の法。石の大小、軽重等により占ふ。いしづら(石占)名 占の法。石の大小、軽重等により占ふ。いしづら(石占)名 占の法。石の大小、軽重等により占ふ。

いしづら 石占(名) 占の法。石の大小、軽重等により占ふ。いしづら(石占)名 占の法。石の大小、軽重等により占ふ。

いしづら 石占(名) 占の法。石の大小、軽重等により占ふ。いしづら(石占)名 占の法。石の大小、軽重等により占ふ。

いしづら 石占(名) 占の法。石の大小、軽重等により占ふ。いしづら(石占)名 占の法。石の大小、軽重等により占ふ。

いしづら 石占(名) 占の法。石の大小、軽重等により占ふ。いしづら(石占)名 占の法。石の大小、軽重等により占ふ。

いしづら 石占(名) 占の法。石の大小、軽重等により占ふ。いしづら(石占)名 占の法。石の大小、軽重等により占ふ。

いしづら 石占(名) 占の法。石の大小、軽重等により占ふ。いしづら(石占)名 占の法。石の大小、軽重等により占ふ。

いしづら 石占(名) 占の法。石の大小、軽重等により占ふ。いしづら(石占)名 占の法。石の大小、軽重等により占ふ。

いしづら 石占(名) 占の法。石の大小、軽重等により占ふ。いしづら(石占)名 占の法。石の大小、軽重等により占ふ。

いしかべ (石壁) (名) 建 石材をセメントモルタル等の接合材で接合して積重ねて造つた壁。いしかみ (石神) (名) 奇石。積石。石。刻の類を神體として祭つた民間信仰の神。いしがみ (石龜水龜) (名) 動 石龜科の龜類。背甲平たく中央に一本の鈍い縦走線がある。口大きく齒なく、四肢共に五本づつ趾を有し、腹が有す。背甲は暗褐色、腹面は黒色。本邦の特産で淡水に棲む。いしぢんだん (名) 自分の力を顧みないで、人のする事をまねようとするのできないことの譬。

いしかりがわ (石狩川) (名) 地 北海道五大川の1。源を石狩嶺に發し、石狩平野を貫流して石狩灣に注ぐ。信濃川に次いで我が國第二の長流とせられる。長さ三七〇軒。いしがれい (石鱗) (名) 軟鰭類の魚。形は普通の鱗に似、兩眼は其の右側面にある。全體暗灰色又は淡褐色。體長約〇〇釐。浅い砂泥の海底に棲息する。

いしかわがほら (石川) (名) 地 石川の別稱。いしかわこえもん (石川五右衛門) (名) 大 三好氏の家臣石川明石の子といふ。文祿三年豊臣秀吉に捕へられ油を以て煮殺された。年三十七。其の傳記には異説あり。

いしかわがほら (石川) (名) 地 石川の別稱。いしかわこえもん (石川五右衛門) (名) 大 三好氏の家臣石川明石の子といふ。文祿三年豊臣秀吉に捕へられ油を以て煮殺された。年三十七。其の傳記には異説あり。

いしかわがほら (石川) (名) 地 石川の別稱。いしかわこえもん (石川五右衛門) (名) 大 三好氏の家臣石川明石の子といふ。文祿三年豊臣秀吉に捕へられ油を以て煮殺された。年三十七。其の傳記には異説あり。

いしかわがほら (石川) (名) 地 石川の別稱。いしかわこえもん (石川五右衛門) (名) 大 三好氏の家臣石川明石の子といふ。文祿三年豊臣秀吉に捕へられ油を以て煮殺された。年三十七。其の傳記には異説あり。

いしかわがほら (石川) (名) 地 石川の別稱。いしかわこえもん (石川五右衛門) (名) 大 三好氏の家臣石川明石の子といふ。文祿三年豊臣秀吉に捕へられ油を以て煮殺された。年三十七。其の傳記には異説あり。

いしかわがほら (石川) (名) 地 石川の別稱。いしかわこえもん (石川五右衛門) (名) 大 三好氏の家臣石川明石の子といふ。文祿三年豊臣秀吉に捕へられ油を以て煮殺された。年三十七。其の傳記には異説あり。

いしかわがほら (石川) (名) 地 石川の別稱。いしかわこえもん (石川五右衛門) (名) 大 三好氏の家臣石川明石の子といふ。文祿三年豊臣秀吉に捕へられ油を以て煮殺された。年三十七。其の傳記には異説あり。

いしかわがほら (石川) (名) 地 石川の別稱。いしかわこえもん (石川五右衛門) (名) 大 三好氏の家臣石川明石の子といふ。文祿三年豊臣秀吉に捕へられ油を以て煮殺された。年三十七。其の傳記には異説あり。

いしかわがほら (石川) (名) 地 石川の別稱。いしかわこえもん (石川五右衛門) (名) 大 三好氏の家臣石川明石の子といふ。文祿三年豊臣秀吉に捕へられ油を以て煮殺された。年三十七。其の傳記には異説あり。

いしかわがほら (石川) (名) 地 石川の別稱。いしかわこえもん (石川五右衛門) (名) 大 三好氏の家臣石川明石の子といふ。文祿三年豊臣秀吉に捕へられ油を以て煮殺された。年三十七。其の傳記には異説あり。

いしかわまさち (石川雅望) (名) 八 明治時代の歌人。名は一(一)石。若手縣の人。獨特の口語の發想に依る新しい生活に即した短歌を作つて、若い歌人の共鳴を得た。明治四十五年(二五七二)歿。年二十七。著に歌集「一握の砂」(悲しき玩具)等がある。

いしき意識 (名) 心の覺醒してある時の心の状態。分別の心。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。

いしき意識 (名) 心の覺醒してある時の心の状態。分別の心。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。

いしき意識 (名) 心の覺醒してある時の心の状態。分別の心。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。

いしき意識 (名) 心の覺醒してある時の心の状態。分別の心。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。

いしき意識 (名) 心の覺醒してある時の心の状態。分別の心。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。

いしき意識 (名) 心の覺醒してある時の心の状態。分別の心。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。

いしき意識 (名) 心の覺醒してある時の心の状態。分別の心。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。

いしき意識 (名) 心の覺醒してある時の心の状態。分別の心。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。

いしき意識 (名) 心の覺醒してある時の心の状態。分別の心。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。

いしき意識 (名) 心の覺醒してある時の心の状態。分別の心。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。

いしき意識 (名) 心の覺醒してある時の心の状態。分別の心。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。いしき意識 (名) 佛八識の一。眼、耳、鼻、舌、身、意。

いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。

いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。

いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。

いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。

いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。

いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。

いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。

いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。

いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。

いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。

いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。

いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。いしくら (石蔵) (名) 石を積み重ねて造つた。

(西にあった泉忌部)の居城。一どの(泉殿)(名) 跡殿造の一部。約殿と相對して、間に渡廊があった。突きだして設けた家で、相對して、間に渡廊があった。
いずみいし いづみ(和泉石)(名) 鑿(大阪府泉南郡下莊村附近から産出する石材。青緑色を帯び、石理脈を石碑などに用いる。)
いずみしきぶ いづみ(和泉式部)(名) (人) 歌入。明愛五歌仙の一人。大江雅致の女。和泉守播磨直良の妻。直良の没後、上東門院に仕へ、冷泉天皇の皇子爲尊親王、教通親王の寵を受け、再び藤原保昌に嫁して丹後に下つた。一いつき(和泉式部日記)(名) [文] 一條天皇の長保五年四月から寛弘元年正月までの和泉式部日記。
いづみ(名) 主妻。理學。

いづもうら いづ(居相撲)(名) (すわり) すし。
いづもろ いづ(出雲牛)(名) 動(出雲地方に産出する牛。毛色は普通黒色で體軀小、我が國固有の牛種で、役牛とする。)
いづもがな いづ(出雲假名)(名) ひらがな平假名。
いづもぐすり いづ(出雲薬)(名) 江戸時代に、出雲大社から製出せられた丸薬で、小兒の疳積の薬。
いづもぐつ いづ(出雲書)(名) 明治出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。

いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。
いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。
いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。
いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。
いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。
いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。

いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。
いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。
いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。
いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。
いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。
いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。

いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。
いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。
いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。
いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。
いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。
いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。

いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。
いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。
いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。
いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。
いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。
いづもさき いづ(田雲書)(名) 明珍出雲守紀。宗介の作り始めた十文字書。

女であった。慶長十八年(二七三)八十七歳で歿したといふ。
いづものかみ いづ(出雲神)(名) 神えんむすびのかみ。出雲大社の神は人の結婚を支配せられるといふ俗傳による。
いづものくにのみやつこ いづ(出雲國造)(名) 出雲國を統治した職。天孫比呂の後裔。後千家、北島に分れた。一のかんよと(出雲國造神壽詞)(名) [文] 出雲國造が新任した時朝廷に奏する大御代を祝する詞。
いづもふと いづ(出雲風土記)(名) [文] 元明天皇の和銅六年(一七三)諸國に勅して作らされた風土記の一、出雲國九郡の物産、地勢、名稱等の由来、傳説等を述べた書。一巻。天乎五年成。今から二百餘年前前に松江に起つた。
いづもやき いづ(出雲焼)(名) 出雲國から産出する陶器。樂山(行)焼(志志名)焼との總稱。今から二百餘年前前に松江に起つた。

いづら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)

いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)

いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)

いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)

いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)
いずら いづ(何ら)(代) どの。いづれ。(全語)

いずわり いづ(居坐)(名) ①あむる。こも。②相場や人の地位がそのままで變動せぬこと。③いすわる。いす(居坐)の(自動)ラ四。④坐して動かぬ。⑤そのままで動かぬ。相場や人の地位がそのままで變動しない。ぬひしめ。
いせ(五十瀬) (名) 多くの瀬(古語)
いせ伊勢 (名) 國名。伊勢大神宮の略。一の御師(名) 伊勢大神宮の神職の身分低き者。一の御田植(名) 伊勢大神宮の神田に苗を植ふる五月廿三日の式。一の神垣(名) 伊勢神宮。⑤皇后御座の時、守護する人。⑥夕餞の時、産婦のよりかきかき酒。一の御縁日(名) 伊勢大神宮の御祭日十二月十六日。二(名) 内宮と外宮。一の物語(名) 間違つたことを話すこと。(古語)
いせ伊勢 (名) (人) 歌。伊勢守藤原繼隆の女。宇多天皇に寵されて行明親王を生む。伊勢の御と稱せられた。後、教隆親王に嫁して中務(名)を生む。三(名) 歌仙の一人。天慶二年(五九九)歿。家集に伊勢集がある。
いせあみ いせ伊勢編笠(名) 伊勢國から産する編笠。
いせい (異性)(名) 性質の異なること。又そのもの。①男女、雌雄の性の異なること。又そのもの。②男性から女性、女性から男性にさしていふ語。③化(名) の分子より、性、しかも其の性質の異なること。一たい(異性體)(名) 化(名) の分子式を有して、異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。

いせい (異性)(名) 性質の異なること。又そのもの。①男女、雌雄の性の異なること。又そのもの。②男性から女性、女性から男性にさしていふ語。③化(名) の分子より、性、しかも其の性質の異なること。一たい(異性體)(名) 化(名) の分子式を有して、異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。

いせい (異性)(名) 性質の異なること。又そのもの。①男女、雌雄の性の異なること。又そのもの。②男性から女性、女性から男性にさしていふ語。③化(名) の分子より、性、しかも其の性質の異なること。一たい(異性體)(名) 化(名) の分子式を有して、異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。

いせい (異性)(名) 性質の異なること。又そのもの。①男女、雌雄の性の異なること。又そのもの。②男性から女性、女性から男性にさしていふ語。③化(名) の分子より、性、しかも其の性質の異なること。一たい(異性體)(名) 化(名) の分子式を有して、異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。

いせい (異性)(名) 性質の異なること。又そのもの。①男女、雌雄の性の異なること。又そのもの。②男性から女性、女性から男性にさしていふ語。③化(名) の分子より、性、しかも其の性質の異なること。一たい(異性體)(名) 化(名) の分子式を有して、異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。

いせい (異性)(名) 性質の異なること。又そのもの。①男女、雌雄の性の異なること。又そのもの。②男性から女性、女性から男性にさしていふ語。③化(名) の分子より、性、しかも其の性質の異なること。一たい(異性體)(名) 化(名) の分子式を有して、異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。
いせい (異姓)(名) 異なる性質を有する物質。

いせえび (伊勢蝦伊勢海老龍蝦)(名) ①蝦の一種。形大きく、大なるものは三〇〇體位に達する。全身黒色又は暗紫褐色の堅皮革を有し、大なる尾を具し、眼は有柄覆眼で露出し、二對の觸角と五對の脚がある。肉味佳良。かまくらえび。しまえび。
いせおしろい (伊勢白粉)(名) 昔、伊勢國から産したおしろい。はち(水)銀粉。
いせおとり (伊勢踊)(名) 伊勢音頭にあはせるおとり。いせおとり。
いせおんど (伊勢音頭)(名) 俗語。伊勢國度會郡古市で歌つたもの。間山郡から出たもの。古市の近傍川崎の地名から川崎音頭ともいふ。いせおどり。
いせかり (伊勢替)(名) いせおんどと伊せき(射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。

いせえび (伊勢蝦伊勢海老龍蝦)(名) ①蝦の一種。形大きく、大なるものは三〇〇體位に達する。全身黒色又は暗紫褐色の堅皮革を有し、大なる尾を具し、眼は有柄覆眼で露出し、二對の觸角と五對の脚がある。肉味佳良。かまくらえび。しまえび。
いせおしろい (伊勢白粉)(名) 昔、伊勢國から産したおしろい。はち(水)銀粉。
いせおとり (伊勢踊)(名) 伊勢音頭にあはせるおとり。いせおとり。
いせおんど (伊勢音頭)(名) 俗語。伊勢國度會郡古市で歌つたもの。間山郡から出たもの。古市の近傍川崎の地名から川崎音頭ともいふ。いせおどり。
いせかり (伊勢替)(名) いせおんどと伊せき(射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。

いせえび (伊勢蝦伊勢海老龍蝦)(名) ①蝦の一種。形大きく、大なるものは三〇〇體位に達する。全身黒色又は暗紫褐色の堅皮革を有し、大なる尾を具し、眼は有柄覆眼で露出し、二對の觸角と五對の脚がある。肉味佳良。かまくらえび。しまえび。
いせおしろい (伊勢白粉)(名) 昔、伊勢國から産したおしろい。はち(水)銀粉。
いせおとり (伊勢踊)(名) 伊勢音頭にあはせるおとり。いせおとり。
いせおんど (伊勢音頭)(名) 俗語。伊勢國度會郡古市で歌つたもの。間山郡から出たもの。古市の近傍川崎の地名から川崎音頭ともいふ。いせおどり。
いせかり (伊勢替)(名) いせおんどと伊せき(射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。

いせえび (伊勢蝦伊勢海老龍蝦)(名) ①蝦の一種。形大きく、大なるものは三〇〇體位に達する。全身黒色又は暗紫褐色の堅皮革を有し、大なる尾を具し、眼は有柄覆眼で露出し、二對の觸角と五對の脚がある。肉味佳良。かまくらえび。しまえび。
いせおしろい (伊勢白粉)(名) 昔、伊勢國から産したおしろい。はち(水)銀粉。
いせおとり (伊勢踊)(名) 伊勢音頭にあはせるおとり。いせおとり。
いせおんど (伊勢音頭)(名) 俗語。伊勢國度會郡古市で歌つたもの。間山郡から出たもの。古市の近傍川崎の地名から川崎音頭ともいふ。いせおどり。
いせかり (伊勢替)(名) いせおんどと伊せき(射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。

いせえび (伊勢蝦伊勢海老龍蝦)(名) ①蝦の一種。形大きく、大なるものは三〇〇體位に達する。全身黒色又は暗紫褐色の堅皮革を有し、大なる尾を具し、眼は有柄覆眼で露出し、二對の觸角と五對の脚がある。肉味佳良。かまくらえび。しまえび。
いせおしろい (伊勢白粉)(名) 昔、伊勢國から産したおしろい。はち(水)銀粉。
いせおとり (伊勢踊)(名) 伊勢音頭にあはせるおとり。いせおとり。
いせおんど (伊勢音頭)(名) 俗語。伊勢國度會郡古市で歌つたもの。間山郡から出たもの。古市の近傍川崎の地名から川崎音頭ともいふ。いせおどり。
いせかり (伊勢替)(名) いせおんどと伊せき(射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。

いせえび (伊勢蝦伊勢海老龍蝦)(名) ①蝦の一種。形大きく、大なるものは三〇〇體位に達する。全身黒色又は暗紫褐色の堅皮革を有し、大なる尾を具し、眼は有柄覆眼で露出し、二對の觸角と五對の脚がある。肉味佳良。かまくらえび。しまえび。
いせおしろい (伊勢白粉)(名) 昔、伊勢國から産したおしろい。はち(水)銀粉。
いせおとり (伊勢踊)(名) 伊勢音頭にあはせるおとり。いせおとり。
いせおんど (伊勢音頭)(名) 俗語。伊勢國度會郡古市で歌つたもの。間山郡から出たもの。古市の近傍川崎の地名から川崎音頭ともいふ。いせおどり。
いせかり (伊勢替)(名) いせおんどと伊せき(射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。
いせき (射席)(名) 射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用いる。



[びえせい]

間に自生し、地下茎から線形全縁の葉を叢生する。春夏の狭葉間から低い花茎を出し、その頂に頭花を單生する。花は白色又は紅色で、専ら乾質、漏斗形、五裂で、外面は多毛、宿存性。

いそまづかぜ(磯松風)(名)メリケン粉に砂糖を混ぜ、ふくらし粉を加えて蒸し、適宜に切り、紫蘇の粉末をふりかけた菓子。

いそめ(磯蚯蚓)(名)動植物類の小動物。體長約三〇釐、全體黄赤色で、光澤を有し、數多の環節より成る。海岸の砂泥中に棲息す。釣餌とする。

いそめく(いそけり)(自動)カ四いそがしいやうである。(古語)。

いそめばる(名)動(い)お(磯魚)。

いそもく(名)楊柳類の海濱種は黒褐色、長さ一〇釐乃至六〇釐、葉片は長方形、枝の軸は圓く、ほんだらに似軸の梢部に倒卵形の氣節を有する。

いそもし(急文字)(名)いそがしい。(婦人語)。

いそもと(磯許)(名)磯の波うちきは、いそげ、いそもと(磯本)(名)磯の波うちきは。(古語)。

いそもな(磯最中)(名)外皮を貝形に焼いて、中に羊羹又は餡を入れたもの。

いそも(磯物)(名)海草。海藻。

いそや(磯屋)(名)海岸にある家。いそやが。いそやがた(磯籠)(名)メリケン粉に砂糖、醤油を加へて練った後、胡麻油をひいた鍋の上で焼いて、餡を包んで四つに疊んだもの。

いた(板)(名)材木を薄く平たく挽きわたしたもの。①金屋又は石など薄く平たくしたもの。②板敷の略。③板物の略。まいた(組)の略。④かまぼこ。

いた(板敷)副(名)板敷の略。いた(板敷)名(板敷)の略。いた(板敷)名(板敷)の略。

いた(板敷)名(板敷)の略。いた(板敷)名(板敷)の略。

いた(板敷)名(板敷)の略。いた(板敷)名(板敷)の略。

いた(板敷)名(板敷)の略。いた(板敷)名(板敷)の略。

いた(板敷)名(板敷)の略。いた(板敷)名(板敷)の略。

いた(板敷)名(板敷)の略。いた(板敷)名(板敷)の略。

いた(板敷)名(板敷)の略。いた(板敷)名(板敷)の略。

いた(板敷)名(板敷)の略。いた(板敷)名(板敷)の略。

いた(板敷)名(板敷)の略。いた(板敷)名(板敷)の略。

いた(板敷)名(板敷)の略。いた(板敷)名(板敷)の略。

いたおろき(板屋)(名)薄い板を敷いて縁で敷った庭。疊まを防ぎ又、婦人が顔を隠す爲に用ひた。楡屋の類。

いた(板屋)名(板屋)の略。いた(板屋)名(板屋)の略。

いた(板屋)名(板屋)の略。いた(板屋)名(板屋)の略。

いた(板屋)名(板屋)の略。いた(板屋)名(板屋)の略。

いた(板屋)名(板屋)の略。いた(板屋)名(板屋)の略。

いた(板屋)名(板屋)の略。いた(板屋)名(板屋)の略。

いた(板屋)名(板屋)の略。いた(板屋)名(板屋)の略。

いた(板屋)名(板屋)の略。いた(板屋)名(板屋)の略。

いた(板屋)名(板屋)の略。いた(板屋)名(板屋)の略。

いた(板屋)名(板屋)の略。いた(板屋)名(板屋)の略。

いた(板屋)名(板屋)の略。いた(板屋)名(板屋)の略。

いたく(依託)(名)たのむこと。たのむこと。①委ねる。②預けること。③たのむこと。④たのむこと。⑤たのむこと。⑥たのむこと。⑦たのむこと。⑧たのむこと。⑨たのむこと。⑩たのむこと。⑪たのむこと。⑫たのむこと。⑬たのむこと。⑭たのむこと。⑮たのむこと。⑯たのむこと。⑰たのむこと。⑱たのむこと。⑲たのむこと。⑳たのむこと。㉑たのむこと。㉒たのむこと。㉓たのむこと。㉔たのむこと。㉕たのむこと。㉖たのむこと。㉗たのむこと。㉘たのむこと。㉙たのむこと。㉚たのむこと。㉛たのむこと。㉜たのむこと。㉝たのむこと。㉞たのむこと。㉟たのむこと。㊱たのむこと。㊲たのむこと。㊳たのむこと。㊴たのむこと。㊵たのむこと。㊶たのむこと。㊷たのむこと。㊸たのむこと。㊹たのむこと。㊺たのむこと。㊻たのむこと。㊼たのむこと。㊽たのむこと。㊾たのむこと。㊿たのむこと。

いたく(依託)名(依託)の略。いたく(依託)名(依託)の略。

いたく(依託)名(依託)の略。いたく(依託)名(依託)の略。

いたく(依託)名(依託)の略。いたく(依託)名(依託)の略。

いたく(依託)名(依託)の略。いたく(依託)名(依託)の略。

いたく(依託)名(依託)の略。いたく(依託)名(依託)の略。

いたく(依託)名(依託)の略。いたく(依託)名(依託)の略。

いたく(依託)名(依託)の略。いたく(依託)名(依託)の略。

いたく(依託)名(依託)の略。いたく(依託)名(依託)の略。

いたく(依託)名(依託)の略。いたく(依託)名(依託)の略。

いたく(依託)名(依託)の略。いたく(依託)名(依託)の略。

接した板の木理や種類を交互に異ならしめること。
いたちほり [買置板] (名) 地 大阪市西區新町の遊郭の北方の川を立置板といふ。その川岸の通りを立置板といふ。

いたつ (遺脱) (名) ぬけること。おちまて。
いたつ (遺脱) (名) ぬけること。おちまて。
いたつ (遺脱) (名) ぬけること。おちまて。
いたつ (遺脱) (名) ぬけること。おちまて。

いたつき (平題附) (名) 角木。鐵釘はよく透つた。小さくて鉄のところがぬれぬ。号術の練習用にするもの。
いたつき (板附) (名) 佛儀が舞臺に出ること。その舞臺。又、その佛儀。

いたつけ (板附) (名) 長さ五分の釘。
いたつけ (板附) (名) 長さ五分の釘。
いたつけ (板附) (名) 長さ五分の釘。
いたつけ (板附) (名) 長さ五分の釘。

いたて (痛手) (名) 重い手き。ふかて。おしで。
いたて (痛手) (名) 重い手き。ふかて。おしで。
いたて (痛手) (名) 重い手き。ふかて。おしで。
いたて (痛手) (名) 重い手き。ふかて。おしで。

いたど (板戸) (名) 板張の戸。
いたど (板戸) (名) 板張の戸。
いたど (板戸) (名) 板張の戸。
いたど (板戸) (名) 板張の戸。

いたど (板戸) (名) 板張の戸。
いたど (板戸) (名) 板張の戸。
いたど (板戸) (名) 板張の戸。
いたど (板戸) (名) 板張の戸。

いたど (板戸) (名) 板張の戸。
いたど (板戸) (名) 板張の戸。
いたど (板戸) (名) 板張の戸。
いたど (板戸) (名) 板張の戸。

いたのま (板間) (名) 疊を敷かないで、板を敷いた所。一かせき (板間控) (名) 湯屋で、人の所有品を置くところ。又、その人。
いたのま (板間) (名) 疊を敷かないで、板を敷いた所。一かせき (板間控) (名) 湯屋で、人の所有品を置くところ。又、その人。

いたは (板場) (名) 料理屋では組を置く處。菓子屋ではの板を置く處。又、料理人菓子製造の職人。
いたは (板場) (名) 料理屋では組を置く處。菓子屋ではの板を置く處。又、料理人菓子製造の職人。

いたは (板橋) (名) 板の橋。 (東京市北都の一隅) 青森羽越電車が通過する。昔の中仙道の一部にあり。現に陸軍火藥製造所がある。
いたは (板橋) (名) 板の橋。 (東京市北都の一隅) 青森羽越電車が通過する。昔の中仙道の一部にあり。現に陸軍火藥製造所がある。

いたは (板橋) (名) 板の橋。 (東京市北都の一隅) 青森羽越電車が通過する。昔の中仙道の一部にあり。現に陸軍火藥製造所がある。
いたは (板橋) (名) 板の橋。 (東京市北都の一隅) 青森羽越電車が通過する。昔の中仙道の一部にあり。現に陸軍火藥製造所がある。

いたは (板橋) (名) 板の橋。 (東京市北都の一隅) 青森羽越電車が通過する。昔の中仙道の一部にあり。現に陸軍火藥製造所がある。
いたは (板橋) (名) 板の橋。 (東京市北都の一隅) 青森羽越電車が通過する。昔の中仙道の一部にあり。現に陸軍火藥製造所がある。

いたは (板橋) (名) 板の橋。 (東京市北都の一隅) 青森羽越電車が通過する。昔の中仙道の一部にあり。現に陸軍火藥製造所がある。
いたは (板橋) (名) 板の橋。 (東京市北都の一隅) 青森羽越電車が通過する。昔の中仙道の一部にあり。現に陸軍火藥製造所がある。

いたは (板橋) (名) 板の橋。 (東京市北都の一隅) 青森羽越電車が通過する。昔の中仙道の一部にあり。現に陸軍火藥製造所がある。
いたは (板橋) (名) 板の橋。 (東京市北都の一隅) 青森羽越電車が通過する。昔の中仙道の一部にあり。現に陸軍火藥製造所がある。

いたは (板橋) (名) 板の橋。 (東京市北都の一隅) 青森羽越電車が通過する。昔の中仙道の一部にあり。現に陸軍火藥製造所がある。
いたは (板橋) (名) 板の橋。 (東京市北都の一隅) 青森羽越電車が通過する。昔の中仙道の一部にあり。現に陸軍火藥製造所がある。



【評板】

いたぶ (傷ぶ) (自動) (四) いたましく思ふ。深く悲しむ。いたむ (全語)。
いたぶ (傷ぶ) (自動) (四) いたましく思ふ。深く悲しむ。いたむ (全語)。

いたぶ (傷ぶ) (自動) (四) いたましく思ふ。深く悲しむ。いたむ (全語)。
いたぶ (傷ぶ) (自動) (四) いたましく思ふ。深く悲しむ。いたむ (全語)。

いたぶ (傷ぶ) (自動) (四) いたましく思ふ。深く悲しむ。いたむ (全語)。
いたぶ (傷ぶ) (自動) (四) いたましく思ふ。深く悲しむ。いたむ (全語)。

いたぶ (傷ぶ) (自動) (四) いたましく思ふ。深く悲しむ。いたむ (全語)。
いたぶ (傷ぶ) (自動) (四) いたましく思ふ。深く悲しむ。いたむ (全語)。

いたぶ (傷ぶ) (自動) (四) いたましく思ふ。深く悲しむ。いたむ (全語)。
いたぶ (傷ぶ) (自動) (四) いたましく思ふ。深く悲しむ。いたむ (全語)。

いたぶ (傷ぶ) (自動) (四) いたましく思ふ。深く悲しむ。いたむ (全語)。
いたぶ (傷ぶ) (自動) (四) いたましく思ふ。深く悲しむ。いたむ (全語)。

いたぶ (傷ぶ) (自動) (四) いたましく思ふ。深く悲しむ。いたむ (全語)。
いたぶ (傷ぶ) (自動) (四) いたましく思ふ。深く悲しむ。いたむ (全語)。

いたぶ (傷ぶ) (自動) (四) いたましく思ふ。深く悲しむ。いたむ (全語)。
いたぶ (傷ぶ) (自動) (四) いたましく思ふ。深く悲しむ。いたむ (全語)。

いたむ (痛む) (名) 痛む所。痛い場所。わけ (痛分) (名) 相撲で取組中、一方が負傷した爲に分けとなること。
いたむ (痛む) (名) 痛む所。痛い場所。わけ (痛分) (名) 相撲で取組中、一方が負傷した爲に分けとなること。

いたむ (痛む) (名) 痛む所。痛い場所。わけ (痛分) (名) 相撲で取組中、一方が負傷した爲に分けとなること。
いたむ (痛む) (名) 痛む所。痛い場所。わけ (痛分) (名) 相撲で取組中、一方が負傷した爲に分けとなること。

いたむ (痛む) (名) 痛む所。痛い場所。わけ (痛分) (名) 相撲で取組中、一方が負傷した爲に分けとなること。
いたむ (痛む) (名) 痛む所。痛い場所。わけ (痛分) (名) 相撲で取組中、一方が負傷した爲に分けとなること。

いたむ (痛む) (名) 痛む所。痛い場所。わけ (痛分) (名) 相撲で取組中、一方が負傷した爲に分けとなること。
いたむ (痛む) (名) 痛む所。痛い場所。わけ (痛分) (名) 相撲で取組中、一方が負傷した爲に分けとなること。

いたむ (痛む) (名) 痛む所。痛い場所。わけ (痛分) (名) 相撲で取組中、一方が負傷した爲に分けとなること。
いたむ (痛む) (名) 痛む所。痛い場所。わけ (痛分) (名) 相撲で取組中、一方が負傷した爲に分けとなること。

いたむ (痛む) (名) 痛む所。痛い場所。わけ (痛分) (名) 相撲で取組中、一方が負傷した爲に分けとなること。
いたむ (痛む) (名) 痛む所。痛い場所。わけ (痛分) (名) 相撲で取組中、一方が負傷した爲に分けとなること。

いたむ (痛む) (名) 痛む所。痛い場所。わけ (痛分) (名) 相撲で取組中、一方が負傷した爲に分けとなること。
いたむ (痛む) (名) 痛む所。痛い場所。わけ (痛分) (名) 相撲で取組中、一方が負傷した爲に分けとなること。

いたむ (痛む) (名) 痛む所。痛い場所。わけ (痛分) (名) 相撲で取組中、一方が負傷した爲に分けとなること。
いたむ (痛む) (名) 痛む所。痛い場所。わけ (痛分) (名) 相撲で取組中、一方が負傷した爲に分けとなること。



【目板】

【外にある鳥居】

いちのとりゆ 一鳥居(名)神社の一番

いちのひと 一人(名)攝政關白の異稱。

いちのみや 一宮(名)第一番目の皇子。

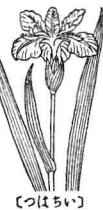
いちのみや 一宮(名)第一の皇子。いちのみや。自稱我が國の各國中の由緒ある神社、其の國の第一位のもの。

いちのみや 一宮市(名)地愛知縣の西北部にある機業都市。毛織物の産で名高い。

いちば 市場(名)屋毎日若しくは定期に商人が集まって、賣買を行ふ所。

いちばつ 賈買(名)一八・紫羅傘(名)植蓄番(名)科の多年生

草本。支那の原産葉は劍狀で、高さ三〇釐ばかりひあふぎ(射干)に似てる。



〔つばい〕

花はかまつばに似て、紫色、稀に白色。花蓋の外列の片上には、細裂した突起がある。

いちばなける 一着(名)一番最初に着ける。

いちばなて 一着(名)著る。くまはて。

いちばやし 一速(名)一速速(形)一すぐれて早い。すど。勢がはげしい。(古語)

いちばやぶ 一速(名)一速速(名)自動。上二する。とる。はげしく。(古語)

いちばらの おおきみ 一市原王(名)一市原長初(名)天智天皇の御孫安貴王の子。正五位下。藤原大夫。東大寺長官となつた。生没年未詳。

いちばん 一番(名)一組。ひとつがひ。一た。最初。第一。同種の中の中で最もすぐれたもの。①歌舞奏將校などの一曲。②うしろ

一番(名)すぐれて大きな男。①おとこ

一番(名)①賭場で一擲に駈入つて取ふこと。②人に先じて事なす。③一きり

一番(名)一回限り。①くび ②番首(名)

賭場で、第一に敵の首を得る。①一 ②一番

煎(名)最初に生れた子。①せんじ ②一番

ぞなえ ①一番太鼓(名)芝居で顔見世軍の初日の八つ時(午前四時)に最初に打つ太鼓。

ちや ①一番茶(名)最初に摘みとつた茶。②

②一番(名)第一番に敵陣に當る人。③

②一番弟子(名)門弟中、第一位にあるもの。弟子。高弟。③どり ④一番雞(名)鶏に最初に鳴く雞。⑤一にやうぼう(名)一にやうぼう

⑥一番乗(名)第一番に敵陣や敵城に馬を乗り入る。⑦一番(名)第一番に敵陣に駈入つて槍を入れる。

いちばん ①一番(名)一。②一番(名)一。③一番(名)一。④一番(名)一。⑤一番(名)一。⑥一番(名)一。⑦一番(名)一。⑧一番(名)一。⑨一番(名)一。⑩一番(名)一。

いちび ①商麻(名)植蓄。科の一年生草本。高さ二米位。葉は心臟形で先尖。縁邊に鋸齒がある。花黄色五瓣。

花を高く。莖皮の繊維は、綱又は絲粗布に製する。②から ③

麻稈(名)い

ちびの葉の。焼いて炭としほくちを製する。①はばき ②

麻匠市(名)「いちびの皮で編んだ」はばきで昔、一人一人が用いた。

いちびと ①市人(名)市民。②市街の商人。

いちひめのかみ ①市姫神(名)神。市若守

いちぶ ①二部(名)一組。②全部。③全組。④全部中の一。⑤全部中の一。⑥全部中の一。⑦全部中の一。⑧全部中の一。⑨全部中の一。⑩全部中の一。

②部始終(名)書物の始から終まで。③事の



〔びちい〕

始から終まで。①しゅけんこく ②部主權

國(名)法(High sovereignty)内治上に於ては完全な主權を有するが、外交上の權利は、他國から制限せられる國家。中獨一。③しゅ

んびほう ①二部準備法(名)經兌換券發行制度の一種で、保證準備發行の最高額を法定し置き、其の額以上一切正準備をなさない目的

①はんたふ ②一部判決(名)法廷の目的の多數ある場合にその一部に就いてなす終局判決。

いちぶ ①二分(名)一尺の百分の一。②一分金又は一分銀。③十又百に分たもの。④

⑤わけ。⑥一部分。⑦圓周の最下位の史生金の異稱。⑧きん ⑨一分金 ⑩江戸時代の金貨幣で、一兩の四分の一。⑪きん ⑫一分銀 ⑬江戸時代の銀貨幣で、一兩の四分の一。⑭じまん ⑮二分

⑯自慢(名)ひとり。⑰だめし ⑱二分試(名)すたすたにたらし新にすること。⑲ばん ⑳二分判(名)貴

いちぶきん(名)金。⑲めし ⑳二分召(名)貴式部省で、諸國の史生を任命した除目。

いちぶつ ①佛(名)佛。②佛。③佛。④佛。⑤佛。⑥佛。⑦佛。⑧佛。⑨佛。⑩佛。

①じょう ②佛乘(名)佛。③じょう ④佛乘。⑤じょう ⑥佛乘。⑦佛乘。⑧佛乘。⑨佛乘。⑩佛乘。

①佛の極樂世界。②阿彌陀(名)佛。③じょう ④佛の佛の極樂世界。⑤阿彌陀(名)佛。⑥じょう ⑦佛の佛の極樂世界。⑧阿彌陀(名)佛。⑨じょう ⑩佛の佛の極樂世界。⑪阿彌陀(名)佛。

①せかい ②佛世界(名)佛。③佛。④佛。⑤佛。⑥佛。⑦佛。⑧佛。⑨佛。⑩佛。

いちぶふん ①部分(名)全體の或部分。②

いちぶん ①二分(名)十に分たもの。②

①に負つた義理。②たて ③二分立(名)二分を立てようと思ふ。④

いちべつ ①瞥(名)ちらと見ること。②目見る

いちべつ ①別(名)ひとたびわかれること。②

いちべつ ①別(名)ひとたびわかれてから、

のた。

いちばう ①棒(名)佛。二度棒をぶつて野蠻

いちばう ①棒(名)佛。二度棒をぶつて野蠻

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちまいえ ①一枚繪(名)一枚の繪。

いちみやく(一脈)名。一すち。ひとづき。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

いちみょう(一明)名。佛。一草の陀羅尼。

は一つのわづらはしいことが伴ふこと。

いちものすくり(一物作)名。農夫。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

いちもん(一門)名。一家族又は同姓の一族。

い(一)文字笠(一)文字のやうに平

たくなつた笠。い(一)文字切(一)文字高

三五舞位の竹製の花いけ。い(一)文字棚

ち(一)床箱の柱の一直線に架けられたもの。い(一)文字

ち(一)文字蝶(一)動蝶の一種。翅の表面

は黒緑色、裏面は鮮黄色。前後翅を貫き、一列の

白紋が並ぶのがその名がある。い(一)文字屋

ち(一)京都鳥原の遊女屋の名。

いちもんじすけ(一)文字助宗(一)名

「人偏前の刀鍛冶、後鳥羽天皇の番鍛冶。世に

一文字といふ。

いちもんじすけ(一)文字助宗(一)名

「人偏前の刀鍛冶、後鳥羽天皇の番鍛冶。世に

一文字といふ。

いちもんじすけ(一)文字助宗(一)名

「人偏前の刀鍛冶、後鳥羽天皇の番鍛冶。世に

一文字といふ。

いちもんじすけ(一)文字助宗(一)名

「人偏前の刀鍛冶、後鳥羽天皇の番鍛冶。世に

一文字といふ。

いちもんじすけ(一)文字助宗(一)名

「人偏前の刀鍛冶、後鳥羽天皇の番鍛冶。世に

一文字といふ。

いちもんじすけ(一)文字助宗(一)名

「人偏前の刀鍛冶、後鳥羽天皇の番鍛冶。世に

一文字といふ。

いちもんじすけ(一)文字助宗(一)名

「人偏前の刀鍛冶、後鳥羽天皇の番鍛冶。世に

一文字といふ。

いちもんじすけ(一)文字助宗(一)名

鹿蹄草科の多年生草。葉は厚く楕圓形で根生し、

冬も萎まない。夏の初花莖

を挿くと約二〇センチ。雄株

花序をなして高さ五

センチの花を咲く。山林の

陰地に自生し、觀賞用として

栽培される。又、血止又は瘰癧類

とし、毒乾に咬まれた時生葉を揉んで汁をつければ

有効といふ。

いちやつく(一)意中(一)名。心の中。

いちやつく(一)意中(一)名。心の中。

いちやつく(一)意中(一)名。心の中。

いちやつく(一)意中(一)名。心の中。

いちやつく(一)意中(一)名。心の中。

いちやつく(一)意中(一)名。心の中。

いちやつく(一)意中(一)名。心の中。

いちやつく(一)意中(一)名。心の中。

いちやつく(一)意中(一)名。心の中。

いちやつく(一)意中(一)名。心の中。

いちやつく(一)意中(一)名。心の中。

いちやつく(一)意中(一)名。心の中。

いちやつく(一)意中(一)名。心の中。

いちやつく(一)意中(一)名。心の中。

いちやつく(一)意中(一)名。心の中。

いちやつく(一)意中(一)名。心の中。

いちやつく(一)意中(一)名。心の中。

いちやつく(一)意中(一)名。心の中。

いちやつく(一)意中(一)名。心の中。

いちやつく(一)意中(一)名。心の中。

いちやつく(一)意中(一)名。心の中。



〔草藥〕

色の単性花を生じ、雄花は穂状をなし、雌花は柄の先に二箇をつけ、秋、黄色の種子を結ぶ。内に白色硬質の核果状の部がある。これを「まんなん」と呼び、焼き又は茹で食ふ。材は極緻で美しい。①いちょうがしは、略。②紋師の名。種類が多い。③「あし銀杏脚」(名) 脚などの足の末廣にして、銀杏の葉の形をしたもの。「がせし」(名) 銀杏返

「あし銀杏脚」(名) 脚などの足の末廣にして、銀杏の葉の形をしたもの。「がせし」(名) 銀杏返。女の色髪を結ぶ方。髷の上を兩旁し、左右に曲げて輪形に結んでみるのしんでふ。(新編)④「がしら」(銀杏頭)(名) 江戸時代の男の髷の一種。刷毛先を銀杏の葉のやうに展げたもの。「がた」(銀杏形)(名) 銀杏の葉の形で、半月形を真中から二つ切にした形。「くずし」(銀杏崩)(名) 女の髪を結ぶ、髷の中に淺葱又は紫の葉の形にしたもの。江戸時代の末に流行し、髷の中に淺葱又は紫の葉の縮を巻込んだもの。「うだいこん」(銀杏大根)(名) 薄く輪切にした大根を十字字に切つて銀杏の葉の形にしたもの。「は」(銀杏羽) (名) せしどりの兩脇にある銀杏の葉形の羽根をよひば。



【銀杏頭】

「は」(銀杏) (名) 銀杏の葉の形に末の廣が下駄の齒。「うまいけ」(銀杏餅)(名) 女の色髪を結ぶ方。烏田餅を銀杏形の羽根をよひば。「も」(銀杏蒸) (名) 種類の。葉類は銀杏形で、下面に紫色の鱗片がある。水陸兩生、睡睡異體。「うまかた」(名) 胃腸加答兒(名) (醫) 胃と腸とを連結せる消化器なるが爲に、彼此のカツルが相影響して起る疾患。「うまはまらうらいく」(名) 二陽來復(名) 陰虚がよつて陽がよつて來ること。①陰歷十一月の冬至の稱。②悪いことのみあつたが、漸く善い方に向いて來ること。「うま」(遠勅)(名) 天子の思召に違ふこと。「いちらく」(一落)(名) 一件。「いちらく」(二樂)(名) 和歌の人士。「いちらく」(一楽) (名) 和歌の人士。「いちらく」(一楽) (名) 和歌の人士。①樂の發明した。葛城工の綴り方。①おり(一)

樂織(名) いちらくあみ ①淨織にした精巧な絹織物。②射て敵を追ひ散らす。「いちらくあみ」(射散らす)(他動、サ) 矢を一覽表「一覽表」(名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。

「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。

「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。

「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。

「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。

「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。

「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。

「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。「一覽表」(一覽表) (名) 一覽目を通すること。

いっしんかい【二道會】(名) 日佛併合に
實成した朝鮮の政教。明治三十一年に朝鮮人尹始
の組織した政治團體で、宮中・府中の混同、兩班の專
横に反抗し、産業・教育の發達を計らうとしたもの。
いっしんきょう【二神教】(名) 【宗教】
nathanaica) 基督教・キリスト教・猶太教等の如く造
化の神は唯一であるとして、之を信仰する宗敎。(多
神敎の對)
いっしんとう【二親等】(名) 【法親等の一】。或
人とその親又は子と關係し、又或人とその配偶者の
親又は子との關係のやうに、或人或はその配偶者よ
り一世を隔つたものと關係し、一等級。
いっしんぼう【二眞法界】(名) 【佛界】唯一眞
實の宇宙の真相。絕對無差別の宇宙の真相。
いっす【二逸す】(自動) 【サ變】①はなれ
る②のされるにける。③うする。④はなれる。
いっす【二逸す】(他動) 【サ變】①はなつ
てが去る。②おとす。③失ふ。
いっすい【二水】(名) ①一筋の流。②一筋の水。
③一流の流。

いっすい【二酔】(名) 一度の酒の酔ひ。
いっすい【二炊】(名) ①たび炊(②て)。③一
の夢(句) 李添の枕中記の旬唐の開元年中、支那
直隸省邯鄲(今は)の地で、蘆生が道士呂翁の枕を借り
て榮華の夢を見たが、それは黄粟(①)がまだ煮えきら
ない時間であったといふこと。④人生の榮華はか
かないこと。⑤ふ。黄粟(名) 邯鄲の夢。蘆生の夢。
いっすけ【二居経】(名) ①連日、よもよもして
家に傳はぬこと。②連日被褥に遊びつづけて家に歸
らぬこと。流連。
いっすもの【二種物】(名) 昔、各人が一種づつ
の肴を出しあって、飯上りに小酒宴を催した。古語
いっすん【二寸】(名) ①一尺の十分の一。②三四
厘。③短い距離。④小。⑤一尺九寸九分。⑥一
寸板(名) 厚さ一寸の板。實際は八分五厘厚。⑦一
さき(名) 厚さ一寸の板。ちよと離れた前途。⑧一

いっすい【二成】(名) 支部で、十里四方の地。
いっせき【二跡】(名) あとつきに謀る物のすべ
て。②特有の持癖。③いちごき。またたく間。
いせき【二夕】(名) 割ひとぼん。一夜。
いせき【二夜】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。
いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。
いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。

いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。
いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。
いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。

いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。
いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。
いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。

いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。
いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。
いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。

いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。
いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。

いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。
いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。

いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。
いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。

いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。
いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。

いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。
いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。

いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。
いせき【二二】(名) ①一匹の眼。②一匹の眼。

に改め立てること。いっせいで。がどめ。一だ

わく【時大工】(名) 一時今の二時間を限つて

雇ふ大工。一のがれ【時道】(名) いっせいの

のがれ。一ふみ【時文】(名) 一時に書いた

てやる手紙。一多の【多】(名) 多と同様に

行ふこと。一徳【徳】(名) 一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

一得【得】(名) 一得の徳。一徳の徳。

相儀【相】(名) 損益のないこと。一きげん【二杯

機嫌】(名) 酒酔つて愉快なさま。一きざ【一

杯】(名) 一酌するの儀。形小さく肉少く僅かに

一杯の量に過ぎないから。一びらき【二杯

開】(名) 帆船が風に逆さ進む時の航法の名。一

度【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

一たび【度】(名) 一回。一たび。一たび。一たび。

【名】(注) 會計法に準ずる國家の普通の會計。(特

別) 會計の對【がいん】(一般概念) (名)

【名】(General concept) 箇箇の事物に共通した特性

を抽象した概念。一かんかく【一般感覺】(名)

【名】(General sensation) 一般感情の基礎となる感

覺。普通感覺。一じん【一般人】(名) 特別の地

位身分を有しない人。普通人。一すう【一般

數】(名) 數文字を以てあらはされた數。一と

う【一般】(名) 一般投票【名】(注) 制限しない

で、一般に行はせる投票。一ほう【一般

法】(名) (注) 主権の下にある全國一般の人若し

は一切の事項に適用せらるる普通の法律。憲法。

民法。刑法。一ほうりやう【一般方

略】(名) 法營などに於ける軍事共通の方略。(特別

方略の對) 一めい【一般名辭】(名) (General

concept) 一般概念を表はす名辭。多數の事

物に共通な特徴を表はす名辭。一ろうどう

しやくみあい【一般労働者組合】(名) 社勞働組合の

一一般の不熟練労働者・半熟

練労働者等を一體にして組織したもの。

一つ【一】(名) 過分のほめかけ。過賞。

一つ【一】(名) 過分のほめかけ。過賞。

一つ【一】(名) 過分のほめかけ。過賞。

一つ【一】(名) 過分のほめかけ。過賞。

一つ【一】(名) 過分のほめかけ。過賞。

一つ【一】(名) 過分のほめかけ。過賞。

一つ【一】(名) 過分のほめかけ。過賞。

一つ【一】(名) 過分のほめかけ。過賞。

一つ【一】(名) 過分のほめかけ。過賞。

一つ【一】(名) 過分のほめかけ。過賞。

いっぴん【一品】(名) 一つ。一品。品。最上すぐれ

た品。天下。一りょうりゅう【一客料理】

(名) 西洋料理店で、一品づつの價をきめて、客の自由

選擇に應ずる料理。一いふ【一人のなつと。一人の男。

一人の武人。一いふ【一夫一婦】(名) 一

人の夫に對して一人の妻のあること。(一夫多妻

一夫兩妻。一夫多婦對) 一たさ【一夫多妻】

(名) 一人の男が二人以上の妻を持つこと。(一夫

一婦。一妻多夫の對) 一開に當れば萬夫も開く

なし【句】(李白の蜀道難の詩の句。險阻な山路の

形容) 一ふう【一風】(名) 氣流。態度などのあつたこと。

一ふうりゅう【一風流】(名) 一ふうりゅう

【一風】(名) 一風流。一ふうりゅう

【一風】(名) 一風流。一ふうりゅう

【一風】(名) 一風流。一ふうりゅう

【一風】(名) 一風流。一ふうりゅう

【一風】(名) 一風流。一ふうりゅう

【一風】(名) 一風流。一ふうりゅう

【一風】(名) 一風流。一ふうりゅう

【一風】(名) 一風流。一ふうりゅう

【一風】(名) 一風流。一ふうりゅう

【一風】(名) 一風流。一ふうりゅう

【一風】(名) 一風流。一ふうりゅう

【一風】(名) 一風流。一ふうりゅう

【一風】(名) 一風流。一ふうりゅう

【一風】(名) 一風流。一ふうりゅう

【一風】(名) 一風流。一ふうりゅう

【一風】(名) 一風流。一ふうりゅう

【一風】(名) 一風流。一ふうりゅう

【一風】(名) 一風流。一ふうりゅう

いでたうち出立(名) ①出て行くこと。②あつたつ。

③よそほひ。みたく。扮装。④すぎた。⑤立身。

(古語) ①いそぎ(出立急) ②出立の準備。

(古語) ③がた出立方(名) 出立する時。古語。

いであつたつ(名) ①出立つ。②自動。夕。四。③出

て行く。出で始める。古語。④旅立つ。⑤よそほひ。

身支度する。古語。⑥うせつてる。(古語)

いであつたつ(名) ①出立つ。②自動。夕。四。③出

て行く。出で始める。古語。④旅立つ。⑤よそほひ。

身支度する。古語。⑥うせつてる。(古語)

いであつたつ(名) ①出立つ。②自動。夕。四。③出

て行く。出で始める。古語。④旅立つ。⑤よそほひ。

身支度する。古語。⑥うせつてる。(古語)

いであつたつ(名) ①出立つ。②自動。夕。四。③出

て行く。出で始める。古語。④旅立つ。⑤よそほひ。

身支度する。古語。⑥うせつてる。(古語)

いであつたつ(名) ①出立つ。②自動。夕。四。③出

て行く。出で始める。古語。④旅立つ。⑤よそほひ。

身支度する。古語。⑥うせつてる。(古語)

いであつたつ(名) ①出立つ。②自動。夕。四。③出

て行く。出で始める。古語。④旅立つ。⑤よそほひ。

身支度する。古語。⑥うせつてる。(古語)

いであつたつ(名) ①出立つ。②自動。夕。四。③出

て行く。出で始める。古語。④旅立つ。⑤よそほひ。

身支度する。古語。⑥うせつてる。(古語)

いであつたつ(名) ①出立つ。②自動。夕。四。③出

て行く。出で始める。古語。④旅立つ。⑤よそほひ。

身支度する。古語。⑥うせつてる。(古語)

いであつたつ(名) ①出立つ。②自動。夕。四。③出

て行く。出で始める。古語。④旅立つ。⑤よそほひ。

身支度する。古語。⑥うせつてる。(古語)

いと(絲糸) (名) ①細く編んだ毛皮などの線維を細く
長くひきのばして、よりをかけたもの。織物・縫糸
織物などに使用する。②絲。③線維。④線維が纏まら
ず。⑤線維の異稱。⑥線維に約線。⑦線が長くし
て絲のやうな線維。⑧を引く。⑨長く頼いて絶
えない。

いと(意圖) (名) 考。おもはく。②まさに行はう

いと(敷) (動) 表だす。至って。最も。(古語) 一

いと(最) (動) この外に。はなはだ。(古語) 一

いと(最) (動) 表だす。至って。最も。(古語) 一

いと(最) (動) この外に。はなはだ。(古語) 一

いと(最) (動) 表だす。至って。最も。(古語) 一

いと(最) (動) この外に。はなはだ。(古語) 一

いと(最) (動) 表だす。至って。最も。(古語) 一

いと(最) (動) この外に。はなはだ。(古語) 一

いと(最) (動) 表だす。至って。最も。(古語) 一

いと(最) (動) この外に。はなはだ。(古語) 一

いと(最) (動) 表だす。至って。最も。(古語) 一

いと(最) (動) この外に。はなはだ。(古語) 一

いと(最) (動) 表だす。至って。最も。(古語) 一

いと(最) (動) この外に。はなはだ。(古語) 一

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。

いと(異土) (名) 異國。外國。



りな縮結などにして、左右に長く垂れたもの。(古語)
●花の形に結び連れた緒を、狩衣の袖に張りつけたもの。

いとゆみ(絲弓)(名)矢に絲をつけて弓射るもの。
いとより(絲控)(名)糸によりなけること。

いとより(絲控)(名)糸によりなけること。
いとより(名)糸によりなけること。

いとより(名)糸によりなけること。
いとより(名)糸によりなけること。

いとより(名)糸によりなけること。
いとより(名)糸によりなけること。

いとらん(絲蘭)(名)百合科の多年生草本。
いとらん(名)糸によりなけること。



いとらん(名)糸によりなけること。
いとらん(名)糸によりなけること。

いとらん(名)糸によりなけること。
いとらん(名)糸によりなけること。

いとらん(名)糸によりなけること。
いとらん(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(絲割符)(名)江戸時代に、支那オランダ・ポルトガル等から輸入した生絲を買賣する権利を官から長崎商人に許した獨占權。又その證書。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いとわつぶ(名)糸によりなけること。
いとわつぶ(名)糸によりなけること。

いなさやま 伊那佐山(名) 地奈良縣宇陀郡にある山。(以上古語)

いなしき 稻敷(名) 稻幹を敷いた所。あんなに久しみてなれたしむ。(以上古語)

いなすま 稲妻電(名) 空中電氣の放電する時に閃く火花いなりびり。人九車馬車などの帆を張るに用いる器具。刀身にあらはれる屈折した光ある筋。動作の敏捷な様。最も短い時間。間。(以上古語)

いおれくぎ 稲妻折釘(名) 稲妻形に二重に折れ曲った折釘。いがた(稲妻形)直線を屈曲した形。いなびかりの形を模倣に取ったもの。いばしり(稲妻走)名 電の如く斜に早く走る。いびし(稲妻差)名 稲妻形の差形にした模様。紋所の。

いなせ 否諾(名) せは「ま」(然の轉で、諾の意)やおう。い(以上古語)

いなせ 鰻脊(名) 江戸時代に、江戸日本橋の魚河岸の勇助の人が鰻の脊の形に結んだ事から、いさみはだの人をふ。いあちよう(鰻脊銀杏)名 勇助の人をつたふ。

いなだ(名) 動ぶ(鰻の幼魚)。

いなだき(頂)名 いただき(古語)

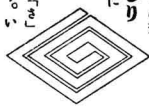
いなたま 稻魂(名) いなたま。いなびかり。

いなたる(稲交)名 いなます。

いななく(稲交)名 自動。カ四馬が聲高く鳴く。いななく(稲交)名 自動。カ四馬が聲高く鳴く。いななく(稲交)名 自動。カ四馬が聲高く鳴く。

いなめ 寝目(名) あげがた。あげほの。しのめ。古語。一の(寝目の)枕。あく(明く)の枕詞。

いなほき 稻掃(名) いなほき。稲を掃く。稲掃(名) 稲を掃く。稲掃(名) 稲を掃く。



【しびまづない】

いなばた 稻機(名) 稻を掛けて乾かす爲の木。いなば(稲機)名 稻を掛けて乾かす爲の木。

いなばどう 因幡堂(名) 佛。京都市下京區丸太町にある眞言宗の平等寺。本尊藥師如来は釋尊の自作で、因幡に渡たのを一條天皇の朝國守在原行平が京都に歸した時、その邸に飛來したので、その寺として安置したと傳へられる。因幡藥師。(文能の狂言の名)。

いなばのしろうさぎ 因幡白兔(名) 傳。神代神話。古事記にある傳説。因幡に渡らうと白兔が、多くの朝國の背に乗って飛んで、最後は兔が、腰に皮を纏ぎとられて飛んでくるのを、大國主神が袈裟を脱いで之を救はれたといふ。

いなびかり 稻光(名) いなすま。古語。

いなびの 稲日(名) 地。いなびの(印南野)古語。

いなぶ(稲) 稲(名) 稲を積んで運ぶ舟。いの(稲舟)枕。いな(否)の枕詞。

いなべ 稻贊(名) 神に供へる稲の初穂。古語。

いなほ 稻穂(名) 稲の穂。紋所の。稲穂を來れた形。

いなみの 印南野(名) 地。秋の。兵衛縣知古明石二郡に跨った野。一の(印南野)枕。

いなみ(名) 色。の枕詞。

いなみほし 牽牛星(名) 色。正し(彗星)。

いなむ 居並(名) 自動。マ四の。いなむ(居並)名 居並む。不承知といふ。

いなむ(稲) 稲(名) 稲を食する蝶翅。いなむ(稲)名 稲を食する蝶翅。いなむ(稲)名 稲を食する蝶翅。

いなむ(稲) 稲(名) 稲を食する蝶翅。いなむ(稲)名 稲を食する蝶翅。

いなむ(稲) 稲(名) 稲を食する蝶翅。いなむ(稲)名 稲を食する蝶翅。

いなむ(稲) 稲(名) 稲を食する蝶翅。いなむ(稲)名 稲を食する蝶翅。

いなむ(稲) 稲(名) 稲を食する蝶翅。いなむ(稲)名 稲を食する蝶翅。

いなむ(稲) 稲(名) 稲を食する蝶翅。いなむ(稲)名 稲を食する蝶翅。

いなむしろ 寝違(寢違)名 枕。寝床に敷く。いなむ(古語)かば「しく」の枕詞。

いなむら 稻藪(名) 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。いなむら(稻藪)名 稻を刈て積重ねたもの。

梅花佛といふ。美濃の人。薙髮して芭蕉の門に入つた。香門十哲の一人。流行が多い。正徳五年(一三七五)没。但し没年に異説がある。「藤の實」「二葉集」等の著がある。

いの(感)「よなし」(轉)或語の下につけて感歎の意をあらはす語。 二番。まじき。最初。

いのちばん(いの一番)(名)いろは番附のいのち。 一。衣(義)(名)いろは。ボケト。

いのうえあや(いのうえあや)(井上文雄)(名)人江戸時代末期の歌人。調福、河笠、歌堂と號し、独自の個性の表現を主張した。伊勢の家范「調福集」等の著がある。明治四年(一五三二)没。年七十二。

いのうえん(いのうえん)(井上圓了)(名)人哲学者。文學博士。新潟縣の人。西洋學を背景として佛敎の新解釋を試みた。又、東洋大學を創立す。大正八年(一五七九)没。年六十二。多くの佛敎學の著者の外、妖怪學講義の著がある。

いのうえかおる(いのうえかおる)(井上馨)(名)人明治維新の功臣。侯爵。大勳位。通稱開多。山口縣の人。松下村塾に學ぶ。財政、經濟に著眼して功があった。外務大臣、内務大臣、大藏大臣となる。大正四年(一五七五)没。年八十一。

いのうせこわし(いのうせこわし)(井上毅)(名)人政治家。子爵。格降を賜ふ。熊本の人。教育勸励の事業及び法律制定に與つた力がある。文部大臣となる。明治二十八年(一五五五)没。年五十二。

いのうせはりま(いのうせはりま)(井上播磨)(名)人上方淨瑠璃の開祖。通稱は市郎兵衛。淨瑠璃を唐風漁夫夫人に學んで一派を開き、大阪道頓堀に棲居を起した。貞享二年(一三四五)没。年五十四。

いのうただたか(伊能忠愍)(名)人本邦最初の實測地圖製作者。學者。通稱は三郎右衛門。勘解由と稱する字は子。號は東河上總國の人。下總國佐原町の伊能氏の養子となる。幕府の命によって全國を測量して、地圖を製した。文政四年(一四八二)没。年七十七。「國郡晝夜時刻對表」「紀源

術註に用法」「求開圖八線表」等、地理、數學に關する著がある。

いのがしら(いのがしら)(井頭)(名)地東京府北多摩郡武蔵野村にある地名。葛粉田の水の水源地。東京市の井頭恩賜公園がある。 一。から退き去る。

いのくち(いのくち)(居退)(自動)力四座席のクルマ。 一。環口(名)井毎から水を落す口。

いのこま(いのこま)(子)(名)陰曆十月上の亥日。昔此日の亥の刻に餅を食へば、孫病を除くとといひ、又、猪は亥の子の祝と稱する。江戸時代に、此の日から短燈を開いた。

いのこし(射退)(名)昔、正月の射禮の式に來なかつた時に、翌日射させた。(古語)

いのこすち(いのこすち)(牛膝)(名)龍長科の多年生草本。莖は青紫色方形で、節高く牛の膝に似る。全株に毛がある。高さ一米位。葉は長卵形又は橢圓形で全縁又は鋸圓形で全縁。對生。秋、緑色小花を穂狀花序に開く。果實は胞果で楕圓形、刺を有し、花後反屈する莖内に宿する。根は收斂劑作用がある。ふしが、こまのひで。

いのこり(いのこり)(居殘)(名)あのこと。又、その人。

いのこる(いのこる)(自動)ラ四あにのこる。あ、おとまでとまるとのこと。

いのしほ(いのしほ)(猪)(名)動物。蹄類の獸。體肥満し、頭部短く、眼小にして脚は長い。毛色は黒色、黒褐色の剛毛を混じ、脊筋の毛は長く、怒れば之を逆立てる。大體は口外に突出し、上方に向かって曲る。山中樹木の繁茂する所に棲息し、夜間、田野に出て食を求め、冬は穴居する。あ、し。やちん野猪。 一。前後の考もなくやちんに突違する者。 一。舊拾

圓紙幣の異名。一だけ(猪背)(名)「種」(一)うたけ(香耳)。一むしや(猪武者)(名)前後の考もなく、むしやみに敵に突違する武者。

いのしりくま(いのしりくま)(猪尻草)(名)天名精(名)「種」(一)一。葉は煙草に似て一米。葉と莖とを細くし、一種の臭氣がある。夏秋の際、葉脈が緑色の小頭花を著ける。やぶた。

いのち(いのち)(名)生物の生活する原動力。生きている間、壽命。生命。生涯。いきのな。たまたま。唯一のたのみ。唯一のよりのき。一がえが(命換)(名)生命にかへる程の重大事。一かきり(命限)(名)命のつづだけ。一いさながらする間。一がけ(命懸)(名)命を失つてもかまはらずに行ふこと。死ぬ覚悟すること。一かほら(命果報)(名)生命の運の強いこと。運よく命の助かること。一からがら(命辛辛)(副)からうじて、やっと生命だけ失はけに。一がら(名)全く一命を捨けること。一がわり(命代)(名)いのちがえ。一きり(命限)(名)生命をかへて行ふこと。一くらへ(命較)(名)生命の長短をくらべあふこと。一精力を較らべあふこと。一げ(命玉)(名)筆先の毛。一こい(命乞)(名)命の助けを乞ふことと神佛に祈ること。一殺される(命の助を乞ふこと)と神佛に祈ること。



【膝】牛

と(命盜人)(名)徒らに長身する人。 一。死ぬべき時に死なぬ人。一ひろい(命拾)(名)生を失はうとしたのを幸に免れたこと。一ふしや(命冥加)(名)冥加(名)死すき場合に、ふしやに助かること。一もらい(命賞)(名)命。一あつての物種(命)何事にし命があつての上のこと。命が何事にしものとすること。一限り根限り(命)命のある限り、精力のある限り(命)命をなすこと。一長ければ毎多し(命)莊子天地篇の句。長命の人、恥辱を受けし(命)が多い。一なりり(命)命があつたれば、その事も出来たのである。一の親(命)死ぬべき者を助けてくれた人の恩(命)死ぬべき場合を救はれた恩。一の限り(命)いのちがきり。一の霞(命)仙人の命。長命。一の際(命)命の終らうとする時。死にさば、死ぬるか生きるかのさまる場合。一の境(命)前後に同じ。一の瀬(命)命のさばる時。一の洗濯(命)氣ばらして、平生の勞を慰めること。一の洗濯(命)氣ばらして、平生の勞を慰めること。一の洗濯(命)氣ばらして、平生の勞を慰めること。一の洗濯(命)氣ばらして、平生の勞を慰めること。

いのち(いのち)(名)生物の生活する原動力。生きている間、壽命。生命。生涯。いきのな。たまたま。唯一のたのみ。唯一のよりのき。一がえが(命換)(名)生命にかへる程の重大事。一かきり(命限)(名)命のつづだけ。一いさながらする間。一がけ(命懸)(名)命を失つてもかまはらずに行ふこと。死ぬ覚悟すること。一かほら(命果報)(名)生命の運の強いこと。運よく命の助かること。一からがら(命辛辛)(副)からうじて、やっと生命だけ失はけに。一がら(名)全く一命を捨けること。一がわり(命代)(名)いのちがえ。一きり(命限)(名)生命をかへて行ふこと。一くらへ(命較)(名)生命の長短をくらべあふこと。一精力を較らべあふこと。一げ(命玉)(名)筆先の毛。一こい(命乞)(名)命の助けを乞ふことと神佛に祈ること。一殺される(命の助を乞ふこと)と神佛に祈ること。



【草尻猪】

沙汰(名)命にかはる沙汰。一しただい(命次第)(名)命の無に。一しらす(命不知)(名)命を大切に思はぬこと。一命の危険なまはす事にすること。又、その人。一物支夫で水い開つたこと。一すく(命遊)(名)命。一命次第。一だ(命取)(名)殺す。一命を償ふ。一だ(命取)(名)殺す。一命長(命善)(名)長命者。長壽者。一ぬすび

と(命盜人)(名)徒らに長身する人。 一。死ぬべき時に死なぬ人。一ひろい(命拾)(名)生を失はうとしたのを幸に免れたこと。一ふしや(命冥加)(名)冥加(名)死すき場合に、ふしやに助かること。一もらい(命賞)(名)命。一あつての物種(命)何事にし命があつての上のこと。命が何事にしものとすること。一限り根限り(命)命のある限り、精力のある限り(命)命をなすこと。一長ければ毎多し(命)莊子天地篇の句。長命の人、恥辱を受けし(命)が多い。一なりり(命)命があつたれば、その事も出来たのである。一の親(命)死ぬべき者を助けてくれた人の恩(命)死ぬべき場合を救はれた恩。一の限り(命)いのちがきり。一の霞(命)仙人の命。長命。一の際(命)命の終らうとする時。死にさば、死ぬるか生きるかのさまる場合。一の境(命)前後に同じ。一の瀬(命)命のさばる時。一の洗濯(命)氣ばらして、平生の勞を慰めること。一の洗濯(命)氣ばらして、平生の勞を慰めること。一の洗濯(命)氣ばらして、平生の勞を慰めること。一の洗濯(命)氣ばらして、平生の勞を慰めること。

沙汰(名)命にかはる沙汰。一しただい(命次第)(名)命の無に。一しらす(命不知)(名)命を大切に思はぬこと。一命の危険なまはす事にすること。又、その人。一物支夫で水い開つたこと。一すく(命遊)(名)命。一命次第。一だ(命取)(名)殺す。一命を償ふ。一だ(命取)(名)殺す。一命長(命善)(名)長命者。長壽者。一ぬすび

いのち(いのち)(名)生物の生活する原動力。生きている間、壽命。生命。生涯。いきのな。たまたま。唯一のたのみ。唯一のよりのき。一がえが(命換)(名)生命にかへる程の重大事。一かきり(命限)(名)命のつづだけ。一いさながらする間。一がけ(命懸)(名)命を失つてもかまはらずに行ふこと。死ぬ覚悟すること。一かほら(命果報)(名)生命の運の強いこと。運よく命の助かること。一からがら(命辛辛)(副)からうじて、やっと生命だけ失はけに。一がら(名)全く一命を捨けること。一がわり(命代)(名)いのちがえ。一きり(命限)(名)生命をかへて行ふこと。一くらへ(命較)(名)生命の長短をくらべあふこと。一精力を較らべあふこと。一げ(命玉)(名)筆先の毛。一こい(命乞)(名)命の助けを乞ふことと神佛に祈ること。一殺される(命の助を乞ふこと)と神佛に祈ること。

す。を投げ出す(名)死ぬ覚悟をきる。

を拾ふ(名)死ぬべき場合に免れる。一を二つ

持つ(句)自分のほかに二人の子があるにいふ。

一的に悪く(句)命がけである。

いのな(名)井(名)色(名)井戸の中。狭い眼

界。一の蛙(句)せいあ蛙。

いのはやた(名)猪俣太(名)人豪勇の士

源頼朝の臣。河州天皇の朝。頼朝が怪獣を射た時、落

ちた怪獣を射殺した。

いのふ(名)胃腑(名)生胃。胃袋。

いのり(祈禱)(名)いの。神佛に祈願する

のこ。一いだす(祈出)(名)祈出す(他動、サ

四)無かった物を法力に依つて出す。一のく

返り掛。一のし(祈願)(名)願(カ下)祈願の方で

返す掛。一のし(祈願)(名)願(カ下)祈願の方で

返す掛。一のし(祈願)(名)願(カ下)祈願の方で

返す掛。一のし(祈願)(名)願(カ下)祈願の方で

返す掛。一のし(祈願)(名)願(カ下)祈願の方で

返す掛。一のし(祈願)(名)願(カ下)祈願の方で

返す掛。一のし(祈願)(名)願(カ下)祈願の方で

返す掛。一のし(祈願)(名)願(カ下)祈願の方で

返す掛。一のし(祈願)(名)願(カ下)祈願の方で

返す掛。一のし(祈願)(名)願(カ下)祈願の方で

返す掛。一のし(祈願)(名)願(カ下)祈願の方で

返す掛。一のし(祈願)(名)願(カ下)祈願の方で

返す掛。一のし(祈願)(名)願(カ下)祈願の方で

返す掛。一のし(祈願)(名)願(カ下)祈願の方で

返す掛。一のし(祈願)(名)願(カ下)祈願の方で

返す掛。一のし(祈願)(名)願(カ下)祈願の方で

によつて相傳された知行。一を汚す(句)祖先の

名譽を汚す。

いはいもとおる(自)い(古語)

いははせ(醫博士)(名)古昔、典藥寮に屬し、醫

術調劑を教授した職。

いはく(醫伯)(名)傑出した醫師。醫師の敬稱。

いはく(威迫)(名)おどかしせること。お

どかせること。

いはく(帷幕)(名)たれぎぬとすだれ。間

戸。

いはく(居場所)(名)あど。ある所。

いはつ(衣鉢)(名)佛の師信から沙門に傳へ

る袈裟。師から傳へる佛敎の象徴。師から

傳へる新道の象徴。えはち。えはつ。

いはつ(遺髪)(名)死者が記念に残した頭髮。

いはつ(斷ゆ)(自動、ヤ下)いなな

く(古語)

いはら(薔薇)(名)植薔薇科の灌木。多くは直立

して刺がある。葉は羽状複葉で互生し、托葉が葉柄

に著生する。花は美麗で、多くの雌蕊が蜜房の花床

内に隠れる。ばら。うばら。

いはら(茨)(名)蔓のある小木の總稱。

いはら(茨垣)(名)からたち(薔薇)等の

刺のある樹皮結ばれた垣。一がく(芙蓉)(名)

芙蓉科の生えてあるあぜ。一ひげ(芙蓉)(名)

芙蓉科の一年生深水草。池沼等にも生じ、葉は細長く、

葉は鋸歯を有する線形で淡緑色。夏目、上部の葉脈

に帯黄緑色の小さい花を開く。雌雄異株。

いはら(桑童子)(名)大坂の豪商。新町妓樓

の主人が常に殿子の外套を着るので、殿子大褌と呼

ばれた茨木屋敷を仄めかしたといはれる人物。

いはら(渡邊綱)が羅生門でその胸を切ったといふ鬼神。

いはら(井原四鶴)(名)江戸時代の浮世草子作家。本名平山勝五。宗因

門に入つて談林風草子二萬堂と號し、後浮世草

子を出して有名となった。その作品はよく雅俗語を

折衷し、物語の條條破つて、深い觀察を以て人間生

活を深刻に描出し、性慾物語に支配されて行く人間

性を生と見せてある。元禄六年(二五三)歿。年

五十二。其著に「兩千句」「好色一代女」「好色一

代男」「好色五人女」「好色二代男」「日本水代藏」世

間調算用(楳村)置土産(俗つづれ)等がある。

いはり(尿)(名)ゆべり。小便。一ぶくろ(尿

袋)(名)ゆべりぶくろ。(はくわう)膀胱。

いはる(威張る)(自動、ラ四)は

ばなきが。おどりがぶ。

いはら(射拂)(名)射拂(他動、ラ四)矢

を射て敵を追ひはらふ。と。法を破るこ

と。法を破るこ

いはん(違反)(名)法にがひ、罪を犯すこ

と。法を破るこ

いはん(夷蠻)(名)王化にうるほはぬ民。えびす

いはん(夷蠻)(名)女の名めかしさま。たなや

が。たなや

いはん(妻腰)(名)なえなびくこと。しなれふす

いはん(肝)(名)寝てある間に出る鼻息の音。

いはん(寝袋)(名)睡眠中に小便を漏らすこと。

いはん(居居)(名)他の家に行つて水く溜

る。二)前後に同じ。

いはん(居居)(名)居居(自動、ラ下

いはん(居居)(名)居居(自動、ラ下

いびつ(飯櫃)(名)楕圓形。小判形。楕圓形

や圓形の飯櫃がんだし。一なり(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

いびつ(飯櫃形)(名)いびつ(飯櫃形)(名)

階に應じて踊はた奮舞す。

いふか…(慰撫)名 慰め安んずること。
いふか…(威武)名 たけつきこと。勢の強いこと。
武力。勢。武威。 [がた。]

いふう 異風(名) 異なつた風俗。異なつたす
いふう 遺風(名) 後世に連る風習。後
世に遺つてゐる教風。
いふうか…(威風)名 威光の他に及ぶ有様。威
光。一 堂堂(句) 威風の盛なさま。

いぶかし 不審だ。いぶかし(評し)(形) 怪しい。疑
はしい。不審だ。一 いぶかし(評し)(形) 形
「いぶかしの口誦。一 がる(評し) 評し(形)
(他動) 三四いぶかしく思ふ。一 げ(評し)
げ(名) 不思議さう。合點のいかぬさま。一 さ
[評し] (名) いぶかしいこと。又その程度。一 さ
み評し(名) いぶかしいこと。いぶかしいこ
ころしむ。おぼつかなくゆかしいこと。

いぶかしみ 不審(評し) 怪しい(他動)。
サ(動) いぶかしがる(古語)。「お、怪しむ。疑ふ。
いぶかす(名) 思ふ(自動) 三四不審に思
いぶかす(名) 思ふ(自動) 三四不審に思
いぶかす(名) 思ふ(自動) 三四不審に思

いぶき(楡樹) (名) 楡科の常緑喬木高さ一
〇米乃至一五米。樹皮は赤
褐色、枝の全形は圓
錐状を呈する。葉に、
杉葉の如く尖つたもの
と小葉状のものとの
もの。單性花は四月頃葉裏
のものに咲く。紫黒色の漿性種子
を結ぶ。いぶき(楡) 伊吹栢樹。

いぶきおろし 伊吹風(名) 滋賀縣伊吹山から
吹きおろす風。
いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]



である。夏、梢に淡紅色や紫色又は白色の小花を開
く。葉と花穂とは香料又は薬用とし、又揮發油を採
取する。ひびり。 [所。(古語)]

いぶきとらのおも 伊吹虎尾・拳拳(名)
[福要科の多年生草本。高山に自生し、高さ一米位。
地下茎は太くて彎曲してゐる。葉は廣披針形深緑色
で、下部のものは長い葉柄を有する。夏、草端に長
さ五厘米位の複合穂状をなす。帯紅色又は白色の花を開
く。觀賞用。地下茎は乾燥用ひられる。]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]



【風防吹伊】

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

いぶき(楡) 伊吹栢樹。 [きぶ]

を結ぶ。種子は長毛を有して飛散に便する。

いよがすり【伊豫糺】(名)松山市附近から産出する絹の木綿織物。松山産。

いよよく【意欲】(名)の欲する所。何かを得ようと思ふ心。いよよく【意欲主義】(名)【法律】法上、犯罪事實を知って犯罪行為を決定し、犯罪事實を生ぜしめんと欲するものとして、始めて刑事上犯罪の故意ありとすべしとする主義。

いよこさね【伊豫小札】(名)絹の小札の一種。形は洋風の小札のやうで、一文字に切つてその端を圓にしたもの。

いよよし【伊豫善し】(形)一、居心地いよよし【伊豫塵】(名)伊豫塵を重にして透かした時に見える木目のやうな模様を絹等に染めたもの。

いよぞめ【伊豫染】(名)伊豫塵を重にして透かした時に見える木目のやうな模様を絹等に染めたもの。

いよと【伊豫低】(名)愛媛縣伊豫郡北山崎村及び低部町に産する色の砥石。

いよまさ【伊豫色】(名)いよまさか。一がみ

いよまき【伊豫紙】(名)伊豫紙から産出する和紙。楮皮にアルブを混じて抄いたもので、多く錦繪に用ひられる。

いよやか【イ】(名)森などのいよよ高く聳えること。

いよまよ【意】(動)いよまよ。

いよよか【イ】(動)いよよか。

いよよか【イ】(動)いよよか。

いよよか【イ】(動)いよよか。

いよよか【イ】(動)いよよか。

いよよか【イ】(動)いよよか。

いよよか【イ】(動)いよよか。

イラク【Iraq】(名)【地】西亜細亞メソポタミヤの王國。面積約三十七萬方寸。チクリス・ユーフラテス兩河の流域で、古代文化の發源地。トルコに屬してゐたが、世界大戰後英國の委任統治地となり、王國となつた。

いらい【以來】(名)その時よりこのかた。【この頃心】(名)他なたりにする心。

いらいら【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。

いらいら【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。

いらいら【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。

いらいら【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。

いらいら【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。

いらいら【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。

いらいら【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。

いらいら【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。

いらいら【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。

いらいら【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。

いらいら【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。

いらいら【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。

いらいら【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。

いらいら【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。

いらいら【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。

いらいら【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。【刺刺】(名)刺刺の音。



に觸れば痛みを感じる。夏秋の候、葉腋に淡緑白色の小花を穂狀に縷り、雌雄花共に同一株である。茎の内皮から繊維を採取し、絲や織物の原料とする。【おどり】(刺草織)【刺草】(名)刺草の葉の纖維から製した絲で織つた織物。

いらさき【伊良湖島】(名)【地】愛媛縣宇和島島の北端、志摩島の対峙と相對して伊勢海を扼し、尾張の師崎と相對して薩摩海を擁してゐる。風景絶佳。歌枕の。

いらす【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。

いらす【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。

いらす【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。

いらす【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。

いらす【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。

いらす【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。

いらす【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。

いらす【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。

いらす【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。

いらす【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。

いらす【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。

いらす【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。

いらす【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。

いらす【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。

いらす【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。

いらす【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。【いらす】(動)貸す。

いらつしやい【句】「いらせられ」との口語。人の尋ねて來た時に挨拶に用ひる語。おいでなさい。

いらつしやる【自動、ラ四】いらせられる。の口語。

いらつひめ【郎姬】(名)色いらつひめ。【古語】いらつひめ【郎女】(名)年若い女を親しんでいふ語。【古語】

いらな【刺菜花芥】(名)【植物】かたらの一種。葉は大きく帯紫色で縁邊に細かい鋸齒がある。

いらな【刺菜花芥】(名)【植物】かたらの一種。葉は大きく帯紫色で縁邊に細かい鋸齒がある。

いらな【刺菜花芥】(名)【植物】かたらの一種。葉は大きく帯紫色で縁邊に細かい鋸齒がある。

いらな【刺菜花芥】(名)【植物】かたらの一種。葉は大きく帯紫色で縁邊に細かい鋸齒がある。

いらな【刺菜花芥】(名)【植物】かたらの一種。葉は大きく帯紫色で縁邊に細かい鋸齒がある。

いらな【刺菜花芥】(名)【植物】かたらの一種。葉は大きく帯紫色で縁邊に細かい鋸齒がある。

いらな【刺菜花芥】(名)【植物】かたらの一種。葉は大きく帯紫色で縁邊に細かい鋸齒がある。

いらな【刺菜花芥】(名)【植物】かたらの一種。葉は大きく帯紫色で縁邊に細かい鋸齒がある。

いらな【刺菜花芥】(名)【植物】かたらの一種。葉は大きく帯紫色で縁邊に細かい鋸齒がある。

いらな【刺菜花芥】(名)【植物】かたらの一種。葉は大きく帯紫色で縁邊に細かい鋸齒がある。

いらな【刺菜花芥】(名)【植物】かたらの一種。葉は大きく帯紫色で縁邊に細かい鋸齒がある。

いらな【刺菜花芥】(名)【植物】かたらの一種。葉は大きく帯紫色で縁邊に細かい鋸齒がある。

いらな【刺菜花芥】(名)【植物】かたらの一種。葉は大きく帯紫色で縁邊に細かい鋸齒がある。

いらな【刺菜花芥】(名)【植物】かたらの一種。葉は大きく帯紫色で縁邊に細かい鋸齒がある。

いらな【刺菜花芥】(名)【植物】かたらの一種。葉は大きく帯紫色で縁邊に細かい鋸齒がある。

いりひたり(入浸)(名)いりびたること。
 いりびたる(入浸)(名)入浸ること。自動ラ四。水につかる。●細まらず他の家にはびつて起臥する。
 いりひやし(入拍子)(名)打ちこむ拍子。
 いりふす(入臥す)(自動サ四)寢室にはびつて臥す。
 いりぶち(入淵)(名)海河などの入江の淵。(古)
 いりふね(入船)(名)港にはびつて来る船。
 いりほが(心)心を入れ過ぎて、事實上に遠ざかったこと。●言葉の上。
 いりまい(舞)●入舞(名)入舞の舞。いるまひ。
 いりま(入前)(名)●收入。みりり。●つひ。●かり。
 いりまじ(入難)(自動ラ四)まままにまじる。入りぬれる。入り込む。
 いりまつだけ(煎松茸)(名)土鍋で松茸を水気の乾く程度につけ煎松茸を注ぎかけた食品。
 いりまめ(炒豆)(名)炒った大豆。●まめいり。●一に花が咲く(句)老朽者の形を榮えること。●洗してあるまじきこと。●の聲。
 いりみ(入身)(名)●相撲柔道で、相手の手許に身を入れて、んで相手の胸を刺す。●白刃でむかって来る人。●空手で相手にむかって来る人。●入る。●自動ラ下二。入りまじる。●紛ぬる。
 いりみだれる(入亂れる)(自動ラ下二)入りまじる。●紛ぬる。
 いりみだ(炒麥)(名)大豆を炒り焦し、碾いて粉となした。炒練を和して食ひ。又、菓子種などにする。●む。●かし。
 いりむ(入婿)(名)●婦人のある家に入つて婿となす。又、其の人。入夫。新養子。
 いりめ(入目)(名)●費用。入費。●入る方。
 いりめく(入目)●自動カ四。●いらだつ。●いらちとて心が舞う。(古語)
 いりもの(炒物)(名)●肉類などをいりつけたもの。●豆米麥などをいりたもの。

いりもみ(煎揉)(名)いりもむこと。(古語)
 いりもみじ(入紅葉)(名)最も色の濃いもみ。(古語)
 いりもむ(む)●煎揉(他動マ四)●はげしく揉む。揉み採(古語)●おしあひへあひする(古語)●是非願を叶へ給へと祈る(古語)
 いりもや(入母屋)(名)●建屋根の上部は切妻で、下方は勾配附になつてあるもの。●すくり附。
 「入母屋造」(名)●建入母屋の様式の屋根。法隆寺の金堂などは其の例である。
 いりやき(煎焼)(名)●鳥獸の肉を落り炙つたもの。
 イリヤツド(三色)(名)●文トロヤとギリヤと文學。オアキキと共にホーマーの作と稱せられてゐる。二四巻。
 いりやまた(入山形)(名)●紋所。山形を入の字のやうにして二つ重ねたもの。●移したの。いりゆ(炒湯)(名)●炒った飯を湯に入れてその香をいりゆす。●遺留(名)●死後にのこすこと。●おきりす。●一ひん遺留品(名)●おきりすた品物。●一ばん遺留分(名)●相続財産中、被相続人の自由処分を禁じ、且その相続人に遺留せられたり。即ち其の額は相続人が直系卑属の時は其の半額、さうでない時はその三分の一で、家督相続人又は遺産相続人が、他に先だつて受けるべき権利のもの。
 イリユージョニスム(Misuseism)(名)●「習外界は単に幻覚に過ぎない」といふ説。迷妄説。
 「文」幻想によつて製作する主義。幻想主義。
 イリユージョニ(illusion) (名) ●幻想。●幻覺。●妄想。錯覺。
 いりゅうど(入夫)(名)●嫁の夫として入つた。いりよ(倚間)(名)●親の喪中に起臥する假屋。(倚



(遺屋母入)

●必要。
 いりよう(入用)(名)●入費。費用。いりり。●療治り治療。●きか(醫療器械)(名)●除痰治療用の器械。
 いりよう(遺領)(名)●死後に遺した領地。
 いりよう(違令)(名)●金(令)の規定に違反すること。
 いりよく(威力)(名)●人を強制して服従させる力。●ていさ(威力偵察)(名)●敵を攻撃してその兵力を計り、敵状を探る偵察。●細。
 いりわけ(入譯)(名)●人の常に守るべき道。一定不易の道理。●かして舞臺に搬し込んで器物を造る。いり(射)(他動マ上)●矢を放つ。●はげしく照らす。
 いり(入)(自動ラ四)●はひる。●内へ行く。●至る。●必要である。●生ずてくる。●量りて出づるを制す(句)●(前記王制篇の句)●收入を考へて出費をきめる。●中。●入る。●入る(他動マ上)●内へやる。●用ひる。●費す。●間にはさま。●從へる。●納めらる。●まじり込む。●炒る。●煎る。●煎る(他動ラ四)●食物を熱し。●鍋で煮つめて水分を去る。●油などで煮かためる。●きかける。いり(入る)●(接尾)●動物の運用形に重れて、その意を強める語。●恐れ。●居る(自動マ上)●或場所に止まる。●おちつく。●動かす。●する。●位にする。●その場所に在る。●在る。●助動「て」を有する動詞の下に附いて、上の動詞の動作が完了又は継続する意を示す語。●鳥が飛んでいりる。●率る(他動マ上)●ひき

ある(率る)(古語)「ほる。腹が」。いり(遺領)(名)●同じたつた。なま。いり(衣類)(名)●きもの。衣裳。衣裳。いり(異類)(名)●類の異なるもの。●妖怪や鳥獸のやうに人類と異なるものか(海豚)(名)●動物。海豚科の海獣。長さ二米乃至五米。體形は紡錘状をなし、前肢は鰭となつてゐるが、後肢を失。背部は藍黑色、腹部は白。頭部長く上下の顎に圓錐形で先端の後方に曲つた歯がある。隊を組んで海洋を游泳する。
 いりかせ(忽)(名)●ゆるかせ。
 いりかた(入方)(名)●はひる方向。
 いりかわ(入側)(名)●入りかた。●入側。
 いりかんこく(伊兒汗國)(名)●(歴)●元の大猷の孫忽烈兀の子孫の君臨した國。其の領土はアム河から西方バシヤを中心とした地方で、ウラル湖の東方マラタラを都とした。一四〇〇年、帖木兒汗に滅ばされた。蒙古四大藩の一。
 イルクーツク(三巴圖魯)(名)●地シバヤの極東地方の大都市。バイカル湖の西六〇軒、アングラ河畔にある。帝政ロシアが東方經營の根據地と定むる。●入る。●入る方。●古語)●また。いり(入る)●(名)●兵東照出石郡出石町の北宮内にある此陣地の嶺つて。●不在なよほ。●小。●入帳(名)●入金を記して置く。いりま(入舞)(名)●いりまひ。●世の末になること。
 いりまがわ(入間川)(名)●(地)●埼玉縣入間郡にある川。秩父郡に發し、荒川に入る。全長五



(か り い)

二軒。◎埼玉縣入間郡の町。◎文雄の狂言の名。

いるまことば(入間詞)名 順序を例にし、又意を反対にいふ。いりま。いりま。

いるまよう(入間様)名 いるまことば。イルミン(名)◎兄弟の意。基督教の教團の伴天連の次に位する。

イルミネーション(Illumination)名 照明。點燈裝飾。電光飾。電飾。

イルリガートル(Irrigator)名 獨。灌漑用・除洗灌用の醫療器。桶で、藥液を容れる圓筒狀の容器と細液を導くゴム管とゴム管の先端をばさむ嘴子管とからなる。



イルリガートル

いれあける(入揚げる)名 入揚げる(他動)ガ下(一)「いれあける」の口語。「入合はさき」(他動)サ下(一)うめあはせる。

いれあわす(入合)名 いれあはすこと。いれあわせる(入合はさき)の口語。(他動)サ下(一)「いれあわす」の口語。ためしがないこと。常ならぬこと。病氣。不例。

いれい(威令)名 威力と命令と。いれい(威靈)名 おそそかで神妙(イ)しい力。威徳。

いれい(違令)名 命令に違反すること。いれい(違罪)名 法陸海軍刑法で、軍令に違反した罪。「疑。不例。

いれい(違例)名 常例に違ふこと。「疑。不例。

いれい(遠戻)名 たがひもとのこと。「疑。不例。

いれい(遺令)名 死後に遺した命令。いれい(遺令)名 昔女院崩御の際その遺令を奉聞したこと。

いれいすうはい(偉靈崇拜)名 宗(宗)偉人の神靈を崇拜すること。宗教學上神人同格の形式に屬する。

いれかえ(入代)名 いれかへること。うめあはせる。いれかえ(入代子)名 (とりかえ)の(取替)子。

いれかえる(入代へる)名 入代へる(他動)ハ下(一)「いれかえる」の口語。

いれかけ(入掛)名 相撲芝居などで、其の日の興行を中途でやめる。「入掛ける」(他動)カ下(一)「いれかけ」の口語。

いれかた(入替)名 衣服などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれかた(入替)名 衣類などを箱に入れる時に、それを包む袱紗の知しもの。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれこ(入込)名 自ら費用を負担すること。

いれは(入造)名 ぬけ穴に缺けた籠のおきなひにれは入造の飾。義飾。下駄の飾入。いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。

いれは(入造)名 義飾を入れることを義入とする。



(結元入)

いれわた (入綿) (名) 蒲團などを縫ひ、中央の裂目から綿を入れる。

いろこ (色入) (名) 服の刺繍が、光波から受ける一種の刺繍感から起る現象。その主な色は赤黄青である。①顔色。②きんじや紫色。紫(古語)③表服のにびいろ。(古語)④つやよいいろなり。⑤容貌のうるはしいこと。又その人。⑥なまけ。愛情。色情。男女の春情。⑦遊女。⑧色男。色女。情夫。情婦。⑨しな。たぐひ。⑩ささし。⑪様子。⑫髪色のうるはしいこと。⑬調子。びびき。⑭青濁。⑮上がる。(句)色が美しく染まる。⑯添ふ。(句)⑰物事が重なり加はる。⑱色が一きは青紫緑等は寒い色の如く、色彩が人に與へる感覺。⑲の象徴(句)白は高潔赤は精悍、青は沈鬱をあらはすやうに、色が精神状態を象徴すること。⑳の白いは七難隱す(句)女の顔色の白いは、醜態をも美しく見せる。㉑の無い酒(句)酌をする女でない酒。㉒は思案の外(句)男女の情事は常識では判断することが出来ない。㉓一深し(句)容貌が美しい。㉔も香もあり(句)秀美しうかしく有徳なるにいふ。㉕品を替ふ(句)種別に工夫をめぐらす。㉖一を替す(句)類の様子を正しくする。㉗一を作る(句)類に化粧を施す。㉘一を附ける(句)お愛想に幾らかのものを出す。㉙一を取る(句)いりどる。㉚一を作(す) (句)怒つて顔色をへがる。

いろ (倚態) (名) 色。倚間。「一世色」。

いろ (愛) (接頭) 親しみ愛する意の語。「一れ」。

いろあひ (色合) (名) 色の工合。色の程度。いろあひ。色調。「かた」。

いろあく (色悪) (名) 芝居で、容貌の端曲なくいろあぐ。(古語)②(色揚ぐ) (他動、方下)「こくする」と。

いろあけ (色揚) (名) 古い色を染め直して美いろあそび(色遊) (名) 遊郭で遊ぶこと。

いろあそび (色遊) (名) 色の美しさを

争ふこと。⑤互に美談を競ふこと。⑥痴情の爲のあそび。

いろあわい (色合) (名) (いろあひ)。

いろい (掃弄) (名) いろふこと。かかりあひ。干渉。取扱。②(古語)。

いろいた (色板) (名) 色調に用ひる版木。②種の形の板に種種の色をつけたもの。

いろいと (色練) (名) 種種の色に染めた練。色染の練。②(色練) (名) 三味線。③味線。④色練の板一枚毎に種種の色を練や革で、一段毎に織したのもの。⑤(古語)⑥(古語)⑦(古語)⑧(古語)⑨(古語)⑩(古語)⑪(古語)⑫(古語)⑬(古語)⑭(古語)⑮(古語)⑯(古語)⑰(古語)⑱(古語)⑲(古語)⑳(古語)㉑(古語)㉒(古語)㉓(古語)㉔(古語)㉕(古語)㉖(古語)㉗(古語)㉘(古語)㉙(古語)㉚(古語)㉛(古語)㉜(古語)㉝(古語)㉞(古語)㉟(古語)㊱(古語)㊲(古語)㊳(古語)㊴(古語)㊵(古語)㊶(古語)㊷(古語)㊸(古語)㊹(古語)㊺(古語)㊻(古語)㊼(古語)㊽(古語)㊾(古語)㊿(古語)

いろえ (愛兒) (名) (いろえは接頭語) 兄を親しんで呼ぶ語(古語)。

いろえ (美) (名) (いろえは接頭語) 兄を親しんで呼ぶ語(古語)。

いろえ (烏帽子) (名) 銜色の烏帽子。

いろえんび (色鉛筆) (名) 埋土白墨等に顔料質を混して忠とした鉛筆。①が(色鉛筆) (名) 色鉛筆で書いた書。②情夫。みそか男。みそか女。③美人。④情婦。⑤(古語)⑥(古語)⑦(古語)⑧(古語)⑨(古語)⑩(古語)⑪(古語)⑫(古語)⑬(古語)⑭(古語)⑮(古語)⑯(古語)⑰(古語)⑱(古語)⑲(古語)⑳(古語)㉑(古語)㉒(古語)㉓(古語)㉔(古語)㉕(古語)㉖(古語)㉗(古語)㉘(古語)㉙(古語)㉚(古語)㉛(古語)㉜(古語)㉝(古語)㉞(古語)㉟(古語)㊱(古語)㊲(古語)㊳(古語)㊴(古語)㊵(古語)㊶(古語)㊷(古語)㊸(古語)㊹(古語)㊺(古語)㊻(古語)㊼(古語)㊽(古語)㊾(古語)㊿(古語)

いろがまし (色紙) (名) 色紙の紙。

いろがみ (色紙) (名) 色紙の紙。

いろがらす (色硝子) (名) 着色した硝子。金屬酸化物金屬鹽類又は金屬の細粉を硝子の原料と共に溶かして製する。

いろがわ (色革) (名) (そめがわ) (染革)。

いろかわら (色河原) (名) (地) 京都四條河原。昔此處に芝居小屋があり、男色を賣る若衆があったらういふ。

いろがわり (色變) (名) 色のかはったこと。又、その物。②種類のかはったこと。又、その物。③(古語)④(古語)⑤(古語)⑥(古語)⑦(古語)⑧(古語)⑨(古語)⑩(古語)⑪(古語)⑫(古語)⑬(古語)⑭(古語)⑮(古語)⑯(古語)⑰(古語)⑱(古語)⑲(古語)⑳(古語)㉑(古語)㉒(古語)㉓(古語)㉔(古語)㉕(古語)㉖(古語)㉗(古語)㉘(古語)㉙(古語)㉚(古語)㉛(古語)㉜(古語)㉝(古語)㉞(古語)㉟(古語)㊱(古語)㊲(古語)㊳(古語)㊴(古語)㊵(古語)㊶(古語)㊷(古語)㊸(古語)㊹(古語)㊺(古語)㊻(古語)㊼(古語)㊽(古語)㊾(古語)㊿(古語)

いわきぼらうしゅ 〔岩擬寶珠〕 (名) 種
百谷科の多年生草本。たうきぼらうしの變種。
根茎太く横匍、葉は菱葉状に類して短小。夏、花梗
を抜き、白色に紫華ある花を開く。①イキのしたの
異稱。

いわきりそう 〔岩切草〕 (名) 苦苣苔科の
多年生草本。葉は根生で卵形、鈍鋸歯。葉柄を
有し、初夏、花茎を抜き、淡紫色漏斗状の花を開く。
いわきんばい 〔岩金梅〕 (名) 種 蓼科の
多年生草本。高さ一〇〇餘釐、葉は三小葉から成る複
葉で長き葉柄を有する。春季、黄色の小花を葉腋に
開く。

いわく 〔イワク〕 (自動、カ下) 驚きあわてる。
いわく 〔イワク〕 (種) 童く(自動、カ下)
いとけな、さまない。(古語)
いわく 〔イワク〕 (名) わけ。仔細。事情。理由。
いわく 〔イワク〕 (名) 一言ひ難し(句) (孝公孫丑上篇に出る)
調ではいひにくい。

いわく 〔イワク〕 (居分) 他動、カ下
いわく 〔イワク〕 (岩崩) 名 岩のくづれること、其の
場所古語一の(岩崩)の枕 梅ゆくの枕詞
いわくすぶね 〔岩樽船〕 (名) 樽でつづいた
堅固な船、神代に用いた。(古語)

いわく 〔イワク〕 (名) おく(古語)
いわく 〔イワク〕 (名) 岩國縮(名) 山口縣岩
國町及び玖波村近から産する木綿織、夏の單
衣地とする。
いわく 〔イワク〕 (名) 岩國町(名) 地出口
縣玖波の町。岩國縮等を産する。錦帯橋は岩川
に架けられ、長さ三三〇米。

いわく 〔イワク〕 (名) 岩國半紙(名) 山口
縣岩國地方から産する精製の中紙。天正年間玖波
郡小瀬村の長、大郎右衛門の製紙に傳るとす。
いわく 〔イワク〕 (名) 横木を入れた、
の字の形に似せた筒。
いわく 〔イワク〕 (名) 庭園に於ける岩の配

置。岩が組みあつたやうになつてゐる所。①種
いわく 〔イワク〕 (名) 夏雲。岩石の狀に似
てゐるがらひ。
いわく 〔イワク〕 (名) 夏雲。岩石の狀に似
てゐるがらひ。

いわくら 〔岩座磐座〕 (名) 神の御座。
いわくら 〔岩倉〕 (名) 神の倉。①地京
都市上京區岩倉町。藤原藤房の運世地。又、岩倉具親
の閉居した地として名高い。歌枕の一。

いわくらし 〔岩刺〕 (名) 歌枕の一。
明治維新の功臣。政治家。關川張氏の子、岩倉具慶
の養子。右大臣に任ぜられ、明治十六年薨。年五十
九。子具定、父の功によつて公爵を授けられた。
又、その度也。

いわけなし 〔岩無〕 (名) 岩のくづれないこと。
又、その度也。
いわけなし 〔岩無〕 (名) 岩のくづれないこと。
又、その度也。

いわさき 〔岩崎〕 (名) 岩の突きでたみき。
いわさき 〔岩崎〕 (名) 岩の突きでたみき。
いわさき 〔岩崎〕 (名) 岩の突きでたみき。
いわさき 〔岩崎〕 (名) 岩の突きでたみき。

いわさき 〔岩崎〕 (名) 岩の突きでたみき。
いわさき 〔岩崎〕 (名) 岩の突きでたみき。
いわさき 〔岩崎〕 (名) 岩の突きでたみき。
いわさき 〔岩崎〕 (名) 岩の突きでたみき。

群集して海の上層を游泳する。燒又は煮て食用とし、
又、油漬乾鮓とする。一あぶら(名) 鮓油(名) 鮓
から採取した油で、不快臭があつて褐色である。
いあみ 〔鮓網〕 (名) 鮓を捕らるに用ひる網。同取網。鮓引
網。鮓網。持流網。刺網等の種類がある。一かす
①鮓網に胸に油と水分をとる。乾かしたものを
肥料とする。一くじら(名) 鮓網の網。體長約
四十餘釐の群集するに集まる。背
部の色は暗灰色で腹部の色は淡い。
咽から胸にかけて乳白色で、腹側
に一條の灰色帯狀斑がある。腹腹は
帯青灰色。頭上の噴水孔から噴水す
ること、高さ三四米。春季我が國
の近海に來る。捕獲の目的は油を採
取して工業用とする爲である。



〔鮓網〕

いあし 〔鮓網〕 (名) 鮓の産卵する爲に集まる頃の
鱗の紋狀の雲。一捕進(名) 鮓のやうな
つらぬ魚で精進落するものは馬鹿鹿しいといふ
所から、つらぬを相手として不義の名を取ること
の愚かなるをいふ。一の頭も信心からか
つたらぬのも信心すれば光を出すやうに見える。一
至誠は大切である。〔鮓網〕 がんえん。

いあし 〔鮓網〕 (名) 鮓の産卵する爲に集まる頃の
鱗の紋狀の雲。一捕進(名) 鮓のやうな
つらぬ魚で精進落するものは馬鹿鹿しいといふ
所から、つらぬを相手として不義の名を取ること
の愚かなるをいふ。一の頭も信心からか
つたらぬのも信心すれば光を出すやうに見える。一
至誠は大切である。〔鮓網〕 がんえん。

いあし 〔鮓網〕 (名) 鮓の産卵する爲に集まる頃の
鱗の紋狀の雲。一捕進(名) 鮓のやうな
つらぬ魚で精進落するものは馬鹿鹿しいといふ
所から、つらぬを相手として不義の名を取ること
の愚かなるをいふ。一の頭も信心からか
つたらぬのも信心すれば光を出すやうに見える。一
至誠は大切である。〔鮓網〕 がんえん。

びつめる網。一の(岩網)の枕(名) 若か(ヘリ)の
枕詞。
いあす 〔岩網〕 (名) 若か(ヘリ)の
枕詞。
いあす 〔岩網〕 (名) 若か(ヘリ)の
枕詞。

いあす 〔岩網〕 (名) 若か(ヘリ)の
枕詞。
いあす 〔岩網〕 (名) 若か(ヘリ)の
枕詞。

いあす 〔岩網〕 (名) 若か(ヘリ)の
枕詞。
いあす 〔岩網〕 (名) 若か(ヘリ)の
枕詞。

いあす 〔岩網〕 (名) 若か(ヘリ)の
枕詞。
いあす 〔岩網〕 (名) 若か(ヘリ)の
枕詞。

いあす 〔岩網〕 (名) 若か(ヘリ)の
枕詞。
いあす 〔岩網〕 (名) 若か(ヘリ)の
枕詞。

いあす 〔岩網〕 (名) 若か(ヘリ)の
枕詞。
いあす 〔岩網〕 (名) 若か(ヘリ)の
枕詞。



〔草 岩〕

リスの一大支隊である。一あひか【印度藍】

【イデオロギ】一きようざ【印度教】(名)

【宗紀元前八世紀の頃クマヨウサンカラ等の遊羅門によって唱道された多神教の宗教で、其の教理は信仰・世俗的で、一般民衆の信奉を得、佛教の勢力を駆逐してこれに代り、十九世紀に入って更に盛麗の兆あらはれ、近時ゲルチンが出て全印度人の信望をつたひである。一ゲルマンゴク【印度語族】(名) Indo-Germanic language) 印度語族。東は印度から西は大西洋沿岸に至り北はシベリアナウグヤより南は地中海に亘る地域を占めた言語で、其の言語の最東部の代表インド人及び最西部の代表ゲルマン人の名を取って名づけた。形態的には屈折語の特長とする。現存する者は、インドイラン語・バルトスラヴ語・ゲルト語・アルムニヤ語・ギリシ語・ゲルマン語・ケルト語・イタリア語である。アリアン語。印欧語族。

インドアースポーツ【Indoor sports】(名) 室内競技の總稱。屋内スケート・卓球・撞球の類。(アクトアースポーツの對)

いんととう【淫蕩】(名) はんを彫る刀。

いんととう【淫蕩】(名) 酒色に耽ける。

いんととう【淫蕩】(名) 一ふんがく【淫蕩文學】(名) 【文】花柳界の情事や男女間の猥褻な方面を題材とし、色慾的の描寫を主とする文學。

いんととう【咽喉】(名) 【生】上方は鼻腔に、前方は口腔に、下方は食道の上端に發する漏斗状な部分。

いんととう【咽喉炎】(名) 【醫】咽喉に起る炎症。一カタル【咽喉加答兒】(名) 【醫】咽喉はれて聲のから病。即ち咽喉結核の炎症。

いんどろつ【引落】(名) ①導くこと。てびき。②死を葬る前に、僧侶が棺前に立って轉送・閉棺を説くこと。③送る衆生を導いてさとり道の道にさせること。④せき引落石【名】大阪市天王寺西門石鳥居の南手にある石で、この石の邊に葬送の柩を置き、無常院の鐘を撞くと、至徳太子が同向して、亡靈を葬送し給ふといふ。一を渡す【句】

死者に引導を與へること。④最後の決意を宣告してあきらめさせること。

いんととうか【隱頭花】(名) 【種】いちじくの花のつるに、花軸の頂端が回入するの内に多くの花をつける。

いんととく【隱匿】(名) 隠すこと。秘密にすること。かくまふこと。①心。②【隱匿した】(名) 心中に藏する罪惡。③心。④【隱匿した】(名) 【法】他人の所有物を隠したることによって成立する犯罪。

いんととく【陰德】(名) 人に知らぬやうに施す恩徳。一あれば陽報あり【句】(淮南子の人間訓の句陰徳を積んだ人には、必ずよい報がある。

いんととく【印度支那】(名) 【地】アジア大陸の東南部に突出する一大半島で、印度と支那の中間に位置するから名づける。政治上では、フランス領印度支那、ジャバ、スマタラ、マラ、イ、聯邦・ビルマ、海峽植民地に分かれてゐる。面積約一九六萬方呎。

いんどら【Indra】(因陀羅) (名) 【宗】印度吠陀に關與し、後には偉大な勇武軍神となつた。身體榮耀は悉く茶鬘れ、四手で、電戟、弓箭、網を武器とし、戰車を駕して空中を疾驅し、猛威を振ふ。其の居はヒマラヤの北麓山と信ぜられた。

いんとら【Intolerance】(名) 狭量。頑冥。特に宗教上、他説に耳を傾けぬこと。

いんとら【Introspection】(名) 内觀。内省。反省。

いんとら【Introduction】(名) 序緒。序論。入門書。前奏曲。紹介。紹介状。

いんどろつ【Indrotp】(名) インドロ。野球で投手の投じた球が、ベースの邊で急に下りながら打者の近くを通るもの。

いんとら【隱遁】(名) 世事をすて隠れること。

いんとら【Inner life】(名) 内面生活。

精神生活。

いんない【院内】(名) 貴族院又は衆議院の内閣。一か【院内幹事】(名) 【政】衆議院、其の政黨の議案其他の事務を取扱ふもの。一【院務】(名) 政黨議院内に於けるその政黨員に關する事務を總へる。一【院務】(名) 衆議院内閣、その政黨の議員を統率し總へるもの。

いんにく【印肉】(名) 印をすに用ひる肉。もぐ色には朱黒や油松脂・白蠟をまて着色したもの。色は朱黒や油松脂・白蠟をまて着色したもの。

いんにん【印忍】(名) 苦痛をらへて、表面に合の同態。フラスコ・インギンガは第一回。

いんねん【因縁】(名) 何事も因縁によること。

いんのうら【陰養】(名) 【生】陰室の後面に垂れた糞狀のもので、その中に糞丸があつて精液を分泌する。ふぐり。さんたま。

いんのとく【大業】(名) いぬのこ。小兒が夢に

いんのこ【犬子】(名) いぬのこ。小兒が夢に

いんのこ【院御所】(名) 法皇又は上皇の御所。

いんのしょう【院庄】(名) 【地】岡山縣吾田郡にあつた地。今津山市に入る。元弘二年三月後醍醐天皇が遷都に連率の途行在所を置かれ、兒島高徳が車駕を停はうとして成らず、櫻樹を削つて、天皇が空幻時非無范龜の詩を書いたと傳はれる所。

いんせんと【Innocent】(名) 形。潔白。無

いんのちやう【院應】(名) 上皇又は法皇の政治なまる所。

いんばい【淫賣】(名) 色賣。又其の女。

いんばい【淫賣】(名) 色賣。又其の女。

いんばい【淫賣】(名) 色賣。又其の女。

いんばい【淫賣】(名) 色賣。又其の女。

いんばい【淫賣】(名) 色賣。又其の女。

いんばい【淫賣】(名) 色賣。又其の女。

いんばい【淫賣】(名) 色賣。又其の女。

いんばい【淫賣】(名) 色賣。又其の女。

いんばい【淫賣】(名) 色賣。又其の女。

いんばい【淫賣】(名) 色賣。又其の女。

いんばい【淫賣】(名) 色賣。又其の女。

いんばい【淫賣】(名) 色賣。又其の女。

いんばい【淫賣】(名) 色賣。又其の女。

いんばい【淫賣】(名) 色賣。又其の女。

いんばい【淫賣】(名) 色賣。又其の女。

いんばい【淫賣】(名) 色賣。又其の女。

いんばい【淫賣】(名) 色賣。又其の女。

いんばい【淫賣】(名) 色賣。又其の女。

女。姉妹以外の密淫賣の女。一や【淫賣屋】(名) 淫賣屋をかかへておく家。一やど【淫賣宿】(名) 淫賣屋が客をよむ家。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【伊】(名) 【色】異色の種種の材料を煉りかへして固めること。海城細工の類。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

いんばい【印匣】(名) 印をなでておく箱。

う (ウ)

う 五十音圖の行、第三の音。咽喉から鼻腔への通路を開き、上唇と下歯とを接近させ、唇を固く突らせ、舌の後面を高めて發する母音。『字の章聲』

う (兔・兎) (名) (動) うさぎ。時刻の。今午の十二支の一。方角の一。東方。『昔』

う (卵) (名) 『昔』。時刻の。今午の十二支の一。方角の一。東方。『昔』

う (鶴・鶴) (名) (動) 鶴科の鳥類の總稱。形鳥に似て大きく、色黒く背と尾とは紫緑・青緑色の光澤を有する。嘴長く末端曲る。河海・湖沼に棲息して魚を捕へ、しまつどり。

う (鴛) (名) (動) 鴛鴦の鳥類の總稱。形鳥に似て大きく、色黒く背と尾とは紫緑・青緑色の光澤を有する。嘴長く末端曲る。河海・湖沼に棲息して魚を捕へ、しまつどり。

う (鴛) (名) (動) 鴛鴦の鳥類の總稱。形鳥に似て大きく、色黒く背と尾とは紫緑・青緑色の光澤を有する。嘴長く末端曲る。河海・湖沼に棲息して魚を捕へ、しまつどり。

う (鴛) (名) (動) 鴛鴦の鳥類の總稱。形鳥に似て大きく、色黒く背と尾とは紫緑・青緑色の光澤を有する。嘴長く末端曲る。河海・湖沼に棲息して魚を捕へ、しまつどり。

う (鴛) (名) (動) 鴛鴦の鳥類の總稱。形鳥に似て大きく、色黒く背と尾とは紫緑・青緑色の光澤を有する。嘴長く末端曲る。河海・湖沼に棲息して魚を捕へ、しまつどり。

う (鴛) (名) (動) 鴛鴦の鳥類の總稱。形鳥に似て大きく、色黒く背と尾とは紫緑・青緑色の光澤を有する。嘴長く末端曲る。河海・湖沼に棲息して魚を捕へ、しまつどり。

う (鴛) (名) (動) 鴛鴦の鳥類の總稱。形鳥に似て大きく、色黒く背と尾とは紫緑・青緑色の光澤を有する。嘴長く末端曲る。河海・湖沼に棲息して魚を捕へ、しまつどり。

う (鴛) (名) (動) 鴛鴦の鳥類の總稱。形鳥に似て大きく、色黒く背と尾とは紫緑・青緑色の光澤を有する。嘴長く末端曲る。河海・湖沼に棲息して魚を捕へ、しまつどり。



(鶴)

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

最大の宮殿。一時はカトリック教に世界文化の中心と稱せられた。殿内にはラファエル・ケラランジェロ等巨匠の名畫がある。

ヴァニティー (Vanity) (名) 虚榮心。虚榮。『ケース (Vanity-case) (名) 化粧箱。』

ヴァニティー (Vanity) (名) 虚榮心。虚榮。『ケース (Vanity-case) (名) 化粧箱。』

ヴァニティー (Vanity) (名) 虚榮心。虚榮。『ケース (Vanity-case) (名) 化粧箱。』

ヴァニティー (Vanity) (名) 虚榮心。虚榮。『ケース (Vanity-case) (名) 化粧箱。』

ヴァニティー (Vanity) (名) 虚榮心。虚榮。『ケース (Vanity-case) (名) 化粧箱。』

ヴァニティー (Vanity) (名) 虚榮心。虚榮。『ケース (Vanity-case) (名) 化粧箱。』

ヴァニティー (Vanity) (名) 虚榮心。虚榮。『ケース (Vanity-case) (名) 化粧箱。』

ヴァニティー (Vanity) (名) 虚榮心。虚榮。『ケース (Vanity-case) (名) 化粧箱。』

ヴァニティー (Vanity) (名) 虚榮心。虚榮。『ケース (Vanity-case) (名) 化粧箱。』

ヴァニティー (Vanity) (名) 虚榮心。虚榮。『ケース (Vanity-case) (名) 化粧箱。』

ヴァニティー (Vanity) (名) 虚榮心。虚榮。『ケース (Vanity-case) (名) 化粧箱。』

から、うつりかはつて、しばらくも定住せぬこと。世事の移りかはりやすくはかないこと。『ほう』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

う (有) (名) (質) 有る。天地間の實在。『生死の相續。又、十二因縁の一。愛慾の煩惱に依つて善惡の行業を後生に續生させること。』

うそつけく **【植附く】** (他動、カ下) 草木を移し植ふこと。ひ立たす。
【うそつけ】 (植附) (名) ①うまつけること。②うそ。③一半作(植附) (句) 田植がすれば、收穫の半分は保護されたも同様であるの意。
うそつけける **【植附ける】** (他動、カ下) (うそつけく) の口語。【植附ける】の指環。
ウエディングリング **【Wedding-ring】** (名) うそつけぼね **【上局】** (名) ①宮中の奥御殿の室。②局の對。③宮中の女房の請附。(以上古語)。
うそえなし **【上無し】** (形) ①「ろ纏」のしがない。②上である。③限がない。④「ろ纏」以上の意。
うそえなわ **【植繩】** (名) 移植の時に、照單に用ひウエニス **【Venice】** (名) 【地イター】北島の要塞市で、ヴェニス稱に違ひ。町は百十七の小島の上にあつて、百五十の運河が四通八達してゐる。市内の交通は主として小舟と小乗船艇により、小舟はゴンドラと呼び、船客を運ぶ。市内にサンマルコ寺院ナボリ守サンエールモ城国立博物館等がある。一はけんちく **【一派建築】** (名) 【地イター】圓ルネサンス建築の一派で、ヴェニスを中心として、初期はゴシック式であつたが、後、正面が平坦で凹凹のないものを用ひられ、優美輕快・華麗な美学的建築となつた。
ウエニス **【ヴェニス】** (一の商人)

【Merchant of Venice】 (名) 【文】マーケツス **【ヒヤンの喜劇】** アントニオと守城奴シヤロコックとを訴訟事件の中にシヤロコックや奇習に富む若い女ボーシヤの性格描寫が最も巧みならはれ、韻文と散文、夢幻と現實とを點綴して、渾然たる劇を構成してゐる。一五九四年發表。坪内逍遙の翻譯があつた。
うそえの **【上野野】** (名) 【地】東京市下各區にある公園。大正十三年、帝室が、東京市に御下賜となつた。櫻花の名所。寛永寺、東宮御所、帝室博物館、帝國學士院、東京美術學校、東京音樂學校、東京科學博物館、東京府美術館等がある。又、公園の北端には東北、信越、常磐山手線等の鐵道線がある。一せん

そう **【上野戦争】** (名) 【歴】明治元年四月、將軍川慶喜の藩軍を悦ばぬ輩が、上野公園に輪王寺宮を築じて、彰義隊と稱して官軍に反抗した。古語。
うそえのきぬ **【表衣】** (名) 【ほう】襖。古語。
うそえのはかま **【表袴】** (名) 束帯時に大口の上にはく袴。色は表白、裏黒で、地質は平絹綾で、表に紋がある。
うそえひげ **【植鬚】** (名) 能の假面などに、毛を植へて作る鬚。
うそえひと **【上人】** (名) (てんじょう) 殿上人。
うそえびと **【植人】** (名) ひじりかつてゐる人。
うそえびと **【植人】** (名) 植物をうまつける人。
うそえびと **【植人】** (名) 自動、バ上(上) 上品になる。上つ方らしくなる。(古語)。
うそえびと **【上臥】** (名) 殿中の宿直。(古語)。
ウエプスター **【Weber】** (名) 【人】Joan Weber **【英國】** の劇作家。シークスセヤに比肩する作家。「白鳥」モルフィの公爵夫人等の著がある。「二天宮」(The White Swan) アメリカの辭書編纂者。一八二八年辭書を編纂した。これが有名なウエプスター辭典である。又、氏名を作つたスベリングベックも好評を得た。(一七九三)。
うそえぼろ **【植痘瘡】** (名) 【種痘】。
うそえまわもの **【上町者】** (名) 堅氣者。几帳面な人。
うそえみだ **【上御臺】** (名) 幕府となつた御臺とめり少年。
うそえもの **【植物】** (名) ①しくぶつ。②野菜。うそえもん **【右衛門】** (名) 右衛門町長官。一のじん **【右衛門陣】** (名) うそえもん **【右衛門】** (名) 一のたいぶ **【右衛門大夫】** (名) 右衛門の對して五右衛門。一ののふし **【右衛門】** (名) 右衛門下生。右衛門のふし **【右衛門】** (名) えもん **【右衛門】** (名) 旗出し。幕下。

ウエリントン **【Arthur Wellesley Wellington】** (名) 【人】イギリスの名將政治家。印度、ケルト、ガル、スペインに活躍して、職功を樹て、一八一五年聯合軍總帥となり、再興の拿破崙をウエリントンに破り、英名を世界に轟かした。功を以て公爵となる。後、政界に入つて保守派の首領となり、内閣を組織した。(一七九三)。
うそえ **【自動】** (自動、ワ下) (うそえ) の口語。
うそえ **【植る】** (他動、ワ下) (うそえ) の口語。
ウエルカム **【Welcome】** (名) 歓迎。挨拶。
ウエルサイエ **【Versailles】** (名) 【地】フランス。セーヌ上流の都府。パリの南西二六軒にある。一きゆうてん **【一宮殿】** (名) ヴェルサイエにある著名の大宮殿。ルイ十四世の計畫、ルソーによるもので、一六六四年著手し、一七一四年完成した。豪華・華麗の意匠裝飾は、ルイ十四世と稱せられる。その鏡の間は、講和會議が行はれたことによつて名高い。
【一平和條約】 (名) 【歴】歐洲大戦は、一九一八年十一月休戦となり、翌年一月、ヴェルサイエに於いて講和會議が開かれ、四箇月の討議の後、遂に平和條約案を作成し、六月二十八日ヴェルサイエ宮殿で、日米英・佛伊外十二箇國とドイツとの調印を終つた。同條約は十五箇年四十年の附屬をもち、成り、ドイツに對する平和條約のみならず、恒久平和の策を企圖してゐる。
ウエリス **【Herbert George Wells】** (名) 【人】イギリスの小説家・評論家・歴史家。文學者たるは勿論、他面生物學者・物理學者・哲學者・社會學者・歴史學者で、その知識の上に理論と機械發明の進歩に基礎を置く小説を書き、且物理的機械科學と經濟學との利用によつて社會改良の理想地に至らうとしてゐる。その著に「タイムマシン」空中戦争「世

界文化史大系「生命の科學等がある。(一八九六)。
ヴェルダン **【Verdun】** (名) 【地】フランスの要塞市で、ミーズの首府。歐洲大戦に際し、一九一六年二月から、獨逸兩軍の激戦地として有名である。一じょうやく **【一條約】** (名) 【歴】西曆八四三年、チャールス大帝の孫ロタールイチャールが、この地に會つて遺領を三分する事を定めたる條約。
ウエルテル **【Werthers】** (名) 【文】若きウエルテルの悲しき (Die Leiden des jungen Werthers) 一テ作の書簡體の小説。情熱的なドイツ文學の價値を世界的とした、意匠的意義ある作で、主人公若き直東ウエルテルと屋友ロッテとの悲戀物語。一七七四年刊。
ヴェルハーレン **【Emilie Verhaeren】** (名) 【人】ベルギーの詩人。マーテルリックと共にベルギー興文學を代表する方、プロレタリア詩人。現實的傾向を有したが、後、神祕主義に入り、又、厭世思想を有してゐたが、漸次光明的人生觀に向つた。代表的作品に「フランドル雜詠」午後「黎明」條道院」等がある。(一九一七)。
ヴェルモット **【佛 Vernouth】** (名) 葡萄酒の原料に香料を加へた酒、味酸に似た苦みがある。イターリ及フランスで製造されてゐる。
ヴェルレーヌ **【Paul Marie Verlaine】** (名) 【フランス】の詩人。象徵詩派の柱石。其の作品に「野の調」華やかな樂句等がある。(一八六四)。
ヴェロナ **【Verona】** (名) 【藥】強壯劑藥。無色の結晶。無臭で、稍苦味を呈し、水に僅かに溶解する。一回量は〇・五以下。
うそえら **【有縁】** (名) 【佛】縁に縁のまゝ。
うそえん **【鳥縁】** (名) (兩字の字形が似てゐて誤り易いから) 文字の縁。
うそえん **【遷】** (名) (より) といふこと。てゐる。たまたま。道路の曲つてて遠いこと。

うそえん **【うそえん】**

うそえん **【うそえん】**

うそえん **【うそえん】**

うそえん **【うそえん】**

うそえん **【うそえん】**

うおー(魚)(名) 動魚類の總稱。脊椎動物の一類。すべて水中に生活し、體は水に抵抗を少なくするやうに多少個層な紡錘形のものゝ大部を占め、背鰭、臀鰭、尾鰭、胸鰭、腹鰭がある。胸鰭、腹鰭は體の平衡を保つ爲のものゝ、運動には尾鰭を用ひる。又、鰭があつて皮膚を保護してゐる。呼吸には鰓をもち、鰓の體内に浮囊を具し、水中に於ける體の浮力の調節を司る。
いち(魚)市(名) うをいち。
いち(魚)市場(名) 魚を賣する市場。

し(魚)河(名) 魚市場のある河岸。
ぎれ(魚)切(名) 不適の魚。魚の品切となる。
(魚)魚(名) 釣の鏡合時代に起つた、魚商人の同業組合。
(北)天(の)星(座) 獸帯十二星座の十二番目。
(魚)油(名) いかに、魚肝油。
(魚)油(名) 魚類を原料として製し、煉油。
(魚)餅(名) 魚の肉を原料として煎餅の形に製したもので、吸物などの材料に用ひる。
(魚)類(名) 魚類を載せて置く棚。
(魚)類を賣する家。
(魚)類(名) 魚類を載せて置く棚。
(魚)類(名) 魚類の骨、皮などから製した餅。
(魚)類(名) 魚類の骨、皮などに生ずる神経の乳糖起の硬化し發育したものの。魚の目のやうに見えるから。
(魚)類(名) 手足などから製した餅。

(魚)類(名) 魚が串にさしたやうに續いて並ぶこと。
(魚)類(名) 魚目。
(魚)類(名) 魚類の骨、皮などから製した餅。
(魚)類(名) 魚類の骨、皮などに生ずる神経の乳糖起の硬化し發育したものの。魚の目のやうに見えるから。
(魚)類(名) 手足などから製した餅。

魚(魚)目(名) 魚の所在又は魚の群り來る状況を見分けるといふ。
(魚)目(名) 魚類を載せて置く棚。
(魚)目(名) 魚類の骨、皮などから製した餅。
(魚)目(名) 魚類の骨、皮などに生ずる神経の乳糖起の硬化し發育したものの。魚の目のやうに見えるから。
(魚)目(名) 手足などから製した餅。

その境通に心づくぬこと。
(魚)類(名) 魚類を載せて置く棚。
(魚)類(名) 魚類の骨、皮などから製した餅。
(魚)類(名) 魚類の骨、皮などに生ずる神経の乳糖起の硬化し發育したものの。魚の目のやうに見えるから。
(魚)類(名) 手足などから製した餅。

ウォーク [Walk] (名) 歩行。散歩。歩道遊歩道。
ウォークスペース [Workspace] (名) 充満な仕事をするに堪ふる。
ウォータ [Water] (名) 水。
ウォータ [Water] (名) 水。
ウォータ [Water] (名) 水。

ウォータ [Water] (名) 水。
ウォータ [Water] (名) 水。
ウォータ [Water] (名) 水。
ウォータ [Water] (名) 水。
ウォータ [Water] (名) 水。

ウォータ [Water] (名) 水。
ウォータ [Water] (名) 水。
ウォータ [Water] (名) 水。
ウォータ [Water] (名) 水。
ウォータ [Water] (名) 水。

ウォッシュ [Wash] (名) 洗滌用の給狀結核。
ウォッシュ [Wash] (名) 洗滌用の給狀結核。
ウォッシュ [Wash] (名) 洗滌用の給狀結核。
ウォッシュ [Wash] (名) 洗滌用の給狀結核。
ウォッシュ [Wash] (名) 洗滌用の給狀結核。

ウォッシュ [Wash] (名) 洗滌用の給狀結核。
ウォッシュ [Wash] (名) 洗滌用の給狀結核。
ウォッシュ [Wash] (名) 洗滌用の給狀結核。
ウォッシュ [Wash] (名) 洗滌用の給狀結核。
ウォッシュ [Wash] (名) 洗滌用の給狀結核。

ウォッシュ [Wash] (名) 洗滌用の給狀結核。
ウォッシュ [Wash] (名) 洗滌用の給狀結核。
ウォッシュ [Wash] (名) 洗滌用の給狀結核。
ウォッシュ [Wash] (名) 洗滌用の給狀結核。
ウォッシュ [Wash] (名) 洗滌用の給狀結核。

ウォッシュ [Wash] (名) 洗滌用の給狀結核。
ウォッシュ [Wash] (名) 洗滌用の給狀結核。
ウォッシュ [Wash] (名) 洗滌用の給狀結核。
ウォッシュ [Wash] (名) 洗滌用の給狀結核。
ウォッシュ [Wash] (名) 洗滌用の給狀結核。

うか(魚) (名) 幼蟲が蛭となり、後羽を生じて成蟲となる。
(魚) (名) 人間に羽が生えて空中を飛行する仙人となる。
(魚) (名) 人間に羽が生えて仙人となつて天に登ること。
(魚) (名) 鳥を飼ひながらして貼をとらせること。
(魚) (名) 鵜飼を業とする人。
(魚) (名) 謡曲の名。甲斐石和の川。
(魚) (名) 鵜飼の曲。日蓮上人といふ物。
(魚) (名) 鵜飼する時に焚く篝火。
(魚) (名) 鵜飼する時に焚く篝火。
(魚) (名) 鵜飼する時に焚く篝火。



うか (魚) (名) 幼蟲が蛭となり、後羽を生じて成蟲となる。
(魚) (名) 人間に羽が生えて空中を飛行する仙人となる。
(魚) (名) 人間に羽が生えて仙人となつて天に登ること。
(魚) (名) 鳥を飼ひながらして貼をとらせること。
(魚) (名) 鵜飼を業とする人。
(魚) (名) 謡曲の名。甲斐石和の川。
(魚) (名) 鵜飼の曲。日蓮上人といふ物。
(魚) (名) 鵜飼する時に焚く篝火。
(魚) (名) 鵜飼する時に焚く篝火。
(魚) (名) 鵜飼する時に焚く篝火。

うか (魚) (名) 幼蟲が蛭となり、後羽を生じて成蟲となる。
(魚) (名) 人間に羽が生えて空中を飛行する仙人となる。
(魚) (名) 人間に羽が生えて仙人となつて天に登ること。
(魚) (名) 鳥を飼ひながらして貼をとらせること。
(魚) (名) 鵜飼を業とする人。
(魚) (名) 謡曲の名。甲斐石和の川。
(魚) (名) 鵜飼の曲。日蓮上人といふ物。
(魚) (名) 鵜飼する時に焚く篝火。
(魚) (名) 鵜飼する時に焚く篝火。
(魚) (名) 鵜飼する時に焚く篝火。

うか (魚) (名) 幼蟲が蛭となり、後羽を生じて成蟲となる。
(魚) (名) 人間に羽が生えて空中を飛行する仙人となる。
(魚) (名) 人間に羽が生えて仙人となつて天に登ること。
(魚) (名) 鳥を飼ひながらして貼をとらせること。
(魚) (名) 鵜飼を業とする人。
(魚) (名) 謡曲の名。甲斐石和の川。
(魚) (名) 鵜飼の曲。日蓮上人といふ物。
(魚) (名) 鵜飼する時に焚く篝火。
(魚) (名) 鵜飼する時に焚く篝火。
(魚) (名) 鵜飼する時に焚く篝火。

うか (魚) (名) 幼蟲が蛭となり、後羽を生じて成蟲となる。
(魚) (名) 人間に羽が生えて空中を飛行する仙人となる。
(魚) (名) 人間に羽が生えて仙人となつて天に登ること。
(魚) (名) 鳥を飼ひながらして貼をとらせること。
(魚) (名) 鵜飼を業とする人。
(魚) (名) 謡曲の名。甲斐石和の川。
(魚) (名) 鵜飼の曲。日蓮上人といふ物。
(魚) (名) 鵜飼する時に焚く篝火。
(魚) (名) 鵜飼する時に焚く篝火。
(魚) (名) 鵜飼する時に焚く篝火。

うがしん(宇賀神)〔名〕神、辨財天の寶冠中にある白蛇を神として祀つたもの。
うがす(うがす)〔浮かす〕(他動、サ四)うがかる。うがした。〔浮かす。〕「條に同じ。」

うかす(うかす)〔浮かす〕(他動、サ下二)うかせる。〔浮かせる〕(他動、サ下二)うかす。〔浮かす。〕

うかたま(宇迦魂)〔名〕神。うかのみうか(宇か)〔浮かす〕。〔うか。〕

うかづ(うかづ)〔浮かす〕。〔うか。〕

うかづ(うかづ)〔浮かす〕。〔うか。〕

うかづ(うかづ)〔浮かす〕。〔うか。〕

うかづ(うかづ)〔浮かす〕。〔うか。〕

うかづ(うかづ)〔浮かす〕。〔うか。〕

うかづ(うかづ)〔浮かす〕。〔うか。〕

うかしーうきく

うかめたて(浮立)〔名〕鶴。うかり。うかもたて(浮鶴)〔名〕鴨。鴨の島。鳩より大きく、嘴は黒くつ尖り、羽毛は夏は黒褐色であるが、冬は白色が加はる。脚は灰白色。

うかやぶきあえすのみこと(うかやぶきあえすのみこと)〔名〕神。火出見(火出見)の尊の御子。御世は豊玉姫。五瀬尊神日本幣倉彦(日本幣倉彦)の尊の御父。

うから(族)〔名〕血縁の人々より。親族。やから。〔古語〕一やから親族。〔名〕同族。一家親族。〔古語〕一やから親族。

うかり(名)〔名〕物。物事にうかす。茫然としてゐるさま。一ぼろ。〔浮坊〕(名)花籠としてゐる人を寓つていふ語。

うかる(名)〔名〕浮かす。〔自動、ラ下二〕(名)心が他にうつる。心が定まらぬ。うかり。うかり。うかり。

うかれ(名)〔名〕浮かす。〔自動、ラ下二〕(名)心が他にうつる。心が定まらぬ。うかり。うかり。うかり。

うかれお(名)〔名〕浮かす。〔自動、ラ下二〕(名)心が他にうつる。心が定まらぬ。うかり。うかり。うかり。

うかれころ(名)〔名〕浮かす。〔自動、ラ下二〕(名)心が他にうつる。心が定まらぬ。うかり。うかり。うかり。

うかれひと(名)〔名〕浮かす。〔自動、ラ下二〕(名)心が他にうつる。心が定まらぬ。うかり。うかり。うかり。

うかれぶし(浮節)〔名〕(な)にわぶし(浪花節)。うかれぶね(浮船)〔名〕遊覧の遊船。〔名〕遊覧。〔名〕遊覧。

うかれゆた(浮浴衣)〔名〕浮かれた人の着るゆた。はてなゆた。

うか(名)〔名〕浮かす。〔自動、ラ下二〕(名)心が他にうつる。心が定まらぬ。うかり。うかり。うかり。

うかん(名)〔名〕浮かす。〔自動、ラ下二〕(名)心が他にうつる。心が定まらぬ。うかり。うかり。うかり。

うか(名)〔名〕浮かす。〔自動、ラ下二〕(名)心が他にうつる。心が定まらぬ。うかり。うかり。うかり。

うか(名)〔名〕浮かす。〔自動、ラ下二〕(名)心が他にうつる。心が定まらぬ。うかり。うかり。うかり。

うか(名)〔名〕浮かす。〔自動、ラ下二〕(名)心が他にうつる。心が定まらぬ。うかり。うかり。うかり。

うか(名)〔名〕浮かす。〔自動、ラ下二〕(名)心が他にうつる。心が定まらぬ。うかり。うかり。うかり。

うか(名)〔名〕浮かす。〔自動、ラ下二〕(名)心が他にうつる。心が定まらぬ。うかり。うかり。うかり。

立つ(句)透け腰になる。うきあし(浮足)〔名〕水中に箱船を浮かしてその上に組立てた足場。〔名〕浮足。〔名〕浮足。

うきあゆみ(浮歩)〔名〕足を浮かせてゐるうきい(浮石)〔名〕燻焙岩の冷卻した塊。冷却の際、瓦斯や水蒸気が逸出した爲に多の小孔があつて、雨は粗綿である。軽くて水に浮く。かもし。〔古語〕水面に牛をはあらはして浮いた。うきあし。

うきう(名)〔名〕浮かす。〔自動、ラ下二〕(名)心が他にうつる。心が定まらぬ。うかり。うかり。うかり。

うき(名)〔名〕浮かす。〔自動、ラ下二〕(名)心が他にうつる。心が定まらぬ。うかり。うかり。うかり。

うき(名)〔名〕浮かす。〔自動、ラ下二〕(名)心が他にうつる。心が定まらぬ。うかり。うかり。うかり。

うき(名)〔名〕浮かす。〔自動、ラ下二〕(名)心が他にうつる。心が定まらぬ。うかり。うかり。うかり。

うき(名)〔名〕浮かす。〔自動、ラ下二〕(名)心が他にうつる。心が定まらぬ。うかり。うかり。うかり。

うき(名)〔名〕浮かす。〔自動、ラ下二〕(名)心が他にうつる。心が定まらぬ。うかり。うかり。うかり。

うき(名)〔名〕浮かす。〔自動、ラ下二〕(名)心が他にうつる。心が定まらぬ。うかり。うかり。うかり。

つす(句)或事に熱中して心配が多い。かなりを構はす或事に熱中する。

うきみ(浮世) (名) 游泳法の一。體の力を抜いて仰向に浮身。水面に浮かぶ方法。遊女の一種。旅商人などの滞在中、妾のやうな動作をするもの。

うきみどり(遊女) (名) 浮世草子(名) 遊女が遊女門前、遊女門前と稱する。懸心僧侶の同輩者、同僧都作の千徳阿彌陀佛と聖徳太子作の觀世音とを本尊とする。

うきみみ(耳耳) (名) かなしい物語。つらい話。

うきむし(浮武者) (名) 遊軍に屬する武士。

うきめ(愛目) (名) ちやい。『うきもの』。

うきもの(浮物) (名) 水上に浮いてゐる物。

うきもん(浮物) (名) 浮世に於ける(固くの對)うきやく(浮夜) (名) 江戸時代の祝。年賀以外うきよ(愛世) (名) まゝい世。此の世の中。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。

うき世(浮世) (名) 此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

織り出した筈。一ことば(浮世言葉)(名) 應對などにつかふ愛想のある言葉。『こもん』(浮世小紋)(名) 流行の小紋形。『し』(浮世師) (名) 世事に達した人。通人。粹人。『じん』(浮世人)(名) うきよし。『うきよ』(名) 遊女。『うきよの』(名) 浮世の。『せつ』(浮世説)(名) うきよし。『ぞうし』(浮世草子)(名) 文江江時代に行はれた小説の一種。當時の世態・風俗を寫したもので、西鶴物・八世屋物などがある。『ぞめ浮世叶』(名) 當時流行の染織物。『たつき』(浮世叶)(名) 俗語の一種。陶輪から起つたもの。『てら』(浮世寺)(名) 世間なられたせのゆ。俗俗のある寺。『ふ』(浮世床)(名) 床にみゆひ。『文』(式) 式三馬の滑稽小説。聚結床に來た者の滑稽を書いたもの。三篇八巻。文化九年刊行。『人』(浮世形) (名) 婦女の風俗ならはした人形。裾がまゝるやうになつて、陰部を具へてゐる。『はなし』(浮世話)(名) 世間話。俗語。『ひと』(浮世人)(名) 浮世びと。『ふう』(浮世風)(名) 本末其角の稱。たゞ西落風の俳句の流風。江戸風。



〔形人世浮〕

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

なるもの。『の』(塵句) 此の世の名利のげがれ。世間の俗事。『の』(弦句) 現世をつないでゐる弦。命の綱。『の』(情) (名) 此の世の情。一生の悲喜。『の』(波) (名) 浮世喜憂の極まらぬ世の常。『の』(習) (名) 人世の免れ難い習慣。『は三分五厘』(名) 浮世の價值のないこと。『は夢』(名) 浮世の物事のほかないこと。『は瓜』(名) 浮世の物事のほかないことと思はれる。『瓜』(名) 此の世を馬鹿にしたやうに見える草頭巾。絲瓜といふ語から華と出したもの。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うきよ(愛世) (名) 定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。『元』『浮世繪』(名) 寫文の頃、美川師宣によつて創始せられた風俗畫。佛儀、武者の似やその當時の民衆生活を描いたもの。その様式に肉筆と版畫とがある。土佐繪から分れたので、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤寛堂・川村雪舟・葛飾北斎などがある。『おとこ』『浮世男』(名) 好色の男。色男。遊治郎。

うしし 鱒魚(名) (正しい字音は「くし」むしは。うしし) (十二支の一) (方角の一) 北と東との中間。●昔の時刻の名。今の午前二時。―お

き(丑起)(名) 丑の刻に起きること。
うしし(雨神)(名) 雨神を降らす神。雨を掌る神。
うしし(愛し)(形) 思ふまゝにならぬ。ものう。悲しい。つらい。苦しい。いやである。

うしし(蛆)(名) 動脈の幼虫。腐敗物の排泄物を食して生育する。體形圓筒状で、多くの関節よりなり、脚を有せず、蠢動する。

うしし(氏)(名) ●昔、家系の血統に從つて朝廷から賜はつた苗字。家筋を分つて爲の名目。●家の筋目。●家が。家系。―無くして玉の與(句) 婦人は家柄が賤しくても、容貌が美しくして貴人の目にとまつて寵を得れば貴い地位になる。―よりそだち(句) 姓氏の貴きより人格的教育が大切である。うしし(氏)(接尾) 苗字に添へて敬意をあらはすに用ひる語。

うしあぶ(牛蛇)(名) 動蛇の類。體、黒色で、胸背に五條の縱列縞線、腹背には一條の灰線があり、帶黄褐色の翅を有する。夏林の中に多く棲息する。きあはせて戦はせよの勝負を観る戲。闘牛。

うしあわせ(牛合)(名) 牛と牛とを角をうすじあはせしむ。雲林院(名) うりんいん(雲林院)。

うしじうと(氏)(名) (うじと)。「つづつうしじうたま(牛馬)(名) 牛と馬。牛又は馬。●「動馬科の獸。鹿兒島縣種子島に産する。毛細く短く、少し黒くられた。」

うしお(湖)(名) ●海水が日月殊に月の引力によつて、時を定めて或は高くなり或は低くなること。高漲するものを「あげしほ」或は「あしほ」といひ、低落するものを「ひきしほ」「まげしほ」「おちしほ」といふ。●海水。●うしお(潮煮)。

かせ(潮風)(名) (しおかぜ) (潮風)。「ぞめー(潮染)(名) 浴衣の中形染の一。帯紫色の鮮美な青色。―に(潮煮)(名) 鯛などの肉又は骨を水で煮

て、鹽味をつけた吸物。
うしお(牛追物)(名) 小牛を追うて馬上より射る鎌倉時代の騎射の一。

うしお(牛鬼)(名) 牛の妖怪。いじま(牛鬼島)(名) 牛鬼が住んでゐるといふ想像上の島。

うしかい(牛飼)(名) ●牛を飼ふ人。牛をつかふ人。(名) 牛車の牛をつかふ人。頭を垂髪にして袴衣を着、童顔をなすもの。

うしかけ(牛駆)(名) ●昔、陰曆五月五日、大阪北野邊で、野馬の牛を放つて遊ばせた行事。うし(の)やぶいり。

うしかた(牛方)(名) ●牛を使ふ人。牛車を扱ふ人。
うしかた(牛方)(名) ●牛を飼ふ人。牛をつかふ人。上方浮城(名) 代嘉太夫(名) (三枝)の名人。上方浮城(名) 代嘉太夫(名) (三枝)の名人。和歌山の人で、伊勢島宮内(名)の門人。加賀掾と稱し、之に謡曲、狂言、小歌などを加味して一流を開き、優美、麗麗を生命とした。當時の太夫中

で、自作の淨瑠璃があるのは此の人のみである。正徳元年(一三七)歿。年七十七。

うしがみ(氏)(名) ●氏の祖先として祭る神。●氏に由緒ある神。藤原氏の春日の類。●人人の住む土地の鎮守の神。うぶすな(名) ぶ(産土)草。葉は釣つて、花梗に小樽圓状の小樽を著り、茶褐色の花を開く。

うし(牛治川)(名) ●地、京都府の南部を流れる川。源を琵琶湖に發し、上流を瀬田川といひ、宇治に入つて宇治川といひ、久世郡流に至つて淀川と稱する。流程八〇科。元暦元年正月、佐佐木高綱、梶原景季の先陣争が宇治橋の近くの水上であつたので名高い。

うし(牛草)(名) ●本特の一。一年生草本。高さ二〇釐位。葉は叢生して線長、葉は線形。花は淡緑色で、八九月頃開き、葉腋に小穂狀花序をなす。

うじく(蛆草)(名) ●種豆科の灌木。草本。高さ約八〇釐。葉は卵狀複葉で、小葉は長楕圓形で先端。夏の末梢頭、葉腋から花茎を抽き、蝶形で、淡黄色を帯びた白色小花を總狀花序に綴る。花後、葉を結ぶ。

うじく(氏位)(名) 門地と位階。
うじく(氏位)(名) 牛に曳かせる屋形車。
うじく(氏位)(名) 牛に曳かせる駕籠。
うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

うじく(氏位)(名) 氏氏に屬する六位の職人の第百席のもの。職人・源藏人など、その氏の名を冠して稱する。

爲する團體的の交遊。

うじゆちつ(溫州橘)(名)橘の一種。うんしきみかん。(古語)橘の一種。蜜柑より大きく味の酸くがよい。

うしよ(羽書)(名)うけき(羽機)。

うしよ(有生)(名)生命ある物。生物。

うしよ(有性)(名)佛となれる素質のあるもの。佛性あるもの。

うしよ(右相)(名)右大臣の異稱。

うしよ(羽翹)(名)さかづき(羽)。「一を飛ばす」(句)宴會をする。

うしよ(有情)(名)佛の世に生活して情を有するもの。木石等の非情のものに對し一切の人間・鳥類類を含む。

うじよう(鳥城)(名)地(鳥)は、金鳥で、日の惠、相州のほとりにあるからいふ岡山城。

うしよ(右相國)(名)右大臣の異稱。右相。

うしよ(右少將)(名)右近衛府のうじよう(右丞相)(名)右丞相(名)うじよう(右相)。

うじよう(羽狀複葉)(名)「植」葉柄の左右兩側に二枚以上の小葉が配列して、鳥の羽の状をなすもの。先端に一小葉あるものを複羽狀葉。無きものを単羽狀葉といふ。

うしよ(右少辨)(名)「辨」の條を見よ。

うじよう(みやく)(名)「羽狀脈」(名)「植」類葉脈の一條の主脈の左右に枝脈を出し、更に分れて細脈となって鳥の羽の状をなすもの。梅樹の葉の類。

うしよ(有所得)(名)佛の物事に執着してうしよ(鳥絲欄)(名)黒紙。昔、支那で女が製香を香に用いたもの。

うしよ(前)の反對。しり。背後。あと。

うしよ(後)の反對。しり。背後。あと。

うしよ(見えぬ)の反對。しり。背後。あと。

うしよ(下)の反對。しり。背後。あと。

うしよ(上)の反對。しり。背後。あと。

うしよ(下)の反對。しり。背後。あと。

うしよ(上)の反對。しり。背後。あと。

うしよ(下)の反對。しり。背後。あと。

うしよ(上)の反對。しり。背後。あと。

うしよ(下)の反對。しり。背後。あと。

うしよ(上)の反對。しり。背後。あと。

うしよ(下)の反對。しり。背後。あと。

うしよ(上)の反對。しり。背後。あと。

のしり。裾。うしろの姿。のち。將來。一千兩(句)女の姿の後から見れば甚だ美しいこと。一の目(句)自分の氣配かぬ間に、他人は注意なくとも、事はあるから見よ。一辨天(句)うしろの千兩に同じ。一を見る(句)負けて逃げ出す。

うしろ(後明)(名)光線を後方からとる。うしろ(後脚)(名)あとあし。背を向け

うしろ(あたま)(後頭)(名)頭の後部。

うしろ(あたま)(後歩)(名)あしを向け

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(あたま)(後合)(名)うしろとうし

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(さ)後挿(名)女の髪のうちうしろに挿すか

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

うしろ(ま)後摺(名)袴のうしろのわきを縫

男子が自分の謙稱として用ひる。
うそやう……(有相) (名) 佛有情、非情悉く形體
を具へて煩惱愛着を起すこと。 (古語)

うそやう……(有想) (名) 佛心中に想念を有する
もの。 (古語)

うそやう……(有縁無縁) (名) 世の中の
有形無形の一切の物。 縁無縁。 澤山に集ま
りたくさなる。 (古語)

うそえひ……(薄笑む) (自動、マ四) 少
く笑ふ。 微笑する。 (古語)

うそふ……(嘘) (名) うそふこと。 (古語)

うそふ……(嘘) (名) うそふこと。 (古語)

うそふ……(嘘) (名) うそふこと。 (古語)

うそむく……(嘘) (自動、カ四) うそむ
く。 (古語)

うそむく……(嘘) (自動、カ四) うそむ
く。 (古語)

うそむく……(嘘) (自動、カ四) うそむ
く。 (古語)

うそむく……(嘘) (自動、カ四) うそむ
く。 (古語)

うそむく……(嘘) (自動、カ四) うそむ
く。 (古語)

うそむく……(嘘) (自動、カ四) うそむ
く。 (古語)

うそむく……(嘘) (自動、カ四) うそむ
く。 (古語)

うそむく……(嘘) (自動、カ四) うそむ
く。 (古語)

うそむく……(嘘) (自動、カ四) うそむ
く。 (古語)

うそむく……(嘘) (自動、カ四) うそむ
く。 (古語)

うた……(歌) (名) 和歌を詠するもの
が左右に分れて歌を詠み、列者が其の歌の優劣を批
判して左右が勝負を決する。 (うたぐり)

うた……(歌) (名) 人の歌曲。 (うたぐり)

うた……(歌) (名) 人が一定の日に集まって
詠なうたふ事。 一むめ詠初 (名) 江戸幕府で、
毎年正月三日始めは二日に殿中で行った詠曲を詠
ひ初める儀式。

うた……(歌) (名) 人と相待って存在する
有差別無差別の法。 一生無差別の凡夫の境涯。

うた……(歌) (名) 天地四方の内。 天下。 あみが

うた……(歌) (名) 天地四方の内。 天下。 あみが

うた……(歌) (名) 天地四方の内。 天下。 あみが

うた……(歌) (名) 天地四方の内。 天下。 あみが

うた……(歌) (名) 天地四方の内。 天下。 あみが

うた……(歌) (名) 天地四方の内。 天下。 あみが

うた……(歌) (名) 天地四方の内。 天下。 あみが

うた……(歌) (名) 天地四方の内。 天下。 あみが

うた……(歌) (名) 天地四方の内。 天下。 あみが

うた……(歌) (名) 天地四方の内。 天下。 あみが

うた……(歌) (名) 天地四方の内。 天下。 あみが

うた……(歌) (名) 天地四方の内。 天下。 あみが

うた……(歌) (名) 天地四方の内。 天下。 あみが

うた……(歌) (名) 水の上に浮かぶ泡。 (古
語) うたがわ……(泡) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うた……(歌) (名) 水の泡。 (古語)

うたさざわぶし「歌澤」(名)うたさざわぶし。一ふ

うたさざわぶし「歌澤」(名)音福唄の一。安政二年

(二五)五征本彦太郎(征丸)藤園の虎右衛門御家

人の柴田金助等によって樹立された一流派。虎右衛

門の派を寅流といひ柴田金助の派を芝流といふ。

うたさざわぶし「歌澤」(名)音福唄の元祖。旗本上り

大和太掾(名)「人歌澤節」の元祖。旗本上り

本名は征本彦太郎。征丸と號す。一派を樹立して

家元名を授かる。萬延元年(二五〇)夏。年六十三

うたさざわぶし「歌澤」(名)音福唄の元祖。旗本上り

一種。長門に淨瑠璃節を流した。語物としての

淨瑠璃が唄物に化したもの。

うたさざわぶし「歌澤」(名)音福唄の元祖。旗本上り

「うたりよ」雅樂寮。(古語)

うたせあみ「打瀬網」(名)漁

引網の一種で、葦狀の兩方に袖網

を附け、船で海底を引廻すもの。

うたせき「歌關」(名)和歌を詠

まなければ通行させぬ關所。

うたせつきよう「歌説經」(名)宗門の教義

を説き聞かすのに、聲に節をつけてすること。せつ

きやうといふん。

うたせうし「歌草紙」(名)和歌の香物。歌

うたせらこと「歌空事」(名)歌には想像のことが



【みあせたう】

うたて「轉」(動)おます。甚だしく。常でな

くして。餘りにおます。いよいよ強しく。物

強くして。以上古語。一「げ」(名)いよいよ

よ進んで。うたてきま。古語。一「さ」(名)さ

「轉」(形)一「其た」(名)餘りである。薄情で

ある。思ひよきことである。うささい。面白く

ない。興味がない。(以上古語)一「ひと」(名)ひと

うたてん「う」(字)多天皇(名)第五十九

代天皇。御名は定宗。光孝天皇の第七皇子。昔

原道真を登用し結ぶ。讓位の後、寛平法皇と申す。

承平三年崩御。世に享子院の帝と稱す。法皇の

稱は天皇から始まった。寛平遺詔は御子醍醐天皇の

爲に記されたものである。(三五九)

うたななし「歌」(名)歌を詠むこと。(古語)

うたななし「歌」(名)疑ない。(古語)

うたねんぶつ「歌念佛」(名)俗語の一。もと念

佛に節をつけて歌ふから出たもので、ふせが(伏

經)に合はせて、種種の張數な文句を念佛の節で

歌ふやうになつた。

うたのいえ「歌家」(名)鎌倉時代以後歌道

を傳統的に相傳へて歌外を統一し、師匠の家と仰が

れた家で、一に師範家といふ。藤原俊成は其の家で、

其の子定家、其の孫爲家と相繼ぎ、爲家の子爲成は二

條家を起こし、爲成は京極家、爲相は冷泉家と稱して

うたびと「歌人」(名)歌を巧みに詠む人。うた

うたひめ「歌姫」(名)歌を歌ふ女。女の聲樂家。

うたぶえ「歌笛」(名)音指孔六つある横笛で、

風俗歌及び歌謡などの伴奏に用ひるもの。

うたぶくろ「歌袋」(名)和歌の草稿を入れておく

袋。紙の柱にかけ

て備とく。鞋の

咽のふくれがて

あること。文宣王

御杖の歌學に關する著。六卷。詠歌の心持、和歌の

變遷と歌の種類等に就いて論じてゐる。寛政五年

(二四五三)に刊行。

うたまい「歌舞」(名)歌ひ舞ふこと。一「び

うたまい「歌舞」(名)歌ひ舞ふこと。一「び

うたまい「歌舞」(名)歌ひ舞ふこと。一「び

うたまい「歌舞」(名)歌ひ舞ふこと。一「び

うたまい「歌舞」(名)歌ひ舞ふこと。一「び

うたまい「歌舞」(名)歌ひ舞ふこと。一「び

うたまい「歌舞」(名)歌ひ舞ふこと。一「び

うたまい「歌舞」(名)歌ひ舞ふこと。一「び

うたまい「歌舞」(名)歌ひ舞ふこと。一「び

うたまい「歌舞」(名)歌ひ舞ふこと。一「び

うたまい「歌舞」(名)歌ひ舞ふこと。一「び

うたまい「歌舞」(名)歌ひ舞ふこと。一「び



【ろくぶたう】

りを飾ればならぬ。一廣が外に出たは意氣地

(名)内にては威風凛々ならずが外に出たは意氣地

のな、こ。うちへんけい。一を外出にす「出遊

幕に他出のみして、家にあることが少い。一を出

違ふ「出」訪れて來る人を入りちがひに家を出る

わざと外出して面會を避ける。

うち「打」(接頭)動詞に添へて其の意を強める語。

うちあけ「打合せ」(名)「たかひ。ぶちあひ。

「鉄砲を互に打放すこと。」「ちおひ」の口語。

うちあは「内赤」(名)衣服の裏の赤い色。

うちあかす「打明す」(動)「サ」四「打

うちあかす「打明す」(動)「サ」四「打

うちあかす「打明す」(動)「サ」四「打

うちあかす「打明す」(動)「サ」四「打

うちあかす「打明す」(動)「サ」四「打

うちあかす「打明す」(動)「サ」四「打

うちあかす「打明す」(動)「サ」四「打

うちあかす「打明す」(動)「サ」四「打

うちあかす「打明す」(動)「サ」四「打

うちあかす「打明す」(動)「サ」四「打

うちあかす「打明す」(動)「サ」四「打

うちあかす「打明す」(動)「サ」四「打

うちあかす「打明す」(動)「サ」四「打

うちあかす「打明す」(動)「サ」四「打

務者に屬し、記録を作り、記録を司つた役所でない。

うちのたくみののかみ(内匠頭)(名)「うち

のたくみののかみ」長官。たくみののかみ。

うちのたくみのつかさ(内匠寮)(名)昔

中務者に屬し、宮中の修繕その他寮院などの設備の

事を司つた役所。たくみ。

うちのつわもののかみ(内兵庫)

(名)昔、御所の兵器を司つた役所。一ののかみ

うちのつねり(内舍人)(名)うちとねり。

うちのひと(内人)(名)妻が第三者に向か

つて夫を呼ぶ名。宅。など。

うちのひめみこ(内姫御子・内親王)(名)

(ないしんのう)(内親王)。(古語)

うちのべ(打延)(名)うってのばすこと。

うちのぼる(打上)(名)「さほ」(佐保)の枕詞。

うちのみこ(内御子)(名)ないしんのう(内親

王)ひめみこ(古語)「みうち」いへに仕へる人。

うちのもの(内の者)(名)いへのうちの人。

うちのり(内法)(名)箱状の構造物の内法より

他内法までをさしたし。中堂の中空部の縦・

横深さ。柱と柱との内側の距離。欄干と敷居と

の距離。「に」かへる暖簾。

うちのれん(内暖簾)(名)店と奥とを仕切る爲

うちは(内端)(名)こ。ひかへめ。

うちは(内端)(名)「打延」へて(副)うちついで。

うちは(内端)(名)「打延」へて(副)うちついで。

うちは(内端)(名)「打延」へて(副)うちついで。

うちは(内端)(名)「打延」へて(副)うちついで。

うちは(内端)(名)「打延」へて(副)うちついで。

うちは(内端)(名)「打延」へて(副)うちついで。

うちは(内端)(名)「打延」へて(副)うちついで。

うちばちもんじ(内八文字)(名)遊女などが

郭内を練り行く歩み方。兩足の爪先を内方に向けて

あること。「だし」。(古語)

うちばはなち(打放)(名)「副」ぶしつけに。むき

うちばはなち(打放)(名)昔、天皇が射御を御覽に

なつた武殿前の馬場。

うちばむ(むのむむ)「打欲む」(他動、マ下)

しむひんて(打)「おし」こめて置く。(古語)「終

うちばやし(打囉)(名)大鼓や鼓をうちばやし

うちばやし(打囉)(名)「打囉す」(他動、サ四)「ば

やし」を強めて。い。

うちばらし(打拂)(名)「うち」はらふこと。

「神前などの塵を拂ふ具。塵拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

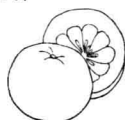
うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。

うちばらし(打拂)(名)「内拂」(名)内金の支拂。



【㊦きさむちう】



【㊦きさむちう】

うめぞめ(梅壺) (名) 紅梅の根を煎じた汁で染めた染布で、黄ばんだ赤色。②うめざめ。うめだげんじろう(梅田源次郎) (名) 人。志士名は定明。雲漢と號する。若狭小濱の人。山崎闇齋に學び、尊王攘夷の説を唱へ、安政六年(二五一九)江戸の獄會に斬られた。年四十四。

うめたて(埋立) (名) ①うめたてること。又その土地。②河海などを埋めて陸とすること。③うじ(埋立工事) (名) 河海などを埋め立てる工事。④しんち(埋立新地) (名) 新しく埋立てて出来た土地。⑤いち埋立地(名) うめ立てて出来た土地。

うめたて(埋立) (名) ①うめたてること。又その土地。②河海などを埋めて陸とすること。③うじ(埋立工事) (名) 河海などを埋め立てる工事。④しんち(埋立新地) (名) 新しく埋立てて出来た土地。⑤いち埋立地(名) うめ立てて出来た土地。

うめちやよらう(埋茶女郎) (名) 埋茶見世にあつた遊女。江戸、吉原にあつた下等遊女。

うめつさつき(名) 陰曆二月の異稱。(古語)

うめつさつき(名) 陰曆二月の異稱。(古語)

うめつさつき(名) 陰曆二月の異稱。(古語)

うめつさつき(名) 陰曆二月の異稱。(古語)

うめつさつき(名) 陰曆二月の異稱。(古語)

うめつさつき(名) 陰曆二月の異稱。(古語)

うめつさつき(名) 陰曆二月の異稱。(古語)

うめつさつき(名) 陰曆二月の異稱。(古語)

うめばたけ(梅園) (名) うめぞの。園から見た形のもの。①そうじ(梅鉢草) (名) 種。②虎耳草(名) 科の多年生草本。葉の形は心臟形で、長い葉柄を有する。莖の高さ二〇程度。夏日一花茎毎に輪つこの小白花をつける。形梅花に似る。③も(梅鉢藻) (名) 種はつかい。④うめびしお(梅干餅) (名) 梅干の肉をうめびしお(梅干) (名) 熟した梅を鹽漬して取出して乾かし、紫蘇の葉を加へて漬け、取出して日に晒した食品。⑤あめ(梅干節) (名) 水飴を煮詰めた香料着色料を加へ油をつけて固めた菓子。形梅干に似てゐるからいふ。⑥おやし(梅干爺) (名) 年老いて顔に皺の多くなった男。⑦はば(梅干婆) (名) 年老いて顔に皺の多くなった女。

うめみずき(名) (梅見月) (名) 陰曆二月の異稱。(古語)

うめみずき(名) (梅見月) (名) 陰曆二月の異稱。(古語)

うめみずき(名) (梅見月) (名) 陰曆二月の異稱。(古語)

うめみずき(名) (梅見月) (名) 陰曆二月の異稱。(古語)

うめみずき(名) (梅見月) (名) 陰曆二月の異稱。(古語)

うめみずき(名) (梅見月) (名) 陰曆二月の異稱。(古語)

うめみずき(名) (梅見月) (名) 陰曆二月の異稱。(古語)

うめみずき(名) (梅見月) (名) 陰曆二月の異稱。(古語)

うめみずき(名) (梅見月) (名) 陰曆二月の異稱。(古語)

うめみずき(名) (梅見月) (名) 陰曆二月の異稱。(古語)

うめみずき(名) (梅見月) (名) 陰曆二月の異稱。(古語)



〔草 鉢 梅〕



〔きどもめう〕

うめようかん(梅羊羹) (名) 梅干の肉を加へて製した羊羹。①むの口語。②うめる(名) 埋めること。他動(マ下) ③うも(名) (種) いし、いし、いし。(古語) ④うも(名) (種) いし、いし、いし。(古語) ⑤うも(名) (種) いし、いし、いし。(古語) ⑥うも(名) (種) いし、いし、いし。(古語) ⑦うも(名) (種) いし、いし、いし。(古語) ⑧うも(名) (種) いし、いし、いし。(古語) ⑨うも(名) (種) いし、いし、いし。(古語) ⑩うも(名) (種) いし、いし、いし。(古語)

うもれ(埋) (名) ①埋れること。②埋まること。③埋められること。④埋まること。⑤埋まること。⑥埋まること。⑦埋まること。⑧埋まること。⑨埋まること。⑩埋まること。

うもれ(埋) (名) ①埋れること。②埋まること。③埋められること。④埋まること。⑤埋まること。⑥埋まること。⑦埋まること。⑧埋まること。⑨埋まること。⑩埋まること。

うもれ(埋) (名) ①埋れること。②埋まること。③埋められること。④埋まること。⑤埋まること。⑥埋まること。⑦埋まること。⑧埋まること。⑨埋まること。⑩埋まること。

うもれ(埋) (名) ①埋れること。②埋まること。③埋められること。④埋まること。⑤埋まること。⑥埋まること。⑦埋まること。⑧埋まること。⑨埋まること。⑩埋まること。

うもれ(埋) (名) ①埋れること。②埋まること。③埋められること。④埋まること。⑤埋まること。⑥埋まること。⑦埋まること。⑧埋まること。⑨埋まること。⑩埋まること。

うもれ(埋) (名) ①埋れること。②埋まること。③埋められること。④埋まること。⑤埋まること。⑥埋まること。⑦埋まること。⑧埋まること。⑨埋まること。⑩埋まること。

うもれ(埋) (名) ①埋れること。②埋まること。③埋められること。④埋まること。⑤埋まること。⑥埋まること。⑦埋まること。⑧埋まること。⑨埋まること。⑩埋まること。

うもれ(埋) (名) ①埋れること。②埋まること。③埋められること。④埋まること。⑤埋まること。⑥埋まること。⑦埋まること。⑧埋まること。⑨埋まること。⑩埋まること。

うもれ(埋) (名) ①埋れること。②埋まること。③埋められること。④埋まること。⑤埋まること。⑥埋まること。⑦埋まること。⑧埋まること。⑨埋まること。⑩埋まること。

うもれ(埋) (名) ①埋れること。②埋まること。③埋められること。④埋まること。⑤埋まること。⑥埋まること。⑦埋まること。⑧埋まること。⑨埋まること。⑩埋まること。

うもれ(埋) (名) ①埋れること。②埋まること。③埋められること。④埋まること。⑤埋まること。⑥埋まること。⑦埋まること。⑧埋まること。⑨埋まること。⑩埋まること。

うや(體) (名) 作法。禮儀。あや。(古語)

うや(烏夜) (名) 闇の夜。闇夜。

うや(雨夜) (名) 雨の降る夜。あまよ。

うや(雨夜) (名) 雨の降る夜。あまよ。

うや(雨夜) (名) 雨の降る夜。あまよ。

うや(雨夜) (名) 雨の降る夜。あまよ。

うや(雨夜) (名) 雨の降る夜。あまよ。

うや(雨夜) (名) 雨の降る夜。あまよ。

うや(雨夜) (名) 雨の降る夜。あまよ。

うや(雨夜) (名) 雨の降る夜。あまよ。

うや(雨夜) (名) 雨の降る夜。あまよ。

うや(雨夜) (名) 雨の降る夜。あまよ。

を(句) 社会の現象は誠に複雑してゐる。一の裏
ま行く(句) 敵の意図外に出る戦法。一をかか
(句) 矢張り裏返す。敵の計の反對に出
て来る。②同じ遊女を二度あつて。
うら(浦) (名) 海や湖の陸地に入り込んだ所。
うら(末) (名) 浦。①し。す。は。は。②す。去。消。
うら(浦) (名) 海や湖の陸地に入り込んだ所。
うら(心) (名) ころ。ころの中。(古語)
うら(占) (名) 物の象や徴候によつて、未来の吉凶を
判明すること。(古語)

うら(心) (接頭) 「心」思の意。「悲し」
うら(代) (代) おのれ。われ。
うら(心) (名) ロシヤ語。我が國の「萬歲」の意
うら(浦) (名) 浦に出て魚介などを採
つて遊ぶ。
うら(心) (名) 裏合(名) 互に心をうちあ
はせる。心の合ふこと。②あつたつになること。
裏と裏あふこと。③家の裏と裏と向きあふ
うら(心) (名) 裏板(名) いか。はま。
うら(心) (名) 裏表(名) 裏と表。うらわし
根元に張りつけた板。②天井。
うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。
うら(心) (名) 裏表(名) 裏と表。うらわし
根元に張りつけた板。②天井。
うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。

うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。
うら(心) (名) 裏表(名) 裏と表。うらわし
根元に張りつけた板。②天井。
うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。

うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。
うら(心) (名) 裏表(名) 裏と表。うらわし
根元に張りつけた板。②天井。
うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。

うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。
うら(心) (名) 裏表(名) 裏と表。うらわし
根元に張りつけた板。②天井。
うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。

うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。
うら(心) (名) 裏表(名) 裏と表。うらわし
根元に張りつけた板。②天井。
うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。

うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。
うら(心) (名) 裏表(名) 裏と表。うらわし
根元に張りつけた板。②天井。
うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。

うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。
うら(心) (名) 裏表(名) 裏と表。うらわし
根元に張りつけた板。②天井。
うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。

うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。
うら(心) (名) 裏表(名) 裏と表。うらわし
根元に張りつけた板。②天井。
うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。

うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。
うら(心) (名) 裏表(名) 裏と表。うらわし
根元に張りつけた板。②天井。
うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。

うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。
うら(心) (名) 裏表(名) 裏と表。うらわし
根元に張りつけた板。②天井。
うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。

うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。
うら(心) (名) 裏表(名) 裏と表。うらわし
根元に張りつけた板。②天井。
うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。

うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。
うら(心) (名) 裏表(名) 裏と表。うらわし
根元に張りつけた板。②天井。
うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。

うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。
うら(心) (名) 裏表(名) 裏と表。うらわし
根元に張りつけた板。②天井。
うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。

うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。
うら(心) (名) 裏表(名) 裏と表。うらわし
根元に張りつけた板。②天井。
うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。



〔菊 浦〕

うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。
うら(心) (名) 裏表(名) 裏と表。うらわし
根元に張りつけた板。②天井。
うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。

うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。
うら(心) (名) 裏表(名) 裏と表。うらわし
根元に張りつけた板。②天井。
うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。

うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。
うら(心) (名) 裏表(名) 裏と表。うらわし
根元に張りつけた板。②天井。
うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。

うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。
うら(心) (名) 裏表(名) 裏と表。うらわし
根元に張りつけた板。②天井。
うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。

うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。
うら(心) (名) 裏表(名) 裏と表。うらわし
根元に張りつけた板。②天井。
うら(心) (名) 裏印(名) 物の裏面に彫つた小印。
うら(心) (名) 裏面(名) 物の裏面。

うらこし〔裏腰〕(名)袴の腰裏の裏に付ける布。

うらこと〔占事・卜事〕(名)うらなひのこと。うらなひ。(古語)

うらさい〔裏彩色〕(名)日本裏の極彩色の密着で、絹地の裏面から彩色を施すこと。

うらさだめ〔占定〕(名)うらなひで物事を決定すること。

うらさと〔浦里〕(名)浦近にある村里。漁村。

うらさびし〔うらさびし心寂し〕(形)心の中がさびし。さびし。心寂し(名)うらさびし。さびし。さびし。心寂し(名)うらさびし。

うらさぶ〔うらさぶ心寂ぶ〕(自動)パ(二)うらさぶ(心)寂ぶ。さびし。心細く思ふ。(古語)

うらさん〔裏棧〕(名)天井板・屏などの裏面に取つけられた。

うらじ〔裏地〕(名)衣服の裏に用ひる布帛。

うらしお〔浦潮〕(名)浦に湧いて来る潮。古ウラジオストック(Madros Stock)浦鹽斯(德)地名)イタリヤの沿海部の海邊で、ベネチア帝國に突出するムラビコフ半島の尖端、ルスキ島等の陰に在する。シベリヤの門戸であると同時に世界交通上重要な水陸連絡地帯で、我が教養誌から誌約四〇時間を通し得る。

うらしま〔浦島〕(名)浦にある島。①動)擬足形の鱗貝。鱗約七層。殻の表面は淡灰色の地に五帯の鮮麗な色彩を被り。②浦島子。③文)曲の名。④浦島子(名)傳)日本古昔紀雄略紀丹後風土記。萬葉集中に見る傳説的人物で、丹後水江又は興都郡宮川の漁夫と傳へられる。龜に伴なはれて籠堂で三年の月日を榮華の中に暮し、別時に臨んで妻女が玉手匣と共に老翁の背を破けて聞いたが、立ち上る白鳥と共に老翁になった。⑤一そらう(浦島草)虎掌(名)橘(天南星)科の多年生草本。山野の陰地に自生する。地下莖は

丸塊をなし、一莖一葉を生ずる。高さ一〇釐位。葉は鳥趾狀に分裂し、長い葉柄があり、その基部は花莖を抱く。四五月の頃三〇釐の花梗を出し、佛燄花(花)を開く。花輪の延長は黒紫色の長い絲狀をなして地上に垂れる。葉は、浦島太郎の釣絲を聯想させる。有毒植物。①たろう(浦島太郎)〔種別〕科の落葉灌木。矮小(浦島)生ずる。葉は倒卵形で縁歯を有し、深緑色。六月頃黄白色葉狀の花を開く。高山に自生する。①のはこ(浦島箱)〔名〕浦島子の船室が持歸つた箱。た。ま。

うらしやく〔裏尺〕(名)うらがれ(裏曲)。根葉土中に匍匐して隨處に葉柄を抜き、分岐。葉は羽狀に分裂し、葉は鮮緑色。葉は帯白色春の葉際、葉の裏に顆粒狀の胞子囊を排出する。

葉は正月の飾に用ひる。②紙を横に二つに折つて、表のうらみに文字を書きし紙。③種うらし(名)〔種別〕科の落葉灌木。葉は、葉の裏に小葉が三小葉を有し、各小葉は卵形の細毛を具へ。葉刺にも赤白毛と棘とを密生する。六月頃、梢上に花梗を出し、淡紅色の五輪花を開き、花後、黄赤色の果實を生ずる。①かんば(裏白樺)〔名〕樺木科の落葉喬木。高さ一五メートル。葉は楕圓形若しくは卵形。縁邊に重鋸齒があり、裏面に白毛を生ずる。四五月頃、葉腋に淡黄褐色を呈する單性の種花を下垂し、花後、圓形の果實を結ぶ。①種はんば(裏白金梅)〔名〕種別科の多年生草本。草の高さ一〇釐位。葉は三出葉形をなし、深く

缺裂し、裏面に白色を呈する。夏秋の交、花莖を抜き、黄色五輪の小花をつける。信州八ヶ嶽戸隠山等に産する。①ど(裏白戸)〔名〕土蔵の入口の引戸。表を漆喰塗りにした。②のき(裏白木)〔名〕〔種別〕科の落葉喬木。高さ二メートル。周圍一米半以上に達する。樹皮は光澤を有し、葉は廣卵形で縁齒があり、裏面に白毛が密生する。夏、葉の間に白色の繭房花群開き、果實は櫻の實に似て赤い。材は堅く、器具製造に用ひられる。①れんが(裏白連歌)〔名〕連歌を傍談の表にのみ書いて裏には吾がめ方式。

うらすける〔うらすける〕(動)裏附ける(他動、カ下)①裏をつける。②たかにする。

うらすたひ〔裏傳〕(名)海邊に滑りて行く

うらすんけ〔裏千家〕(名)茶道千家流の分派で、千利休の孫宗春の創めたもの。本家千氏の裏に住ん

うらたな〔裏店〕(名)人家の裏に建てた長屋。うらや。うらなや。①が(裏店借)〔名〕裏店を借りて住むこと。又、その人。①すまい(裏店住)〔名〕前借に同じ。

うらつき〔裏附〕(名)裏の附いたもの。②うらつき(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うらつけ(裏附)③裏を附けたもの。

うりつづける 附けつづける(一)買附ける(二)他動、カ下(一)うりつづけるの口語。

うりつづなき(買賤)(名) 經相場、現物の所有者が定期取引で買つて置くと、低落すれば、買戻して利益を得る。

うりてがた(買手形)(名) 買手形。うりぬし。

うりてころ(瓜所)(名) 瓜を賣つた地。

うりとばす(買飛ばす)(他動、サ四) 品物を惜げなく賣拂ふ。

うりな(買名)(名) 買物の名。

うりなが(買主)(名) 買物の名。

うりぬし(瓜主)(名) 瓜の持主。

うりね(買値)(名) 買り渡す相場の買値。

うりのき(買退)(名) 經相場用語。定期取引で買つて置いたものの相場が下落して、當分騰貴の見込無い場合、多少の損を忍んで転賣すること。

うりのき(瓜木)(名) 瓜木科の落葉喬木。高さ約三米。葉は互生、大形の掌状葉で、淺く三至五裂し、基部は心臟形、葉柄と共に多くの細毛を有する。夏、葉腋に、葉を抽き、白色で外反する五瓣花を開く。花後、漿果を結ぶ。

うりのせ(買乗)(名) 經相場用語。買建が相當利益あるやうな時、更に買増すこと。

うりは(買場)(名) 商品を買取る場所。①賣るべき好機。②劇場で、機敏に土問などの見計りに關する事務を取扱ふ所。

うりばえ(瓜繩守瓜)(名) ①動 金花魚(ハナコ)科の昆蟲。體長七センチ。體は黃褐色で、前胸背に深い横溝がある。瓜類の葉を食害し、捕へると、惡臭ある液を出す。うりばし。

うりばか(かえり)(名) ①瓜腐楓(名) 一種、槭樹科の落葉喬木。幹の高さ約一〇米。樹皮綠色、葉は心臟形で、三乃至五裂装し、對生する。春、淡黃

うりつーるか

色の花を總狀花序に配列する。樹皮は繩を造る料となり、木材は諸種の器具材に供せられる。

うりはらい(買拂)(名) 買拂ふこと。

うりはら(買拂)(名) 買拂ふこと。

うりはら(買拂)(名) 買拂ふこと。

うりはら(買拂)(名) 買拂ふこと。

うりひろ(買擴)(名) 買擴げること。

うりひろ(買擴)(名) 買擴げること。

うりひろ(買擴)(名) 買擴げること。

うりひろ(買擴)(名) 買擴げること。

うりひろ(買擴)(名) 買擴げること。

うりひろ(買擴)(名) 買擴げること。

うりひろ(買擴)(名) 買擴げること。

うりひろ(買擴)(名) 買擴げること。

うりひろ(買擴)(名) 買擴げること。

うりひろ(買擴)(名) 買擴げること。

うりひろ(買擴)(名) 買擴げること。

うりひろ(買擴)(名) 買擴げること。

うりゆう(瓜生)(名) 瓜のはえてゐる處。瓜畑。

うりゆう(瓜生)(名) 瓜のはえてゐる處。瓜畑。

うりゆう(瓜生)(名) 瓜のはえてゐる處。瓜畑。

うりゆう(瓜生)(名) 瓜のはえてゐる處。瓜畑。

うりゆう(瓜生)(名) 瓜のはえてゐる處。瓜畑。

うりゆう(瓜生)(名) 瓜のはえてゐる處。瓜畑。

うりゆう(瓜生)(名) 瓜のはえてゐる處。瓜畑。

うりゆう(瓜生)(名) 瓜のはえてゐる處。瓜畑。

うりゆう(瓜生)(名) 瓜のはえてゐる處。瓜畑。

うりゆう(瓜生)(名) 瓜のはえてゐる處。瓜畑。

うりゆう(瓜生)(名) 瓜のはえてゐる處。瓜畑。

うりゆう(瓜生)(名) 瓜のはえてゐる處。瓜畑。

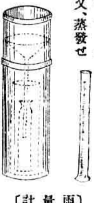
うりゆう(瓜生)(名) 瓜のはえてゐる處。瓜畑。

うりゆう(瓜生)(名) 瓜のはえてゐる處。瓜畑。

うりゆう(瓜生)(名) 瓜のはえてゐる處。瓜畑。

うりゆう(瓜生)(名) 瓜のはえてゐる處。瓜畑。

うりゆう(瓜生)(名) 瓜のはえてゐる處。瓜畑。



雨量計

區界野、大徳寺の南にあつた天古宗の寺。もと淳和天皇の隱宮であつたのを、仁明天皇の貞觀十一年(八二九)等となし、光孝天皇の仁和二年(八四六)僧正通明が存して、元應寺別院となし、後、荒廢して觀音堂だけが残す。一ほだいこう 雲林院

菩提講(名) 佛雲林院で、三月廿二日、法華金光明の二經を講じた法會。

うりあ(買受)(名) 買受ること。

うりあ(買受)(名) 買受ること。

うりあ(買受)(名) 買受ること。

うりあ(買受)(名) 買受ること。

うりあ(買受)(名) 買受ること。

うりあ(買受)(名) 買受ること。

うりあ(買受)(名) 買受ること。

うりあ(買受)(名) 買受ること。

うりあ(買受)(名) 買受ること。

うりあ(買受)(名) 買受ること。

うりあ(買受)(名) 買受ること。

うりあ(買受)(名) 買受ること。

うりあ(買受)(名) 買受ること。

うりあ(買受)(名) 買受ること。

うりあ(買受)(名) 買受ること。

古の首都で、同國に於ける政治・宗教・經濟の中心。

うるきび (種黍) (名) 粘力の少い種子の黍。

うるける (種黍) (名) (自動) カ下(一)うるほふ。

うるこめ (種米) (名) うらち。「うるこふやける」。

うるさ (類) (名) うらさ。い。うるさ(類) (類) (名) 極めてうるさいさま。一がうるさ(類) (類) (名) (自動) 思ふこと。一がうるさ(類) (類) (名) (自動) 思ふこと。一がうるさ(類) (類) (名) (自動) 思ふこと。

うるさし (形) (一) わづらはい。いとはい。うるさし (形) (一) わづらはい。いとはい。うるさし (形) (一) わづらはい。いとはい。

うるし (漆) (名) (種) 漆樹(一) 科の落葉喬木。高さ三米以上。樹皮は灰白色。葉は五對若しくは七對の小葉をつけた奇數羽狀複葉で、小葉は卵形又は卵狀椭圆形、全縁で、葉面は葉脈上と葉柄には多くの毛茸を有する。六月頃葉面に黄緑色の斑點状に開く。果實は核果で十月頃成熟して黄褐色となる。乾かした後押って油を採り、樹皮からは漆液を採る。うるしの木。漆汁に着色剤や乾燥剤を加へて製した塗料は灰白色であるが、乾けば黒褐色となる。一うるし(漆石)(名) 磨石。かすり色。一うるし(漆) (名) 漆の上塗を塗り、金泥などを用いて光るやうにした綿輪。漆器に色漆又は生漆で重いた輪。一かき(漆搦) (名) 漆の樹皮を傷つけて流し出る漆液を採集すること。又、その人。一かふれ(漆感) (名) 漆の毒に感して生ずる皮膚病で、局部に多數の小突起を生じ、腫れあがつて痒みを感じる。一うるし(漆流) (名) 漆を塗りに用いる紙で、多くは吉野紙を用ひ。一うるし(漆細工) (名) 漆器に漆を塗って細工すること。



と。又、其の物。一うるし(漆地) (名) 漆を塗った下地。一ぬり(漆塗) (名) 漆に塗られた。又、その器。又、その製造人。一うるし(漆木) (漆樹) (名) うらさ。一ばん(漆判) (名) 膠をひいて漆のやうな光澤を出した判。檢目として奈良酒に押し込まれる。一ぶら(漆風呂) (名) うらさむる。一まけ(漆負) (名) うらさかぶれに罹り易い。一むろ(漆室) (名) 漆を塗った器を乾燥せしめる室。一もん(漆紋) (名) 漆で器に定義。多くは夏衣の紋附などに用ひる。

うるしねび (稗稻) (名) うらさき。

うるし (米) (種) 飯に炊いて常食とする米のなる稻。うるし (米) (種) 飯に炊いて常食とする米のなる稻。

うるせし (形) (一) うらさ。うるせし (形) (一) うらさ。うるせし (形) (一) うらさ。

うるち (梗) (名) 粘気の少ない米。即ち普通の米。うるち (梗) (名) 粘気の少ない米。即ち普通の米。

ウルトラ (Ultra) (英名) (形) 超。飛びぬけてゐること。一モダン (Ultra modern) (名) 超近代的。モダン中のモダン。

ウルトラマリン (Ultramarine) (名) 紺青。

うるみ (酒) (名) うらさ。うるみ (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。

うるの (酒) (名) うらさ。うるの (酒) (名) うらさ。



〔しわいめろ〕

色がよい。まつややである。愛らしい。親しみ易い。心がまややかである。一うるし(麗) (名) (形) うらわしの口語。一け麗しげ (名) (形) うらわしの口語。一さ麗し (名) (形) うらわしの口語。一さ麗し (名) (形) うらわしの口語。

うるわした (形) (一) うらわし。うるわした (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

うるわし (形) (一) うらわし。うるわし (形) (一) うらわし。

軽しく見える。●言葉は親切であるが、心が軽薄である。●上臈する。地上する。

うわすんべり 上臈(名) (うわすべり)。
うわぞめ 上臈(名) 表面を染めること。うはすり(上臈)。

うわちどり 上千鳥(名) (うわちどり)。
うわちより 上調子(名) ●落ちつかぬ調子。うかれてゐる調子。●言語・動作などの落ちつかぬこと。誠意の足らぬこと。●つれなきに強い調子の三味線をひく者。●三味線の特に鋭い調子。

うわつく 上附(名) (自動) 力四氣が浮浮して落ちつかぬ。

うわつぱり 上面(名) (うわつぱり)。
うわつぱり 上面(名) 衣服の汚れを防ぐ爲に、其の上に着る表衣。

うわつら 上面(名) ●うはへ。表面。外側。●上臈。●技能・學力などが他に勝れてゐる。●大動物で我が馬の前に立つた射手。

うわて 上手舵(名) 舵の柄を少し風上に寄せること。●すかし(上手透) 相手の手。相手の腕を握き込め、その腕に頭をつけてひねり倒すこと。●なげ(上手投) 相手の手。相手の廻しの結び目をつかき、身を捻りながら投げる。●ひねり(上手捻) 相手の手。廻しを引きわら間に上手に力を入れて捻り倒すこと。

うわな 上臈(名) ●上臈(名) ●相場で、買人氣の旺衰など。●買取組で、賣方の店が買方の店より多数なこと。

うわなみ 上波(名) 水面の波。●外の雑音。●うわなり 上鳴(名) 笛などの正音。●うわなり 後妻次妻(名) 後にぬた妻。

うわい 古語(名) ●うはをの對一うち(後妻打) 名。●嫡妻が次妻を嫉んで打った時。●古語時代に、妻を離れて後妻を娶つた時。先妻が親戚と共に後妻の家を襲つた習俗。

うわに 馬車(名) 馬車。●運送する上臈の荷。(うわに) ぶれ。●一さ(上荷差) 名。船の上荷を運搬する人夫。●一ぶね(上荷船) 波止場と本船との間を運ぶ荷物を運ぶ小舟で、二〇—三〇石積位のもの。

うわにこり 上濁(名) 流動物の上部の濁つた所。(上濁の對)。

うわぬり 上塗(名) 中塗の壁の上に土をぬること。●ある上に更に添へ加へること。●うわぬり 上直上値(名) 値段のあがらぬこと。●うわのそら 上空(名) 上方の天。●少し心にとらぬさま。●うてにならぬこと。●有頂天(名)。

うわのり 上乗(名) 航海中、荷と共に船に乗つてそれを監視監督し、且取引の委任を受けること。●又、其の人。●物事の上に又添へ加へること。●うは。●其の端數。

うわは 上端(名) 物の上部。●單位より上。●上齒(名) 上のはぐきに附いた齒。(下歯の對)。

うわはき 上履(名) 室内の床敷の間などに用ひるはき。●うわはけ 上剌(名) 塗物などの表面のはけに用ひるはき。

うわはた 上機(名) 麻や袖を織るに用ひるもの。●うわはみ 上機(名) 蛇の巨大なるもの。



(打妻後)

大蛇。なちろ。長さ六米位。背部に暗黄褐色の斑紋がある。●大酒家。●腹帯の上を包む大帯。

うわはらおびき 上腹帯表腹帯(名) 馬衣(名) 衣。●上腹垂(名) 水干などの上につける腹垂。

うわはり 上臈(名) 襪などの仕上げげり。●うわはり 上臈(名) 表面のはれること。

うわはれ 上臈(名) 表面のはれること。●うわはれ 上臈(名) 表面のはれること。●うわはれ 上臈(名) 表面のはれること。

うわひげ 上髭(名) 髭の上のひげ。●うわふし 上臥(名) ●うまへし(上臥)。

うわぶし 上扶持(名) ちんちん(名) 扶持。●うわぶし 上扶持(名) ちんちん(名) 扶持。

うわぶみ 上扶(名) ●うまへし(上扶)。

うわぶみ 上扶(名) ●うまへし(上扶)。

うわぶみ 上扶(名) ●うまへし(上扶)。

うわぶみ 上扶(名) ●うまへし(上扶)。

うわぶみ 上扶(名) ●うまへし(上扶)。

うわぶみ 上扶(名) ●うまへし(上扶)。

うわぶみ 上扶(名) ●うまへし(上扶)。

うわぶみ 上扶(名) ●うまへし(上扶)。

うわぶみ 上扶(名) ●うまへし(上扶)。

●神祕の上面にした點を標本として量ること。●向目(名) 對目(名) 上に出ること。●越過(名) かい(名) 一すかい(名) 上目遣(名) 瞳を上に向けて人を見る癖。●うわもり 上臈(名) 襪の上に重ねる。●うわもり 上臈(名) 襪の上に重ねる。●うわもり 上臈(名) 襪の上に重ねる。

●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。

●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。

●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。

●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。

●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。

●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。

●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。

●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。

●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。

●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。

●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。

●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。

●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。

●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。●上臈(名) 襪の上に重ねる。

らんす(ランス) (捲す) (自動、サ變) 捲じ。らんすになる。(古語)

らんすい(雲水) (名) 雲と水。○雲の如く行き水の如く流れる義から、所定めず遊歴する行脚僧の意に用ひ。ーらそう(水僧)(名) あんき僧の異稱。ー飛動す(句) 山水畫の自然に運るやうにいきまゝであること。

らんすんかるた(宇平須半加留多)(名) 江戸時代の初期ボクサーの傳へたカタルズ・イヌといふボクサーといふ青色の根株コップといふ酒盃オケルといふ命貨の四種の紋に分ち各半枚、總計四十八枚からなり、用法は花ガルトに似て博奕用のもの。

らんせい(運性)(名) 干支によって、人の天興の運命を定めること。

らんせい(運勢)(名) めぐりあはせ。運。

らんせい(曇生)(名) 陰曆十一月の異名。

らんせん(暈道)(名) ぼか。いろどり。ーしき(暈道式)(名) 地圖で、地表の高低を彩色の濃淡で現すもの。

らんせん(雲箋)(名) 他人の手紙の美稱。

らんせんがたけ(温泉岳雲仙岳)(名) 地。長崎縣南高来(今部島原市島)にある噴火山。その西部の九千部岳は海拔一〇六二米。その東部の警整岳は海拔一三六〇米。種種の地獄・洞窟・噴出。西南の山麓に硫黄泉の温泉がある。噴火公園の一。

らんそ(運祥)(名) しかあはせ。天運。○天子の御位。天運を受けて帝位に登りになること。

らんそ(雲窗)(名) 窓の窗。書齋。書齋。

らんそ(運漕)(名) 船で物を運ぶこと。

らんそ(運送)(名) 物品を運び送ること。○貨物及び旅客を搬送又は船舶によつて一定の場所から他の場所に送り送ること。ーきよう(運送業)(名) 運賃又は手数料を受けて旅客や貨物の

運送をなす營業。ーけいやく(運送契約)(名) 運送人が運送することを約し、荷送人らに對して運賃を支拂ふことを保証する契約。ーじようして(運送料)(名) 運送人が荷受人に對して、物品と共に發送する通知状。○荷送人が運送人に對して、貨物の運送について法定事項を記載し、交付する證書。ーせん(運送料)(名) 運送に用ひる船舶。○貨物の輸送に用ひる船。ーちん(運送料)(名) 貨物又は旅客の運送の報酬として受け取る金。ーとつあつかい(名) (運送料) 運送の目的とする物品。ーほけん(運送保険)(名) 運送の目的とする貨物に對し、災害の爲、荷主の受けける損害を補ふ爲の保險。ーりや(運送料)(名) 運送業を營むる又はその家。ーりやう(運送料)(名) 運送料。

らんそん(雲孫)(名) (仍孫)の子で、已を去るこの歳きこ浮雲の如しの意八代の孫。

らんちく(襪著)(名) 積みたくはへること。又その物。○知識や學問の深いこと。

らんちゅう(雲中)(名) 雲の中。○白鶴(句) 俗氣を抜け離れた人。

らんちん(運賃)(名) 運送賃。ーさきばらい(運賃先拂)(名) 運送した貨物の到着した時、荷受主からその運賃を支拂ふこと。ーどらうめい(運賃同盟)(名) 運送業者が同業者間の競争を避ける爲、相互間及び鐵道事業者と各貨物の最低運賃を協定すること。ーひょう(運賃表)(名) 旅客又は貨物の運賃を種別に記載した表。ーほけん(運賃保險)(名) 運送業者が事故の爲、運送を繼續する能はしめて運賃を失ふ場合の損害を補ふ爲の保險。ーまぜばらい(運賃前拂)(名) 貨物の運送を委託した場合にその運賃を前に支拂ふこと。

らんつく(名) ぼんやり者。うかりもの。

らんでい(雲梯)(名) 貴城攻に用ひた長いはらんでい(雲梯) (名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。

らんてい(雲梯)(名) 貴城攻に用ひた長いはらんでい(雲梯) (名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。

らんてい(雲梯)(名) 貴城攻に用ひた長いはらんでい(雲梯) (名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。

らんてい(雲梯)(名) 貴城攻に用ひた長いはらんでい(雲梯) (名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。

らんてい(雲梯)(名) 貴城攻に用ひた長いはらんでい(雲梯) (名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。

らんてい(雲梯)(名) 貴城攻に用ひた長いはらんでい(雲梯) (名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。

らんてい(雲梯)(名) 貴城攻に用ひた長いはらんでい(雲梯) (名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。

らんてい(雲梯)(名) 貴城攻に用ひた長いはらんでい(雲梯) (名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。

らんてい(雲梯)(名) 貴城攻に用ひた長いはらんでい(雲梯) (名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。

らんてい(雲梯)(名) 貴城攻に用ひた長いはらんでい(雲梯) (名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。

らんてい(雲梯)(名) 貴城攻に用ひた長いはらんでい(雲梯) (名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。

らんてい(雲梯)(名) 貴城攻に用ひた長いはらんでい(雲梯) (名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。

らんてい(雲梯)(名) 貴城攻に用ひた長いはらんでい(雲梯) (名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。

らんてい(雲梯)(名) 貴城攻に用ひた長いはらんでい(雲梯) (名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。

らんてい(雲梯)(名) 貴城攻に用ひた長いはらんでい(雲梯) (名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。○雲梯(名) 相違することの甚だしい。

らんと(副) 多く。たくさん。

らんと(副) 多く。たくさん。

らんと(副) 多く。たくさん。

らんと(副) 多く。たくさん。

らんと(副) 多く。たくさん。

らんと(副) 多く。たくさん。

らんと(副) 多く。たくさん。

らんと(副) 多く。たくさん。

らんと(副) 多く。たくさん。

らんと(副) 多く。たくさん。

らんと(副) 多く。たくさん。

らんと(副) 多く。たくさん。

らんと(副) 多く。たくさん。

らんと(副) 多く。たくさん。

らんと(副) 多く。たくさん。

らんと(副) 多く。たくさん。

らんと(副) 多く。たくさん。

(名) わらひ顔。ここに、顔。笑ひを含んだ顔つき。
 一 つば笑蓋 (名) 笑ひ興する。一 壹に
 入る (句) 類りに笑ひ興する。頻りに面白く。
 一の會 (名) 句) 一連の者がすべて笑蓋に入ると。
 えい (名) 字の笑音) 物の形がまがきあらは
 した。の。繪畫。

えい (餌) (名) 鳥獸 鳥獸を飼育し又は之を捕へ
 る爲に用ひる食物。人 人を誘惑する爲に提供する利
 害。一 がい (餌飼) (名) 鳥獸などを餌飼養
 する。一 がい (餌食) (名) 餌のきのひのこり。
 一 かい (餌を) (名) 餌を乞ふ。一 かい (餌を)
 一 かい (餌を) (名) 餌を乞ふ。一 かい (餌を)
 一 かい (餌を) (名) 餌を乞ふ。一 かい (餌を)
 一 かい (餌を) (名) 餌を乞ふ。一 かい (餌を)

えい (餌) (名) 鳥獸 鳥獸を飼育し又は之を捕へ
 る爲に用ひる食物。人 人を誘惑する爲に提供する利
 害。一 がい (餌飼) (名) 鳥獸などを餌飼養
 する。一 がい (餌食) (名) 餌のきのひのこり。
 一 かい (餌を) (名) 餌を乞ふ。一 かい (餌を)
 一 かい (餌を) (名) 餌を乞ふ。一 かい (餌を)
 一 かい (餌を) (名) 餌を乞ふ。一 かい (餌を)

えい (餌) (名) 鳥獸 鳥獸を飼育し又は之を捕へ
 る爲に用ひる食物。人 人を誘惑する爲に提供する利
 害。一 がい (餌飼) (名) 鳥獸などを餌飼養
 する。一 がい (餌食) (名) 餌のきのひのこり。
 一 かい (餌を) (名) 餌を乞ふ。一 かい (餌を)
 一 かい (餌を) (名) 餌を乞ふ。一 かい (餌を)
 一 かい (餌を) (名) 餌を乞ふ。一 かい (餌を)

えい (餌) (名) 鳥獸 鳥獸を飼育し又は之を捕へ
 る爲に用ひる食物。人 人を誘惑する爲に提供する利
 害。一 がい (餌飼) (名) 鳥獸などを餌飼養
 する。一 がい (餌食) (名) 餌のきのひのこり。
 一 かい (餌を) (名) 餌を乞ふ。一 かい (餌を)
 一 かい (餌を) (名) 餌を乞ふ。一 かい (餌を)
 一 かい (餌を) (名) 餌を乞ふ。一 かい (餌を)

えい (餌) (名) 鳥獸 鳥獸を飼育し又は之を捕へ
 る爲に用ひる食物。人 人を誘惑する爲に提供する利
 害。一 がい (餌飼) (名) 鳥獸などを餌飼養
 する。一 がい (餌食) (名) 餌のきのひのこり。
 一 かい (餌を) (名) 餌を乞ふ。一 かい (餌を)
 一 かい (餌を) (名) 餌を乞ふ。一 かい (餌を)
 一 かい (餌を) (名) 餌を乞ふ。一 かい (餌を)



〔圖〕

まりに背後に垂れ
 下げたもの名残
 である。冠が下
 げぬやうに顎の
 下で結ぶ紐。
 えい (類) (名) 木本料
 植物の花の外部にある二片
 の苞。鋭い才氣。才氣ある人物。一 脱す (句)
 (先記列傳平原君傳の句) 鎌は髪に包れて自然と穗
 先をあらはす意から人に秀でた才氣をあらはす意
 ふ。えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。

えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。
 えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。
 えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。

えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。
 えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。
 えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。

えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。
 えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。
 えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。

えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。
 えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。
 えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。

えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。
 えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。
 えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。

えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。
 えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。
 えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。

えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。
 えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。
 えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。

えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。
 えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。
 えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。

えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。
 えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。
 えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。

えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。
 えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。
 えい (類) (名) 詩歌を詠すること。うたふこ
 と。くちすまじと。一 作詩歌。

安法實行に際し、報徳社より社員に交付する證券
 一口元金十圓を納付すれば、永遠に保管し、四利を
 以て増殖し、元利が自由に達した時、その半額五十圓
 を本人又は相続者に善根金として交付し、殘金を引
 續増殖する法は、大日本報徳社の實行案である。
 えいあんぼん (永安證券) (名) 二宮尊徳の報
 徳社法様式の一。衰頹を復興した後、再び衰頹に陥ら
 めやうに、團體の力によつて報徳社法の様目を永遠
 に繼續し、報徳事業の進達、自給自足の増加を計る法。
 えいあんもん (永安門) (名) 平安内裏西門十二
 門の。内裏の南面、永安門の西にある門。右衛門
 とし稱する。

えい (名) 一心に心をなげますこと。
 えい (名) 名譽ある地位。
 えい (名) 英傑 (名) すぐれておおいなる。
 えい (名) 大人物。
 えい (名) 聲域 (名) 是は、音階。「ま
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。

えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。

えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。

えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。

えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。
 えい (名) 營營 (名) 力を入る時掛聲。



〔果類〕

(名)【生進進化論】生物進化説。
エヴォリューション [Evolution] (名) 進化。
えうかし [兄猪] (名) 人神武天皇東征の際、大和國宇陀で稲實に反抗した賊。遠征軍に誅せられた。弟猪(し)の兄。
えうちわ [時給扇] (名) 扇を賣いた扇。扇賣(し)の兄。
えうちま [時給] (名) 時給に用ゐる漆液。
えええ [罵] (名) 又は悲しむの聲。『えええ』と應答するの聲の聲。

エー (獨 E) (名) 監理學に於ける全稱否定動詞。
エー (獨 E) (名) 米國自動車協會 (Automobile Association of America) (名) 米國自動車協會。
エー (獨 E) (名) 業の運動競技協會。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 米國労働總同盟 (Federation of Labour) (名) 米國労働總同盟。
エー (獨 E) (名) 米國の地権の單位。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

風。南米大陸の不和は、この三國の提携によつて確保されてゐる。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

【軍用空軍根據地】
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

に向かひ、初習によつて甲板軟骨に附着する食物を嚥下する際、喉頭を閉鎖し、氣嚥入るを防ぐ。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。
エー (獨 E) (名) 代理人。代理店。

えがわ **A. B.** (繪草) (名) 繪を描いたなめしがは。
えがわ **A.** (江川) (名) 入江となつた川。
えがわら **A.** (伊豆) (名) 伊豆山山頂の代官。
左衛門 **A.** (名) 芝居、活動寫眞などで、狂言の模様などを描いて掲げる看板。

えき **易** (名) 算本と筮竹として吉凶を判断する支那漢族の占法。除魔の原理と神人交感の神秘に基づき、社会に於ける幽明晦昧のあらゆるものを細察して稱せらる。えききやう(易經の略)。
えき(益) **A.** (名) りえき。とく。まうけ。りやく。
えき(液) (名) 流動する物質。液體。
えき(疫) (名) ばやりやまひ。流行病。
えき(釋) (名) うまや。しやくば。停車場。
えき(奕) (名) 二(奕)。圍碁。
えき(役) (名) 人民を公用に使ふこと。ぶやく。
えき(民) (名) 國民を徵發して之を使用するよりいふ。
えき(官) (名) 官邸の會垣門庭。

えき(液) **A.** (名) えんき液起。(古語)。
えき(液) **A.** (名) 陰曆十月頃に降る雨。
えき(奕) **A.** (名) 奕奕(名) 副(大)になるさま。
えき(役) **A.** (名) 副(力)を勞するさま。
えき(液) **A.** (名) 副(力)を勞するさま。
えき(液) **A.** (名) 副(力)を勞するさま。

えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。

えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。

えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。



えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。

えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。

えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。

えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。

えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。

えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。

えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。

えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。

えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。
えき **A.** (名) 宿弊を人の眼立を取扱つた體格に變ずる現象。

趣味の。異國情調の。外國産の。舶來の。油味の。具體を有するが、一定の形を有せぬ流動體より、其の凝集力は、氣體よりは強く、固體よりは弱いもの。●酒の異名。一くろり液(液體空氣)(名)(理) Liquid Air 温度と壓力との作用によつて空氣を液化したるもの。一たんさんガス(液體炭酸瓦斯)(名) 瑪炭質瓦斯を低温高壓で液化したるもの。一ねりりよう(液體燃料)(名) 液體の燃料で、石油の原油・重油の如きもの。高熱を發し、灰燼を残さぬ便がたのて實用される。一ばくやく(液體爆藥)(名) 化學少くとも一成分が普通で液體をなす混合爆藥、及び爆發性の液體糖、或吸劑で十分な乾燥状態にならぬ混合爆藥の總稱。●置くと。

えきち(易置)(名) おきかへること。とりかへてえきちゆう(益蝨)(名) 動物植物の害蟲を驅除するに效する昆蟲で、人類に利益を興へるもの。害蟲(名) 害の對するもの。●停車場の長。

えきちちゆう(益鳥)(名) 動物植物の害蟲を捕食し又は肉卵などを食用に供せられ、羽毛は用具となる等、直接間接に吾人利益を興へる鳥類。害鳥(名) 害の對するもの。●停車場の長。

えきちちゆう(益鳥)(名) 動物植物の害蟲を捕食し又は肉卵などを食用に供せられ、羽毛は用具となる等、直接間接に吾人利益を興へる鳥類。害鳥(名) 害の對するもの。●停車場の長。

えきちちゆう(益鳥)(名) 動物植物の害蟲を捕食し又は肉卵などを食用に供せられ、羽毛は用具となる等、直接間接に吾人利益を興へる鳥類。害鳥(名) 害の對するもの。●停車場の長。

えきちちゆう(益鳥)(名) 動物植物の害蟲を捕食し又は肉卵などを食用に供せられ、羽毛は用具となる等、直接間接に吾人利益を興へる鳥類。害鳥(名) 害の對するもの。●停車場の長。

えきちちゆう(益鳥)(名) 動物植物の害蟲を捕食し又は肉卵などを食用に供せられ、羽毛は用具となる等、直接間接に吾人利益を興へる鳥類。害鳥(名) 害の對するもの。●停車場の長。

えきちちゆう(益鳥)(名) 動物植物の害蟲を捕食し又は肉卵などを食用に供せられ、羽毛は用具となる等、直接間接に吾人利益を興へる鳥類。害鳥(名) 害の對するもの。●停車場の長。

えきちちゆう(益鳥)(名) 動物植物の害蟲を捕食し又は肉卵などを食用に供せられ、羽毛は用具となる等、直接間接に吾人利益を興へる鳥類。害鳥(名) 害の對するもの。●停車場の長。

えきちちゆう(益鳥)(名) 動物植物の害蟲を捕食し又は肉卵などを食用に供せられ、羽毛は用具となる等、直接間接に吾人利益を興へる鳥類。害鳥(名) 害の對するもの。●停車場の長。

えきたーえこえ

ち騾子給料、騾馬の購入飼養費に充てる爲に給せらる田。えきてん(驛傳)(名) しゅうくつぎの車馬。一きようそう(驛傳競走)(名) 長距離を競走する競走で、數人で一チームをなし、各一區間を競走するもの。えきてん(驛傳)(名) 地味でせて毎時耕作するに過ぎず、隨處に耕作する田地。かたがた。えきとどう(驛道)(名) 宿驛に通ずる道路。えきとどう(驛道)(名) 宿驛に通ずる道路。●停車場に通ずる道路。えきぬ(繪絹)(名) 日本書畫を畫くに用ひる平えきぬ(繪衣)(名) 貴女のもの着た表衣。表は白練布で雲に梧の花彩を施し、裏は萌黄にした生絹を用ひる。●供た馬。えきは(驛馬)(名) 宿驛に用意しておいて、官用にえきは(役馬)(名) 勞作に使役する馬。駄馬。えきひ(液肥)(名) 液體の肥料。水肥。一ひ。えきひ(疫馬)(名) 流行病。はやりやえきふ(疫夫)(名) 人にそく。にんぶ。えきふ(驛夫)(名) 昔の宿驛の人夫。●鐵道停車場で、車輛の運轉、貨物の運轉場内の掃除等に従事するもの。えきめい(驛名)(名) 昔の宿驛の名稱。●停車場の名稱。えきもん(接門)(名) 大門の傍にある小門。えきもん(接門)(名) 大門の傍にある小門。えきゆう(益友)(名) 交てたためになる友人。えきゆう(奕葉)(名) 奕(奕)は重れる意。代。世世。えきゆう(役用)(名) 勞役に使用すること。えきゆうじ(會行事)(名) 佛天台宗流言宗などで、法堂の時、佛堂を奉行。えきり(疫痼)(名) 醫小兒の急性傳染病。大人の赤痢の惡性のもので、最初惡寒を受え、後、發熱甚だしく腹痛を感じ、下痢を催し、便には血を交へ、死に至ることが多い。我が國特特有の疫。えきれい(疫癘)(名) えきびん(疫菌)。えきれい(疫菌)(名) 貴官使の諸國へ赴く時、

朝廷から購はつた鈴で、驛路の人間を徵發する意として、振舞ひならしたるもの。えきろ(驛路)(名) 宿驛に通ずる道路。すま。えきわ(腋窩)(名) えきか(腋窩)。えぐい(敷手)(名) 植生半の變種。子半を生ずること多く、塊茎と葉とを食用とする。味はみく。えぐし(敷し)(形) 一食べたのてを割裂していらする味のあるじよ。エクスカンショントール(Excursion Train)(名) 同遊列車。名所案内の列車。エクスタシー(Ecstasy)(名) 有頂天。狂喜。無我夢中。恍惚。忘我。法悅。エクスタジス(Ecstasy)(名) 露出。曝露。日光に露出して寫眞を焼くこと。すばやく。エクセントリック(Eccentric)(名) 風がはり。えくぼ(鬱)(名) 笑ふ時、顔に生ずる小さい。へんくつ。えぐり(抉刺)(名) 深く工夫して、人の意表えぐる(えぐり) 抉る。刺る(他動、ラ四)●突かされてまはす。●意地わるい皮肉な言葉で相手を苦しめる。●人の意表に出るやうにする。エクスワルド(Exwold)(名) 南米西北北部一共和國。北はコロンビヤ、南はペルー、東はペルー及びコロンビヤに接し、西は太平洋に臨む。面積約二十六萬五千平方千米。首府はキート。えけ(懸解)(名) 佛智慧に集まつて事理を了解せしむ。佛(佛)師の下に集まつて參禪。修學する學徒。一そら(會下僧)(名) 佛(佛)會下僧の稱。門下の學徒。一てら(會下寺)(名)

えきたーえこえ

えきたーえこえ

えきたーえこえ

えきたーえこえ

えきたーえこえ

えきたーえこえ

えきたーえこえ

えきたーえこえ

えきたーえこえ

えきたーえこえ

えきたーえこえ

えきたーえこえ

えきたーえこえ

えきたーえこえ

えきたーえこえ

えきたーえこえ



したま。

えこく〔衣械〕(名) 佛花を盛って諸佛菩薩に捧げ、佛手の歯又は竹製の籠で、三所に紐を下

り、佛手を捧げるやうにしたもの。

えこくA〔織國〕(名) 佛手。織土。

えこころA〔繪心〕(名) 繪の趣味を解する心。

エゴティズム〔Egotism〕(名) 自己中心主義。主

我。自負。自尊。ひよが。ひよめ。ほ。ほ。

えことはA〔繪詞〕(名) 繪を説明した詞。繪卷

物の詞書。よとこ。よとこ。

えこよき〔賈子木齊墩果〕(名) 種齊墩果科

の落葉小喬木。高さ三

米位に達し、葉はに結

黑色で平滑。皮は鋭鋸

の形形で、不明瞭な鋸

齒を有し、花は白色、

五裂し、短い總狀花序

をなす。果實は小さく球形

球形、熟すれば鋭角けて褐色の種子を現す。種子から

油を採り、材を挽物細工玩具材などに造る。

エノミヤ〔Economy〕(名) 經濟。理財。徳用。

家政。節約。

エノミカル〔Economic〕(英、形) 經濟的。

エノミカルアライアンス〔Economic Alliance〕(名) 經濟同盟。

エノミカルクライシス〔Economic crisis〕(名) 經濟的危機。

エノミスト〔Economist〕(名) 經濟學者。理

財學者。儉約家。

エノニツクホリツト〔Economic policy〕

(名) 經濟政策。

えごのりA〔葱胡苔〕(名) 〔植〕紅藻類の海藻。

馬尾藻(こん)科植物に著生し、體は紐のやうに分岐し、鮮紅色を帯びてゐる。到る處の海濱に見られる。寒天の原料となる。

えごま〔在胡麻〕(名) 〔植〕唇形科の一年生草本。



【きこえ】

高さ約一米。莖は方形。葉はに似てゐるが、葉は薄

緑色で、葉は卵形。一種の臭氣がある。又、花

は白色で、紫線がある。

うに淡紫色で、花。種子

は炒つて胡麻に代用し、その種子

から採つた油は、えごあぶらとい

ひ燈用・印用油といふ。又、雨衣衣に塗る。油を搾つた

滓(む)を在津といふ。

えごむ〔自動マ〕(名) はひりこ。又、落し

えごよみ〔精曆〕(名) 繪のある曆。又、繪に

意味を持たせた曆。前者は繪入曆といひ、歲徳神・金

神大歲神・大將軍以下の神像を圖し、干支・星辰の

吉凶を圖録し、後者は文字を解せぬ庶民に繪で、種

種織繪等の曆日を示したものをめくらともいふ。

えさがしA〔精探〕(名) 繪の中にわからぬやう

に他の物の形をまがき込んでゐるのを探し求めるこ

と。又その繪。

えさしほうきA〔柄差帚〕(名) 帚の莖に柄を

えさまき〔感〕重い物を動かす時などに發する聲。

(古語)

えさらずA〔不得遊〕(副) やむを得ず。しかたな

えし〔善〕(形、) よし(善)。(古語)

えしA〔繪師〕(名) 〔形、) 畫工。(古語)

えしの畫工に屬し、繪を描くことを掌つた職。(江

戸幕府の繪所に屬して繪畫の事を掌つた職)

えしA〔衛士〕(名) 諸國の軍團から毎年交

替して上衛士・衛士に屬し、常にくをもち、夜は火

を焚いて禁園を守つた者。(誤つて「しちやう」(仕

見張)をたもの。伊勢大神宮の神地に屬する職。

えしA〔衛士府〕(名) 中古宮城の禁衛・儀仗の檢

校・内府の名。車駕出入の際の前驅・後殿等の事を

掌つた所で、左右二府に別れた。弘仁二年(四七二)

衛門府と改稱。

えしきA〔壞色〕(名) 佛に純色を消壞した色



【まこえ】

地の三色。

えしきA〔會式〕(名) 佛の法會の儀式。日

蓮華宗・宗廟日蓮の忌日。即ち十月十三日に替む法會

をさす。おむい。おむい。

えしき〔兄城〕(名) 人神武天皇東征の際、召せ

たも懸つ、遂に降せられた和の磯城(和)の土人の

えじきA〔穢食〕(名) 佛に不淨の食物。「長

えじきA〔穢食〕(名) 佛に不淨の食物。「長

えじくちA〔繪地口〕(名) 地口を繪で示したも

の、地口行燈の流行から畫畫のやうに繪の上に地

口を畫つたもの。

エシックス〔Elixirs〕(名) 倫理學。

エジプトA〔埃及〕(名) 地) フリカ大陸

の東北部に獨立した王國。實は英國にある。面

積七十八萬平方浬。首都はカイロ。棉花・穀物・甘蔗

等の農作物を産し、重要な資源をなす。「もし

埃及文字(名) 古代エジプト人の使用した象形

文字で、始めは繪畫文字から發達した。音を示す字

と意を示す字とあり、世界最古の文字である。

えじまきせきA〔江島其礎〕(名) 江戸時代の

小説家。通稱市郎右衛門。京都の人。八文字屋自文

の名を借つて役者評判記・浮世草子等を發表した。元

文元年二二九六。年七十。其の著に「傾城色三

味録」「傾城術氣」「傾城曲三味録」「世間息子氣質」と

「世間娘容氣」等がある。この種の本を八文字屋本と

いふ。

えしやくA〔會釋〕(名) 佛の法文の釋義に會

通して之を解釋すること。①のみこむ。合點する

こと。②心をくみとること。③相手の感情を和げる

こと。④相手となること。接拶。辭接すること。⑤首を垂

れて、請すること。挨拶。俯接。あひきやう。

えしやくA〔會釋〕(名) 佛の法文の釋義に會

通して之を解釋すること。①のみこむ。合點する

こと。②心をくみとること。③相手の感情を和げる

えしゆA〔會衆〕(名) 佛集まつた人人。一座の

法會の大衆。

えじつちんA〔繪提燈〕(名) 吉野紙等の薄

紙を貼つて繪を描いた提燈で、夏夜軒先などに吊し

て點火する。蚊早提燈が最も有名である。

えしんA〔穢身〕(名) 佛に不淨の身。凡天の身。

えしんA〔穢心〕(名) 佛に不淨の心。凡天の心。

えしんA〔同心〕(名) 佛佛心を離して正者に

歸向すること。

えしんA〔慧心惠心〕(名) 人慧心僧部。諱

は源信。天台宗の高僧で、彌陀の信仰を鼓吹し、彫

刻・繪畫に巧みであつた。寛仁元年(一六七七)

寂。一七十六。「往生要集」「慧心僧部」とする佛

畫の流派。又慧心は始祖とする天台宗派の名。!

えすA〔慧心佛〕(名) 慧心僧部の畫いた佛畫。

えすA〔慧心佛〕(名) 慧心僧部の畫いた佛畫。

えすA〔慧心佛〕(名) 慧心僧部の畫いた佛畫。

エスA〔名) 獨逸語の語の頭文字を取つて美

人の隠語とした語。①英語のEの語の頭文字

を取つて、藝妓の隠語となす。②英語のEの語の

始めの二音をとり、透れて自分の嫌ひな學科を休

むこと。③英語のEの語の頭文字を取つて、女學生の

同性愛の對象をあらはした語。④英語のEの語の

頭文字をとり、中等學校男生徒用語として「煙

草」(喫煙)の意に用ひる語。

えすA〔慧心佛〕(名) 慧心僧部の畫いた佛畫。

えすA〔慧心佛〕(名) 慧心僧部の畫いた佛畫。

えすA〔慧心佛〕(名) 慧心僧部の畫いた佛畫。

えすA〔慧心佛〕(名) 慧心僧部の畫いた佛畫。

エスエムユエー〔S.M.U.〕(名) 社 (Shary Men's Union) の頭文字を取つた生活の向上に企圖

することを目指す團體で、大正八年に組織せら

れた。併給生活者同盟。サラーメニスムニオン。

エスオーエス〔S.O.S.〕(名) 無線電信の危險

を知らせるための呼ぶ言葉。

を掛ける爲に床柱に打つ釘又は之に掛ける爲の紐。

「一」烏帽子(兒) (名) 烏帽子親から烏帽子名を

つられた者。一(名) 烏帽子(名) (名) 元服の時

つらぬき改めて別につけた名で烏帽子親が、自分の

一字を與へたる。實名。一のおし (名) 烏帽

子直衣 (名) 立烏帽子をかぶり、直衣を着た姿。

一の (名) 烏帽子筒 (名) 頭を入れる烏帽

子の部分。一はじむ (名) 烏帽子始 (名) 元服。

エポック [Epoch] (名) 時代。紀元。世紀。

エポーカー [Epoch-maker] (名) 新時代を

創する人。一メーカー [Epoch-making] (名) 新時代を

創する人。一メーカー (名) 創動的。

エポナイト [Ebonite] (名) 化) 彈性ゴムに硫黄

り、薬品を與へて作つた物で、質堅く、黒色光澤あり、

飾や醫療の器具などに用ひる。硬化樹脂。

エポレット [Epoilet] (名) 女子の洋服の

肩につける飾。一肩帯。

えほん (名) 繪本 (名) 繪の本。繪草紙。繪の

手本。一ばんすけ (名) 繪本番附 (名) 芝居

番附の。狂言の一幕を繪で示し、傍に役名と

併置の名を記入し、表紙に脚本の外題を記したも

の。えほんたいこうき (名) 繪本大図記 (名)

「文」寛政九年玉出が、大図記に繪を挿入して出版した

書で、寛政九年初篇を出版し、享保二年完結。七篇。

文化元年、幕府は絶版を命じた。

えほんたいこうき (名) 繪本大図記 (名)

「文」浄瑠璃の曲書、繪本大図記に基づいて、近松柳

近松柳水軒近松千葉軒の合作したもので、十段目

「尼ヶ崎の段」は最も有名である。寛政十一年大野監

竹屋初演。

えま (名) 繪馬 (名) 新

願又は稱讚の爲に、馬の

繪を重いて、神社、佛前に

奉納する例で、馬四又は遠

馬を奉る代りに、奉納す



〔馬繪〕

えほん—えもん

繪の額。一いしや (繪馬醫者) (名) 商家に赴

く風をなして、社寺の繪馬を見歩く醫者。はやらぬ醫

者。一でん (繪馬殿) (名) えまどう。一ど

う (繪馬堂) (名) 神社、佛閣などに奉納の繪馬

を掲げ置く堂。一や (繪馬屋) (名) 繪馬を賣る

家。又は其の人。

エマソン [Ralph Waldo Emerson] (名)

「入」アメリカ合衆國の文學者思想家。ボストンに生

まれ、教育家、宗教家となつた。後、著述生活に入り

「ソニー」の歌。「英國氣質」論文集等の著がある。

世に「ソニー」の哲人と呼ばれた。「EMerson」

と綴る。(古語)

えま (名) 笑 (名) えみ (名) 笑 (古語)

えまき (名) 繪卷物 (名) 繪を卷物にし

て、詞書を添へたるもの。一條義時の異名。

えまこころう (名) 江馬小四郎 (名) 一北

えま (名) 笑 (名) 笑 (古語)

えま (名) 笑 (名) 笑 (古語)

えま (名) 笑 (名) 笑 (古語)

えま (名) 笑 (名) 笑 (古語)

えま (名) 笑 (名) 笑 (古語)

えま (名) 笑 (名) 笑 (古語)

えま (名) 笑 (名) 笑 (古語)

えま (名) 笑 (名) 笑 (古語)

えま (名) 笑 (名) 笑 (古語)

えま (名) 笑 (名) 笑 (古語)

えま (名) 笑 (名) 笑 (古語)

えま (名) 笑 (名) 笑 (古語)

えま (名) 笑 (名) 笑 (古語)

(自動、ラ下二) 形もくづれる程に笑ふ。(古語) 一

さかゆ (名) 笑 (名) 笑 (古語) 一

笑つて滑稽が出る。笑顔をたくつて満足する。一の

まゆ (笑眉) (名) 眉の、心が眉の間にあらはれ

る。一ひろく (名) 笑 (名) 笑 (古語) 一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ

下二) 大口をあけて笑ふ。一ひろく (自動、ガ



〔一ユエ〕

こと。(ラテン語 Membran (メンブラン) の頭文字

をとつて、男根の隱語。英語 Monthly 又は Menstru

の頭字をとつて、月經の隱語。

エメチン [Emetine] (名) 化) 瀉木、吐根より得

られた一種のアルカロイド。この鹽酸鹽を普通略

してエメチンといひ、藥學に用ひる。鹽酸エメチン

えむし (名) 繪縫 (名) 花模様などを織り出し

たじろふ。はなし。

エメラルド [Emerald] (名) 綠 (名) 綠色の光澤

ある寶石。綠玉石。翠玉。一グリーン

[Emerald-green] (名) 寶石エメラルドのやうな

明い綠色。

エメリー [Emeril] (名) 鑲嵌玉石の一種。粒狀

で、黒灰色又は黒色。金剛石に次ぐ硬度を有するから、

粉末として研磨用に供せられる。一ヘーパー

[Emery-paper] (名) 研磨紙。

えも (名) あまはかにも。よし。(古語)

えもう (名) あまはかにも。よし。(古語)

えも (名) あまはかにも。よし。(古語)

えも (名) あまはかにも。よし。(古語)

えも (名) あまはかにも。よし。(古語)

えも (名) あまはかにも。よし。(古語)

えも (名) あまはかにも。よし。(古語)

えも (名) あまはかにも。よし。(古語)

えも (名) あまはかにも。よし。(古語)

えも (名) あまはかにも。よし。(古語)

えも (名) あまはかにも。よし。(古語)

えも (名) あまはかにも。よし。(古語)

えも (名) あまはかにも。よし。(古語)

二〇五

えんあい 煙雲 (名) 煙もまじり。えんあい 宴飲 (名) 遊び樂して日を遊る。◎酒に耽つてなまけな事。一は耽毒 (名) (左傳) 公元年の條、齊の管仲の言に耽ること、耽毒に耽るや、夏の毒に耽はす。

えんい 炎威 (名) 緑地に張った板。えんい 宴飲 (名) さまじり。酒宴。えんい 延引 (名) 或事柄のきまたりからのびに、おこなること。えんに、のびぬ。

えんいん 奄尹 閼尹 (名) 支那の後宮に仕へる官吏。かんく 寛容 (名) 寛容。えんいん 遠引 (名) 遠い原因。聞接原因。えんち 煙雨 (名) けぶる雨。きりあめぬかあめ。

えんち 簪字 櫛字 (名) のき。櫛の下。エンヴェロップ (Envelope) (名) ◎包。角封筒。状態。◎飛行船や軽氣球の瓦斯嚢。氣嚢。

えんちん 煙雲 (名) ◎けむり。◎雲のやうに立ちのぼる煙。えんえい 掩映 (名) おひひかくすること。『孫』

えんえい 遠裔 (名) 遠い血つづき。末の子えんえき 演習 (名) 教習して述べること。『論』一定の根本原理から未の事項を推論すること。

えんえい 遠裔 (名) 遠い血つづき。末の子えんえき 演習 (名) 教習して述べること。『論』一定の根本原理から未の事項を推論すること。一はほうり (名) 演習法 (Deduction) (既知の一般原理から特殊事實を論ずる法。推理二大法の一。帰納法の對)。

えんえん 奄奄 (名) 副 火の盛んにえあが。えんえん 奄奄 (名) 副 息の絶えんとするさま。えんえん 淵淵 (名) 副 鼓を撃ちつづける聲。◎静かなこと。深きこと。

えんえん 餓餓 (名) 副 火の燃え始めるさま。一に滅せずんば炎炎を若何せん (句) (孔子家語の周潤篇の句、愈細な時に止めなければ遂に大事になつて手つけやうがなくなる。

えんえん 煙燄 (名) 煙とほのぼ。一天に漲る (句) 煙と燄が空一面になる。火災の盛んに燃えひかるさま。えんえん 厭惡 (名) さひらかにむこうい。い

えんおら 鴛鴦 (名) ◎動 おしどり。一の契 (句) 夫婦の睦い誓。一の家 (句) 男女が共に居るさま。◎刑を受けることしへたな。

えんおら 冤枉 (名) ◎冤罪にかかつて無法のえんおんのさけ (名) 宴座 (名) 宴座と煙座えんか (名) 煙と座。◎天候の景色。一。

えんか 煙霞 (名) ◎煙と霞。◎神隠しや呼吸器病の、新鮮な空気に恵まれた地に行つて保養すること。一の痼疾 (句) 深く山水の景色を好んで之に耽著し、旅行を好む習癖。一の癖 (句) 前條に同じ。

えんか 縁家 (名) 婿による親族。みうち。しんぞう。しんせき。しんる。まんじん。つづきあひ。えんか 鉛華 (名) おしろい。白粉。

えんか 煙火 (名) ◎かまどの火。炊煙。◎のろし。烟火。一はなび。花火。一中の食 (句) 火食する。即ち人間。(山人對) 一の食 (句) 火を用ひて煮た食物。熟食。

えんか 遠遊 (名) ◎遠いこと。はるかなること。◎報下 (名) 遠いこと。はるかなること。一に便せられること。部下。門下。一の駒 (句) (史記魏其武安傳の漢武帝の諸人の東遊を受け、意氣の振はぬこと。

えんか 圓價 (名) ◎經圓の貨幣價値。圓買。えんか 圓買 (名) ◎經圓の貨幣價値。圓買。◎圓下の階級。(古語) 一のまひ (名) 垣下舞 (名) 垣下座する舞。(古語)

えんか 假臥 (名) ◎うつぶしてれること。えんか 假臥 (名) ◎うつぶしてれること。えんか 假臥 (名) ◎うつぶしてれること。

えんか 假臥 (名) ◎うつぶしてれること。えんか 假臥 (名) ◎うつぶしてれること。えんか 假臥 (名) ◎うつぶしてれること。

えんか 假臥 (名) ◎うつぶしてれること。えんか 假臥 (名) ◎うつぶしてれること。えんか 假臥 (名) ◎うつぶしてれること。

えんか 假臥 (名) ◎うつぶしてれること。えんか 假臥 (名) ◎うつぶしてれること。えんか 假臥 (名) ◎うつぶしてれること。

えんか 假臥 (名) ◎うつぶしてれること。えんか 假臥 (名) ◎うつぶしてれること。えんか 假臥 (名) ◎うつぶしてれること。

えんか アンモニウム (名) ◎鹽化一 (名) ◎化學 (Ammonium chloride) アンモニウムと鹽化水素を混ぜて製した白色の固體で水に溶解し易く、其の溶液は中性の反應を示する。電池・電筒つけ等にも用ひられる。晶砂糖。

えんかい 沿海 (名) ◎地 平島及び列島などで區劃せられた海。日本海の如きは其の例である。えんかい 沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。

えんかい 沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。

えんかい 沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。

えんかい 沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。

えんかい 沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。

えんかい 沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。

えんかい 沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。

えんかい 沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。

えんかい 沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。

えんかい 沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。

えんかい 沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。

えんかい 沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。沿海 (名) ◎海に沿う。

えんか カルシウム (名) ◎鹽化一 (名) ◎化學 (Calcium chloride) 白色立方體の結晶體で、加里石鹽として天然に産し、鹽素加里加里硝石・苛性加里等の

えんか カルシウム (名) ◎鹽化一 (名) ◎化學 (Calcium chloride) 白色立方體の結晶體で、加里石鹽として天然に産し、鹽素加里加里硝石・苛性加里等の

えんか カルシウム (名) ◎鹽化一 (名) ◎化學 (Calcium chloride) 白色立方體の結晶體で、加里石鹽として天然に産し、鹽素加里加里硝石・苛性加里等の

えんか カルシウム (名) ◎鹽化一 (名) ◎化學 (Calcium chloride) 白色立方體の結晶體で、加里石鹽として天然に産し、鹽素加里加里硝石・苛性加里等の

えんか カルシウム (名) ◎鹽化一 (名) ◎化學 (Calcium chloride) 白色立方體の結晶體で、加里石鹽として天然に産し、鹽素加里加里硝石・苛性加里等の

えんか カルシウム (名) ◎鹽化一 (名) ◎化學 (Calcium chloride) 白色立方體の結晶體で、加里石鹽として天然に産し、鹽素加里加里硝石・苛性加里等の

えんか カルシウム (名) ◎鹽化一 (名) ◎化學 (Calcium chloride) 白色立方體の結晶體で、加里石鹽として天然に産し、鹽素加里加里硝石・苛性加里等の

えんか カルシウム (名) ◎鹽化一 (名) ◎化學 (Calcium chloride) 白色立方體の結晶體で、加里石鹽として天然に産し、鹽素加里加里硝石・苛性加里等の

えんか カルシウム (名) ◎鹽化一 (名) ◎化學 (Calcium chloride) 白色立方體の結晶體で、加里石鹽として天然に産し、鹽素加里加里硝石・苛性加里等の

えんか カルシウム (名) ◎鹽化一 (名) ◎化學 (Calcium chloride) 白色立方體の結晶體で、加里石鹽として天然に産し、鹽素加里加里硝石・苛性加里等の

えんか カルシウム (名) ◎鹽化一 (名) ◎化學 (Calcium chloride) 白色立方體の結晶體で、加里石鹽として天然に産し、鹽素加里加里硝石・苛性加里等の

えんか カルシウム (名) ◎鹽化一 (名) ◎化學 (Calcium chloride) 白色立方體の結晶體で、加里石鹽として天然に産し、鹽素加里加里硝石・苛性加里等の

えんか カルシウム (名) ◎鹽化一 (名) ◎化學 (Calcium chloride) 白色立方體の結晶體で、加里石鹽として天然に産し、鹽素加里加里硝石・苛性加里等の

したものは鹽酸である。食鹽に硫酸を加へて製する。
えんかすずり 〔鹽化錫〕(名)〔化〕Tin chloride
錫の鹽化物で、白色針形の結晶體なる鹽化第一錫と白色の結晶體又は無色乃至白色の液體なる鹽化第二錫とある。共に煤炭劑を用ひられる。

えんかすら 〔綠系〕(名)〔越〕切目録の東の間に通して、縁板を支へる横木。

えんかつ 〔圓滑〕(名)かどをたすなめらかなこと。○物事が圓滑なく行はれること。

えんかナトリウム 〔鹽化〕(名)〔化〕Sodium chloride (鹽化) (名)〔化〕

えんかぶつ 〔鹽化物〕(名)〔化〕Chloride 鹽系と他の元素との化合物。

えんかマグネシウム 〔鹽化〕(名)〔化〕Magnesium chloride (鹽化) (名)〔化〕

えんかま 〔縁板〕(名)〔越〕縁板(越)の東に取ひつけて根太の端を承ける横木。

えんがら 〔風〕(名)あたりの風をさす。めかしい姿をさす。あたりの風をさす。

えんがわ 〔縁側〕(名)室の外にある板敷。

えんがわ 〔圓替替〕(名)經我が國の圓貨幣と外國貨幣との比較價值。

えんか 〔閩官〕(名)支那の後宮に仕へる官吏。(かん)〔閩官〕(名)支那後宮、人民の獻金したものに官職を授けたこと。

えんかん 〔烟管〕(名)居館をすてて去る義。諸侯などの死。○煙の通過する管。

えんかん 〔烟管〕(名)させる煙管。○煤の煙管。○鉛管(名)鉛製の管。主として給水排水瓦斯工事に使用される。

えんかん 〔沿岸〕(名)河海又は湖に沿つた岸。

えんかん 〔沿岸〕(名)河海又は湖に沿つた岸。

えんかん 〔沿岸〕(名)河海又は湖に沿つた岸。

えんか 〔えんき〕(名)電氣。

えんか 〔えんき〕(名)電氣。

えんか 〔えんき〕(名)電氣。

えんか 〔えんき〕(名)電氣。

えんか 〔えんき〕(名)電氣。

えんか 〔えんき〕(名)電氣。

えんか 〔えんき〕(名)電氣。

えんか 〔えんき〕(名)電氣。

えんか 〔えんき〕(名)電氣。

えんか 〔えんき〕(名)電氣。

えんか 〔えんき〕(名)電氣。

えんか 〔えんき〕(名)電氣。

えんか 〔えんき〕(名)電氣。

えんか 〔えんき〕(名)電氣。

えんか 〔えんき〕(名)電氣。

えんか 〔えんき〕(名)電氣。

えんか 〔えんき〕(名)電氣。

えんか 〔えんき〕(名)電氣。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

えんき 〔延喜〕(名)首を延べ足をつまてて置くこと。○延喜(名)期限をのぼすこと。○しよ(名)延期證(名)約束の期限を延ばすことを證明する文書。

エンサイクロペディア [Encyclopaedia]

(名) 百科辭典。百科全書。のしり。

えんざかほい (副) 重い車を引く時などの掛聲。

えんざき (名) 縁先 (名) 縁側 (名) 縁起 (名) 縁起

えんざく (名) 鉛酸 (名) 酢酸鉛の水溶液を酸化

鉛を溶解したもので、收效性の甘味ある無色透明の

液。醫術・化学の實驗等に用ひる。

えんざくほうち (名) 圓整方帖 (名) 史

記孟買に「持方帖」内副蓋其能入乎」とある

に「あふ」圓孔に四角はなぞを入れることで、兩者

の相容せること。

えんざさしき (縁座敷 (名) 母屋) と其の外側の

縁の間にある座敷。ひさしのまゝいりがある。

えんざだめ (縁定 (名) 縁組) 以上の紙幣。

えんざん (鹽酸 (名) 四倍以上の紙幣。

えんざん (鹽酸 (名) 四倍以上の紙幣。

えんざん (鹽酸 (名) 四倍以上の紙幣。

えんざん (鹽酸 (名) 四倍以上の紙幣。

えんざん (鹽酸 (名) 四倍以上の紙幣。

えんざん (鹽酸 (名) 四倍以上の紙幣。

えんざん (鹽酸 (名) 四倍以上の紙幣。

えんざん (鹽酸 (名) 四倍以上の紙幣。

えんざん (鹽酸 (名) 四倍以上の紙幣。

えんざん (鹽酸 (名) 四倍以上の紙幣。

えんざん (鹽酸 (名) 四倍以上の紙幣。

えんざん (鹽酸 (名) 四倍以上の紙幣。

えんざん (鹽酸 (名) 四倍以上の紙幣。

えんざん (鹽酸 (名) 四倍以上の紙幣。

えんざん (鹽酸 (名) 四倍以上の紙幣。

えんぞく (浮世) がん (遠視眼) (名) 眼珠の屈折力

弱い爲に遠の物は能く視得るが近い物体が朦朧

としてよく視得ぬ眼を眼。近視眼の對。「の文学

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじ (衍字) (名) 語句中であまり入らた不要

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱

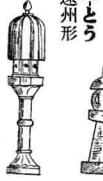
えんじや (縁者) (名) 縁者類の總稱



【蟲 脂 脂】



【植 槐】



【籠 燈 形 州 燈】

えんしよ 艶書 (名) 戀意の情を書いて送る手紙。いろぶみ。けさうぶみ。ラダレター。あわせ

えんじよ 援助 (名) たすけること。助勢。えんじよ 怨女 (名) 容貌のあてやな女。まめで美しい女。「なうらみ己なせむ女」

えんじよ 縁女 (名) 縁結の請期が来て世エンジョイ (Enjoy) (英動) 享ける。樂し。享樂。エンジョイメント (Enjoyment) (名) 享受。享樂。エンジョイメント (名) 煙燻のかかたき

えんじよ 煙燻 (名) 煙燻のかかたき。えんじよ 炎症 (名) 菌 (Bacteria) (名) 細菌。化学薬品等の作用の、身體の一部に潮紅腫脹疼痛 熱點等起す症状。

えんじよ 縁生 (名) 佛一切の眞物は因縁の和合にて生ずること。

えんじよ 厭勝 (名) まじない。いせんえんじよ 厭勝 (名) 凶災を避け吉祥を求める爲に、まじなひとして用ひる錢。

えんじよ 垣墻 (名) かき。えんじよ 炎上 (名) 火の燃えあがること。えんじよ 城郭等の大建物の火事にあふこと。

えんじよ 艶稱 (名) 盛んにめたること。えんじよ 圓成 (名) 佛圓滿に成就する。えんじよ 圓成 (名) 圓成實性 (名) 佛圓滿に成就し眞實の本性。

縁によつて成ること。「を傳ふこと。」えんしよ 縁飾 (名) 飾を施すこと。えんしよ 艶色 (名) ややかな唇色。

えんしよ 艶色 (名) 艶いばに食ふこと。えんしよ 燐化 (名) 燐化 (名) 吹管分折で、ランプの火焰に接した物の爲に、相にあらはれる種種の色。「Ethereal color」

えんしよ 燐化 (名) 燐化 (名) 吹管分折で、ランプの火焰に接した物の爲に、相にあらはれる種種の色。「Ethereal color」

えんしよ 燐化 (名) 燐化 (名) 吹管分折で、ランプの火焰に接した物の爲に、相にあらはれる種種の色。「Ethereal color」

えんしよ 燐化 (名) 燐化 (名) 吹管分折で、ランプの火焰に接した物の爲に、相にあらはれる種種の色。「Ethereal color」

えんしよ 燐化 (名) 燐化 (名) 吹管分折で、ランプの火焰に接した物の爲に、相にあらはれる種種の色。「Ethereal color」

えんしよ 燐化 (名) 燐化 (名) 吹管分折で、ランプの火焰に接した物の爲に、相にあらはれる種種の色。「Ethereal color」

えんじよ 燐化 (名) 燐化 (名) 吹管分折で、ランプの火焰に接した物の爲に、相にあらはれる種種の色。「Ethereal color」

えんすい 演說 (名) 他動。サ變の「おせ」なふ。「人の興味する食品。蒸餾。燕窩。えんすい 燕窩 (名) 燕窩が海産で造つた巢で、支那の古語。

えんすい 煙水 (名) 水蒸氣の立ちこめた水。えんすい 鹽水 (名) 食鹽を加へた水。えんすい 鹽水 (名) 食鹽を加へた水。

えんすい 遠水 (名) 遠方にある水。えんすい 遠水 (名) 遠方にある水。えんすい 遠水 (名) 遠方にある水。

えんすい 圓錐花序 (名) 圓錐花序の一種。えんすい 圓錐花序 (名) 圓錐花序の一種。えんすい 圓錐花序 (名) 圓錐花序の一種。

えんすい 圓錐形 (名) 圓錐形。えんすい 圓錐形 (名) 圓錐形。えんすい 圓錐形 (名) 圓錐形。

えんすい 圓錐面 (名) 圓錐面。えんすい 圓錐面 (名) 圓錐面。えんすい 圓錐面 (名) 圓錐面。

えんすい 圓錐面 (名) 圓錐面。えんすい 圓錐面 (名) 圓錐面。えんすい 圓錐面 (名) 圓錐面。

えんすい 圓錐面 (名) 圓錐面。えんすい 圓錐面 (名) 圓錐面。えんすい 圓錐面 (名) 圓錐面。

の最大が酒宴を賜はつて管絃歌舞などして歡樂した。えんすい 延髓 (名) 生後頭の頸部にあつて、脳と脊髄との連絡をなす部分で、脳の傳達路となり、反動路となり、呼吸中樞、心拍中樞となり、生命に最も必要な所。細針の一刺刺もして生命を絶つに至る生命點。

えんすく 緣附 (名) 縁側の下の束柱。「もえんすく 緣附 (名) 縁側にくこ。縁入るえんすく 緣附 (名) 縁側にくこ。縁入るえんすく 緣附 (名) 縁側にくこ。縁入る

えんすく 緣附 (名) 縁側にくこ。縁入るえんすく 緣附 (名) 縁側にくこ。縁入るえんすく 緣附 (名) 縁側にくこ。縁入る

えんすく 緣附 (名) 縁側にくこ。縁入るえんすく 緣附 (名) 縁側にくこ。縁入るえんすく 緣附 (名) 縁側にくこ。縁入る

えんすく 緣附 (名) 縁側にくこ。縁入るえんすく 緣附 (名) 縁側にくこ。縁入るえんすく 緣附 (名) 縁側にくこ。縁入る

えんすく 緣附 (名) 縁側にくこ。縁入るえんすく 緣附 (名) 縁側にくこ。縁入るえんすく 緣附 (名) 縁側にくこ。縁入る

えんすく 緣附 (名) 縁側にくこ。縁入るえんすく 緣附 (名) 縁側にくこ。縁入るえんすく 緣附 (名) 縁側にくこ。縁入る

えんすく 緣附 (名) 縁側にくこ。縁入るえんすく 緣附 (名) 縁側にくこ。縁入るえんすく 緣附 (名) 縁側にくこ。縁入る

なり、清帝の退位後、臨時共和政府を組織し、正式大總統となり、次で自ら帝位に就き、民國五年大正五年(癸卯)年五十一(二六六)

えんせき【鹽析】(名)【化】(名)【物】(名) 水には溶解するが、鹽類の溶液には溶解せず物質の溶液中に、鹽類を加えて分離させること。

えんせき【燕石】(名)【燕山から出る石】玉に似て価値のない石。まがひの將。

えんせき【筵席】(名)【まじりの席】。座席。

えんせき【圓石】(名)【まあるい石】。一を千仞の山に轉ず【句】孫子兵勢篇の句。勢が急激で抑止めらるることをいふ。

えんせき【遠戚】(名) ちよとの遠い親戚。

えんせき【演説】(名) 公衆の前で、自分の主義主張の意見を陳述すること。一かい【演説會】(名) 演説の會の會合。

えんせき【沿線】(名) 鐵路に沿う所。

えんせん【鹽泉】(名) 鹽類を多量に含んだ源泉。

えんせん【淵泉】(名) 深い泉。【えんるんせん】(名) 淵泉【名】深い泉。【えんるんせん】(名) 淵泉【名】深い泉。

えんせん【淵泉】(名) 深い泉。【えんるんせん】(名) 淵泉【名】深い泉。

えんせん【鹽素】(名)【化】(名) 氣體元素の一。二酸化マンガンに強酸を加えて除去し熱して生ずるもの。黄綠色で鹽氣がある。鹽氣より重く、他の燃

えんせ—えんち

機を助け、又、植物性の色素を褐色する作用があるから漂白剤の原料は殺菌剤として用ひる。

えんぞ【鮑書】(名) 【えん】の古語。とほつおや。

えんぞ【鮑書】(名) 【えん】の古語。とほつおや。

えんぞう【圓窓】(名) 【圓形の窗】。圓窓。

えんぞう【圓窓】(名) 【圓形の窗】。圓窓。

えんぞう【圓窓】(名) 【圓形の窗】。圓窓。

えんぞう【圓窓】(名) 【圓形の窗】。圓窓。

えんぞう【圓窓】(名) 【圓形の窗】。圓窓。

えんぞう【圓窓】(名) 【圓形の窗】。圓窓。

えんぞう【圓窓】(名) 【圓形の窗】。圓窓。

えんぞう【圓窓】(名) 【圓形の窗】。圓窓。

えんぞう【圓窓】(名) 【圓形の窗】。圓窓。

えんそぞくげんそ【鹽素族原素】(名)【化】(名) ロン原素。

えんそん【遠孫】(名) 遠い孫。血筋の子孫。

えんそん【遠孫】(名) 遠い孫。血筋の子孫。

えんそん【遠孫】(名) 遠い孫。血筋の子孫。

えんそん【遠孫】(名) 遠い孫。血筋の子孫。

えんそん【遠孫】(名) 遠い孫。血筋の子孫。

えんそん【遠孫】(名) 遠い孫。血筋の子孫。

えんそん【遠孫】(名) 遠い孫。血筋の子孫。

えんそん【遠孫】(名) 遠い孫。血筋の子孫。

えんそん【遠孫】(名) 遠い孫。血筋の子孫。

えんそん【遠孫】(名) 遠い孫。血筋の子孫。

えんそん【遠孫】(名) 遠い孫。血筋の子孫。

博したからいふ。乗合馬車。がたばし。がたくりばし。

えんたん【鉛丹】(名)【化】(名) 炭酸鉛を徐徐に空氣中で熱する際に生ずる赤色結晶性の粉末。鏡材の鑄造時に、又、輪具やフロッター硝子の製造、電気工業等に用ひられ、一組の相續、結晶の製造。

えんたん【鉛丹】(名)【化】(名) 炭酸鉛を徐徐に空氣中で熱する際に生ずる赤色結晶性の粉末。鏡材の鑄造時に、又、輪具やフロッター硝子の製造、電気工業等に用ひられ、一組の相續、結晶の製造。

えんたん【鉛丹】(名)【化】(名) 炭酸鉛を徐徐に空氣中で熱する際に生ずる赤色結晶性の粉末。鏡材の鑄造時に、又、輪具やフロッター硝子の製造、電気工業等に用ひられ、一組の相續、結晶の製造。

えんたん【鉛丹】(名)【化】(名) 炭酸鉛を徐徐に空氣中で熱する際に生ずる赤色結晶性の粉末。鏡材の鑄造時に、又、輪具やフロッター硝子の製造、電気工業等に用ひられ、一組の相續、結晶の製造。

えんたん【鉛丹】(名)【化】(名) 炭酸鉛を徐徐に空氣中で熱する際に生ずる赤色結晶性の粉末。鏡材の鑄造時に、又、輪具やフロッター硝子の製造、電気工業等に用ひられ、一組の相續、結晶の製造。

えんたん【鉛丹】(名)【化】(名) 炭酸鉛を徐徐に空氣中で熱する際に生ずる赤色結晶性の粉末。鏡材の鑄造時に、又、輪具やフロッター硝子の製造、電気工業等に用ひられ、一組の相續、結晶の製造。

えんたん【鉛丹】(名)【化】(名) 炭酸鉛を徐徐に空氣中で熱する際に生ずる赤色結晶性の粉末。鏡材の鑄造時に、又、輪具やフロッター硝子の製造、電気工業等に用ひられ、一組の相續、結晶の製造。

えんたん【鉛丹】(名)【化】(名) 炭酸鉛を徐徐に空氣中で熱する際に生ずる赤色結晶性の粉末。鏡材の鑄造時に、又、輪具やフロッター硝子の製造、電気工業等に用ひられ、一組の相續、結晶の製造。

えんたん【鉛丹】(名)【化】(名) 炭酸鉛を徐徐に空氣中で熱する際に生ずる赤色結晶性の粉末。鏡材の鑄造時に、又、輪具やフロッター硝子の製造、電気工業等に用ひられ、一組の相續、結晶の製造。

えんたん【鉛丹】(名)【化】(名) 炭酸鉛を徐徐に空氣中で熱する際に生ずる赤色結晶性の粉末。鏡材の鑄造時に、又、輪具やフロッター硝子の製造、電気工業等に用ひられ、一組の相續、結晶の製造。

えんたん【鉛丹】(名)【化】(名) 炭酸鉛を徐徐に空氣中で熱する際に生ずる赤色結晶性の粉末。鏡材の鑄造時に、又、輪具やフロッター硝子の製造、電気工業等に用ひられ、一組の相續、結晶の製造。

えんちゅう【鉛毒】(名)【動】(名) 動物の一種は圓筒形で兩端尖り運動性を有さない。概ね寄生生活を營々、雌雄異體、鱗鱗十二指腸蟲の類。

ぞうじつ。

えんのきょうじや……「役行者」(名)「人」修験道の志。大和國葛城郡の人。本名は役小角。ちて佛教を好む彫術を善くす。葛城山に入り、窟窟中で苦業を積む。文武天皇の朝、獲らよつて捕へられ、伊豆國に流し、大寶元年(三六)赦された。寛政十一年、神變大菩薩の號を賜はる。

えんのさゝ(宴座) (名) えんざ(宴座)。

えんのした(線下) (名) 線下の、下に鋪かれぬ壁。

えんのつな(縁綱) (名) 佛寺の間の時に内陣から堂前の佛壇に張つた白木繩の綱。之に手を觸れば本尊佛に觸れ、同一の功德があるといふ。

えんば(鷺馬) (名) ふりうん。「ふ。えんば」(鷺馬) (名) 馬の二字が似通つて誤ることがあるから、心誤譯の文字。まぢがひい文字。うんば(鳥馬)。

えんは(遠馬) (名) 馬の遠乗。

えんば(煙波) (名) 深氣の立ちこめた中に立つ海。

えんばい(鹽梅) (名) すず。ゆえん。

えんばい(鹽梅) (名) 書經の説命篇に「若作和羹、則惟鹽梅」とある。食料に鹹味をつける。鹽と酸味をつける梅の意。食物を調理すること。うんばい。○物事の調和を保つこと。○政務を料理すること。

エンバイヤ(Empire) (名) 帝國。主權。統轄。

エンパイヤ(Empire) (名) 帝國。主權。統轄。

Empire State Building (名) 米國ニューヨーク市の大建屋。一九三一年完成。高さ三八一米。八十一階。間借人二萬五千人。外部の出入者六萬人。超高速昇降機五十七臺を備へる。丸ビルを十二釐少重れた高さである。

えんはく(燕麥) (名) 種がらすぢき。

えんはく(鉛白) (名) 化「White lead」鉛酸を

えんの(えんは)

えんの(えんは)

酔に漬した上、空氣と炭酸とを作用せしめ、若くは炭酸鉛を精製し溶解し、無水炭酸を通じて得る白色の粉末で、おしろい、の原料、繪具、ペンキ、印刷用インキなどに用ひる。

えんはしら(縁柱) (名) 縁側の外にある柱。

エンバッシン(Embassy) (名) 大使。大使館。

えんばん(線端) (名) 線頭の端。

えんばん(鉛版) (名) 活字の體版を助き印刷能力を高める爲に、粗かあげた活字版を紙型にとり、更に焙じた鉛とアルミニウムと錫との合金を流し込んで作つた印刷版。ステロ。

えんばん(圓盤) (名) 食鹽にする海水を濃縮ならしめるのに用ひる。たゞし又は「セメント」で池の形につつた鹽盤。

えんばん(圓盤) (名) 四疊投に用ひる金屬製の圓くない盤。一なげ(圓盤投) (名) 投擲技の一種。圓盤を投げて、其の距離の長短を競ふこと。

えんばん(遠帆) (名) 遠い所に見える船の帆。

えんば(燕尾) (名) 燕の尾の異名。昔の作方は、燕尾に似てゐたからいふ。燕尾のやうに末端が二つに分れた線の種類。○燕尾服。一がた(燕尾形) (名) 燕尾のやうに細長く、末端が二つに分れた形。一ふく(燕尾服) (名) 燕尾のやうに洋裝の禮服。地は黒縮毛で、重胸、細はし、上着の下腹部の邊から前を缺き、後部は判れて燕尾のやうになつてゐる。

えんび(艶美) (名) やましく美しこと。

えんび(燕尾) (名) 燕の飛ぶやうに、身がらに直がりますこと。

えんび(猿臂) (名) 猿のやうに手の長いこと。○手をのばして物を掴む時の手つき。

えんび(線引) (名) 靱類の關係あること。線放のあること。線透。

えんびせん(鉛線) (名) 理數多の細線線な

えんびつ(鉛筆) (名) 筆は、鉛を用ひながら、の芯がある。黒鉛と粘土の粉末を高熱で燒

いて芯を造り、木鞘にはめて造つたもの。現在の鉛筆芯は、江戸時代、フランス人からの輸入されたもので、一がた(鉛筆畫) (名) 美観筆で描いた畫。洋畫で、スケッチ又は畫稿用として行はれる。

えんぶ(服袴) (名) 服袴

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺



【舞臺】

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんぶ(舞臺) (名) 舞臺

えんほん 法圓本(名) 定價一圓均一の書物。大正十五年の秋「現代日本文学全集」が改造社から出版されて、漸次流行した。

えんま 闇魔(名) 佛梵語で、闇魔羅。闇の精に似た十八の將官と八萬の獄卒を従へて、地獄に落ちる人間の生前の善惡を審判し懲罰して、不善を防止する大王。その像はも普通の佛像に似て左手に人頭をつけた旗を持ち、水牛に乗る。たすきを不用ひが、近時は支那服を着て慈悲の相をなすものを用ひる。俗に闇魔王が虐害者の苦を抜きとるといふ傳説に基づく。こころしい心の人まきの尊稱。一がおろ(闇魔王)(名) えんまの尊稱。一がおろ(闇魔王)(名) えんまの尊稱。一がおろ(闇魔王)(名) えんまの尊稱。

一だにおろ(闇魔王)(名) 佛闇魔の尊稱。一ちやう(闇魔帳)(名) 佛闇魔が亡者生前の罪惡を書きとめておく帳簿。一教師が生徒の採得したとめく帳簿。一巡査が罪科を調べて留めおく手帳。一どう(闇魔堂)(名) 佛えんまを祭つてある堂。一のちやう(闇魔廳)(名) 佛えんまが亡者生前の罪惡を取調べる法廷。一もうて(闇魔詣)(名) 佛毎年一月十六日と七月十六日に闇魔の誓日を稱し、又、地獄の蓋を開く日と傳へて、佛教信徒が闇魔堂に參詣すること。一ら(闇魔羅)(名) 佛

えんまく(煙幕)(名) 軍事上、敵眼から我が行動を遮断する爲に、四酸化チタン・四酸化硅素等の薬品から成る發煙劑を、風送機や飛行機等から發射し、投下して、濃煙を張り掛けること。

えんまてん(焰摩天)(名) 佛もと婆羅門神。密教の神。轉じて闇魔の稱。一く(焰摩天供)

えんまてん(焰摩天)(名) 佛もと婆羅門神。密教の神。轉じて闇魔の稱。一く(焰摩天供)

(名) 佛密教法の一。罪人を助ける爲に、焰摩天を供養すること。闇魔を祀ること。えんまさん(圓満)(名) 十分に満ち足ること。少しも缺たことのないこと。ふくぶくしいこと。圭角がなくておどやかなこと。感情のけしきないこと。一じしよ(圓満辭職)(名) 永い間、少しの過失、缺點なく勤務し、自分の意思から辭職すること。

えんまよう(圓明)(名) 佛理智圓滿で、明らかにかん悟ること。一りやう(圓明流)(名) (に)とら(二)万流。

えんみやう(延命)(名) 佛えんみやうはまつ。一じそ(延命地獄)(名) 佛壽命の福を興へるといふ地獄。一ぼさつ(延命菩薩)(名) 佛聖賢菩薩の一體で、眞言天台宗で、その甚難を本尊として、増益、息災、延命の佛法を行ふ。【浮する爲に生ずる大氣の混濁。

えんむ(姻縁)(名) 姻と縁と。縁原が空中に迷信。男女の名と年齢を紙に記して、社會の格字などに紅指又は小指で結びつけ、夫婦とならんことを断ること。一種の遊戲。多くの男女の名を別別の紙片に記して捻り、無心に合はせ結んで最終の配合を占ふこと。

えんめい(延命)(名) いのちを延ばすこと。一せく(延命菊)(名) 菊科の多年生栽培草本。高さ一〇—一五單位。葉は披形で細鋸歯がある。長い葉柄を有する。春、葉の間から、花をのき、白色又は帯紅色の花を開き、秋頃まで繰り返す。ひな名。アイビー。イタリーの国花。一しよ(延命酒)(名) 薨の銘酒。一そら(延命草)(名) 植えんれい(そう)延命草。一ぶくろ(延命袋)(名) 寶輪の。錦の袋の腹をふくらせ、口を括た形を重いたもの。



(くきいめん)

えんもう(燕毛)(名) 宴會の席を年齢順に定めること。えんもく(覿目)(名) よく見える目。他人の缺點のよく見える目。

えんもん(鞍門)(名) 貴支部で、田獵、陣などの時、車でかきつくり出入の所は、車をあなむけ、鞍を相對せしめて門をなすやうにした。こにに基づく陣の門。軍門。

えんや(鹽池)(名) 海水を煮て鹽を製し、鑛山を掘つて治工をなすこと。えんや(感重)(名) 重いものをあげる時若しくは牽く時、その力を出して。えんや(縁由)(名) ゆかり。たより。由來。つづき。えんや(奄有)(名) おほひ保つこと。えんや(苑圃)(名) 草木を植ふ、又禽獸を畜ふ所。そのほか。

えんゆう(圓融)(名) 圓滑に滑らぬこと。廣く融通すること。佛一切諸法の事理、通く融合して無二なること。えんゆう(圓遊會)(名) 多くの客を招いて、櫻井、餘興場を設けて遊樂すること。えんゆう(圓融)(名) 皇太子。第六十四代の天皇。御名は守平。村上天皇の皇子。寛和元年御崩。圓融院に在す。十七年。正曆二年崩御。(六五)

えんや(嬰飲)(名) 食ひあること。親しい人を疎遠すること。えんや(炎陽)(名) 夏の太陽。夏になること。えんや(炎陽)(名) 夏になること。えんや(炎陽)(名) 夏になること。えんや(炎陽)(名) 夏になること。

えんや(遠洋)(名) 陸地を遠く離れた海。えんや(遠洋)(名) 陸地を遠く離れた海。えんや(遠洋)(名) 陸地を遠く離れた海。

えんや(遠洋)(名) 陸地を遠く離れた海。えんや(遠洋)(名) 陸地を遠く離れた海。えんや(遠洋)(名) 陸地を遠く離れた海。

加工の設備をなし、遠洋を航行して行ふ漁業。一こ(遠洋航海)(名) 遠洋を航海して、内國と外國との間を交通すること。一(遠洋航海)(名) 遠洋を航海して、内國と外國との間を交通すること。

えんや(宛容)(名) しゃやな姿。やさしいこと。えんや(援用)(名) おまへさき用ひること。えんや(掩抑)(名) おまへさき用ひること。えんや(宛容)(名) しゃやな姿。やさしいこと。

えんら(圓羅)(名) 佛圓羅閣の略。えんま。一おろ(圓羅王)(名) 佛えんま。えんら(圓羅)(名) 佛圓羅閣の略。えんま。一おろ(圓羅王)(名) 佛えんま。

えんら(煙嵐)(名) 水蒸氣と山氣。山中の霧。えんら(煙嵐)(名) 水蒸氣と山氣。山中の霧。

えんら(延攬)(名) 招きよせて殊方にする。えんら(延攬)(名) 招きよせて殊方にする。えんら(延攬)(名) 招きよせて殊方にする。

えんり(垣離)(名) 遠大は。深い謀。えんり(垣離)(名) 遠大は。深い謀。えんり(垣離)(名) 遠大は。深い謀。

えんり(延暦寺)(名) 佛滋賀縣滋賀郡比叡山にある天台宗の總本山。延暦七年(四八四)僧最澄の建立。弘仁十四年(四八三)延暦寺の四名勅賜せられた。圓城寺を寺門といひ、對して山門といひ、奈良(南都)の諸寺に對して、北嶺といふ。えんり(淹留)(名) 久しく一所にとま

おおいおおいし(おおいおおいし)「老老し」(形二)老人らしい。年老いたままである。(古語)

おおいおくる(おおいおくる)「追後る」(他動)う下二「追ひかけておくる」(古語)

おおいおとし(おおいおとし)「追落す」(他動)おとし(おとし)「追落す」(他動)おとし(おとし)「追落す」(他動)

おおいおとす(おおいおとす)「追落す」(他動)おとす(おとす)「追落す」(他動)おとす(おとす)「追落す」(他動)

おいかかまる(おいかかまる)「老痴まる」(自動)ラ四「老痴まる」(自動)ラ四「老痴まる」(自動)ラ四

おいかく(おいかく)「追掛く」(他動)カ下二「追掛く」(他動)カ下二「追掛く」(他動)カ下二

おいかけ(老懸綫)(名)昔、武官の冠の左右に著けた飾で、毛で作り、菊花を半切にした形のもの。ほほすけあげな。



おいかける(おいかける)「追掛ける」(他動)カ下二「追掛ける」(他動)カ下二「追掛ける」(他動)カ下二

おいかさぬ(おいかさぬ)「追負ぬ」(他動)カ下二「追負ぬ」(他動)カ下二「追負ぬ」(他動)カ下二

おいかぜ(おいかぜ)「追風」(名)うしろから吹いて来る風。舟を吹きおくる風。おひて。着物の動くによつて起る風。

おいがね(おいがね)「追金」(名)おせん「追銭」(自動)カ下二「追銭」(自動)カ下二「追銭」(自動)カ下二

おいがね(おいがね)「追金」(名)おせん「追銭」(自動)カ下二「追銭」(自動)カ下二「追銭」(自動)カ下二

おいかれ(おいかれ)「追川」(名)年老いてしづかぬ聲となる

おいき老木(おいき老木)「古木」老木。老樹。年老んで幹太く、枝の垂れまがった木。一に花(句)黄へ

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいき(おいき)「再び榮えること」

おいら(おいら)「老老」(名)年老いたままである。(古語)

おいら(おいら)「老老」(名)年老いたままである。(古語)

おいら(おいら)「老老」(名)年老いたままである。(古語)

おいら(おいら)「老老」(名)年老いたままである。(古語)

おいら(おいら)「老老」(名)年老いたままである。(古語)

おいら(おいら)「老老」(名)年老いたままである。(古語)

おいら(おいら)「老老」(名)年老いたままである。(古語)

おいら(おいら)「老老」(名)年老いたままである。(古語)

おいら(おいら)「老老」(名)年老いたままである。(古語)

おいら(おいら)「老老」(名)年老いたままである。(古語)

おいら(おいら)「老老」(名)年老いたままである。(古語)

おいら(おいら)「老老」(名)年老いたままである。(古語)

おいら(おいら)「老老」(名)年老いたままである。(古語)

おいら(おいら)「老老」(名)年老いたままである。(古語)

おいら(おいら)「老老」(名)年老いたままである。(古語)

おいら(おいら)「老老」(名)年老いたままである。(古語)

おいら(おいら)「老老」(名)年老いたままである。(古語)

おういん(王院) (名) 天皇。みかど。

おういん(押韻) (名) 詩句中の一定の處に同韻の字を用ひること。

おういん(王胤) (名) 王者の子孫。

おういん(奥羽) (名) 盛州と出羽と。東北六縣。福宮、宮城、岩手、青森、秋田、山形縣の總稱。

おううつ(烏) (名) 草木のしげつたるをさう。

おううつ(翁) (名) 草木のしげつたるをさう。

おううん(櫻雲) (名) 櫻の花の盛んに咲くついで、白雲のやうに見えること。花の雲。

おうえき(御上) (名) 奥の間。入口をひいて開き置ける間。さま(御上様) (名) 主人の要の敬稱。

おうえん(應援) (名) たすけ。すけ。か。せ。手元元氣をつける爲に合唱する歌。一たん應援(名) 主義目的を達するものを感得する團體。専ら運動技能を應援する團體。

おうおう(感) (名) 應答の聲。悲しむ叫ぶ聲。思ふさま。思ふさま。

おうおう(央央) (名) 思ふさま。思ふさま。

おうおう(快快) (名) 不平なさま。うらうら。

おうおう(決決) (名) 深く廣いさま。

おうおう(要要) (名) 小鳥の樂しげに鳴くさま。

おうおう(汪汪) (名) 水のはてしなく廣いさま。

おうおう(往往) (名) 折折。時時。

おうおう(追追) (名) あとを追ひながら。

おうあか(鶯歌) (名) 鶯の聲。

おうあか(櫻花) (名) 櫻の花。

おうあか(鶯歌) (名) 聲をあはせて歌ふこと。

おうあか(應化) (名) 動物が周圍の状態に應じて、組織機能を變へること。

【心】人の性質や作用が、環境の状態に應じて變化すること。

おうか(歐化) (名) ヨロップの思想や風俗に化すること。しゅき歐化主義(名) ヨロップ文化を模倣しようとする主義。

おうか(王家) (名) 王者の家系。又、其の家系を稱する。

おうか(王化) (名) 君主の徳化。むらさひ。

おうか(横禍) (名) 不應の災禍。むらさひ。

おうか(殃禍) (名) わざはひ。災禍。

おうか(柱駕) (名) 殿を柱まぐる意。來訪の敬語。

おうか(横臥) (名) よこねること。ねること。

おうか(横海岸) (名) 山脈と海岸と直角なやうな海岸。大西洋、印度洋等の海岸の類。(縦海岸の對)

おうか(鸞花海) (名) 支那東の陸游の「鸞花樓小酌の句」春三月の頃、何處も鶯は鳴き、花は盛んに開いて、春の景色の佳なること。

おうかく(四角) (名) 數に直角より大きく四直角より小なる角。

おうかく(王學) (名) 陽明學。

おうかく(横隔膜) (名) 生體腹と胸腔とを分ける膜状筋。上面は心臟と肺に、下面は胃、脾臓、肝臓等に接する。横膈膜神經に支配されて呼吸筋、肝臓、肺臓の呼吸作用を司る。

おうかん(往還) (名) ゆきま。ゆきかへり。

おうかん(横貫) (名) 横に貫くこと。東西に貫くこと。てつとつ(横貫鐵道) (名) 東西を貫通する鐵道。

おうかん(王冠) (名) 君主のかぶる冠。

おうかん(京風) (名) 人支那南北朝の儒者論語、孝經、三論に通達し、傑に仕へ、諸記、諸疏五〇卷を著す。

おうかん(佛敎經典の異名) 黃経朱軸。

おうかん(黄卷赤軸) (名) 佛敎經典の異名。

おうき(應器) (名) 尤(尤器) 應器。僧侶が人の布施する物を受ける器で、鐵土、木など近た。

おうき(王威) (名) 王威の附。

おうき(王威) (名) 王者を出すさきしのあるおうき。

おうき(王威) (名) 王者を出すさきしのあるおうき。

おうき(扇) (名) かほいで風を起し涼を取る用具。

おうき(扇) (名) 四手綱の扇。扇形に開く扇。

おうき(扇) (名) 扇に書かれた文字、出しあはせて優劣をきめる昔の遊戯。

おうき(扇) (名) 扇を賣りたる男。

おうき(扇) (名) 扇をつくること。又、その人。

おうき(扇) (名) 扇を動かすこと。扇。

おうき(扇) (名) 扇を動かすこと。扇。

おうき(扇) (名) 扇を動かすこと。扇。

おうき(扇) (名) 扇を動かすこと。扇。

おうき(扇) (名) 扇を動かすこと。扇。

おうき(扇) (名) 扇を動かすこと。扇。

おうき(扇) (名) 扇を動かすこと。扇。

おうき(扇) (名) 扇を動かすこと。扇。

おうき(扇) (名) 扇を動かすこと。扇。

おうき(扇) (名) 扇を動かすこと。扇。

おうき(扇) (名) 扇を動かすこと。扇。

おうき(扇) (名) 扇を動かすこと。扇。

おうき(扇) (名) 扇を動かすこと。扇。

おうき(扇) (名) 扇を動かすこと。扇。

おうき(扇) (名) 扇を動かすこと。扇。

おうき(扇) (名) 扇を動かすこと。扇。

おうき(扇) (名) 扇を動かすこと。扇。

おうき(扇) (名) 扇を動かすこと。扇。



おうき

【扇】床の間、書院などの脇につける。一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

一だるき(扇) (名) 扇形に開いた様。神社の軒などに用ひる。

しやうのないやうになること。一あんらく(往生安樂)(名)佛往生。一いちじょう(往生一定)(名)佛念を得て、極樂往生にまかひのないこと。一かんねんぶつ(往生観念佛)(名)往生。一きわむし(往生際)(名)にきは。一くわんなく(往生観)往生を願ふ人の法事。一すくめ(往生盡)(名)本意のない無理に納得させること。一どころ(往生所)(名)しにばし。一にん(往生人)(名)極樂に往生する人。又、往生場(名)しにばし。一ようしゅう(往生要集)(名)佛慧心僧道深の著。六卷。念佛の要旨と功德を示したるもの。寛和三年成る。

おうじょういん(往生院)(名)佛京都市京區嵯峨清涼寺の西にあつた寺で、今、其の遺跡に祇王寺がある。念佛材の開基。大阪府河内郡枚岡南村にある寺。岩瀬山六萬寺といふ。行基菩薩の開基。聖武天皇の勅願所。

おうしやうくん(王昭君)(名)支那の匈奴元帝帝宮の女多く、常に見ることができなかつたので、竟寧元年匈奴の呼韓邪单于が來朝して、美人を得ることを求めた時、元帝は竟寧を以て昭君に行かした。去るとして召見すること絶世の美人なのを見て、悔いなくしてすることを得なかつた。昭君は胡地に居つて帝を恋み、怨思の歌を作り、後毒を服して死んだ。胡地の草色皆黄であつたに、昭君の墓の草は青かたと傳へられる。

おうしやくけつろえん(黄色血滴鹽)(名)化(おうけつえん)(名)黄血鹽。一黄色血滴鹽。おうしやくけつろえん(黄色血滴鹽)の地山脈の主軸を横断して、それと直角の方向に震動する地質。

おうしん(王臣)(名)帝王の臣。一蹇蹇躬

の故にあらず(句)(易经蹇卦六二の句)王臣として仕へた以上は、一身を忘れて艱難に處すべきにいふ。

おうしん(往診)(名)醫師が患者の家に往つて診察すること。

おうしん(往信)(名)通信を致すこと。(返)おうしん(鴛鴦)(名)鴛鴦の鳴き聲。「た語。おうしん(櫻唇)(名)櫻花を美人の唇に譬へおうしん(應身)(名)佛が美に應じ物に接して、色身心ならずは法を説き衆生を救ふこと。一ぶつ(應身佛)佛の三身の一。應身をあらはした佛。佛迦は其の例である。

おうじんてんのう(應神天皇)(名)第十五代天皇。御名は崇田命(たかのたかのみこと)仲哀天皇の御四皇子。御母は神功皇后。御在位中、阿直岐・蝦工・船匠等が百濟新羅から來朝し、諸種の工藝を傳へ、支那人も歸化して養蠶、紡績の術を傳へた。在位四十一年で崩御。寶曆百一十一年(天智七)。

おうす(自動)(名)サ四。水中に身を浮かべること。(古語)

おうす(雄白)(名)すりす。雌白又はひき。おうす(生)他動、サ四。成長させる。はやす。一養育する。養ふ。

おうす(負)他動、サ下。負はせる。かぶせる。頭などをさせる。おほす。(古語)

おうす(應)自動、サ變。一答へる。一適當する。かなふ。あてはまる。一和して起る。

おうすい(水)(名)化(あまみず)強弱酸と強鹼との混合液。通常酸に溶解せぬ金・白金を溶解し得る強烈な作用を有する。

おうすち(鷲鷲)(名)おうちち(鷲鷲)。古。おうすち(蓬瀛)(名)相違ふ所。面會の時。

おうせい(應制)(名)制(天子の命令)勅命を奉じて詩歌を詠進すること。

おうせい(王政維新)(名)帝王の政に復て、諸政の革新せられること。一應(我が國)明治初年に於ける大改革。一ぶつ(天子)王政復古(名)天下の政治が、古へにかへて天子御自らに政を統べ給ふやうになること。明治初年の改革。

おうせい(王制)(名)王者の定められた制度。

おうせい(旺盛)(名)まかんなこと。

おうせい(黃精)(名)種々なこゆり鳴子百色の漢名。

おうせい(應請者)(名)平安朝に於いて、請の特典によつて刑罰の減せられた身分の者。

おうせかた(負方)(名)貨方。債權者。債主。おうせき(往昔)(名)むかひ。いしへ。

おうせつ(應接)(名)あしら。もてなし。

おうせつ(應接室)(名)來客と應接するたために設けられた室。一しよ(應接所)(名)應接する場所。一に暇あらず(句)舟行などの際、景色等がつぎつぎに眼あはれて眺めにくくなること。

おうせつ(横截)(名)横さまに切ること。

おうせつ(鶯舌)(名)鶯の舌。一はい(鶯舌梅)(名)鶯舌の一種。花は白色。車梅、蕊の中から一瓣を吐くさまが鶯の舌に似てゐる。

おうせん(横説盜脱)(名)横自在に逃へ脱くこと。

おうせん(慶戰)(名)全軍をなげしにす。おうせん(鶯遷)(名)鶯の谷間を出でて鶯木に遷ること。一進士の試験に及第すること。

おうせん(横線)(名)横さまに引いた線。一こきつ(横線小切手)(名)經小切手の面に二線の平行線を引いたもの。要領者は、自己の取引銀行に預金し、之が交換された後で、これに現金を引出すことが出来る。不正に行はせられる虞れが無い。横線内を受領者の取引銀行を指定記載したものを特別横線小切手といひ、銀行名の記載

して無いものを普通横線小切手と云ふ。すぢひきぎつて。

おうせん(在然)(名)副(水)の深いさま。一瀉のしきりに流れるさま。

おうそ(應訴)(名)法原告の訴訟に對して、被告となつて陳述すること。

おうそう(押送)(名)法囚人又は刑事被告を他の官廳へ送り出すこと。一じょう(押送状)(名)法押送に際し、發送官衙が被押送者に關する事項を記して、押送者に交付する書狀。

おうそう(往相)(名)佛自分の功德を以て、一切の衆生にめぐらし施して、共に安樂淨土に往生せんと願ふこと。一王神と相神。

おうそうじん(王相神)(名)陰陽家で祭るおうそく(一族)(名)帝王の一族。

おうそく(王族)(名)帝王の一族。

おうそん(王孫)(名)帝王の子孫。一貴公子。一種(つくばな)鶯羽根草の漢名。「語

おうた(毆打)(名)他人をたたきまぐること。一そうし(毆打)毆打(名)他人をたたきまぐること。一毆打致死(名)法他人の身體に傷害を與へ、これが原因となつて被害者を死に至らしめること。

おうた(横乾)(名)軍(魚形水雷の尾部に取附け、所要の深度に進行せしめる爲のもの。一潜水艇に取附ける水の乾で、艇の上下動をなさせらるが爲のもの。

おうた(横滲)(名)水泳術で、水面に横臥する體形。水原流神傳流の基本となるもの。

おうた(横隊)(名)横に並列する隊形。(艦隊の形)。

おうたい(應對)(名)人に面會して、その間に答へるさま。一はじらく(皇帝)(名)くわい。一おうたい(應對)一はじらく(皇帝)破陣樂(名)唐の雅樂。唐の

玄宗の作といふ。

おうたい [王代] (名) 王朝時代。一もの
 [王代物] (名) 文王朝時代の事象を脚色した芝居
 狂言。源平時代以前の事件、主として禁中・公卿等皇
 上の事を扱った狂言。「扶背山」「菅原傳授手習鑑」の
 類。大時代物。

おうちやうえん [王仲淹] (名) へん
 おうちやう [王朝] (名) 帝王親政の朝廷。
 ◎王制時作。一じたい [王朝時代] (名) 歴
 我が朝の衣代朝・平安朝時代の總稱。武家時代の對
 おうて [王手] (名) 將軍。直接に王將を攻
 め立てる手。

おうどり [黄土] (名) 赤土を水脈して製した
 原料。◎赤土より生ずる繪具。
 おうとう [王通] (名) 人支那隋末の大儒
 字は仲淹。唐の王勃の祖父。中說文序子を作つて
 論語に擬し、禮書樂論・續書續詩元經贊易を作
 つて六經に擬した。大業十三年(六七)卒。年三十四。
 門人號して文中子といふ。

おうによ [皇女] (名) (こうじ) 皇女。
 おうによ [王女] (名) 王の御女。内親王にあら
 せられぬ皇族の御女也。
 おうによ [王女御] (名) 王女で女御にお
 おうにん [應仁] (名) 後土御門天皇の御宇の年
 號。足利義滿の時代。應仁の亂あり、京都は友誼に
 歸した。三三三。一のらん [應仁の亂] (名)
 ◎應仁元年(1467)元弘元年(1399)年(1413)との
 間の前後十一年。應仁元年より文明九年まで。間の
 大亂で、此の故によつて京都及び其の郊外は戰亂の
 巷となり、内裏を始め、寺院・邸宅は殆ど烏有に歸し、
 之より以後、幕府の威令は行はれず、遂に群雄割據の
 亂國時代を醸すに至りた。

おうねん [往年] (名) 過ぎ去つた年。むかし。

おうたど [御歌所] (名) 宮内大臣の管理に
 屬し、御歌・御歌又御歌會に關する事を掌る役所。
 おうたんと [黄丹] (名) ちんじ(山椒)色の紅
 色を帯びたもので昔の皇太子の御袍の色。

おうてん [暎田] (名) なりし(當代田) 方
 おうてん [應天門] (名) 平安朝末、内裏小
 院の正門。外郭の南面にあつて、重岡、迄かに朱雀門
 を望む。一のへん [應天門の變] (名) 歷清
 和天皇の貞應二年、大納言伴善男父子は應天門に放
 火し左大臣源信の所爲であるとして陸奥藤原
 つて遠流した事件。

おうとう [王道] (名) 帝王が天下を治めるの
 に仁義を本とする政道。勸道の對。
 おうとう [王道] (名) 帝王が天下を治めるの
 仁義を本とする政道。勸道の對。

おうのうら [麻生浦] (名) 地
 おうのうら [麻生浦] (名) 地
 おうのうら [麻生浦] (名) 地
 おうのはな [王島] (名) 鼻を極めて高くし、
 赤く塗つた御築の假面。猿田彦の相といふ。
 おうはり [王親] (名) 王者と親者。◎王道と
 訓道。仁義による政治と武力による政治。

おうはり [横波] (名) 理。◎日影をさす。ささ

おうたんと [黄丹] (名) ちんじ(山椒)色の紅
 色を帯びたもので昔の皇太子の御袍の色。
 おうだん [横断] (名) 横にきりなつこと。
 わせ [横断爲替] (名) 經問接爲替のこと。二
 國間に直接爲替の取組を爲すを得ざる場合に、その
 二國以外の國を理由にして爲替を決済するもの。一

おうと [音] (名) おびと(夫)の音便。な。
 おうと [王都] (名) 皇居のある都市。古語。
 おうと [嘔吐] (名) 胃中にある飲食物を吐くこと。
 (へん) をつく。

おうな [老女] (名) 老いた女。(樂) 處。
 オナーシステム [Owner system] (名)
 教育生自治による教育法。
 おうな [老女] (名) 老いた女。(樂) 處。
 オナーシステム [Owner system] (名)
 教育生自治による教育法。

おうはい [黃梅] (名) 迎春花 (名) 植木原
 科の落葉小灌木。高
 さ一米乃至二米。莖
 の若い部分に緑色の
 なし、葉の上部は下
 垂する。葉は複葉で、
 三箇の小葉より成り
 對生する。春、葉に先
 だつて六個色の花を開く。觀賞用。



【梅 黃】

おうたんと [横断] (名) 横にきりなつこと。
 わせ [横断爲替] (名) 經問接爲替のこと。二
 國間に直接爲替の取組を爲すを得ざる場合に、その
 二國以外の國を理由にして爲替を決済するもの。一
 しゅぎ横断分け [名] 社資本階級と労働階級
 とを上下の階級に分け各々の組合を組織し以て相對
 立せしめようとする主義。一ひんこう [横断
 飛行] (名) 飛行機で、山河海洋を横きりて長距離

を飛行すること。一めん [横断面] (名) 物體を
 其の長さに直角ななす垂直面に沿つて切つた切面。
 おうちやうえん [王仲淹] (名) へん
 おうちやう [王朝] (名) 帝王親政の朝廷。
 ◎王制時作。一じたい [王朝時代] (名) 歴
 我が朝の衣代朝・平安朝時代の總稱。武家時代の對
 おうて [王手] (名) 將軍。直接に王將を攻
 め立てる手。

おうどり [黄土] (名) 赤土を水脈して製した
 原料。◎赤土より生ずる繪具。
 おうとう [王通] (名) 人支那隋末の大儒
 字は仲淹。唐の王勃の祖父。中說文序子を作つて
 論語に擬し、禮書樂論・續書續詩元經贊易を作
 つて六經に擬した。大業十三年(六七)卒。年三十四。
 門人號して文中子といふ。

おうによ [皇女] (名) (こうじ) 皇女。
 おうによ [王女] (名) 王の御女。内親王にあら
 せられぬ皇族の御女也。
 おうによ [王女御] (名) 王女で女御にお
 おうにん [應仁] (名) 後土御門天皇の御宇の年
 號。足利義滿の時代。應仁の亂あり、京都は友誼に
 歸した。三三三。一のらん [應仁の亂] (名)
 ◎應仁元年(1467)元弘元年(1399)年(1413)との
 間の前後十一年。應仁元年より文明九年まで。間の
 大亂で、此の故によつて京都及び其の郊外は戰亂の
 巷となり、内裏を始め、寺院・邸宅は殆ど烏有に歸し、
 之より以後、幕府の威令は行はれず、遂に群雄割據の
 亂國時代を醸すに至りた。

おうねん [往年] (名) 過ぎ去つた年。むかし。

さん〔黄葉山〕(名) 地蔵宗の大導師であつた支那の山。福建省福州福清縣にある。ししゅう

〔黄葉宗〕(名) 佛敎宗派の一分派。明の黄葉山萬福寺の僧隆が、承應三年(三二四)に來朝し山城國宇治郡宇治に黄葉山萬福寺を創立して弘めた宗派。一ぜん

〔黄葉宗〕(名) 佛敎宗派の一分派。明の黄葉宗に傳はる。一ばん

〔黄葉宗〕(名) 佛敎宗派の一分派。明の黄葉宗に傳はる。一ばん

〔黄葉宗〕(名) 佛敎宗派の一分派。明の黄葉宗に傳はる。一ばん

〔黄葉宗〕(名) 佛敎宗派の一分派。明の黄葉宗に傳はる。一ばん

〔黄葉宗〕(名) 佛敎宗派の一分派。明の黄葉宗に傳はる。一ばん

〔黄葉宗〕(名) 佛敎宗派の一分派。明の黄葉宗に傳はる。一ばん

〔黄葉宗〕(名) 佛敎宗派の一分派。明の黄葉宗に傳はる。一ばん

〔黄葉宗〕(名) 佛敎宗派の一分派。明の黄葉宗に傳はる。一ばん

〔黄葉宗〕(名) 佛敎宗派の一分派。明の黄葉宗に傳はる。一ばん

〔黄葉宗〕(名) 佛敎宗派の一分派。明の黄葉宗に傳はる。一ばん

〔黄葉宗〕(名) 佛敎宗派の一分派。明の黄葉宗に傳はる。一ばん

〔黄葉宗〕(名) 佛敎宗派の一分派。明の黄葉宗に傳はる。一ばん

〔黄葉宗〕(名) 佛敎宗派の一分派。明の黄葉宗に傳はる。一ばん

〔黄葉宗〕(名) 佛敎宗派の一分派。明の黄葉宗に傳はる。一ばん

〔黄葉宗〕(名) 佛敎宗派の一分派。明の黄葉宗に傳はる。一ばん

おうびょう〔秧苗〕(名) 稻の苗。

おうふり〔王父〕(名) 死んだ祖父の尊稱。王者の父。(王母)の對。

おうふく〔往復〕(名) ゆきかへり。ゆきまへ。手紙のやりとり。(復)おうふくきよきつ。

おうひやく〔往復切符〕(名) 往復の乗車切符を一枚につなぎあはせたもの。一はがき

おうぶん〔應分〕(名) 身の程に相當すること。信用と返信用とが續いてある郵便業者。

おうぶん〔歐文〕(名) ヨロップ諸國に行はれる文字。一こう

おうぶん〔歐文〕(名) 歐の活字を組立てる職工。一たい

おうぶん〔歐文〕(名) 歐の活字を組立てる職工。一たい

おうぶん〔歐文〕(名) 歐の活字を組立てる職工。一たい

おうぶん〔歐文〕(名) 歐の活字を組立てる職工。一たい

おうぶん〔歐文〕(名) 歐の活字を組立てる職工。一たい

おうぶん〔歐文〕(名) 歐の活字を組立てる職工。一たい

おうぶん〔歐文〕(名) 歐の活字を組立てる職工。一たい

おうぶん〔歐文〕(名) 歐の活字を組立てる職工。一たい

おうぶん〔歐文〕(名) 歐の活字を組立てる職工。一たい

おうぶん〔歐文〕(名) 歐の活字を組立てる職工。一たい

おうぶん〔歐文〕(名) 歐の活字を組立てる職工。一たい

おうほう〔王法〕(名) 王者の施行する法律。天下にわたる道。

おうほう〔枉法〕(名) 法の正理をよけること。おうほう

おうほう〔往訪〕(名) 訪問すること。おうほう

おうほう〔横暴〕(名) 我儘で亂暴なこと。おうほう

おうほう〔王法〕(名) 佛敎の方から世間のおきてをいふ。(佛法)の對。

おうほう〔王勃〕(名) 〆支那唐の詩人。字は子安。隋末の大儒王通の孫。詩賦に秀で、楊炯彦

おうみか〔みか〕(名) 〆支那天津邊から出る蕪。根塊は扁圓形で大きい。

おうみげん〔せんじん〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみげん〔せんじん〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみげん〔せんじん〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみげん〔せんじん〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみげん〔せんじん〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみげん〔せんじん〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみげん〔せんじん〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみげん〔せんじん〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみげん〔せんじん〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみげん〔せんじん〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

に擬して定めたもの。(山比良の墓碁(2)矢種(3)の歸帆(3)石山の秋月(瀧田)夕陽(三井)の晚鐘(田原)の落雁(栗津)の時風(唐時)の夜雨。

おうみつり〔みつり〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみつり〔みつり〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみつり〔みつり〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみつり〔みつり〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみつり〔みつり〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみつり〔みつり〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみつり〔みつり〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみつり〔みつり〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみつり〔みつり〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみつり〔みつり〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみつり〔みつり〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみつり〔みつり〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみつり〔みつり〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみつり〔みつり〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみつり〔みつり〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

おうみつり〔みつり〕(名) 〆支那天津邊から出る蠟燭で品質がよい。

二二六

【經】生産通利。ーラップ [Overlap] (名) 映画用紙。甲の畫面が映つてゐるうちに、更に乙の畫面が映り、甲の畫面が次第に消え去るの畫面のみ残る撮影法。二種撮影。

オーヴァータイム [Over-time] (名) 規定時間以外に労働に對する賃銀。
オーヴァーチューア [Overture] (名) 序曲。序楽。前奏曲。

おおうえ (大上) (名) 貴人の母。おほきたの
オウエン [Robert Owen] (名) 英人。社会思想家。空想的社會主義者。英國動植物園協會創立者。労働組合の創立者。其の著に新社會觀「自傳」等がある。(一八七二)

おおうじ (天皇) (大氏) (古語) 一族中の宗族。即ち本家で、天皇に直隷し、數多の古氏を統率したるの。(古語)

おおうすのみこと (大確命) (名) うまと、たけるのみこと(日本武尊)の御名。

おおうた (大歌) (名) (お)はは敬稱。昔宮中の大歌で敬稱せられた歌曲。又それを奏する人。(小歌の對) ーところ(大歌所) (名) 昔諸國の風俗歌、神樂、能馬場等の歌曲を掌り、大嘗會新嘗祭などに、雑詠奏入の時、初音を奏する等の事を掌る。た後所。

おおうち (大内) (名) だいら。こし。禁裏。皇居。ーがた(大内名) (名) 宮中の方の横櫓の對) ーざり(大内桐) (名) 五七の桐の横櫓。○名物としての。金地などに紋金の桐草草のある製布。大内義隆が、明國に稱して、織せられたといふ。ーしゆじ(大内守護) (名) 禁裏を守護した武家の職名。ーそたち(大内首) (名) 御所風のそだち族。族さだち上品に生長した。ーび花(大内差) (名) 元祿の頃流行した染模様。葉の形の形をしたもの。ーびな(大内人) (名) 大神宮等で、供御の物などを掌る神官。ーびな(大内

雛) (名) だいらびびな(内養雛)。ーぼん(大内本) (名) 大内義隆の出版した書籍。明國版と我が國の版とがある。ーやま(大内山) (名) 京都市右京區仁和寺の北嶺。○おほうち。皇居。ーゆかり(大内縁) (名) 宮中に縁のあること。又其の人。(大内)

おおうちぎ (大柱) (名) ゆきたけを大きくおおうちもの (大打物) (名) 大太刀。槍。薙刀等の長大なもの。

おおうちよしおき (大内義興) (名) 入武將。足利義隆を勤王として、菅領に補せられた。享祿元年(一一八八)没。年五十二。

おおうちよししたか (大内義隆) (名) 入武將。義隆の長子。性嗜射にして武事を急り、將士無敵。天文二十年(一一三二)老臣陶晴賢に居城山口を圍まれ、長門國深川大宰寺に自殺。年四十五。

おおうちよしひら (大内義弘) (名) 入武將。義隆の石と號。足利義滿に仕へて軍功あり、功長豊石。泉紀諸將の守護となる。南北朝の合一に助あり。應永六年(一一五九)義滿の意に忤つて討伐せられ、長洲津に斃死。年四十六。

おおうつし (大窩) (名) (お)はは敬稱。映畫、特に觀客の注意を惹く目的で、人物の顔や手紙の文面等を畫面一ぱいにうつし出すこと。海。大海。おおうなばら (天海原) (名) 廣敷としたおおうら (天兄) (名) おはに。長兄。(古語)

おおえ (天枝) (名) 大きな枝。(古語)

おおえ (天枝) (名) 大きな枝。(古語)

おおえ (天枝) (名) 大きな枝。(古語)

おおえ (天枝) (名) 大きな枝。(古語)

りことに當ふ。賴朝の天下に號令するを得たはそその功に依る。剃髮して覺阿といふ。嘉祿元年(一一八九)五薨。年七十八。

おおえまさき (大江匡房) (名) 人安朝の學者歌人。江師と稱す。後冷泉、後三條、河の三朝に仕へ、參議中納言大藏卿となり、天永二年(一一七二)薨。年七十一。詩文は續本朝文粹に、歌は勅撰和歌集に殘る。その著に「江家次第」「江談抄」等がある。藤原長房藤原伊房と故に三房の稱がある。

おおえやま (大江山) (名) 山城の丹波との境にある山。その坂路を大江の坂又は老の坂といふ。大枝山。○京都府與郡にある山。其の頂上を千丈が嶽とひ、昔酒呑童子の棲んだといふ窟がある。海拔約一三三米。

おおお (大婆) (名) 大きな婆。(古語)

おおお (大扇) (名) 大きな扇。(古語)

おおお (大扇) (名) 大きな扇。(古語)

おおお (大扇) (名) 大きな扇。(古語)

おおお (大扇) (名) 大きな扇。(古語)

おおお (大扇) (名) 大きな扇。(古語)

おおお (大扇) (名) 大きな扇。(古語)

おとお (大扇) (名) 大きな扇。(古語)

おとお (大扇) (名) 大きな扇。(古語)

おとお (大扇) (名) 大きな扇。(古語)

おとお (大扇) (名) 大きな扇。(古語)

おとお (大扇) (名) 大きな扇。(古語)

おとお (大扇) (名) 大きな扇。(古語)

おとお (大扇) (名) 大きな扇。(古語)

おとお (大扇) (名) 大きな扇。(古語)

おとお (大扇) (名) 大きな扇。(古語)

おとお (大扇) (名) 大きな扇。(古語)

おおかたは「大形」(名) 大きな形。(小形の對)

おおかたなし「性善」(名) 大方なし(形) 一) なまなまでない。真だしい。

おおかたひら「大帷子」(名) 裝束の下に着るもの。布で作り、単衣。

おひより小さく短い。中古には汗取として夏だけ用いたが、後して夏冬共に用ひた。色は春・夏は白、夏は紅。

おひよ(名) 絹をこはくつた白布で仕立て、武家で、軍衣の直垂の下に重ねて着用したしもの。



〔子帷大〕

オーガニゼーション [Organization] (名) 組織。編成。一) オブイナダストリー [Organization of Industry] (句) 産業組織

おおがね「巨鐘」(名) つりがね。先鐘(古語)

おおがね「大矩」(名) 大形の三角定規で、土木建築に於いて此角を測定するに用ひる。

おおがね「大金」(名) 多くの金銭。なにかいん。

おもうけ「大金儲」(名) 大金を儲けること。おほまうけ。一) もち「大金持」(名) 多額の財産を有する人。富豪。

おおかぶら「大鐘」(名) 鐘失の、鐘の大なおおかぶ。土蔵の壁のやうに、全鐘を懸置したものをいふ。

おおかま「大鎌」(名) 鎌は曲つてゐることから、人の心の邪曲なかに懸ていふ語。

おおかみかみ「大神」(名) 神の敬稱。おほみかみ。

おおかみ「狼」(名) 悪で深山に棲み、夜間群をなして徘徊し、飼みれば人を害し、吠聲遠く響く。形は和犬に似



〔狼〕

て解せ、耳小く口大きく眼鋭く、全身黄灰色若しくは赤褐色、前肢に五爪、後肢に四爪ある。一) もの(名) 女義太夫の藝人にけしからぬ野心を振く男子の仲間。一) の衣(句) 表面は柔順で内心の恐るべき人。衣服の大きくて、身體にあはぬもの。

おおがみのまつり「天神祭」(名) 昔、四月と十二月と上の卯の日に行はれた大物主神を祀つた祭。

おおかめのき「植忍冬」(名) 科の落葉灌木。葉は廣楕圓形又は圓心形。夏、嫩葉圓錐花序に白色の花を開き、熟すると果實を結ぶ。

おおがら「大柄」(名) 身體の、普通より大きなこと。大盛。一) 人を褒めていふ語。

おおがら「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおがら「正」(接頭) おほい正。(ひろい從)の對)(古語)

おおがら「大辛」(名) 七色唐辛子、味の極めて辛いもの。(中辛小辛の對)

おおがり「多かり」(多かり)(自動、ラ變) 多おおがり「大雁」(名) 動物) ひくひく。

おおがら「大強盗」(名) おほねずびと。大盗。一) 人を褒めていふ語。

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「正」(接頭) おほい正。(ひろい從)の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおきさき「天后」(名) 皇后(古語) 皇太后。(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

役所。おほきみのつかさ。おほきんだちのつかさ。

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

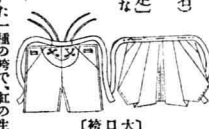
おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)

おおき「大」(接頭) おほきなと。すぐれたこと。(古語) おほは(大)。(小の對)(古語)



〔袴口大〕

「俳諧付合小観」俳諧發句小観等がある。

おおしもしも 大楮(名) 大きなしも。(古語)

おおしよん 大書院(名) 大きな書院。武家の書閣。おほしよん。

おおしよんじよう 大猩猩(名) 大猩猩。おほしよんじよう。

おおしよんじよう 大上段(名) 力をこめて勢よく、得物を頭上よりかざした構。おほしよんじよう。

おおしよんじよう 大庄屋(名) 多くの庄屋の上になつて、廣い邸宅を支配する庄屋。帯刀を許された。おほしよんじよう。大横目。

おおしよんじよう 大上段(名) 禁中の女官の最上位のもの。又、幕府で備へたこの名稱を用いた。近松門左衛門に更にこれを諸侯の召使ふ女のことを用ひてゐる。おほしよんじよう。

おおしよんじよう 果す(他動) サ下(一) 果す。おほしよんじよう。

おおしよんじよう 生す(他動) サ四(一) 成長させる。おほしよんじよう。

おおしよんじよう 負す(他動) サ下(一) 負す。おほしよんじよう。

おおしよんじよう 金を借らせる。(古語) 借らせる。おほしよんじよう。

おおしよんじよう 課す(他動) サ下(一) 課す。おほしよんじよう。

おおしよんじよう 買物を出させる。(古語) 買物を出させる。おほしよんじよう。

おおしよんじよう 相應ならしめる。(古語) 相應ならしめる。おほしよんじよう。

おおしよんじよう 仰す(他動) サ下(一) 仰す。おほしよんじよう。

おおしよんじよう 天都(名) 天都。おほしよんじよう。

おおしよんじよう 天須賀乙字(名) 天須賀乙字。おほしよんじよう。

おおしよんじよう 伴御子(名) 伴御子。おほしよんじよう。

おおしよんじよう 大物(名) 大物。おほしよんじよう。

おおしよんじよう 大介(名) 大介。おほしよんじよう。

おおしよんじよう 大守(名) 大守。おほしよんじよう。

おおしよんじよう 大守(名) 大守。おほしよんじよう。

おおしよんじよう 大守(名) 大守。おほしよんじよう。

おおしよんじよう 大守(名) 大守。おほしよんじよう。

おおしよんじよう 大守(名) 大守。おほしよんじよう。

に自警する場合に「守」に代へて用ひた稱號。●祖先以來、地方に土著して権勢を振つたもの。

おおすじ 大筋(名) あらましの筋。

おおすつ 大筒(名) 大筒。火筒。

おおすつ 大透波(名) 大透波。火筒。

オーストラリア Australia 大洋洲(名) 大洋洲。●世界最小の大洲。東は太平洋、西及び南印度洋、北はアラフ海に面する。面積約七五五萬方里。英國の自治領地。羊毛の産出は世界第一。金、鑽石等の産出も多い。所謂白人南洋主義を唱へて、亞細亞人種に移住を拒否してゐる。濠洲。

オーストリア Austria 奥地利(名) 奥地利。●ヨーロッパに於ける一共和國、海を有せず。面積凡そ八萬五千方里。我が北海道より稍大きい。首府はウィーン。オーストリア。

オーストリアン スクール Austrian School (名) 奥地利派。●経済學。英國經濟學者カーネルメンガーによつて創始された主義主義的經濟學。限外效用學。

おおすなり 大網(名) 大網。おほすなり。

おおすなり 大垂髪(名) 大垂髪。おほすなり。

おおすなり 芝居狂言の最終。おほすなり。

おおすなり 大横(名) 大横。おほすなり。

おおすなり 仰出(名) 仰出。おほすなり。

おおすなり 仰書(名) 仰書。おほすなり。

おおすなり 仰書(名) 仰書。おほすなり。

おおすなり 仰書(名) 仰書。おほすなり。

おおすなり 仰書(名) 仰書。おほすなり。

おおすなり 仰書(名) 仰書。おほすなり。

おおすなり 仰書(名) 仰書。おほすなり。

おおすなり 仰書(名) 仰書。おほすなり。

おおすなり 仰書(名) 仰書。おほすなり。

おおすなり 仰書(名) 仰書。おほすなり。

おおすなり 仰書(名) 仰書。おほすなり。

おおすなり 仰書(名) 仰書。おほすなり。

おおすなり 仰書(名) 仰書。おほすなり。

おおすなり 仰書(名) 仰書。おほすなり。

●仲間の中で最もすぐれたもの。

おおせたい 大世帯(名) 大きな世帯。

おおせたい 家(名) 家。おほせたい。

おおせたい 大節季(名) 一年の終。年末。

おおせたい 大官巨(名) 大臣が宣し、辨官が草する宣旨で、大政官から辨官の諸司や社等などに下した公文書。

おおせたい 大相場(名) 大相場。おほせたい。

おおせたい 大総代(名) 大総代。おほせたい。

おおせたい 大草履取(名) 主人の草履を持って供する奴隷の中、若者を小草履取と稱したに對して成人したものを、若衆でない草履取。

おおせたい 大袖(名) 昔の禮服で、袖口廣く、小袖の上に着る服。大袖の袖。●輕く仕立てた袖。

オースドックス(Orthodox) 正統派。宗教では、教主義を正しく繼承してゐる宗派。學術では、源流の正しい主義學說を繼承してゐるもの。

おおそり 大天(名) 刀のそりの大きなもの。

おおそり 大反(名) 刀のそりの大きなもの。

おおそり 大反(名) 刀のそりの大きなもの。

おおそり 大反(名) 刀のそりの大きなもの。

おおそり 大反(名) 刀のそりの大きなもの。

おおそり 大反(名) 刀のそりの大きなもの。

おおそり 大反(名) 刀のそりの大きなもの。

おおそり 大反(名) 刀のそりの大きなもの。

おおそり 大反(名) 刀のそりの大きなもの。

おおそり 大反(名) 刀のそりの大きなもの。

おおそり 大反(名) 刀のそりの大きなもの。

おおそり 大反(名) 刀のそりの大きなもの。

おおそり 大反(名) 刀のそりの大きなもの。

おおそり 大反(名) 刀のそりの大きなもの。

おおそり 大反(名) 刀のそりの大きなもの。

を用ひ雲形をさき、上に火筒の形がある。火筒大鼓だいたい。●芝居などで囃子方用ひる大きな太鼓。●西洋音樂に用ひる大きな太鼓。ドラム。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

おおたか 大高(名) 大高。おほたか。

く刺して、角を鎌のまきさのやうに尖らせて抜きあげたもの。中間・小者などに流行した。

おおひめ 大姫(名) 大姫の敬稱。(古語) 一 おおみ(大姫君)(名) 大姫の敬稱。(古語) 一 おおみ(大姫御前)(名) 前條に同じ。(古語)

おおひやくえ 大白衣(名) 鎧の下に着る白く、白のうのみを着て袴を着けぬ。(古語)

おおひやくし 大百姓(名) 多くの田畑を持つてゐる農夫。

おおひらうし 大拍子(名) 大拍子を加へ鳥肉を加へて汁を多くして煮た食品。(おおひらうし) 一 わん(天平椀)(名) ひらいたい大きな椀。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

おおひらうし 天平(名) あらには人目に領者せぬまゝ、慣り隠すことのない。

船の「枕」たる「か」と「り」の「ゆくりゆくり」。「たゆたふ」「ゆたわ」りの枕詞。一に乗ったやう(句) 心丈夫に思ひ安心することなど。

おおふは 大文箱(名) 名筆の文などを入れて黒欄に飾るかぶる箱。

オーブリン(佛 Aubequin)(名) 化粧品や香水等の基礎香料の液體で、ヒシンスのやうな芳香を放つもの。

おおふり 大降(名) 雨などの甚だしく降る。

おおふり 大風(名) おおがじ(大形)。

おおふり 大振袖(名) 大きく仕立てた振袖。

おおぶるまい 大振舞(名) 盛大な宴會。

おおぶろしき 大風呂敷(名) 大きな風呂敷。一 誇大な言を吐くこと。一 名をひろげる(句) 大言壯語する。ほらなを。

オープン(Open)(英、名、形) あげばなし。秘密しないあけすけな。一 公開競技。一 飛入競技。一 無蓋自動車。

オープンエヤースクール(Open-air school)(英、名) 教野外學校。林間學校。

オープンゲーム(Open game)(名) 遠遊等ななます、何人でも参加し得る競技會。

オープンコース(Open course)(名) 長距離競走名の走路に白線を引かすコース。

オープンシー(Open sea)(名) 公海。原則的に労働組合員でなく、雇傭の機会な興へる工場。

オープンハートッド(Openhearted)(英、名、形) 目の思想感情を率直に表明すること。

おおへ 大倉(名) たいじよ(大倉會)。

おおへ 大柄(名) おうへい(横柄)。做。

おおへ 大部屋(名) 大きな室。廣間。一 劇場や映画撮影所の控室にある、部屋。下級の。

佛儀が雑居する所。一 下級の佛儀。

おおほうしよ 大奉書(名) 大判の奉書紙。一 オボエ(名) 洋楽の木製管樂器。下端は漏斗状をなし、上端の口には金屬管の上に二枚の簧(簧)を取付け、全體を三部にとりはし得るやうにしたもの。音色に一種の特色があつて、異國情調のある稍陰鬱な音色を持つてゐる。

おおほげ 大佛(名) 特別に大きな佛像。

おおほま 大間(名) 廣間。一 (京間)。(おおま) 一 がき(大間書)(名) 任官の時、兩官を書いた文書。兩官の行下をあけて、任官後、追書を附記するからいふ。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまゐり 大參(名) 多人数の參詣。

おおまちけいげつ 大町桂月(名) 一 人明治・大正の文章家。名は芳衛。福知屋の人。桂月桂治。下で職名は其の號である。花紅紫・黄菊白菊を出すに及んで有名になつた。大佛。中學業術白菊に評論の筆を揮ひ、後、雑誌「學生」の主宰となる。大正十四年(一九二五)年五十七。著書には「大正小説」(講堂)、「學生」(社會堂)、「日本文章史」(古今史)等がある。すべて「桂月全集」(五卷)に収められている。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おおまつりごとのおおまゐり 大政大臣(名) おおまつりごとのおおまゐり。

おわわーおかた

おわわだ 大曲(名) 河潮などの水の深く入
込んで遊んだ事。いりえ。
おわわだ 大渡(名) 船の帆足をとる
綱。又その物。一ふ陸生(名) 陸に生えて
おわわだ 大渡懸(名) 船の帆足をとる
綱。又その物。一ふ陸生(名) 陸に生えて

おわだたてき 大和田建樹(名) 人
明治時代の國文學者。歌人。伊豫宇和島の。高等師
範學校教授。東京女子高等師範學校教授となる。明
治四十四年(一八九七)年五十四。その著に明治
唱歌(鐵道唱歌)和文(歌曲通解)和文學史
日本大辭典(修辭學)日本大文學史等がある。
おわわらわ 大童(名) 頭髪の髻がとけ
てはらばらになったこと。急場に際して力限り
奮闘すること。

おん 御(接頭) おほかの音便。(古語)
おん 御方(名) おんかた。(古語) 一老(御
衣)(名) 天皇の御服。(古語) 一たから(御寶
衣)(名) おほかたから。(古語)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)

おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)

おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)

おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)

おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)

汽車。(汽船の對) 一サリ引陸釣(名) 陸
上から魚を釣ること。船釣の對) 一陸田(名) 陸
田(名) 陸田(名) 陸田(名) 陸田(名) 陸田(名)
一陸田(名) 陸田(名) 陸田(名) 陸田(名) 陸田(名)
一陸田(名) 陸田(名) 陸田(名) 陸田(名) 陸田(名)
一陸田(名) 陸田(名) 陸田(名) 陸田(名) 陸田(名)

おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)

おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)

おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)

おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)

おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)
おんべ 大嘗(名) 大嘗の詔。(だい)

おがさき 尾掛(名) 船の尾にかけて、船床に
留めぬ。しりがけつな。
おがさき 御蔭(名) 神佛のたすけ。加護。恩
惠。なげ。一まいり(御蔭參)(名) 江
戸時代に流行した一種の伊勢參宮。路儀を持す消
道の人人の喜捨。此儀によって、伊勢大神宮に參詣し
たこと。けけまる。

おがさき 小笠原(名) かがさき(笠懸)。
おがさき 岡崎市(名) 地愛知縣三河
國の市。岡崎平野の地帯を産する。
おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)
おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)

おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)
おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)
おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)
おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)

おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)
おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)
おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)
おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)

おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)
おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)
おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)
おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)

おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)
おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)
おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)
おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)

おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)
おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)
おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)
おがさき 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名) 岡崎(名)

おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)
おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)
おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)
おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)

おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)
おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)
おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)
おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)

おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)
おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)
おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)
おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)

おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)
おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)
おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)
おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)

おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)
おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)
おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)
おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)

おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)
おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)
おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)
おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)

おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)
おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)
おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)
おがさわら 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名) 小笠原(名)

又は子女の敬稱。●貴人の子息の部屋住みの敬稱。
「くゝい」(御方御所)(名)人妻に狂ふこと。
「くゝい」(御方御所)(名)將軍家又は大臣家の部屋住みの子息の稱。「さむらい」(御方侍)(名)右軍・左衛門等の如く武事に携はるる侍の稱。「すまひ」(御方仕)(名)おたごの稱。「ほうちやう」(御方丁)(名)和泉國堺から出た唐丁で、鍛工が要に手傳はせて造つたが、此の名があるといふ。「めし」(御方めし)(名)自動の力四貴人の愛らしく見える。

おがたごうあん (名)「緒方洪庵」(名)「人」陶工。京都の人。光琳の弟。名は惟允。紫雲・鐵海等の號がある。和法は光悦及び仁清の法に倣つて別に新意を出した。書を父家謙に、點茶を見光琳に學び、作る所の陶器にも雅趣があつた。點茶の間に愛玩せられる。正徳二年江戸に下り、鑪燒を製した。寛保三年(一四〇三)歿。年八十。

おがたごうあん (名)「緒方洪庵」(名)「人」陶工。京都の人。名は惟允。通稱は三年。江戸に出で、坪井信道・宇田川玄眞に蘭學を學び、更に長崎に赴いて歐羅巴に親交し、大隈に業を聞く。後、江戸に來り、侍藝に優れ、法眼に鍛はれ、西洋醫學所頭取となり、文久三年(一五三三)歿。年五十四。

おがたごうあん (名)「緒方洪庵」(名)「人」陶工。京都の人。名は惟允。通稱は三年。江戸に出で、坪井信道・宇田川玄眞に蘭學を學び、更に長崎に赴いて歐羅巴に親交し、大隈に業を聞く。後、江戸に來り、侍藝に優れ、法眼に鍛はれ、西洋醫學所頭取となり、文久三年(一五三三)歿。年五十四。



(樹心黄)

おかたーおき

「黄心樹」(名)「植」木蘭科の落葉樹木。幹高一八米。葉は楕圓形乃至長卵形。樹皮は暗褐色で平滑。果は長楕圓形乃至長卵形で白色。革質で互生する。春、葉腋に紫紅色の帯びた白色の花を開き、芳香を有する。果實は圓形で簇生する。暖地に自生し、又觀賞用として庭園に栽培する。材は暗緑褐色で、床柱又は器具とし、葉は香料とする。

おがたごうあん (名)「緒方洪庵」(名)「人」陶工。京都の人。名は惟允。通稱は三年。江戸に出で、坪井信道・宇田川玄眞に蘭學を學び、更に長崎に赴いて歐羅巴に親交し、大隈に業を聞く。後、江戸に來り、侍藝に優れ、法眼に鍛はれ、西洋醫學所頭取となり、文久三年(一五三三)歿。年五十四。

おがたごうあん (名)「緒方洪庵」(名)「人」陶工。京都の人。名は惟允。通稱は三年。江戸に出で、坪井信道・宇田川玄眞に蘭學を學び、更に長崎に赴いて歐羅巴に親交し、大隈に業を聞く。後、江戸に來り、侍藝に優れ、法眼に鍛はれ、西洋醫學所頭取となり、文久三年(一五三三)歿。年五十四。

おがたごうあん (名)「緒方洪庵」(名)「人」陶工。京都の人。名は惟允。通稱は三年。江戸に出で、坪井信道・宇田川玄眞に蘭學を學び、更に長崎に赴いて歐羅巴に親交し、大隈に業を聞く。後、江戸に來り、侍藝に優れ、法眼に鍛はれ、西洋醫學所頭取となり、文久三年(一五三三)歿。年五十四。

「黄心樹」(名)「植」木蘭科の落葉樹木。幹高一八米。葉は楕圓形乃至長卵形。樹皮は暗褐色で平滑。果は長楕圓形乃至長卵形で白色。革質で互生する。春、葉腋に紫紅色の帯びた白色の花を開き、芳香を有する。果實は圓形で簇生する。暖地に自生し、又觀賞用として庭園に栽培する。材は暗緑褐色で、床柱又は器具とし、葉は香料とする。

おがたごうあん (名)「緒方洪庵」(名)「人」陶工。京都の人。名は惟允。通稱は三年。江戸に出で、坪井信道・宇田川玄眞に蘭學を學び、更に長崎に赴いて歐羅巴に親交し、大隈に業を聞く。後、江戸に來り、侍藝に優れ、法眼に鍛はれ、西洋醫學所頭取となり、文久三年(一五三三)歿。年五十四。

おがたごうあん (名)「緒方洪庵」(名)「人」陶工。京都の人。名は惟允。通稱は三年。江戸に出で、坪井信道・宇田川玄眞に蘭學を學び、更に長崎に赴いて歐羅巴に親交し、大隈に業を聞く。後、江戸に來り、侍藝に優れ、法眼に鍛はれ、西洋醫學所頭取となり、文久三年(一五三三)歿。年五十四。

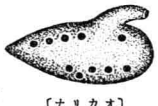
おがたごうあん (名)「緒方洪庵」(名)「人」陶工。京都の人。名は惟允。通稱は三年。江戸に出で、坪井信道・宇田川玄眞に蘭學を學び、更に長崎に赴いて歐羅巴に親交し、大隈に業を聞く。後、江戸に來り、侍藝に優れ、法眼に鍛はれ、西洋醫學所頭取となり、文久三年(一五三三)歿。年五十四。

おかやまし (名)「岡山市」(名)「地」岡山縣の縣廳所在地也。田沼氏の城下町。山陽本線の要驛に當り、中國鐵道及び宇野線を分岐する。後樂園醫科大學、第六高等學校等がある。

おかやまし (名)「岡山市」(名)「地」岡山縣の縣廳所在地也。田沼氏の城下町。山陽本線の要驛に當り、中國鐵道及び宇野線を分岐する。後樂園醫科大學、第六高等學校等がある。

おかやまし (名)「岡山市」(名)「地」岡山縣の縣廳所在地也。田沼氏の城下町。山陽本線の要驛に當り、中國鐵道及び宇野線を分岐する。後樂園醫科大學、第六高等學校等がある。

おかやまし (名)「岡山市」(名)「地」岡山縣の縣廳所在地也。田沼氏の城下町。山陽本線の要驛に當り、中國鐵道及び宇野線を分岐する。後樂園醫科大學、第六高等學校等がある。



【ナリカオ】

おきき(男木) 木村を食ひ合はす時の凸状をなす方(女木の對)



〔荻〕

おきあがり(沖合) 海の方。①漁船におもりのつた子供玩具。如何に倒しても直ちに起きなほるやうにしたもの。

おきあがりこぼし(起上) 小法師、不倒翁(名) 達磨(名)の形に造た土の人の形の起し者かすり又は立。②

おきあがり(置上) 器物を高く置くに、その物の下に他物を添へ置くこと。

おきあがり(置揚) ①木形の上に置揚の著色をした人形。②

おきあがり(沖鯨) ①(鯨の幼魚) おきあみ(置網) ①(あしらひ) おきあわせ(置合) ①(あしらひ) 配合。

おきあみ(置石) ①(あしらひ) 風致を添へる爲に起したに振みおく石。②(あしらひ) 陶に振みおく石。③(あしらひ) 強きに對する場合に、環の二目以上を置いた石。

おきいだす(他動) サ四 だしぬく。

おきえ(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。

おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。

おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。

おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。

おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。

おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。

おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。

おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。

おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。

おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。

おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。

おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。

おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。おきえふし(置餌) ①(置餌) 魚を飼ふ餌。



〔すぎきお〕

おきくち(置口) ①(置口) 金銀などで、器具又は衣服などの緒をとって飾ること。

おきくち(置口) ①(置口) 金銀などで、器具又は衣服などの緒をとって飾ること。

おきくち(置口) ①(置口) 金銀などで、器具又は衣服などの緒をとって飾ること。

おきくち(置口) ①(置口) 金銀などで、器具又は衣服などの緒をとって飾ること。

おきくち(置口) ①(置口) 金銀などで、器具又は衣服などの緒をとって飾ること。

おきくち(置口) ①(置口) 金銀などで、器具又は衣服などの緒をとって飾ること。

おきくち(置口) ①(置口) 金銀などで、器具又は衣服などの緒をとって飾ること。

おきくち(置口) ①(置口) 金銀などで、器具又は衣服などの緒をとって飾ること。

おきくち(置口) ①(置口) 金銀などで、器具又は衣服などの緒をとって飾ること。

おきくち(置口) ①(置口) 金銀などで、器具又は衣服などの緒をとって飾ること。

おきくち(置口) ①(置口) 金銀などで、器具又は衣服などの緒をとって飾ること。

おきくち(置口) ①(置口) 金銀などで、器具又は衣服などの緒をとって飾ること。

おきくち(置口) ①(置口) 金銀などで、器具又は衣服などの緒をとって飾ること。



〔しむくさお〕

おきす(沖洲) ①(沖洲) 沖にある洲。②(おきす) 沖にある洲。③(おきす) 沖にある洲。

おきす(沖洲) ①(沖洲) 沖にある洲。②(おきす) 沖にある洲。③(おきす) 沖にある洲。

おきす(沖洲) ①(沖洲) 沖にある洲。②(おきす) 沖にある洲。③(おきす) 沖にある洲。

おきす(沖洲) ①(沖洲) 沖にある洲。②(おきす) 沖にある洲。③(おきす) 沖にある洲。

おきす(沖洲) ①(沖洲) 沖にある洲。②(おきす) 沖にある洲。③(おきす) 沖にある洲。

おきす(沖洲) ①(沖洲) 沖にある洲。②(おきす) 沖にある洲。③(おきす) 沖にある洲。

おきす(沖洲) ①(沖洲) 沖にある洲。②(おきす) 沖にある洲。③(おきす) 沖にある洲。

おきす(沖洲) ①(沖洲) 沖にある洲。②(おきす) 沖にある洲。③(おきす) 沖にある洲。

おきす(沖洲) ①(沖洲) 沖にある洲。②(おきす) 沖にある洲。③(おきす) 沖にある洲。

おきす(沖洲) ①(沖洲) 沖にある洲。②(おきす) 沖にある洲。③(おきす) 沖にある洲。

おきす(沖洲) ①(沖洲) 沖にある洲。②(おきす) 沖にある洲。③(おきす) 沖にある洲。

おきす(沖洲) ①(沖洲) 沖にある洲。②(おきす) 沖にある洲。③(おきす) 沖にある洲。

おきす(沖洲) ①(沖洲) 沖にある洲。②(おきす) 沖にある洲。③(おきす) 沖にある洲。

之を遣はすもの。

おきやまき置屋詐欺(名) 疵物又は粗悪品に

手を加へ、良品の如く見せかけ、買戻から買戻以上の

借出をする常習詐欺。

おきやん(御俠)(名) 妙齡の女子の、身軽経略して

て賤男をいもいも。おてんば。フアラ。

おきゆうらしい(名) 狂生祖徠(名) 江戸

江戸時代の儒者。字は茂解、號は護園、本姓は物部氏。

物祖徠といふ。始め手學を學び、後、古文辭學を唱

道し、門下から大宰春業、服部南郭等を出した。享保

十三年(二三八八)没。年六十二。其の著に「祖徠集」

「護園隨筆」「論語微」「譯文笠翁」「辨道」等がある。

おきよう(御形)(名) 福ははこぎ。

おきよう(御形)(名) 福ははこぎ。

おきよう(御形)(名) 福ははこぎ。

おきよう(御形)(名) 福ははこぎ。

おきよう(御形)(名) 福ははこぎ。

おきよう(御形)(名) 福ははこぎ。

おきよう(御形)(名) 福ははこぎ。

おきよう(御形)(名) 福ははこぎ。

おきよう(御形)(名) 福ははこぎ。

おきよう(御形)(名) 福ははこぎ。

おきよう(御形)(名) 福ははこぎ。

おきよう(御形)(名) 福ははこぎ。

おきよう(御形)(名) 福ははこぎ。

おきよう(御形)(名) 福ははこぎ。

おきよう(御形)(名) 福ははこぎ。

おきよう(御形)(名) 福ははこぎ。

おきよう(御形)(名) 福ははこぎ。

おきよう(御形)(名) 福ははこぎ。

おきよう(御形)(名) 福ははこぎ。

おく(億)(名) 数の多いこと。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おく(億)(名) 数の多いこと。萬の萬倍。

おくがた(奥方)(名) 奥人の妻。夫人。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくがらう(奥家老)(名) 奥勤めの家老。

おくじょうり(奥浄瑠璃)(名) 江戸時

代に、奥羽地方の座頭が扇子拍子で詠た浄瑠璃で、

主として頼光四天王と兼平手柄権蔵などをつとめた。

おくす(奥書)(名) 奥書。武術などの高尙なとこ

ろ。おくのつと、あつこ。

おくす(奥書)(名) 奥書。武術などの高尙なとこ

ろ。おくのつと、あつこ。

おくす(奥書)(名) 奥書。武術などの高尙なとこ

ろ。おくのつと、あつこ。

おくす(奥書)(名) 奥書。武術などの高尙なとこ

ろ。おくのつと、あつこ。

おくす(奥書)(名) 奥書。武術などの高尙なとこ

ろ。おくのつと、あつこ。

おくす(奥書)(名) 奥書。武術などの高尙なとこ

ろ。おくのつと、あつこ。

おくす(奥書)(名) 奥書。武術などの高尙なとこ

ろ。おくのつと、あつこ。

おくす(奥書)(名) 奥書。武術などの高尙なとこ

ろ。おくのつと、あつこ。

おくす(奥書)(名) 奥書。武術などの高尙なとこ

ろ。おくのつと、あつこ。

おくす(奥書)(名) 奥書。武術などの高尙なとこ

ろ。おくのつと、あつこ。

おくす(奥書)(名) 奥書。武術などの高尙なとこ

ろ。おくのつと、あつこ。

おくす(奥書)(名) 奥書。武術などの高尙なとこ

ろ。おくのつと、あつこ。

おくす(奥書)(名) 奥書。武術などの高尙なとこ

ろ。おくのつと、あつこ。

おくす(奥書)(名) 奥書。武術などの高尙なとこ

ろ。おくのつと、あつこ。

おくたく(臆度・態度)(名)おしはかること。あてずみりや。臆濁。

おくだん(臆断)(名)おしはかつてきめること。オクタント(Octant)(名)三百六十度の圍を八分したもので、角度を測る器。八圓筒。

おくぢち(尾口)(名)馬などの尾のつけね。

おくちち(尾兆)(名)限なく多い数。○人。○民。○民衆。

おくちち(奥帳場)(名)○奥にある機織。主人又は重役支配人などのふる所。○おく(奥役)。

おくつ(麻沓)(名)麻でつく。たわらちで、軍用に供するもの。いはく心麻沓。

おくつ(奥津城)(名)墓。(古語)一どこのろ(奥津城妻)(名)墓。死んで愛する妻。(古語)

おくつ(奥細)(名)奥州から産出する地。おくて(晩稻)(名)稲。おそくみの稻。

おくど(奥手)(名)後れて花咲き又は實る草木。おくど(奥土)(名)奥州の土地。

おくど(奥床)(名)家の奥にある臥床。(古語)おくど(奥年寄)(名)あるすい(古語)

おくど(童男)(名)なは「小」の義。「く」なは「人」の古語。朝鮮語(人)と關係がある。をのわらは。男の子。(副)男の對(古語)。

おくなく(奥無)(副)奥まで弱くて。殘る所な

おくに(御國)(名)江戸時代に於ける大名の領地の敬稱。○故郷。出生地。○故國。○祖國。○地方。なかに○他人の國の敬稱。いさようたん。

御國郷談(名)一地方の人との間にけり通す方言のなまり。御國説(名)江戸時代の

に、大名の在國中に設けたりて、妾數の子をいよ。

もの(御國者)(名)あなごむらひ。○地方人。○田舎者。

おくにかがき(阿國歌舞伎)(名)江戸時代の始め、出雲大船の巫女(阿國といふ)のが神樂が

演じ思つて舞曲で、今の芝居の始めである。

おく、ぬの(奥布)(名)昔、陸奥國から産出した布。(古語)

おくね(信念)(名)堅く中にも銘記し忘れぬこと。心中に把持し、心に思ひ起すこと。

おくのいん(奥院)(名)佛の寺院の本堂が奥の方にあつて、本尊などを安置した所。

おくの(奥手)(名)おくき。ひげつ。こい。

おくのほそみち(奥の細道)(名)文政3年(1821)元禄二年三月廿七日、江戸深川の庵を建て、門内河合曾良と共に奥州を行脚し、北陸の跡を探り、更に遠州から伊勢路へ入つた日數六月、行路六百里の俳文紀行。(元禄七年)三三四四。

おくの(奥屋)(名)武家で、對の國の稱。

おくの(奥組)(名)口語の奥の左右にある。白

が挟まる(句)十分に心が打解けないで、思ふと十分にはいひぬらぬ感じをあらはす語。又、十分に香かぬを、心に察するまじ。

おくは(屋背)(名)屋根の七、八家のうしろ。

おくび(愛氣)(名)胃になまたま五筋の口唇外に出るもの。一にも出さぬ(句)戒物事を深く恥



(きぶかにくお)

おくひ(外せぬ)(名)臆病(名)膽力なくして少しの物事にもおちおそれること。一かぜ(臆病風)(名)おちおちたつこと。臆病の心。一がみ(臆病神)(名)臆病の心を起させる神。一ぐち(臆病口)(名)能書きの切戸口。○芝居の本舞臺の下座の方の出入口。一まだ(臆病窓)(名)商店の戸前に設けて開閉するやうにした小窓。戸を閉ぢた後に、閑閑に来る客に金品を授受し、又、來訪者ある時は、様子を観る爲のもの。一むし(臆病蟲)(名)臆病な心がある人。一も(臆病者)(名)臆病な性質の人。一も(臆病病)(名)臆病な心がある。一も(臆病病)と同じ。一の神おろし(句)臆病者が神の名を念じて救助を祈ること。

おくぶ(奥深)(名)形、一。○奥が深い。○意味が深くてわかりにくい。

おくぼ(奥坊主)(名)江戸時代に、江戸城の奥向に居つて、將軍に茶を進め、登城の諸侯の接待仕度などした坊主。「心を深める。(古語)

おくま(自動、カ下)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくま(奥ま)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくま(奥ま)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくま(奥ま)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくま(奥ま)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくま(奥ま)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくま(奥ま)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくま(奥ま)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくま(奥ま)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくま(奥ま)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくま(奥ま)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくま(奥ま)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくま(奥ま)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくま(奥ま)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくま(奥ま)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくま(奥ま)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくま(奥ま)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくま(奥ま)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくま(奥ま)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくま(奥ま)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくま(奥ま)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくま(奥ま)(名)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)奥ま(自動、カ下)

おくめん(臆面)(名)氣おくれた容態。恐れた顔つき。一なし(臆面無)(名)子供などの臆し憚らぬ性質。

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

おくやく(奥屋)(名)室町時代の武家の對の屋の

【文】おくらし（おくらし）（小倉色紙）。

おくらし（おくらし）（小暗し）（形、こ）うす（うす）。ほのぼの（ほのぼの）。やう（やう）。おくれ（おくれ）。おくらす（おくらす）（後す）（他動、サ四）おくれる（おくれる）。くら（くら）（古語）。

おくら（おくら）（巨椀）（名）（地）京都市伏見區の南にある池。周圍七軒餘。もと宇治川の勢入に

よて生じたもの。古稱おほくらに江。

おくり（おくり）（名）おくる。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

おくり（おくり）（名）おくる。見送。送り届けること。

應の際、來集せぬ客に、贈物を送ること。一たし
【送出手形】（名）送って出すこと。①相対の手。相手
が背面を見た時に、之を突き出すこと。②つく
（送出手形）送附（他動、カ下）③先方（送り
届ける、カ下）④おくりつけの口語。⑤つがた
（他動、カ下）⑥おくりつけの口語。⑦つがた
（送出手形）（名）送附する物品に添へる發送者
の署名・押印した手形。⑧おくりつけ。送って先
方へ届ける。⑨おくりつけ。送って先
方へ届ける。⑩おくりつけ。送って先
方へ届ける。⑪おくりつけ。送って先
方へ届ける。⑫おくりつけ。送って先
方へ届ける。⑬おくりつけ。送って先
方へ届ける。⑭おくりつけ。送って先
方へ届ける。⑮おくりつけ。送って先
方へ届ける。⑯おくりつけ。送って先
方へ届ける。⑰おくりつけ。送って先
方へ届ける。⑱おくりつけ。送って先
方へ届ける。⑲おくりつけ。送って先
方へ届ける。⑳おくりつけ。送って先
方へ届ける。㉑おくりつけ。送って先
方へ届ける。㉒おくりつけ。送って先
方へ届ける。㉓おくりつけ。送って先
方へ届ける。㉔おくりつけ。送って先
方へ届ける。㉕おくりつけ。送って先
方へ届ける。㉖おくりつけ。送って先
方へ届ける。㉗おくりつけ。送って先
方へ届ける。㉘おくりつけ。送って先
方へ届ける。㉙おくりつけ。送って先
方へ届ける。㉚おくりつけ。送って先
方へ届ける。㉛おくりつけ。送って先
方へ届ける。㉜おくりつけ。送って先
方へ届ける。㉝おくりつけ。送って先
方へ届ける。㉞おくりつけ。送って先
方へ届ける。㉟おくりつけ。送って先
方へ届ける。㊱おくりつけ。送って先
方へ届ける。㊲おくりつけ。送って先
方へ届ける。㊳おくりつけ。送って先
方へ届ける。㊴おくりつけ。送って先
方へ届ける。㊵おくりつけ。送って先
方へ届ける。㊶おくりつけ。送って先
方へ届ける。㊷おくりつけ。送って先
方へ届ける。㊸おくりつけ。送って先
方へ届ける。㊹おくりつけ。送って先
方へ届ける。㊺おくりつけ。送って先
方へ届ける。

【送火】（名）佛の靈を送る爲に焚く火。迎火の對
ひる（他動、カ下）②おくりつけの口語。③
【送火】（名）佛の靈を送る爲に焚く火。迎火の對
ひる（他動、カ下）②おくりつけの口語。③
【送火】（名）佛の靈を送る爲に焚く火。迎火の對
ひる（他動、カ下）②おくりつけの口語。③

【送り】（名）見送の人。①お送り（名）荷物を送
る人。②お送り（名）客を乗せて送
り行く船。③お送り（名）品物を送る時に
添へてやる手紙。④お送り（名）送
ると迎へると。そうげい。

【おくり】（御車草）（名）眞宗の僧の号。

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくり】（小栗宗丹）（名）人

【おくら】（名）形小くして色の黒いもの。

【おくら】（名）形小くして色の黒いもの。

【おくら】（名）形小くして色の黒いもの。

【おくら】（名）形小くして色の黒いもの。

【おくら】（名）形小くして色の黒いもの。

【おくら】（名）形小くして色の黒いもの。

【おくら】（名）形小くして色の黒いもの。

【おくら】（名）形小くして色の黒いもの。

【おくら】（名）形小くして色の黒いもの。

【おくら】（名）形小くして色の黒いもの。

【おくら】（名）形小くして色の黒いもの。

【おくら】（名）形小くして色の黒いもの。

【おくら】（名）形小くして色の黒いもの。

【おくら】（名）形小くして色の黒いもの。

書「小父君」(名)「なちの尊稱。(き)は「君」の尊稱。黄は假借の字。一「小父御」(名)「なち」(なちである人の約)なり。

おしあひ(押合)押合(名)おあふと。一「おしあひ」押合(名)副 多人数が雜着しておしあふ。

おしあぐ(押開)押開(名)副 多人数が雜着しておしあぐ。一「おしあぐ」押開(名)副 多人数が雜着しておしあぐ。一「おしあぐ」押開(名)副 多人数が雜着しておしあぐ。

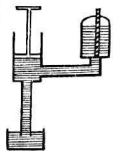
おしあけ(押あ)押あ(名)おあけが。一「おしあけ」押あ(名)おあけが。一「おしあけ」押あ(名)おあけが。

おしあげ(押あげ)押あげ(名)副 多人数が雜着しておしあげ。一「おしあげ」押あげ(名)副 多人数が雜着しておしあげ。

おしあて(押當)押當(名)副 多人数が雜着しておしあて。一「おしあて」押當(名)副 多人数が雜着しておしあて。

おしあゆ(押出)押出(名)副 多人数が雜着しておしあゆ。一「おしあゆ」押出(名)副 多人数が雜着しておしあゆ。

おしあす(押出)押出(名)副 多人数が雜着しておしあす。一「おしあす」押出(名)副 多人数が雜着しておしあす。



〔ポンボげあしお〕

おしだす(押出す)押出す(名)副 多人数が雜着しておしだす。一「おしだす」押出す(名)副 多人数が雜着しておしだす。

おしり(押入)押入(名)副 多人数が雜着しておしり。一「おしり」押入(名)副 多人数が雜着しておしり。

おしいる(押入)押入(名)副 多人数が雜着しておしいる。一「おしいる」押入(名)副 多人数が雜着しておしいる。

おしいる(押入)押入(名)副 多人数が雜着しておしいる。一「おしいる」押入(名)副 多人数が雜着しておしいる。

おしえ(教)教(名)副 多人数が雜着しておしえ。一「おしえ」教(名)副 多人数が雜着しておしえ。

おしえ(教)教(名)副 多人数が雜着しておしえ。一「おしえ」教(名)副 多人数が雜着しておしえ。

おしおき(御仕置)御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。一「おしおき」御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。

おしおくり(押送)押送(名)副 多人数が雜着しておしおくり。一「おしおくり」押送(名)副 多人数が雜着しておしおくり。

おしおけ(押桶)押桶(名)副 多人数が雜着しておしおけ。一「おしおけ」押桶(名)副 多人数が雜着しておしおけ。

おしおき(御仕置)御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。一「おしおき」御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。

おしおき(御仕置)御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。一「おしおき」御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。

おしおき(御仕置)御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。一「おしおき」御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。

おしおき(御仕置)御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。一「おしおき」御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。

おしおき(御仕置)御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。一「おしおき」御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。

おしおき(御仕置)御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。一「おしおき」御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。

おしおき(御仕置)御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。一「おしおき」御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。

おしおき(御仕置)御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。一「おしおき」御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。

おしおき(御仕置)御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。一「おしおき」御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。

おしおき(御仕置)御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。一「おしおき」御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。

おしおき(御仕置)御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。一「おしおき」御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。

おしおき(御仕置)御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。一「おしおき」御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。

おしおき(御仕置)御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。一「おしおき」御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。

おしおき(御仕置)御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。一「おしおき」御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。

おしおき(御仕置)御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。一「おしおき」御仕置(名)副 多人数が雜着しておしおき。



〔りきしお〕

押しよす(押寄す) (他動) サ下二
押し近づく。引きよせ。

押しよせる(押寄せる) (自動)
サ下二「押しよす」の口語。「ちんらんしり」
おしよほからげ(名) 裾を「ちんらんしり」
おしよほ(名) 裾を「ちんらんしり」
おしよほ(名) 裾を「ちんらんしり」

おしろい(名) 顔面等の化粧に用ひる白粉。
水白粉、練白粉、紙白粉等の種類がある。原料はもと
多く炭酸鉛(鉛白)で造られたが、近時鉛毒の恐るべき
ことが唱道せられ、鉛白粉は少くなり、亜鉛華又は澱
粉性のものと變つた。一くささい(白粉)又は白粉
臭い(形) おしろいのにおひがする。あだだ
ろいを塗る時つやよよし且その美しさを發揮す
る爲に、薄め肌塗るクリーム化粧水。一ちゆ
ろとく(白粉中毒) (名) 醫白粉に含んだ鉛分
の毒によつて皮膚又は内臓に異状を來すこと。鉛
毒。一ばな白粉花紫茉莉(名) 植葉薬料
の多年生草本。高さ一米

位。茎枝に結節を有して
分岐する。葉は對生、有柄
で卵状披針形、全縁、夏
秋、葉柄に散花、葉生
し、葉線状をなす。花は
漏斗状、色は黄紅白等種がある。果實は球形で中
に白色粉狀の胚乳がある。おしろい。おしろい。いさ
おしわく(形) おしろい。分け分ける(他動) カ下二
前後、左右「おしわく」分け分ける。古語。
おしわく(形) おしろい。分け分ける(他動) カ下二
前後、左右「おしわく」分け分ける。古語。

おしわける(形) おしろい。分け分ける(他動) カ下二
前後、左右「おしわく」分け分ける。古語。
おしわく(形) おしろい。分け分ける(他動) カ下二
前後、左右「おしわく」分け分ける。古語。

おしわく(形) おしろい。分け分ける(他動) カ下二
前後、左右「おしわく」分け分ける。古語。
おしわく(形) おしろい。分け分ける(他動) カ下二
前後、左右「おしわく」分け分ける。古語。

おしわく(形) おしろい。分け分ける(他動) カ下二
前後、左右「おしわく」分け分ける。古語。
おしわく(形) おしろい。分け分ける(他動) カ下二
前後、左右「おしわく」分け分ける。古語。

おしわく(形) おしろい。分け分ける(他動) カ下二
前後、左右「おしわく」分け分ける。古語。
おしわく(形) おしろい。分け分ける(他動) カ下二
前後、左右「おしわく」分け分ける。古語。

おしわく(形) おしろい。分け分ける(他動) カ下二
前後、左右「おしわく」分け分ける。古語。
おしわく(形) おしろい。分け分ける(他動) カ下二
前後、左右「おしわく」分け分ける。古語。

おしわく(形) おしろい。分け分ける(他動) カ下二
前後、左右「おしわく」分け分ける。古語。
おしわく(形) おしろい。分け分ける(他動) カ下二
前後、左右「おしわく」分け分ける。古語。

おしよ(名) 悪心(名) 心持がわるく、はきけな
おしよ(名) 悪心(名) 心持がわるく、はきけな



備さうとする感に。むかつき。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

内宮と外宮の中間(山内)に、小屋がけの舞臺を
つくり、二人は三味線・胡弓を弾き、一人は踊つて、舞
臺のものに錢を乞うた二人の若女。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。
おしん(名) 汚疹(名) 膿疱や潰瘍などの皮が厚
く重なる。牡蠣殻の状をなすもの。かさぶた。

おせつかい(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。
おせな(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。

おせな(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。
おせな(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。

おせな(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。
おせな(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。

おせな(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。
おせな(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。

おせな(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。
おせな(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。

おせな(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。
おせな(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。

おせな(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。
おせな(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。

おせな(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。
おせな(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。

おせな(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。
おせな(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。

おせな(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。
おせな(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。

おせな(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。
おせな(名) 背丈が高くて曲つたやうに見えるこ
と。(古語) しみ。

掃蕪から産する杉原紙。ほんすきはら。
おにたて「鬼婆」(名)「種木」おきたた。
おにと「鬼斗」(名)「建福木」おにの上にあるま
すかた(多形)。

平安時代に、京都三條の南、西院の東にあつた邸
宅(藤原成行)が、藤原伊尹(公)と讒議を争ひ、
又、大納言となつて納れられなかつたので、憤死
して、死靈(なつた)。

おにのこ「鬼子」(名)「(仇)統率子」に「養子」と
あはれなり。鬼の生みければ、親に似て、これもおそ
ろしき心地あらんとて、とあるに基づくのみ(む
し(養)。

おにのさら「鬼皿」(名)「おにこ」。鬼の皿
幾皿六皿七皿八皿と唱へ、左右の手をよせて數へ、
子供の遊戯。

おにのこく「鬼龍草」(名)「種」しおん。
おにのま「鬼間」(名) 清涼殿の母屋の西雨角。
殿上の間の北の一室。壁に白澤王が鬼を斬る畫があ
る。

おには「鬼齒」(名) 外方へ恰も牙のやうに出た八
生水草。池澤に
生ずる。全體に
刺を有する。葉
は圓い楕形で腺
がある。裏面は
赤色又は紫色。
長柄有する。直径三〇—四〇釐。夏に、花梗を
抽き、四輪の紫花を開き、後葉果を結ぶ。地草。葉
種子は食用となり、又は種子は薬用となる。いばらに
す。みづぶき。



おにば「鬼婆」(名) 好悪又は無慈悲な老婆。
おにび「鬼火」(名) 湯地に小雨降る夜など燃え出
て、空中に浮遊する圓形の青火。燐化水素の燃焼
であるとの説があるが、確かでない。陰火。いうれ
び。りんくろ。さつらび。

おにた「おのの

おにほし「鬼星」(名) きし(ハ)鬼宿。
おにほめ「鬼味憎」(名) 鹽氣多くして、味のか
らぬ味。憎。鬼外は強くとめての實績い人。よわ
みそ。【あらむし】。

おにもじ「鬼武者」(名) きはめて勇猛な武者。
おにもじ「鬼様」鬼様(名) 克くはしたた
か形で、鎧鎧練はる麻練の太いで、物纏はらひ布。
おにも「鬼物」(名) 龍龍で鬼形のが仕手(主
役)となるもの稱。黒服「紅葉袴」の古裝。

おにやらい「鬼遣追難」(名) 古語。禁中
に行はれた年中行事の一。十二月晦日の夜、人を疫
病の鬼に扮装させてこれを節分、疫病をはらひ除く
儀の儀。後世は、民間で節分、大豆を炒つて
「おにうちまめ」と稱し「福は内鬼は外」と呼んで、
おにを散くこととする。

おにゆり「鬼百合卷丹」(名)「種」百合科の多
年生草本。高さ一米。
餘。莖は紫黒で白毛
茸がある。葉は狭長
にして互生し、葉脈
に珠芽を生ずる。秋、
紫色の斑點を有する花を開く。鱗莖は食用に、又、花
は觀賞用に供せらる。
おにわらわ「鬼童」(名) 鬼の妻をなした童。
おぬし「御主」(代) 同業以下に用ひる對稱代名詞。
おぬし。すな。



おね「尾根」(名) (お) 父。【古語】
おね「螺旋」(名) 螺旋の條(帯)が高く
なつて、雌螺の回みにはめるやうに作るたも
の。【雌螺の對】。

オネスト (onesto) (英) 形) 正直な。忠實な。
おねづ「悪熱」(名) 惡寒の後に發する熱。
おね「御結」(名) 結を結(婦人語) 結
飯の煮た時、釜の外に溢れ出る汁。(婦人語) 結
おねり「御練」(名) 踊るゆする歩むことの敬語。
【佛】等院(修行道場)の儀式。

おの(名) おもて表。(古語)
おの(名) (名) ちの小さいもので、木を伐
るに用ひる。【名】まはり(斧始)(名) (ち)よ
うなばち(手斧始)。「柄柄」(句) 曾時
の間と思つて仙遊に留めてあるが、實はそれ長年月で
つた。逸興記に留めてあるが、實はそれ長年月で
童子圍坐を見てゐた。童子は王官に徹の様に似た
ものを典々と食つた。然るに一問の音が終らぬ
中に斧柄が朽ちてゐるのに驚いて、原村へ歸ると
知つてゐた人は皆死んで一人もゐなかつた。とある
故事に基づく)。

おの「小野」(名) ①地京都府東山區山柱。②
野の大字。③山城國愛宕郡八潮大原村の地にあつた
郷。小野朝臣の領邑。

おの「己」(名) おのれ。「がいろいろ」己色
【古語】おもひおのれ。心においそれれに。
おの「己」(名) 己様様。【古語】おのの
【古語】おのの心まかせに。「がしな己品」
おののしな己品。各自さまさま。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの

おの「己」(名) おのれ。「がいろいろ」己色
【古語】おもひおのれ。心においそれれに。
おの「己」(名) 己様様。【古語】おのの
【古語】おのの心まかせに。「がしな己品」
おののしな己品。各自さまさま。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの

おの「己」(名) おのれ。「がいろいろ」己色
【古語】おもひおのれ。心においそれれに。
おの「己」(名) 己様様。【古語】おのの
【古語】おのの心まかせに。「がしな己品」
おののしな己品。各自さまさま。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの

おの「己」(名) おのれ。「がいろいろ」己色
【古語】おもひおのれ。心においそれれに。
おの「己」(名) 己様様。【古語】おのの
【古語】おのの心まかせに。「がしな己品」
おののしな己品。各自さまさま。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの

おの「己」(名) おのれ。「がいろいろ」己色
【古語】おもひおのれ。心においそれれに。
おの「己」(名) 己様様。【古語】おのの
【古語】おのの心まかせに。「がしな己品」
おののしな己品。各自さまさま。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの

おの「己」(名) おのれ。「がいろいろ」己色
【古語】おもひおのれ。心においそれれに。
おの「己」(名) 己様様。【古語】おのの
【古語】おのの心まかせに。「がしな己品」
おののしな己品。各自さまさま。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの

おの「己」(名) おのれ。「がいろいろ」己色
【古語】おもひおのれ。心においそれれに。
おの「己」(名) 己様様。【古語】おのの
【古語】おのの心まかせに。「がしな己品」
おののしな己品。各自さまさま。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの

おの「己」(名) おのれ。「がいろいろ」己色
【古語】おもひおのれ。心においそれれに。
おの「己」(名) 己様様。【古語】おのの
【古語】おのの心まかせに。「がしな己品」
おののしな己品。各自さまさま。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの

おの「己」(名) おのれ。「がいろいろ」己色
【古語】おもひおのれ。心においそれれに。
おの「己」(名) 己様様。【古語】おのの
【古語】おのの心まかせに。「がしな己品」
おののしな己品。各自さまさま。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの

おの「己」(名) おのれ。「がいろいろ」己色
【古語】おもひおのれ。心においそれれに。
おの「己」(名) 己様様。【古語】おのの
【古語】おのの心まかせに。「がしな己品」
おののしな己品。各自さまさま。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの

おの「己」(名) おのれ。「がいろいろ」己色
【古語】おもひおのれ。心においそれれに。
おの「己」(名) 己様様。【古語】おのの
【古語】おのの心まかせに。「がしな己品」
おののしな己品。各自さまさま。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの

おの「己」(名) おのれ。「がいろいろ」己色
【古語】おもひおのれ。心においそれれに。
おの「己」(名) 己様様。【古語】おのの
【古語】おのの心まかせに。「がしな己品」
おののしな己品。各自さまさま。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの

おの「己」(名) おのれ。「がいろいろ」己色
【古語】おもひおのれ。心においそれれに。
おの「己」(名) 己様様。【古語】おのの
【古語】おのの心まかせに。「がしな己品」
おののしな己品。各自さまさま。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの

おの「己」(名) おのれ。「がいろいろ」己色
【古語】おもひおのれ。心においそれれに。
おの「己」(名) 己様様。【古語】おのの
【古語】おのの心まかせに。「がしな己品」
おののしな己品。各自さまさま。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの

おの「己」(名) おのれ。「がいろいろ」己色
【古語】おもひおのれ。心においそれれに。
おの「己」(名) 己様様。【古語】おのの
【古語】おのの心まかせに。「がしな己品」
おののしな己品。各自さまさま。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの

おの「己」(名) おのれ。「がいろいろ」己色
【古語】おもひおのれ。心においそれれに。
おの「己」(名) 己様様。【古語】おのの
【古語】おのの心まかせに。「がしな己品」
おののしな己品。各自さまさま。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの
【古語】おのの己品。おのの己品。おのの

おにたーおのの

おもいどり (思取) (名) 思ふ所があつて、
さされたるを受取ること。思ふ心のある人から至る
受取ること。(思差の對) (古語)
おもいとる (思ひ取る) (他動、
ラ四) それと氣づくこと。

おもいなおし (思直) (名) 思ひ直すこと。
おもいなおす (思直) (思ひ直す) (他
動) サ四。心へ直す。思ひ改める。

おもいなおる (思ひ直る) (自
動) ラ四。心が改まる。心が改まる。(古語)
おもいながす (思ひ流す) (他
動) サ四。思ひつづける。(古語) 心に流す。思
断念する。

おもいながさむ (思ひ慰む)
(他動) マ下。かまうなるがらうと慰める。
おもいなし (思做) (名) 思ひなすこと。
おもいなし (思ひ做す) (他動、
サ四) 推察してそれとよめる。

おもいなたむ (思ひ有む)
(他動) ハ下。心と和むやうに思ひかへす。
おもいなたらむ (思ひ有
らむ) (他動) マ下。おもひなたむ。(古語)
おもいなびく (思ひ靡く) (自
動) カ四。心かたむ。

おもいなやむ (思ひ惱む) (他
動) マ四。心にたやむ。思ひわづらふ。心苦し
まふ。
おもいなる (思ひ成る) (自動、
ラ四) その心になる。(古語)
おもいなる (思ひ慣る) (自
動) ラ下。常に思ふ。(古語)

おもいなる (思ひ習ふ) (自
動、ハ四) 了解する。まよる。(古語) 思ひなれ
る。(古語)
おもいね (思疑) (名) 深く心にかけ疑

おもいねんす (思ひ念す)
(他動) サ四。心に祈る。念がまんする。堪へる。
おもいのいえ (思の家) (名) 佛。おも
ひのいへ。火にかけていふ。無量の福がたい此
の世。火宅。

おもいのいろ (思の色) (名) おもひの
いろ。火にかけていふ。おくれなるの色。(古語)
おもいのかすみ (思の霞) (名) 思のは
れやぬ。心に空をおほふ霞に似ていふ。
おもいのけむり (思の煙) (名) おも
ひのいろ。火にかけていふ。烈しい思を立ちのぼ
る煙に譬へていふ。

おもいのこす (思殘) (名) 念れん。さんれ
おもいのこす (思ひ殘す) (他
動) サ四。心を残す。さんれんがある。未練が残る。お
もひおく。

おもいのそこ (思の底) (名) 思の深い
おもいのたけ (思の丈) (名) 思ひのあり
たけ。思ひの限り。

おもいのたね (思の種) (名) 心配のもと
おもいのたま (思の珠) (名) 念れんす。すず
おもいのつな (思の綱) (名) 情實にひか
されて思ふまにならぬ。心のつな。
おもいのつゆ (思の露) (名) 物思
ひのしげきを露に譬へた語。以上古語。

おもいのどむ (思ひ和む) (他
動) マ下。思ひなだめる。思ひを静める。(古語)
おもいのひ (思の火) (名) 思ひをたふす。思
おもいのふ (思ひ延ぶ) (他
動) マ下。心をゆるめる。心をやほらげる。淵
おもいのふち (思の淵) (名) 積る思を淵
の深いに譬へていふ。深き思。

おもいのほか (思の外) (名) 意外。案外
おもいのほら (思ひ上る) (自動、
ラ四) おもひがある。(古語) 思ふ。思ふ存分
おもいのまま (思の儘) (名) 副。心に思ふ

おもいのみち (思の道) (名) 思ひ入るこ
との深いを道に譬へた語。一に譬へていふ語。
おもいのやま (思の山) (名) 積れる思を山
おもいのやみ (思の闇) (名) 心の闇。物
思ひに心のこぼれ。

おもいはば (思羽) (名) (い) ちやうば (銀香羽。
一) つみ (思羽包) (名) 拜領した香木又は香煙
などをに入れておく。包。ね (思羽根) (名) おも
いは。

おもいはぐくむ (思ひ育む)
(他動) マ四。大切に思つてそだてる。(古語)
おもいはなす (思ひ放つ) (他
動) タ四。おもひきる。おもひする。(古語)
おもいはなる (思ひ離る)
(自動) ラ下。思はぬやうになす。
おもいははかる (思ひ憚る) (他
動) ラ四。心にははかる。憚り思ふ。
おもいはらす (思ひ散らす)
(他動) サ四。思ひに心を散らす。(古語) 一兄弟縁妹
おもいはるく (思ひ晴く)
(他動) カ下。思ひをはらす。(古語) 一愛人。

おもいひらく (思ひ開く)
(自動) カ下。思ひがなくなる。心がどかにな
る。(古語) (思ひ開くの對)
おもいふす (思ひ伏す) (他
動) サ下。信する。思ひこむ。(古語)
おもいふす (思ひ臥す) (自動、
サ四) 思ひつづける。
おもいふり (思振) (名) 思をよせたやうな
おもいふる (思ひ落る) (自動、
ラ上) 思ひつづける年を過ぎて久しむる。(古語)
おもいへたつ (思ひ隔つ)
(他動) タ下。隔てを設けて親しくしない。

おもいはく (思ひ惚く) (自
動) カ下。思ひのあまりにぼんやりとする。(古語)
おもいはこる (思ひ誇る) (自動、
ラ四) 心がたかぶる。ひそかに自惚る。
おもいほる (思ひ惚る) (自
動) ラ下。思ふ餘りに心がぼんやりする。思しく
思ふ。おもひこる。(古語)
おもいまじら (思ひ紛ふ) (自
動) ハ下。まじらばしく思ふ。思ひたかへる。
(古語)
おもいまじる (思ひ雜る) (自
動) ラ四。同時にさまざまの事を思つて、思が入りま
じる。(古語)
おもいます (思ひ増す) (他動、
サ四) 思ひがふつ。(古語)
おもいまつ (思ひ纏は
す) (他動) サ四。結ぶ。思ひにかける。(古語)
おもいまだう (思ひ惑ふ) (自
動) ハ四。心がまよつて死ぬ。
おもい迷ふ (思ひ迷ふ) (自
動) ハ四。おもひまよふ。

おもいまわす (思ひ廻す) (他
動) サ四。さまざまに思ふ。思ひめぐらす。往
事を追憶する。
おもいまだる (思ひ亂る)
(自動) ラ下。どつしうかたさまざまに思ふ。思
ひ苦しむ。
おもいみる (思ひ見る。惟
みる) (他動、マ上) かんがへみる。おもひみる。
おもいむす (思ひ結
ぶ) (自動) ラ下。おもひむす。思ひ結ば
る。(自動) ラ下。思ひかたよまがる。(古語)
おもいむす (思ひ結ぶ) (自
動) ハ四。物思ひに胸がよまがる。
おもいむす (思ひ睦ぶ) (自
動) パ上。互に親しく思ひあふ。

おもいめぐらす (他動) サ四 さまざまに考へる。おもひまはる。

おもいよめる (他動) カ下 かくれて考へておく。豫期する。

おもいもの (名) (思者) (名) 思人。情人。愛者。

おもいやすむ (自動) マ四 なみたとほりに思ふ。(古語)

おもいやすろう (自動) ハ四 心が決しないのでためらふ。(古語)

おもいやむ (自動) ハ四 心が決しないのでためらふ。(古語)

おもいやり (自動) ハ四 心が決しないのでためらふ。(古語)

おもいゆる (自動) ラ四 心を解る。心配をほらす。同情する。

おもいゆるす (自動) ラ四 情愛がうすらふ。(古語)

おもいやす (自動) サ四 心中に許す。

おもいよせる (自動) サ四 思ひあはせる。くらへて思ふ。懸想する。

おもいよせ (自動) サ四 思ひあはせる。くらへて思ふ。懸想する。

おもいよらす (自動) サ四 思ひあはせる。くらへて思ふ。懸想する。

おもいよる (自動) サ四 思ひあはせる。くらへて思ふ。懸想する。

おもいよる (自動) サ四 思ひあはせる。くらへて思ふ。懸想する。

おもいよる (自動) サ四 思ひあはせる。くらへて思ふ。懸想する。

おもいよる (自動) サ四 思ひあはせる。くらへて思ふ。懸想する。

おもいよる (自動) サ四 思ひあはせる。くらへて思ふ。懸想する。

おもいよる (自動) サ四 思ひあはせる。くらへて思ふ。懸想する。

おもいよる (自動) サ四 思ひあはせる。くらへて思ふ。懸想する。

おもいれ思入 (名) (名) (おもいれ)。

おもいわかる (自動) ラ下 分別がつく。わかる。(古語)

おもいやく (自動) ラ下 分別がつく。わかる。(古語)

おもいわけ (自動) ラ下 分別がつく。わかる。(古語)

おもいわけ (自動) ラ下 分別がつく。わかる。(古語)

おもいわけ (自動) ラ下 分別がつく。わかる。(古語)

おもいわけ (自動) ラ下 分別がつく。わかる。(古語)

おもいわけ (自動) ラ下 分別がつく。わかる。(古語)

おもいわけ (自動) ラ下 分別がつく。わかる。(古語)

おもいわけ (自動) ラ下 分別がつく。わかる。(古語)

おもいわけ (自動) ラ下 分別がつく。わかる。(古語)

おもいわけ (自動) ラ下 分別がつく。わかる。(古語)

おもいわけ (自動) ラ下 分別がつく。わかる。(古語)

おもいわけ (自動) ラ下 分別がつく。わかる。(古語)

おもいわけ (自動) ラ下 分別がつく。わかる。(古語)

おもいわけ (自動) ラ下 分別がつく。わかる。(古語)

おもいわけ (自動) ラ下 分別がつく。わかる。(古語)

おもいわけ (自動) ラ下 分別がつく。わかる。(古語)

おもいわけ (自動) ラ下 分別がつく。わかる。(古語)

おもいわけ (自動) ラ下 分別がつく。わかる。(古語)

おもひがけ (古語) 思ふに堪へず。(古語) 思ひはる (古語) 心にこめしめられ成就せぬことのない。一門 (句) 思ひし人家の門。

おもろし (古語) 御申。御契應 (名) おもてなし。

おもえらく (古語) 謂へらく思へらく。以爲へらく。 (副) 考へらく。思ふのに。

おもおし (古語) 思はし召す。他動。サ四。おほしめす。 (古語)

おもおしめす (古語) 思はし召す。他動。サ四。おほしめす。 (古語)

おもおす (古語) 思はす。 (他動) サ四。思ふの敬語。おほす。おほしめす。 (古語)

おもおし (古語) 思はす。 (他動) サ四。思ふの敬語。おほす。おほしめす。 (古語)

おもがけ (古語) 思はす。 (他動) サ四。思ふの敬語。おほす。おほしめす。 (古語)

おもがけ (古語) 思はす。 (他動) サ四。思ふの敬語。おほす。おほしめす。 (古語)

おもがけ (古語) 思はす。 (他動) サ四。思ふの敬語。おほす。おほしめす。 (古語)

おもがけ (古語) 思はす。 (他動) サ四。思ふの敬語。おほす。おほしめす。 (古語)

おもがけ (古語) 思はす。 (他動) サ四。思ふの敬語。おほす。おほしめす。 (古語)

おもがけ (古語) 思はす。 (他動) サ四。思ふの敬語。おほす。おほしめす。 (古語)

おもがけ (古語) 思はす。 (他動) サ四。思ふの敬語。おほす。おほしめす。 (古語)

おもがけ (古語) 思はす。 (他動) サ四。思ふの敬語。おほす。おほしめす。 (古語)

おもがけ (古語) 思はす。 (他動) サ四。思ふの敬語。おほす。おほしめす。 (古語)

おもがけ (古語) 思はす。 (他動) サ四。思ふの敬語。おほす。おほしめす。 (古語)

おもがけ (古語) 思はす。 (他動) サ四。思ふの敬語。おほす。おほしめす。 (古語)

おもがけ (古語) 思はす。 (他動) サ四。思ふの敬語。おほす。おほしめす。 (古語)

おもがけ (古語) 思はす。 (他動) サ四。思ふの敬語。おほす。おほしめす。 (古語)



おもがろし (古語) 二面軽し (形) 一) おとなし。 (古語)

おもがわり (古語) 二面變 (名) おもさのかる。おもさらい (古語) 二面變 (名) 幼児の見知らぬ人を見よりの泣くこと。人みしり。

おもさ (古語) 二面唐 (名) 顔面にできるかま。にきびの類。そはさ。(古語)

おもくす (古語) 二重くす (他動) サ四。おもたけに見えぬ。ふくれて重苦しきことである。

おもくろし (古語) 二重苦し (形) 二) 押へつけられるやうである。軽快でない。一) げ重苦し (名) おもくろし。

おもくろし (古語) 二重苦し (形) 二) 押へつけられるやうである。軽快でない。一) げ重苦し (名) おもくろし。

おもくろし (古語) 二重苦し (形) 二) 押へつけられるやうである。軽快でない。一) げ重苦し (名) おもくろし。

おもくろし (古語) 二重苦し (形) 二) 押へつけられるやうである。軽快でない。一) げ重苦し (名) おもくろし。

おもくろし (古語) 二重苦し (形) 二) 押へつけられるやうである。軽快でない。一) げ重苦し (名) おもくろし。

おもくろし (古語) 二重苦し (形) 二) 押へつけられるやうである。軽快でない。一) げ重苦し (名) おもくろし。

おもくろし (古語) 二重苦し (形) 二) 押へつけられるやうである。軽快でない。一) げ重苦し (名) おもくろし。

おもくろし (古語) 二重苦し (形) 二) 押へつけられるやうである。軽快でない。一) げ重苦し (名) おもくろし。

おもくろし (古語) 二重苦し (形) 二) 押へつけられるやうである。軽快でない。一) げ重苦し (名) おもくろし。

おもくろし (古語) 二重苦し (形) 二) 押へつけられるやうである。軽快でない。一) げ重苦し (名) おもくろし。

おもくろし (古語) 二重苦し (形) 二) 押へつけられるやうである。軽快でない。一) げ重苦し (名) おもくろし。

おもくろし (古語) 二重苦し (形) 二) 押へつけられるやうである。軽快でない。一) げ重苦し (名) おもくろし。

おもくろし (古語) 二重苦し (形) 二) 押へつけられるやうである。軽快でない。一) げ重苦し (名) おもくろし。

おもくろし (古語) 二重苦し (形) 二) 押へつけられるやうである。軽快でない。一) げ重苦し (名) おもくろし。

おもくろし (古語) 二重苦し (形) 二) 押へつけられるやうである。軽快でない。一) げ重苦し (名) おもくろし。

おもくろし (古語) 二重苦し (形) 二) 押へつけられるやうである。軽快でない。一) げ重苦し (名) おもくろし。

重量によって計算するもの。●重過ぎる(重擔)。●小附(句)責任を果して重負の加はる。●を卸す(句)責任を果して重負の加はる。●おもに(主)「副」主として。専ら。「この繁おもにくし」(形)「二面憎し」(形)「二」つらに。●成立した。●阿る(自動)ラ四人の意を迎へる。へつらふ。こびる。つらふ。ようする。

おもひの御物(名) 身の上の供御。めしあがりもの。古語。●貴人の衣冠・刀劍の總稱。―し「御物師」(名) 裁縫師。し「御物師」(名) 將軍の用する刀劍として作たもの。―だな「御物棚」(名) 供御の御物を載せる櫃。御膳櫃。―ちやし「御物茶師」(名) 宮中及び將軍飲料の茶を掌った室町時代の職名。將軍の参内又は外出の際、衣冠刀劍等を容れた唐櫃を預りつぎ添うた職。おもひのながもちぶやう。―やどり「御物宿」(名) 昔、紫宸殿の西廂にあつて、おもひのを對置いた所。(古語) 一やどりのとじ

おもはしら「主柱」(名) 主となる大柱。木柱。袖柱の對。
おもはゆ「面映」(名) はづかしいこと。―い「面映」(名) 映「おもはゆし」の口語。―け「面映け」(形) はづかしい。―し「面映」(形) 一はづかしい。おもふせである。おもはる「面映る」(自動) ラ下二頭が映れる。おもふせ「面映」(名) 面映。おもふせ。

おもほえず「思はえず」(副) おほえず。(古語) おもほし「思はえず」(副) おほえず。(古語) おもほしめす「思はえず」(他動) サ四「思はえず」(古語) おもほす「思はえず」(他動) サ四「思はえず」(古語)

おもほてり「面熱」(名) おもほてること。おもほてる(古語) 面熱る(自動) ラ四 顔が赤くなる。●怒が顔にあはれる。おもほゆ「思はえず」(副) おほえず。(古語) おもはれる。おもはる。(古語)

おもほやく「思はゆる」(名) 思はれること。おもほる「思はゆる」(名) 思はれること。おもほみ「思はゆる」(名) 思はれること。おもむき「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 「やうす。●おもしむ。あはらひ。おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語) おもむく「趣」(名) ことわり趣意。けはひの對) 向かふ。向く。●進んで行く。(従ふ。降す)(古語)

殿上(名)おゆどの。①。どのののよにかん

御所の御用を勤めた女官。(名) 御湯殿に奉仕し、御坐

おゆひ(指)(名)おゆひ。ゆび。

おゆみのしんじ(御弓神事)(名) 正月に諸方

の神で五色の旗を揚げ神を立て、注連を引き

白木の弓で射る儀式。

おゆみはじめぶきよう(御弓始奉行)

(名) 鎌倉室町兩幕府の職名。毎年正月の初に幕府

で行はれた弓始の儀式を奉行した職。

おゆら(老)(名)おゆら。老い。老い。老い。

おゆら(泳)(名)およく。泳ぐ。泳ぐ。泳ぐ。

およく(泳)(名)およく。泳ぐ。泳ぐ。泳ぐ。

およく(老)(名)およく。老い。老い。老い。

およく(老)(名)およく。老い。老い。老い。

およく(老)(名)およく。老い。老い。老い。

およく(老)(名)およく。老い。老い。老い。

およく(老)(名)およく。老い。老い。老い。

およく(老)(名)およく。老い。老い。老い。

およく(老)(名)およく。老い。老い。老い。

およく(老)(名)およく。老い。老い。老い。

およく(老)(名)およく。老い。老い。老い。

およく(老)(名)およく。老い。老い。老い。

およく(老)(名)およく。老い。老い。老い。

およく(老)(名)およく。老い。老い。老い。

およく(老)(名)およく。老い。老い。老い。

およく(老)(名)およく。老い。老い。老い。

およく(老)(名)およく。老い。老い。老い。

およく(老)(名)およく。老い。老い。老い。

およく(老)(名)およく。老い。老い。老い。

およく(老)(名)およく。老い。老い。老い。

およく(老)(名)およく。老い。老い。老い。

およびかかる(及ぶ掛かる)(自動)

①。近づく。②。及ぶ。③。及ぶ。④。及ぶ。

およびくる(及ぶ)(自動)

①。近づく。②。及ぶ。③。及ぶ。④。及ぶ。

およびつく(及ぶ)(自動)

①。近づく。②。及ぶ。③。及ぶ。④。及ぶ。

およぶ(及ぶ)(自動)

①。近づく。②。及ぶ。③。及ぶ。④。及ぶ。

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

およぶ(及ぶ)(自動)

からぬ物事。ふしぎな事。江戸時代の語。茶道で、

古渡の和蘭陶器。②。海。③。又、海外の奇聞を知って

ゐる。④。舶来品。洋品。⑤。又、海外の奇聞を知って

ゐる。⑥。種。⑦。種。⑧。種。⑨。種。⑩。種。

の。⑪。種。⑫。種。⑬。種。⑭。種。⑮。種。

の。⑯。種。⑰。種。⑱。種。⑲。種。⑳。種。

の。㉑。種。㉒。種。㉓。種。㉔。種。㉕。種。

の。㉖。種。㉗。種。㉘。種。㉙。種。㉚。種。

の。㉛。種。㉜。種。㉝。種。㉞。種。㉟。種。

の。㊱。種。㊲。種。㊳。種。㊴。種。㊵。種。

の。㊶。種。㊷。種。㊸。種。㊹。種。㊺。種。

の。㊻。種。㊼。種。㊽。種。㊾。種。㊿。種。

の。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。

の。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。

の。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。

の。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。

の。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。

の。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。

の。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。

の。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。

の。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。

の。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。

の。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。

の。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。

の。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。

の。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。

の。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。

の。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。

の。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。

の。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。

の。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。㊿。種。



〔しくかじ〕ゲンラオ



〔リゼダンラオ〕

は羽状複葉。小葉は三中裂し、縁邊に缺刻状歯牙を

有し、夏秋の頃複葉形花序に白い色の細花をつける。

全體緑い香気がある。嫩葉と根とは食用に供せられ

る。セロリ。①。やき。②。和蘭焼紅毛焼(名)

魚頭の白肉に鹽をふって乾かし、雞卵の薄皮を張り

つけて炙った食品。

おり(織)(名)織ること。又その物。

おり(密)(名)狂人・罪人・狂猫などを入れておく

圍ひの事。

おり(汚)(名)汚。汚。汚。汚。汚。汚。汚。汚。

おり(折)(名)折。折。折。折。折。折。折。折。

おり(折)(名)折。折。折。折。折。折。折。折。

おり(折)(名)折。折。折。折。折。折。折。折。

おり(折)(名)折。折。折。折。折。折。折。折。

おり(折)(名)折。折。折。折。折。折。折。折。

おり(折)(名)折。折。折。折。折。折。折。折。

おり(折)(名)折。折。折。折。折。折。折。折。

おり(折)(名)折。折。折。折。折。折。折。折。

おり(折)(名)折。折。折。折。折。折。折。折。

おり(折)(名)折。折。折。折。折。折。折。折。

おり(折)(名)折。折。折。折。折。折。折。折。

おり(折)(名)折。折。折。折。折。折。折。折。

おり(折)(名)折。折。折。折。折。折。折。折。

おり(折)(名)折。折。折。折。折。折。折。折。

おり(折)(名)折。折。折。折。折。折。折。折。

おり(折)(名)折。折。折。折。折。折。折。折。

おり(折)(名)折。折。折。折。折。折。折。折。

おり(折)(名)折。折。折。折。折。折。折。折。

おり(折)(名)折。折。折。折。折。折。折。折。

おり(折)(名)折。折。折。折。折。折。折。折。

おり(折)(名)折。折。折。折。折。折。折。折。



〔子帽烏折〕

おりかへす(織返す) (他動) サ

おりかき(織金) (名) きんらん(金繰)

おりこ(織子) (名) はたを織る女工

おりこん(織紺) (名) たてよ、共に木綿の紺織

おりざん(織紺) (名) 染精。米の銀

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

オリジナル(Original) (名) 獨創。創

おりつけ(織付) (名) 織り出した最初の部分。織

おりて(織手) (名) はたを織る人

おりどめ(織留) (名) 四位以下に地位任官せられ

おりな(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなし(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

おりなす(織成) (名) 〇狂言に多くある語で、終

青緑色で、白く一菊花を染め伏したものを青織部と

稱する。一りゆう(織部流) (名) 古田織部正

重なる組とする茶道の一派

おります(織交す) (他動) ザ下

おりみだす(織亂す) (他動) サ四

おりみだす(織亂す) (他動) サ四

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

おりめ(織女) (名) はた織の工女

糸を組合はせて布帛をつくる。〇筋を組合はせて産

をつくる。〇交つくる。組立てる。組合はす。

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

おりる(降り) (動) 降る。自動ラ上

「了」はすむ。かたづく。○畢はつまる。○訖ははてる。つぎる。○終は始まつたものがしむになる。できあがる。○終ははつまつしむになる。

おん(恩) (名) めぐみ。あはれみ。いづくし。なすふ。一に受く(句)恩を施したことを自らほく。一に着す(句)恩に掛く。一に着る(句)恩に受く。一のまより情の主(句)恩人より。情人のしつてくたことを施し思ふ。一を仇(句)恩人に報いるに仇を以てすること。

おん(音) (名) ①物理的の振動によつて起る聴官の感覚。音響。②人の音聲の二氣に出づるもの。清音・濁音の類。③韻字の調子。いづる。④おん。漢字の字音。(調子)。「と。おかけ。おかけ。

おん(隆) (名) 父祖の功によつて位階を賜はるる。**おん(御)**(接頭) (おはん)の略。「おみ」(音便)或路に冠して尊敬の意をあらはす語。おはん。おみ。お。一ほき(御母儀)(名)貴族の母君。大名の母の敬稱。一もみじやま(御紅葉山)(名)江戸城内の地名。元和寛永の頃は、ここに東照宮廟があつた。一の字の寄(句)敬すべし。人。お客。

おん(雄) (名) 雄。おん。なす。めんの對。一どり(雄鳥)(名)なすの鳥。なとり。(めんとりの對)**おん(愛)** (名) めぐみ。いづくし。みたま。けなげ。こと。佛(温巻法)(名)愛すること。**おん(あん)** (名) 温巻法(名)愛すること。暖房等の温湯に浸した布片を用いる療法で、局所の發熱促進、神経痛や痙攣の療養に效がある。(温巻法の對)

おん(恩) (名) 恩惠と威光。なまげと。おん(位) (名) 父祖の功によつて子孫に賜はる位階。一音の境界を又し得べ。**おん(音)** (名) 音域(名)漢字の音と韻。①言語を構成する音聲。一がく(音韻學)(名)音韻を研究する學問。

おん(えき) (名) 瘟疫(名)はやりやまひ。**おん(えん)** (名) 恩怨(名)性質のおたやかなさま。暖いさま。**おん(おん)** (名) 温温(名)しつやか。おたやかなさま。暖いさま。

おん(おん) (名) 温温(名)しつやか。おたやかなさま。暖いさま。**おん(おん)** (名) 温温(名)しつやか。おたやかなさま。暖いさま。

おん(えき) (名) 瘟疫(名)はやりやまひ。**おん(えん)** (名) 恩怨(名)性質のおたやかなさま。暖いさま。**おん(おん)** (名) 温温(名)しつやか。おたやかなさま。暖いさま。

おん(おん) (名) 温温(名)しつやか。おたやかなさま。暖いさま。**おん(おん)** (名) 温温(名)しつやか。おたやかなさま。暖いさま。

おん(おん) (名) 温温(名)しつやか。おたやかなさま。暖いさま。**おん(おん)** (名) 温温(名)しつやか。おたやかなさま。暖いさま。

おん(おん) (名) 温温(名)しつやか。おたやかなさま。暖いさま。**おん(おん)** (名) 温温(名)しつやか。おたやかなさま。暖いさま。

おん(おん) (名) 温温(名)しつやか。おたやかなさま。暖いさま。**おん(おん)** (名) 温温(名)しつやか。おたやかなさま。暖いさま。

おん(おん) (名) 温温(名)しつやか。おたやかなさま。暖いさま。**おん(おん)** (名) 温温(名)しつやか。おたやかなさま。暖いさま。

おん(おん) (名) 温温(名)しつやか。おたやかなさま。暖いさま。**おん(おん)** (名) 温温(名)しつやか。おたやかなさま。暖いさま。

おん(おん) (名) 温温(名)しつやか。おたやかなさま。暖いさま。**おん(おん)** (名) 温温(名)しつやか。おたやかなさま。暖いさま。

おん(かん) (名) 温官(名) 獲得のある官職。價の敬稱。**おん(かん)** (名) 温官(名) 獲得のある官職。價の敬稱。

おん(かん) (名) 温官(名) 獲得のある官職。價の敬稱。**おん(かん)** (名) 温官(名) 獲得のある官職。價の敬稱。

おん(かん) (名) 温官(名) 獲得のある官職。價の敬稱。**おん(かん)** (名) 温官(名) 獲得のある官職。價の敬稱。

おん(かん) (名) 温官(名) 獲得のある官職。價の敬稱。**おん(かん)** (名) 温官(名) 獲得のある官職。價の敬稱。

おん(かん) (名) 温官(名) 獲得のある官職。價の敬稱。**おん(かん)** (名) 温官(名) 獲得のある官職。價の敬稱。

おん(かん) (名) 温官(名) 獲得のある官職。價の敬稱。**おん(かん)** (名) 温官(名) 獲得のある官職。價の敬稱。

おん(かん) (名) 温官(名) 獲得のある官職。價の敬稱。**おん(かん)** (名) 温官(名) 獲得のある官職。價の敬稱。

おん(かん) (名) 温官(名) 獲得のある官職。價の敬稱。**おん(かん)** (名) 温官(名) 獲得のある官職。價の敬稱。

おん(き) (名) 温気(名) あたたかみ。暖氣。**おん(き)** (名) 温気(名) あたたかみ。暖氣。

おん(き) (名) 温気(名) あたたかみ。暖氣。**おん(き)** (名) 温気(名) あたたかみ。暖氣。

おん(き) (名) 温気(名) あたたかみ。暖氣。**おん(き)** (名) 温気(名) あたたかみ。暖氣。

おん(き) (名) 温気(名) あたたかみ。暖氣。**おん(き)** (名) 温気(名) あたたかみ。暖氣。

おん(き) (名) 温気(名) あたたかみ。暖氣。**おん(き)** (名) 温気(名) あたたかみ。暖氣。

おん(き) (名) 温気(名) あたたかみ。暖氣。**おん(き)** (名) 温気(名) あたたかみ。暖氣。

おん(き) (名) 温気(名) あたたかみ。暖氣。**おん(き)** (名) 温気(名) あたたかみ。暖氣。

おん(き) (名) 温気(名) あたたかみ。暖氣。**おん(き)** (名) 温気(名) あたたかみ。暖氣。

おんこく 温克(名) 種がよく其の身を保持する。

おんこく 遠國(名) さんこく。といくに。

おんこく 遠國奉行(名) 江戸時代に、奈良・堺・伏見・前衛等の如き江戸から遠い土地に置いた奉行。さんこくまやう。

おんこと 御事(名) 事の敬稱。貴人の死去の敬稱大事。人のしたと。又そのの敬稱。

おんこと 御事(代) 對稱代名詞の敬稱。さきあな。

おんさ 音又(名) 理發音體の振動数を計る用具。銅鑼の口字形ななせるものに柄をなつて、木箱の上に設置したものを打てば一定の振動数の音を發する。



〔さんお〕

おんざ 穩座(名) 大要などの時、正式の勲杯などが終つた後、うちうみで談笑し感樂する席。宴座の對。の初物句。おわりはつもの。

おんざ 溫座(名) あんざ(安座)。じと坐つてゐること。

おんざく 御先(名) 貴人の先に立つ従者。おまおんざくのかむり(御轎)を天皇の神事におつけになる無数の冠、平履(むか)を後から子由(こ)の上を踏し、前上へ折返して白絹で結ぶ。

オンザマック On the Mark(句) 競走に於て、出發に際し、スターターが競走者に競走命令。各自出發點に就けの意。

おんし 隱子(名) 職位をなせる者。五位以上のおんし恩賜(名) 君主などからめぐみ賜はること。又その物。いざいだんさいせいかい

恩賜財團濟生會(名) 施藥治療の資として、明治天皇が御下賜になつた金具及び其の利子で設立された財團法人。

おんし 恩師(名) 恩恵を受けた師匠。

おんし 音字(名) 音語を記載するに、音の記載としての(み)用文字。音語文字(假名・梵字)と單

おんこーおんせ

音文字(ローマ字・キリシ字)とにわかつ。表音文字。音標文字。

おんじき 遺志(名) いひめき(飯糰)を齋用するおんじき(飲食)(名) (漢字の吳音)のみものとくひもの。いんじき。(古語)

おんじつ 溫室(名) 温い装置をした室。寒季又は寒地で、暖地又は暖季の植物を培養する目的で、内部の温度を高めるやうに設備した建物。

おんじや 溫疾(名) えやみ。はやりやみ。

おんじや 溫醇(名) 心廣く包容力の大いこと。おつととしてよかくなこと。

おんじや 恩赦(名) 天子のおめぐみやつて罪を赦し又は刑の執行を減免せられること。一けん恩赦權(名) 法天皇の恩赦を行ひ給ふ憲法上の大權。

おんじやく 恩借(名) なさけて借り受けること。おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

おんじやく 溫石(名) 焼いた軽石を布などに包んで、冬日又は寒氣の際に身體を温めるもの。又鹽を固めて機き、五などりに織なまぶして焼いたものを用ひる。

